史　跡

上之国勝山館跡　Ⅵ

―昭和59年度発掘調査整備事業概報―

1985・3

上ノ国町教育委員会

史　跡

上之国勝山館跡　Ⅵ

—昭和59年度発掘調査整備事業概報—

1985・3

上ノ国町教育委員会

序

国指定史跡上之国勝山跡の環境整備事業は昭和54年以来本年で6ヵ年を経過することとなりました。

この間遺構確認調査により各種建物跡、空壕、柵列、墓所等またこれに伴う豊富な遺物の発掘ができ漸次その当時の勝山館の姿が判明してきたのであります。

昭和59年度は文化庁のご指導をいただき館の東南隅に位置する通称侍屋敷との伝承のある地域の発掘調査と昭和54年以来の遺構調査にもとづく整備の実施計画設計の作成をいたしましたところですが通称侍屋敷については伝承を裏づけするように住居様の掘立柱建物跡等が計画的に地割されて建てられておった往時の勝山館の姿が判明し驚きを深くしているところであります。また整備事業実施計画設計につきましては文化庁をはじめ関係機関諸先生からご懇切なご指導をいただき上ノ国中世史跡公園計画の今後の具体的な指針を作成することができました。

今日までの成果を踏まえさらにこの事業を継続推進してまいる所存でありますので一層のご指導を賜りますようお願いいたします。

昭和60年3月

上ノ国町教育委員会

教育長　布施潤一郎

本文目次

序……

本文目次/挿図目次……iii

例言/参考文献……vi

第一編遺構確認調査

Ⅰ 調査概要…… 1

Ⅱ 層 序…… 3

Ⅲ 遺構…… 9

1 調査方法…… 9

2 調査…… 9

Ⅳ 小 括…… 47

1 侍屋敷跡地割面の形成について…… 47

2 遺 構…… 71

3 遺 物…… 72

4 勝山館跡他地点との比較…… 73

5 侍屋敷跡の位置づけ74

Ⅴ 保存処理…… 88

Ⅵ 上之国勝山館跡出土鍛冶関係遺物の金属学的調査 90

1 概 要…… 90

2 調査試料…… 90

3 調査方法…… 91

4 調査結果…… 91

5 考 察…… 94

6 まとめ…… 96

Ⅶ まとめ……101

第二編環境整備実施設計書

挿図目次

第1図 調査位置図…… 2

第2図 東西セクション…… 5

第3図 南北セクション…… 7

第4図 第1号地割面出土遺物 10

第5図 柱穴断面図…… 11

第6図 第1、2号土壙、焼土1、2…… 12

第7図 第1号地割面柱穴配置図…… 13

第8図 第2号、3号地割面柱穴配置図…… 16

第9図 第2号地割面セクション…… 17

第10図 第3号土壙…… 17

第11図 第2号・3号地割面出土遺物…… 19

第12図 第4号地割面柱穴配置図…… 20

第13図 第4号地割面出土遺物 21

第14図 焼土3…… 22

第15図 第5号地割面柱穴配置図…… 23

第16図 第5号地割面出土遺物 25

第17図 焼土4…… 25

第18図 第6号地割面柱穴配置図…… 26

第19図 第6号地割面出土遺物 27

第20図 第7号地割面柱穴配置図…… 28

第21図 第7号地割面盛土整地層セクション…… 29

第22図 第7号地割面出土遺物 29

第23図 焼土5…… 30

第24図 第5号土壙…… 30

第25図 第8号地割面柱穴配置図…… 31

第26図 第8号地割面出土遺物 32

第27図 焼土6…… 33

第28図 第9号地割面柱穴配置図…… 35

第29図 第9号地割面出土遺物 36

第30図 第10号地割面柱穴配置図…… 38

第31図 第10号地割面出土遺物 39

第32図 第11号地割面柱穴配置図…… 40

第33図 第12号地割面柱穴配置図…… 42

第34図 第12号地割面出土遺物 43

第35図 第6号土壙…… 44

第36図 第13号地割面柱穴配置図…… 45

第37図 第13号地割面出土遺物 46

第38図 第7号土壙・焼土7 46

第39図 第1号地割面遺物分布図…… 48

第40図 第1号地割面建物想定図…… 49

第41図 第2、3号地割面平面・遺物分布図…… 51

第42図 第4号地割面遺物分布図…… 52

第43図 第4号地割面建物想定図…… 53

第44図 第4号地割面建物想定図②…… 55

第45図 第5号地割面遺物分布図…… 55

第46図 第5号地割面建物想定図…… 56

第47図 第6号地割面遺物分布

図…… 57
第48図　第６号地割面建物想定図…… 58
第49図　第７号地割面遺物分布図・建物想定図…… 59
第50図　第８号地割面遺物分布図…… 60
第51図　第８号地割面建物想定図…… 61
第52図　第９号・10号地割面建物想定図…… 62
第53図　第９号地割面遺物分布図…… 63
第54図　第10号地割面遺物分布図…… 63
第55図　第10号地割面建物想定図…… 64
第56図　第11号地割面遺物分布図…… 65
第57図　第11号・第12号地割面建物想定図…… 66
第58図　第12号地割面平面・遺物分布図…… 67
第59図　第13号地割面遺物分布図…… 67
第60図　第13号地割面建物想定図…… 68
第61図　建物跡想定復原図　69
第62図　陶磁器出土分布図　77
第63図　陶磁器、鉄製品等出土分布図…… 79
第64図　木製品保存処理推移グラフ…… 89
第65図　上之国勝山館跡鍛治作業復元図…… 97

表目次

表１　柱穴観察表①…… 81
２　〃　②…… 82
３　〃　③…… 83
４　〃　④…… 84
５　〃　⑤…… 85
６　土壙・焼土・土壌サンプル分析表…… 85
７　地割面別出土遺物集計表１…… 86
８　〃　２…… 87
９　鉄鍋破片・鍛冶滓共伴出土地名表…… 97
10　上之国勝山館跡出土供試材の履歴及び調査項目 98
11　鉄滓の化学組成…… 99
12　カスガイ・鉄鍋破片の化学組織…… 99

写真図版目次

PL. 1　侍屋敷跡全景……199
PL. 2　舶載磁器(外面)……201
PL. 3　舶載磁器(内面)……203
PL. 4　国産陶器(外面)……205
PL. 5　国産陶器(内面)……207
PL. 6　赤外線写真①(第二編Ⅳ)……209
PL. 7　赤外線写真②(第二編Ⅳ)……211
PL. 8　空壕跡環境整備状況(第二編)……213
PL. 9　調査区全景(西より) 215
PL.10　調査区全景(北より) 216
PL.11　調査区中景(北より) 217
PL.12　調査区中景(北より) 218
PL.13　調査区　全景　調査前(西より)他……219
PL.14　土層断面他……220
PL.15　第１号地割面・出土遺物他……221
PL.16　第１号地割面出土遺物(陶磁器)……222
PL.17　第１号地割面焼土内遺物……223
PL.18　第２、３号地割面…224
PL.19　第１、２号地割面出土遺物……225
PL.20　第２、３号地割面出土遺物(陶磁器)……226
PL.21　第４号地割面……227
PL.22　第４号地割面出土遺物 228
PL.23　第４号地割面焼土内出土遺物……229
PL.24　第５号地割面・出土遺物……230
PL.25　第５号地割面・出土遺物(陶磁器)……231
PL.26　第６号地割面・出土遺物……232
PL.27　第６号地割面出土遺物(陶磁器)……233
PL.28　第７号地割面・出土遺物……234
PL.29　第７号地割面出土遺物(陶磁器・銅銭)……235
PL.30　第８号地割面……236
PL.31　第８号地割面出土遺物(陶磁器)……237
PL.32　第８号地割面焼土内出土遺物……238
PL.33　第８号地割面焼土内出土遺物②……239
PL.34　第９号地割面……240
PL.35　第９号地割面出土遺物、第９・10号地割面…241
PL.36　第10号地割面・出土遺

物(陶磁器)……242
PL.37 第11号地割面……243
PL.38 第11号地割面・出土遺物……244
PL.39 第12号地割面……245
PL.40 第12号地割面出土遺物(陶磁器)……246
PL.41 第12号地割面出土遺物 247
PL.42 第13号地割面・土壙出土遺物……248
PL.43 第13号地割面出土遺物(陶磁器)……249
PL.44 鉄製品他……250
PL.45 近世以降陶磁器他…251
PL.46 保存処理終了後の木製品、鉄製品……252
PL.47 鉄滓の顕微鏡組織…253
PL.48 鉄滓の顕微鏡組織② 254
PL.49 鉄酸化物及び鉄滓の顕微鏡組織……255
PL.50 カスガイ及び鉄鍋破片の顕微鏡組織……256
PL.51 カスガイの結晶粒組織 257
PL.52 鉄鍋破片の顕微鏡組織 258
PL.53 上之国勝山館跡出土カスガイ中非金属介在物の走査X線像及びエネルギー分散分析…259
PL.54 花粉顕微鏡写真 ① 260
PL.55 花粉 〃 ② 261

附図目次

附図1 侍屋敷跡地形図・遺構配置図……
附図2 勝山館跡植生図……
附図3 上之国勝山館跡整備計画図……
附図4 館神八幡宮跡整備計画図……
附図5 平坦部建物跡植栽計画図……
附図6 園跡整備計画図……
附図7 勝山館跡アプローチ部分(上国寺・笹浪家周辺)の町並み整備構想

例言

1　本書は史跡上之国勝山館跡の昭和59年度発掘調査及び環境整備事業について概要をまとめたものである。第二編環境整備実施設計書作成は柳田石塚建築設計事務所に依頼した。内容については文化庁記念物課・加藤充彦調査官、北海道大学・足立富士夫先生、文化学院・鈴木亘先生から御指導を頂戴した。

2　本年度の発掘調査は次の体制でのぞんだ。尚、調査の後半、乙部町教育委員会、知内町教育委員会の格別の配慮により森広樹氏、高橋豊彦氏のご指導と、ご助力を頂戴した。

調査主体者　上ノ国町教育委員会　教育長　布施謂一郎

主管　上ノ国町教育委員会文化課　課長　森勇一、文化財係　疋田英夫

修景技術専門員　山崎重任(上ノ国町建設課長)

発掘担当者　学芸員　松崎水穂

調査員　　学芸員　斉藤邦典　乙部町教育委員会学芸員　森広樹（9月下旬～10月上旬）　知内町教育委員会学芸員　高橋豊彦（10月初旬～10月中旬）

3　第一編Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴは斉藤邦典がⅣ、Ⅶは松崎水穂が執筆し、Ⅵは新日鉄八幡製鉄所大澤正己氏より頂戴したものである。尚第二編Ⅳ植生調査は宗像和彦氏他が、花粉分析は山田悟郎氏が柳田・石塚建築設計事務所の依頼により分担したものである。

4　挿図作成は執筆者が主に行い作業員が補助した。

5　挿図の中で示した北方位は真北を示す。

6　調査にあたっては次の関係機関と各位に多大な御指導と御援助を賜った。(順不同)

文化庁記念物課　仲野浩、牛川喜幸、加藤充彦、岡本東三、　同　建造物課　鈴木嘉吉、藤村泉　北海道教育庁文化課　辻義光、大沼忠春、越田賢一郎　東京大学名誉教授　三上次男　京都大学名誉教授　小林行雄　早稲田大学　桜井清彦　北海道大学　足立富士夫　文化学院　鈴木亘　函館大学　榎森進　奈良国立文化財研究所　坪井清足　東洋文庫　渡辺兼庸　峰山巌　北海道埋蔵文化財センター　藤本英夫、畑宏明、千葉英一、長沼孝　和歌山県教育委員会　辻林浩、上田哲夫　北海道開拓記念館　三野紀雄、小林幸雄、平川善祥、海保嶺夫、小林真人　札幌市教育委員会　加藤邦雄　堺市教育委員会　樋口吉文　稲沢市教育委員会　北條献示　瀬戸市歴史民俗資料館　藤沢良祐　乙部町教育委員会　森広樹　知内町教育委員会　高橋豊彦　新冠町教育委員会　乾芳広　笠原町教育委員会　寿都町教育委員会　内山真澄　名古屋大学大学院　伊藤嘉章　土地所有者　森兼夫

作業員

有我キヨエ、上野ヒデ、加賀アキ、加賀ヤヨイ、加賀ナカコ、甲谷信男、菊地たきえ、草間伸一、片石百合子、小林静子、小滝あけみ、小滝徳栄(故人)、佐山アキ子、沢村照子、笹浪定子、鈴木しのぶ、辻都茂子、辻美保子、土田幸子、富江史郎、中村キクエ、西村百々代、浜田寛子、平井登美子、福田真貴子、布施末子、南谷澄子、南谷鶴治、森節子、森美雪、森朋彦、森理生、山崎洋子、山本幸子、柳田昌子、柳原幸子、米沢キワ、若狭谷有能子

引 用 参 考 文 献

三河後風土記　1610年　平岩親吉　自序
日本民家史　1927年　藤田元春
アイヌの住居　鷹部屋福平　1933年
日本刀（岩波新書）　1943年　本間順次
北門叢書1、3　1944年
上ノ国村史　1956年　上ノ国村
住居の歴史　1956年　後藤守一
アイヌ絵志　1959年　越崎宗一
続上ノ国村史　1962年　上ノ国村
鉄の生活史（角川新書）　1966年　窪田蔵郎
岩波講座　日本歴史　中世2、4　1967年
岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書　1967年　岩木山刊行会
考古学雑誌　55巻2号　1968年
考古学ジャーナル1月号　1970年
考古学ジャーナル9月号　1971年
考古学雑誌　56巻3号　1971年
講座日本史9　1971年　歴史学研究会／日本史研究会
日本の美術　民家　1971年　吉田靖
北門叢書5　1971年
考古学ジャーナル10月号　1972年
「小判、生糸、和鉄」（岩波新書）　1973年　奥村正二
鉄の考古学　1973年　窪田蔵郎
アイヌ絵集成　1973年　高倉新一郎
民家のみかた、調べ方　1974年　文化庁
古代の製鉄　1975年　山本博
岩波講座　日本歴史　中世2、3、4　1975年～1976年
アイヌ絵　1976年　越崎宗一
史館　第6号　1976年
美濃の古陶　1976年　楢崎彰一
日本の民家　1978年　川島宙次
日本古代文化の探究　鉄　1978年　森浩一
日本古代文化の探究　家　1978年　大林太良
どるめん　18号　1978年
古瀬戸、志戸、織部　1978年　朝日新聞社
床の間（岩波新書）　1979年　太田博太郎
菅谷館跡環境整備基本構想　1979年　埼玉県立歴史資料館
浪岡城跡Ⅳ　1980年浪岡町教育委員会
古代探叢　1980年
上之国勝山館跡Ⅰ－Ⅴ　1980～1984年　上ノ国町教育委員会
北海道洲崎館発見の中世遺物と頭骨　1981年　考古学雑誌67—2
埋甕－古代の出産風俗　1981年　木下忠
菅谷館跡環境整備事業実施報告書　1981年　埼玉県教育委員会
末広遺跡における考古学的調査1、2　1981～1982年　千歳市教育委員会
北海道近世史の研究　1982年　榎森進
中世の商人と交通　1982年　豊田武
中世日本の商業　1982年　豊田武
日本の封建制　1983年　豊田武
北海道の研究　近世編　1983年
北海道考古学19　1983年　北海道考古学会
夷王山墳墓群調査概報　1983年　上ノ国町教育委員会
秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書　1984年　秋田市教育委員会
松前町史　1984年　松前町史編集室
国内出土の肥前陶磁　1984年　九州陶磁文化館
物質文化42　1984年　物質文化研究会
夷王山墳墓群　1984年　上ノ国町教育委員会
大館市松原矢立廃寺発掘調査概報　1984年　大館市教育委員会
季刊考古学8　1984年
史跡志苔館跡Ⅰ、Ⅱ　1984、84年　函館市教育委員会
史跡浪岡城跡環境整備基本構想　1984年　浪岡町教育委員会
錦町5遺跡　1984年　旭川市教育委員会

第一編　遺構確認調査

Ⅰ　調査概要

本年度調査対象は館後方部館神八幡宮跡、空壕地区の東側に位置する宮の沢と華の沢にはさまれた東西約36m、南北約170m、標高98m～70mの南北に長い緩斜面台地の一部である。この台地のほぼ中央部には幅約1m、高さ約2m、長さ約10m程の鉤の手状を呈する土塁があり、その周辺は昔から侍屋敷跡として伝えられてきたところである。調査は当台地における館指定範囲南限27F、27G、27H区、26F、26G、26H区約1,100㎡を行なった。

当地区は昭和54年度調査開始以後全く調査がなされておらず土地買収後昨年度初めて笹等の伐採除去が行なわれただけであり、調査地区は100本を越す30年生の杉林になっていたのでまずその伐採、根おこしより開始した。調査は6月4日より行なった。期間中は降雨量が少なく好天に恵まれたが、屋敷跡の複雑さ等のため解明に時間を要し10月末日調査を完了した。その後の埋め戻し作業は各区画毎に段、地割を復原し行なった。これに約3週間を要し11月24日に全作業を完了した。この間9月下旬より2週間程乙部町教育委員会学芸員森広樹氏、10月初旬より2週間程知内町教育委員会学芸員高橋豊彦氏に調査に参加いただき種々御指導を賜わった。

調査方法はまず27G（20m×20mの大グリッド）杭、26G大グリッド杭を基準線として4m×4mの小グリッドを設定した。次に当地区での土層の堆積及び遺構の有無を見るために、南北に台地の東側に1本、中央部に1本、西側に1本、2m×8mのトレンチをそれぞれセットした。すべてソフトロームまで掘り下げた結果、東側、西側のトレンチより柱穴及び段が確認された。これに従って柱穴列の広がり、段の規模を確認するため調査区を拡大していった。その結果段、溝等により区画されていることが判明し、1区画ずつ調査を行なっていった。

6月　調査区全体の杉伐採、根おこし、27G12、7区、27G10、15区、27H10、15区に2m幅のトレンチ設定及びセクション図作成。遺構確認の調査

7月　1号・2号・3号地割面表土剝ぎ、精査。
1号2号地割面柱穴、土壙半裁セクション図作成。
27F13区～27G13区東西セクション図作成。

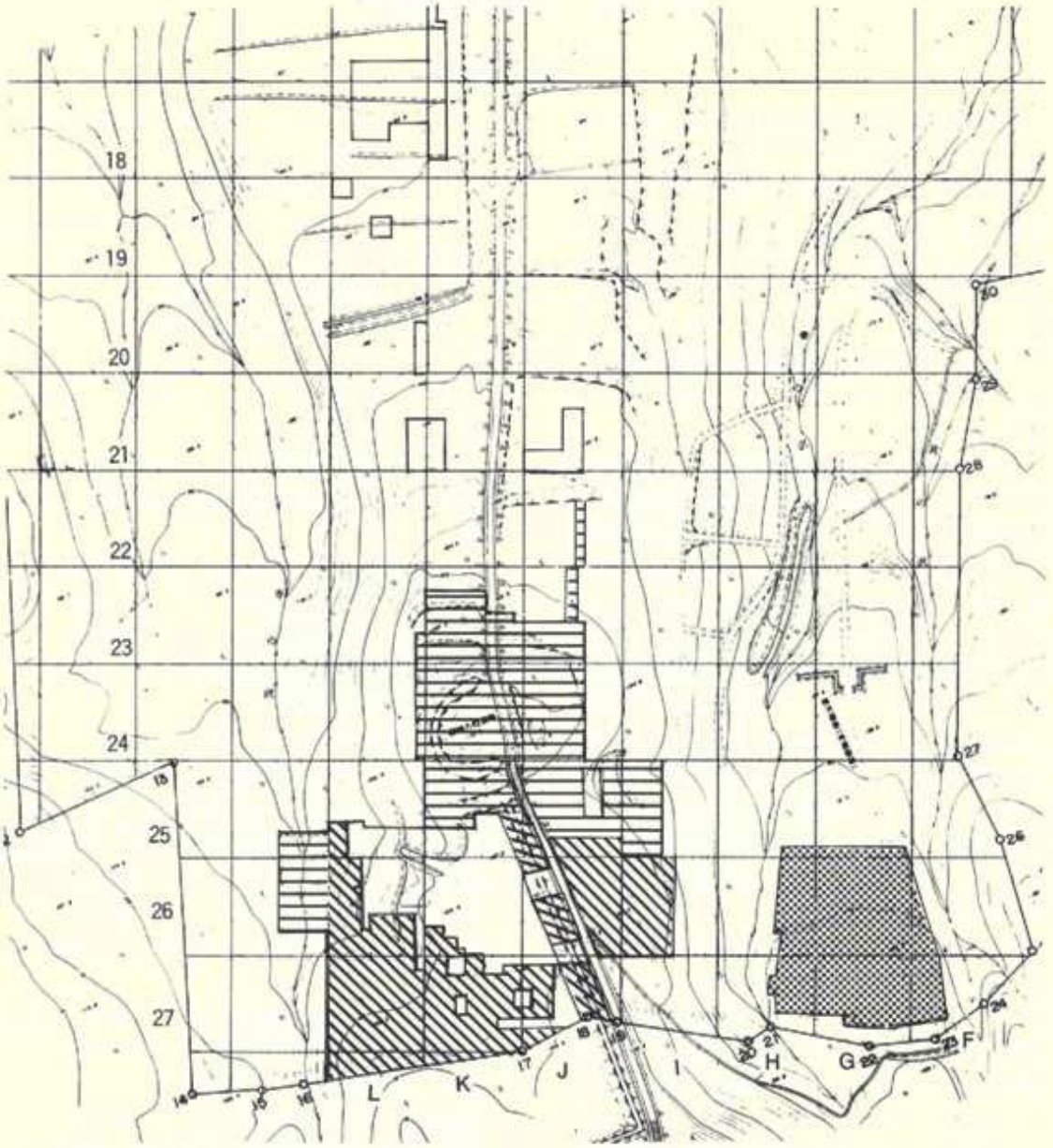
8月　1号・2号・3号地割面柱穴群調査、写真撮影、平面実測
6号・7号地割面表土剝ぎ、精査。

9月　27G2区～27H8区東西セクション図作成。
27G12～11区東西セクション、27G12、7区南北セクション図作成。
27H5～26H25区南北セクション図作成。
6号・7号地割面柱穴群調査、平面実測、写真撮影
4号・5号地割面表土剝ぎ、精査、柱穴覆土観察
27F2区～27G3区東西セクション図作成。
27G5区～26G20区南北セクション図作成。
4号地割面柱穴群配置略図作成、及び同調査。
5号地割面柱穴群調査。
27H4区盛土セクション図作成。
4号・5号地割面写真撮影、同平面実測。

10月　8号・9号・10号地割面表土剝ぎ、精査、柱穴覆土観察、柱穴群配置略図作成。
26H20区～26H10区南北セクション図作成。
26G20区～26G10区南北セクション図作成。
8号・9号・10号地割面柱穴群調査、写真撮影、平面実測。
11号・12号・13号地割面表土剝ぎ、精査、柱穴覆土観察、柱穴群配置略図作成。
26G5区南北セクション図作成。
26H10区～26H25区南北セクション作成。
11号・12号・13号地割面柱穴群調査、写真撮影、平面実測。
27F17区～27H14区東西セクション図作成。
25G24区～25H24区東西セクション図作成。

11月　調査区埋め戻し　終了

（斉藤）


18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
L
K
J
I
H
G
F
54年度・55年度発掘区
57年度・58年度発掘区
56年度発掘区
59年度発掘区
0
20m

第1図　調査位置図

Ⅱ 層 序

本年度調査区の層序は以下のとおりである。

Ⅰ層　表土層。暗褐色土～褐色土、粒状。草根多量に入る。腐植はあまり発達していない。粗～やや密。色調、粗密、含有物等により若干細分される。

Ⅱ層　館廃絶後の自然堆積土である。暗褐色土～灰暗褐色土。粒状、渡島大島火山灰（寛保元年－1741　以下文中はOS－aと略記する）混入。Ⅰ層に比しやや灰色味を帯びる。やや粗～やや密。色調、粗密、含有物等により、若干細分され、OS－aの純層も含まれる。

Ⅲ層　館機能時の整地盛土層である。調査区は南～北へ緩斜面となっているため建物を構築の際、平坦面を作り出すためにレベルの低い方へ盛った土である。大きく２層に分けられる。

Ⅲa層　27Ｈ４区附近の盛土。明黄褐色土。堅微OS－a微量混入（上層より浸透したと思われる。）

Ⅲb層　27Ｇ10区附近の盛土。暗褐色土。粒状。炭化物、ローム粒微量含有。やや粗。Ⅱ層に比しやや色調は暗い。

Ⅳ層　建物跡柱穴掘り込み面である。大きく３層に分けられる。

Ⅳa層　黒褐色土、粒状、やや粗

Ⅳb層　黄燈色火山灰純層。やや粗～やや密

Ⅳc層　褐色土。粒状

Ⅴ層　茶褐色ソフトローム

Ⅵ層　茶褐色ハードローム

本年度調査においては東西セクション３本（A～A′、B～B′、C～C′）、南北セクション３本（D～D′、E～E′、F～F′）、その他盛土整地されている27Ｈ４区に十字セクション（G～G′、H～H′）、さらに27Ｇ６、７区、27Ｇ11・12区にまたがる南北約５ｍ、東西約４ｍ程の10cm程の浅い立ち上がりをもつ不整長円形の遺構？について南北、東西にセクションを設け観察を行なった。以下各々の詳細について述べる。

A～A′間について（第２図）

調査区南端部セクションである。このラインの層序は次のとおりである。

Ⅰ層－表土、褐色土、極めて粗。

Ⅰ－１層　暗褐色土、表土に比しやや暗い。やや粗。OS－a降灰以降の整地層である。

Ⅱ層　暗褐色土。OS－a混入を基本として以下に細分される。

Ⅱ－１層　灰褐色土。OS－a多量混入。やや粗。

Ⅱ－２層　暗褐色土。OS－a微量混入。やや粗。

Ⅱ－３層　暗黒褐色土。OS－a微量混入。やや粗。

Ⅱ－４層　OS－aの純層。やや密。

Ⅳa層－黒褐色土。やや粗である。

27Ｇ14区ピット26の掘り込み面はソフトロームであり覆土は①の暗褐色土、粗。②褐色土、やや密。③黄褐色土、やや密。④黒褐色土。やや密である。柱痕跡は検出できず不明。また27Ｇ12区において、10cm程の立ち上がりをもつ溝が確認されたが、片側の立ち上がりは確認できなかった。Ⅱ－１層～Ⅱ－４層はこの溝の覆土上部の堆積土である。掘り込み面はソフトロームであり、その覆土は①暗褐色土②灰黒褐色土③暗褐色土、ロームブロック、炭火物混入である。27Ｇ11区において２つの柱穴断面が観察されたが、いずれもその掘り込み面はⅡ層であり当館の時期より新しいものであった。またその覆土は両方ともロームブロックが多量に混入する暗褐色土で極めて堅微であり埋め戻したような感じであった。

B～B′間について（第２図）

１号地割面北端、５号地割面、７号地割面中央部を横断するセクションである。このラインではⅠ層、Ⅰ－１層、Ⅱ－１層、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅳc層が堆積する。尚Ⅱ－１層はA～A′間のⅡ－４層に該当する。

Ⅰ層－表土　暗褐色土。やや密

Ⅰ－１層　表土に比しやや暗い。OS－a降灰以降の整地層である。

Ⅱ層　暗褐色土。OS－a混入。

Ⅱ－１層　OS－a純層。A～A′間のⅡ－４層に該当する。

Ⅳa層　黒褐色土層。やや粗

Ⅳb層　黄燈色？火山灰純層。当地区では27Ｇ５区の遺構の覆土上面に堆積する。やや密

Ⅳc層　褐色土。以下詳細に述べる。

27Ｇ５区の土壙の掘り込み面はソフトロームであり、その覆土は①褐色土。黄燈色火山灰多量混

入。②褐色土。③暗褐色土。④暗褐色土。③よりやや暗く粗。⑤褐色土。⑥褐色粘土層。密。⑦黒色土。焼土粒、炭化物混入。密。である。覆土上面に黄燈色火山灰？が堆積しているため当館の時期よりも古い時代の構築物と考えられる。また27H10区、27G6区境界の溝は第3号地割面と第7号地割面を区画している段である。掘り込み面はⅣc層である。さらに27H4区の土壙は掘り込み面がⅣa層で、その覆土は①明褐色土。ロームブロック混入。②暗褐色土。③黒褐色土。いずれもやや密。である。

C～C'間について（第2図）

調査区最北端のセクションである。このラインではⅠ・Ⅱ・Ⅳc層が堆積する。25G区附近で道路上遺構の検出を目指した。25G22区、23区で二箇所約12cm程の立ち上がりを認めたが道路のそれとは言い難い。また25G24区の柱穴は覆土に多量のロームブロックが混入し、埋め戻された状態であった。

D～D'間について（第3図）

このラインではⅠ層、Ⅱ層、Ⅳa層、Ⅳb層、Ⅳc層の堆積がみられる。27H10区附近において第3号地割面と第7号地割面の境の段が観察された。掘り込み面はⅣa層である。自然埋没の様相を呈しており、覆土は①褐色土。黄褐色土＋中礫混入。②明褐色土。OS－a微量混入である。③明灰褐色土、小礫含有。柱穴覆土は第10号地割面、P26は褐色土。ロームブロック混入。P2は褐色土。第13号地割面P17は褐色土炭火物混入。P18は暗褐色土＋ロームブロックである。

E～E'間について（第3図）

台地中央部を縦断するセクションである。このラインではⅠ、Ⅱ層のみが堆積している。27G2区中央部においてソフトロームが掘り込み面で立ち上がりがやや急な10cm程の高さをもつ段が観察された。覆土は黄褐色土、OS－a微量混入である。平面図には図示していないが、第4・5地割面内やや南側でも若干差がついており、おそらくこの段の延長であると思われる。

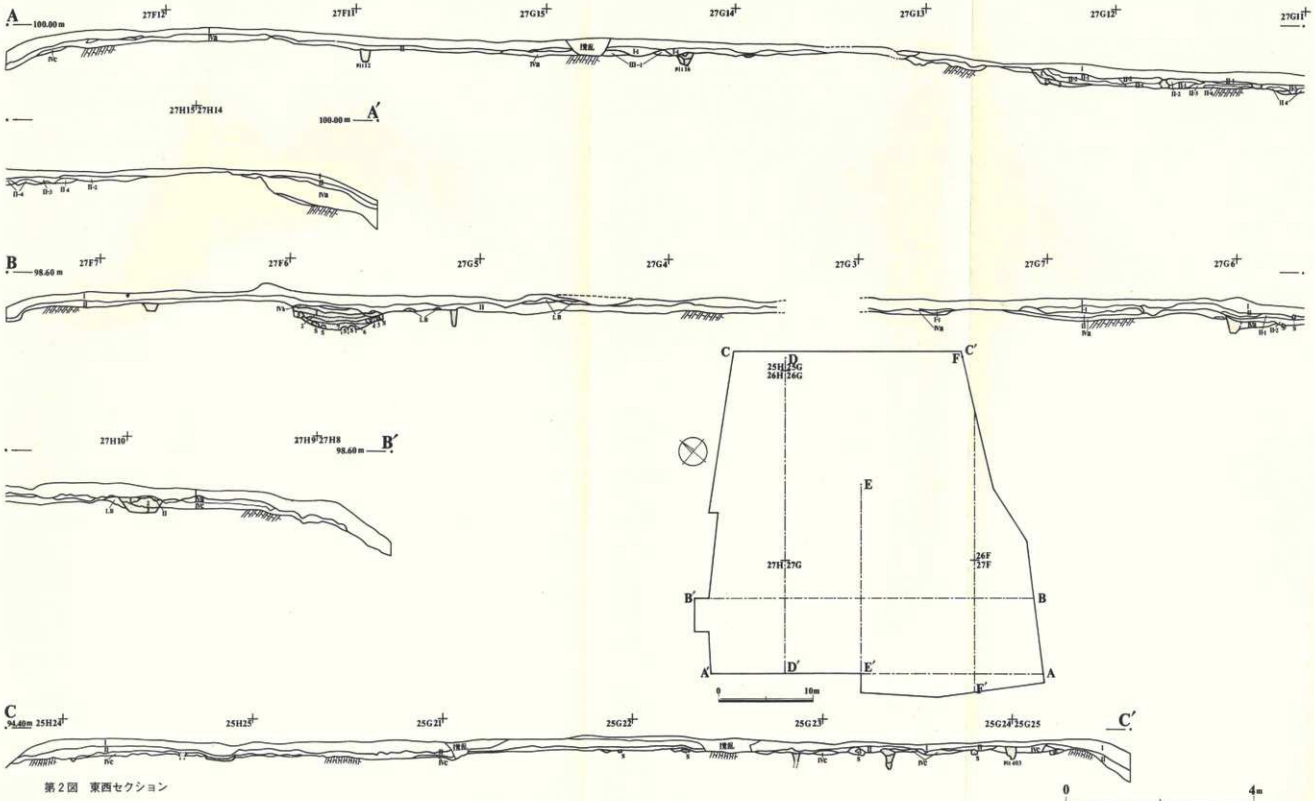
F～F'間について（第3図）

このラインではⅠ・Ⅱ・Ⅳcの他、Ⅲbが堆積し細分される。

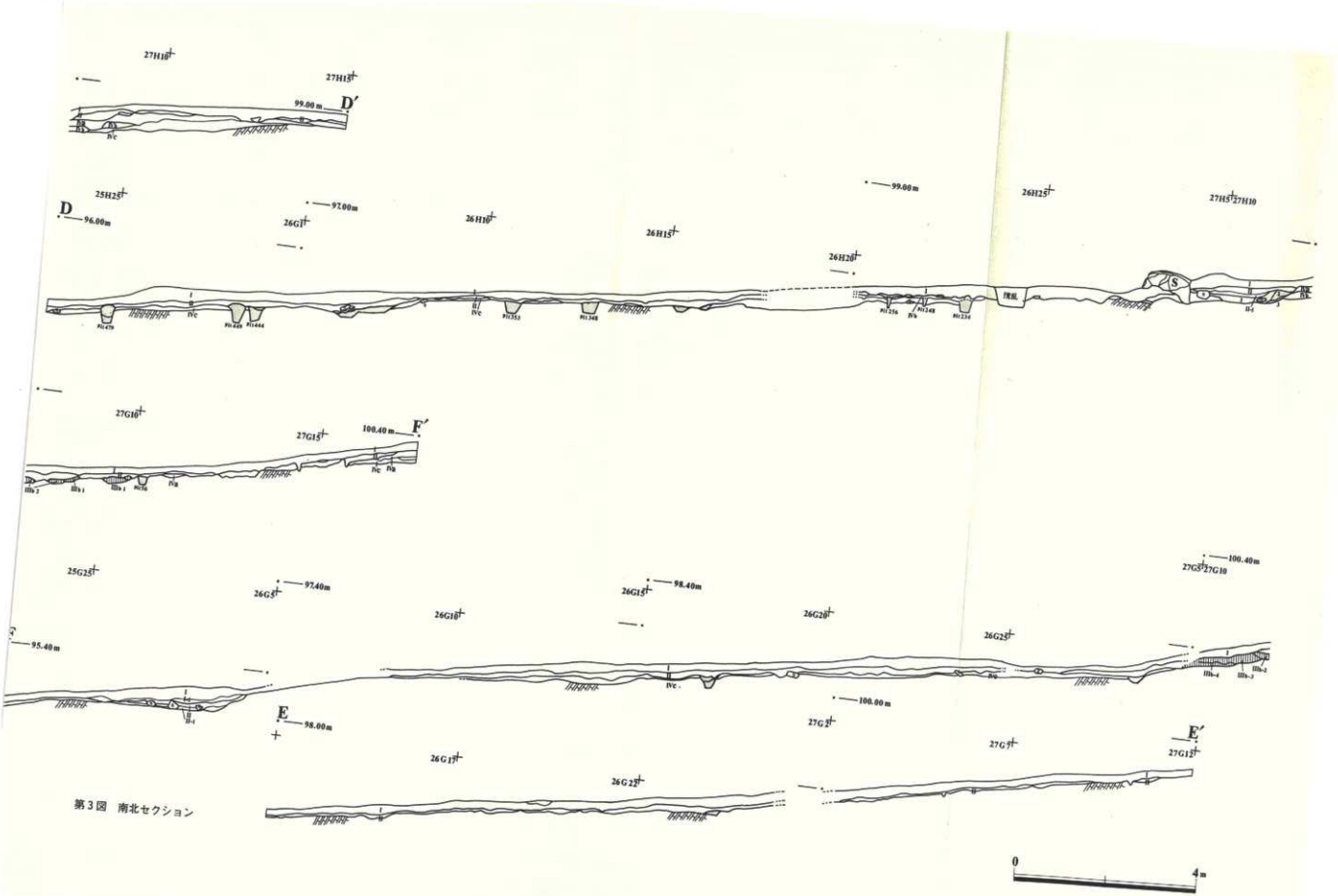
Ⅲb1層　暗褐色土、焼土炭化物含有。
Ⅲb2層　暗褐色土。粗
Ⅲb3層　暗褐色土。炭火物含有。
Ⅲb4層　褐色土。炭化物、ローム粒含有。

27G20区の段は第1号地割面南端部分で掘り込み面はソフトローム、27G5区の段は第4号地割面南端部分で掘り込み面はⅣc層、26G20区の段は第8号地割面南端部分で掘り込み面はⅣc層である。

（斉藤）


A
100.00m
27F12
27F11
27G15
27G14
27G13
27G12
27G11
27H15
27H14
A′
B
98.60m
27F7
27F6
27G5
27G4
27G3
27G2
27G1
27H10
27H9
27H8
B′
C
94.40m
25H24
25H25
25G21
25G22
25G23
25G24
25G25
C′
C
D
F
C′
25H
25G
26H
26G
E
27H
27G
26F
27F
B′
B
A′
D′
E′
F′
A
0
10m
0
4m

第２図　東西セクション


27H18
27H15
99.00m
D'
D
96.00m
25H25
97.00m
26G1
26H10
26H15
99.00m
26H20
26H25
27H5
27H10
27G10
27G15
100.40m
F'
25G25
26G5
97.40m
26G10
26G15
98.40m
26G20
26G25
27G5
27G10
100.40m
95.40m
E
98.00m
26G17
26G22
100.00m
27G2
27G9
E'
27G12
0
4m

第３図　南北セクション

Ⅲ 遺 構

1．調査方法

概要に述べている通り２ｍ×８ｍ幅の南北トレンチを27Ｈ10～15区、26Ｇ７～12区、27Ｇ10～15区に設定し、土層、遺構検出状況を把握後調査区を拡大していった。調査は基本的には一地割面の一建物ごとに行なった。表土剝ぎ、Ⅱ層除去後、Ⅲ層あるいはⅢ層が堆積していない地区ではⅣ層上面において遺構確認のための精査を行なった。さらに柱穴覆土と掘り込み面に色調の差がなく、見極めが困難である場合にはⅤ層ソフトローム面まで下げて遺構の確認を行なった。柱穴全体の形状、掘り方の覆土、柱痕跡、柱穴内礎石の有無、柱穴内詰石の有無、掘り込み面等をそれぞれ観察し別表（Ｐ1～Ｐ509）のように柱穴観察表を作成し、柱穴を掘り上げ、土壙等の調査を行なった。尚第１号地割面柱穴観察表の中では掘り方覆土、柱痕跡について、その有無のみ掲載しているが、表作成後各柱穴を半截しその覆土の状態を観察した。尚土壙も半截し覆土を観察した。また第３・第７号地割面の二地区は建物の建て替えがなかった地区であるが、その他の地割面はすべて建て替えが行なわれたと考えられるため、それぞれ柱穴観察表作成後、柱穴の掘り方覆土の成分、柱穴全体の形状、柱穴間の距離、方向を検討し、それぞれ１軒ずつ想定して調査を行なった。柱穴観察表作成と平行して柱穴配置略図を作成する方法をとった。また柱穴観察表内掘り方覆土の記述についてはそれぞれ主体となる覆土によって記号化した。すなわち褐色土－Ａ、暗褐色土－Ｂ、ロームブロック黄褐色土－Ｃ、黒褐色土－Ｄとした。また遺物の取り上げは調査開始当初Ⅰ、Ⅱ層は４ｍ×４ｍグリッドの一括取上げ、Ⅲ層以下については出土位置を図に落し、レベルを附して取り上げていったが、遺物の出現頻度が少ないため、調査後半９月頃より、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層以下のすべてに対して４ｍ×４ｍグリッドをさらに１ｍ×１ｍにメッシュを切り、１ｍ×１ｍ毎の一括取り上げとした。

2．調査

調査の結果13の地割面とそれに伴なう建物跡、段、焼土、土壙が確認された。地割面は規模でみると第４号が最も大きく240㎡あり、第１・７・８号が100㎡をこえるほかはすべて40㎡～60㎡である。その長軸方向は第１・12号を除きほかはすべて北東方向をとるようである。また第２・３・５・６号については段の確認ができなかった。段の規模は長さは約６ｍ～12ｍであり、幅は20㎝～90㎝とバラつきがある。その長軸方向は殆んど北東方向をとる。土壙は８基確認された。形状は第３号地割面のものを除き円形～隅丸方形を呈し規模はバラつく。焼土は７基確認されたが、すべての地割にはない。また建物跡は第２号以外各々の地割面で想定され、重複も数えて計18軒程が考えられる。

1．第1号地割面

1．位置、概要

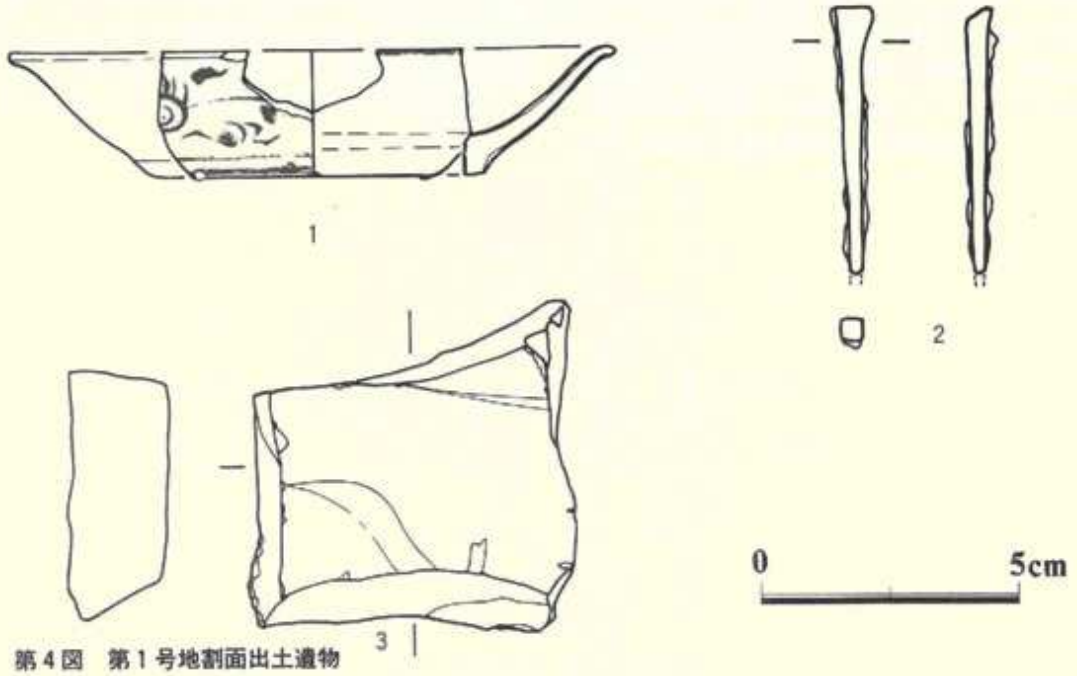
調査区南端27F1区、2区、6区、7区、11区、12区、16区、17区、27G4区、5区、9区、10区、14区、15区、19区、20区、標高99.9～97.6mの緩斜面に位置し短軸8.5m、長軸14.3mで面積121.55㎡であり、N50°Wに長軸をとる。調査はⅣa層上面で遺構確認のための精査を行なったが、遺構覆土とⅣa層の識別が明確に判断できなくⅤ層まで掘り下げ遺構の確認を行なった。その結果二本の段、柱穴群、二基の土壙、焼土が確認された。柱穴は配列状況より複数の建物跡があることが予想されたため、1軒ごとに建物跡を確認後掘り下げた。またそれぞれについてセクション図を作成した。

2．段（第7図）

地割を区画する段は2本検出されたが、1本は27F11区より27G19区まで幅40cm、長さ11.5mでN52°Wに長軸をもつ。南西端ではほぼ直角にカーブを描き、3.3m程で消滅してしまう。比高差10cmで30°の角度で立ち上がる。さらにもう1本は27F11区より始まり27G20区で前者の段と重複してしまう。幅20cm、重複箇所まで長さ3.6mでN78°Wに長軸をもつ。比高差は10cmで70°の角度で立ち上がる。この二本の段の新旧関係は不明である。

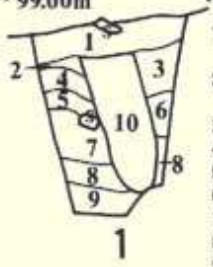
3．建物跡（第7図）

建物跡は二軒想定した。一軒目は短軸2間、長軸3間でその柱穴配列は長軸ではP83－P44－P43－P39、中央部分はP17－P15－P14－P25、さらにP9－P8－P7－P13で、短軸はP83－P17－P9、P44－P15－P8、P43－P14－P7、P39－P25－P13である。中央部内仕切はP15、P14である。その規模は短軸3.4m長軸5.1mでN51°Wに長軸をもつ。柱間は長軸外側はそれぞれ1.7mと一定であるが中央部分は1.5m～2mとややバラつく。短軸はP83－P17－P9はそれぞれ1.7mと一定であるが他のラインは1.2m－1.9mとバラつく。柱の太さ深さ、形状は、太さではP17－P15－P14－P25が10cm、その他は10－24cmとバラつきがある。深さはP83－P44－P43－P39では50cmとほぼ一定しているが、他は54cm～80cmとバラつく。形状は中央部間仕切部分P14、P15は円柱であるが、その他はすべて角柱を用いている。柱穴セクション図はP83、P44、P43、P39を図示した。P83－掘り方は褐色土にソフトロームと推される黄褐色土粒が上部で多量



第4図　第1号地割面出土遺物

SPa 99.00m



1

SPa′

1．褐色土、黄褐色土粒（細粒）多量混入
2．褐色土、黄褐色土粒（細粒）少量混入、やや密
3．暗褐色土、黄褐色土粒微量混入
4．黄褐色土、粗、暗褐色土粒微量混入
5．褐色土、やや密
6．黄褐色土、やや密、褐色土粒混入
7．褐色土、黄褐色土粒・OS-a混入、やや粗
8．褐色土、やや粗、暗褐色土粒・OS-a混入
9．黄褐色土、褐色土粒混入、やや密
10．褐色土、黄褐色土粒・OS-a（粒子大）混入粗

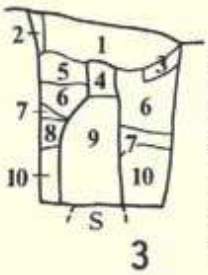
SPb 99.00m

2

SPb′

1．黄褐色土、やや粗
2．暗褐色土＋黄褐色土、やや粗
3．暗褐色土、やや密
4．褐色土、やや密
5．褐色土、2・3・4より明るい、やや粗
6．褐色土、やや密、5よりも若干明るい
7．OS-a純層、黄褐色土粒微量混入
8．暗褐色土、OS-a混入、やや密

SPc 99.00m

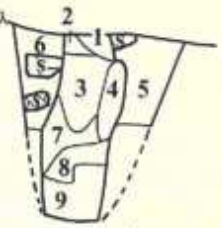


3

SPc′

1．暗褐色土、炭化物・焼土粒黄褐色土粒微量混入
2．暗褐色土、やや密
3．褐色土、黄褐色土粒多量混入
4．暗褐色土、極めて粗
5．暗褐色土、黄褐色土粒（大粒）混入、やや粗
6．褐色土、黄褐色土粒（大粒）混入
7．暗褐色土、極めて粗
8．黄褐色土、粗
9．暗褐色土、草根多量、極めて粗
10．褐色土、暗褐色土粒＋黄褐色土粒

SPd 99.00m

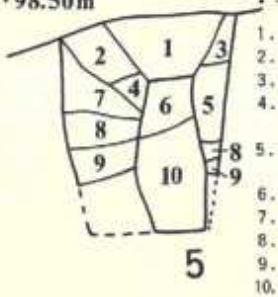


4

SPd′

1．暗褐色土、粗、OS-a混入
2．褐色土、粗
3．暗褐色土、OS-a混入、極めて粗
4．褐色土、やや密
5．褐色土、黄褐色土粒混入、やや密
6．褐色土、やや密、黄褐色土粒微量混入
7．灰褐色土、黄褐色土粒・OS-a混入
8．暗褐色土、OS-a多量混入、やや密
9．暗褐色土、OS-a少量混入、密

SPe 98.50m

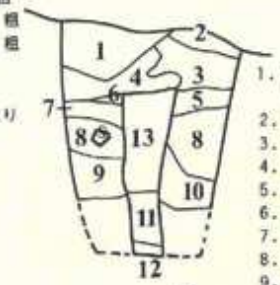


5

SPe′

1．灰褐色土、OS-a多量混入、極めて粗
2．暗褐色土、OS-a・黄褐色土粒混入、粗
3．暗褐色土、炭化物黄褐色土粒混入、粗
4．暗褐色土、2に比しやや暗い、黄褐色土粒混入
5．暗褐色土、OS-a混入、粗、2・3・4・7より暗い
6．褐色土、OS-a混入、極めて粗
7．褐色土、黄褐色土粒多量混入
8．黄褐色土、やや密
9．暗褐色土
10．暗褐色土、極めて粗

SPf 98.60m

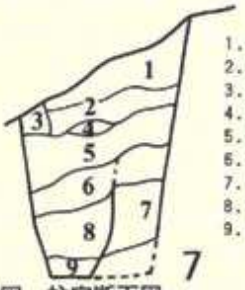


6

SPf′

1．褐色土、やや粗、黄褐色土粒（大粒）やや粗
2．褐色土、粗、1よりやや明るい
3．暗褐色土、1・2・4より暗い、やや粗
4．明褐色土、黄褐色土粒（大粒）混入、やや密
5．褐色土、黄褐色土粒（小粒）混入、極めて粗
6．褐色土、極めて粗
7．褐色土、炭化物混入
8．暗褐色土、粗
9．褐色土、やや密
10．褐色土、4と5の中間色、黄褐色土粒混入、やや密
11．黄褐色土
12．暗褐色土、やや粗

SPg 98.20m

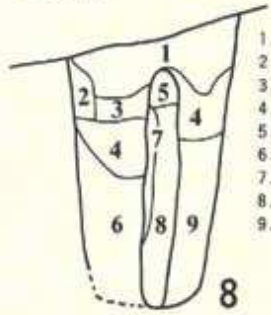


7

SPg′

1．褐色土、やや粗
2．暗褐色土、OS-a混入
3．褐色土、1・2より暗い、やや粗
4．褐色土、1より暗く2より明るい
5．暗褐色土、やや粗
6．褐色土、やや粗
7．暗褐色土、やや粗
8．暗褐色土、黄褐色土、やや粗
9．黒褐色土、やや粗

SPh 98.90m

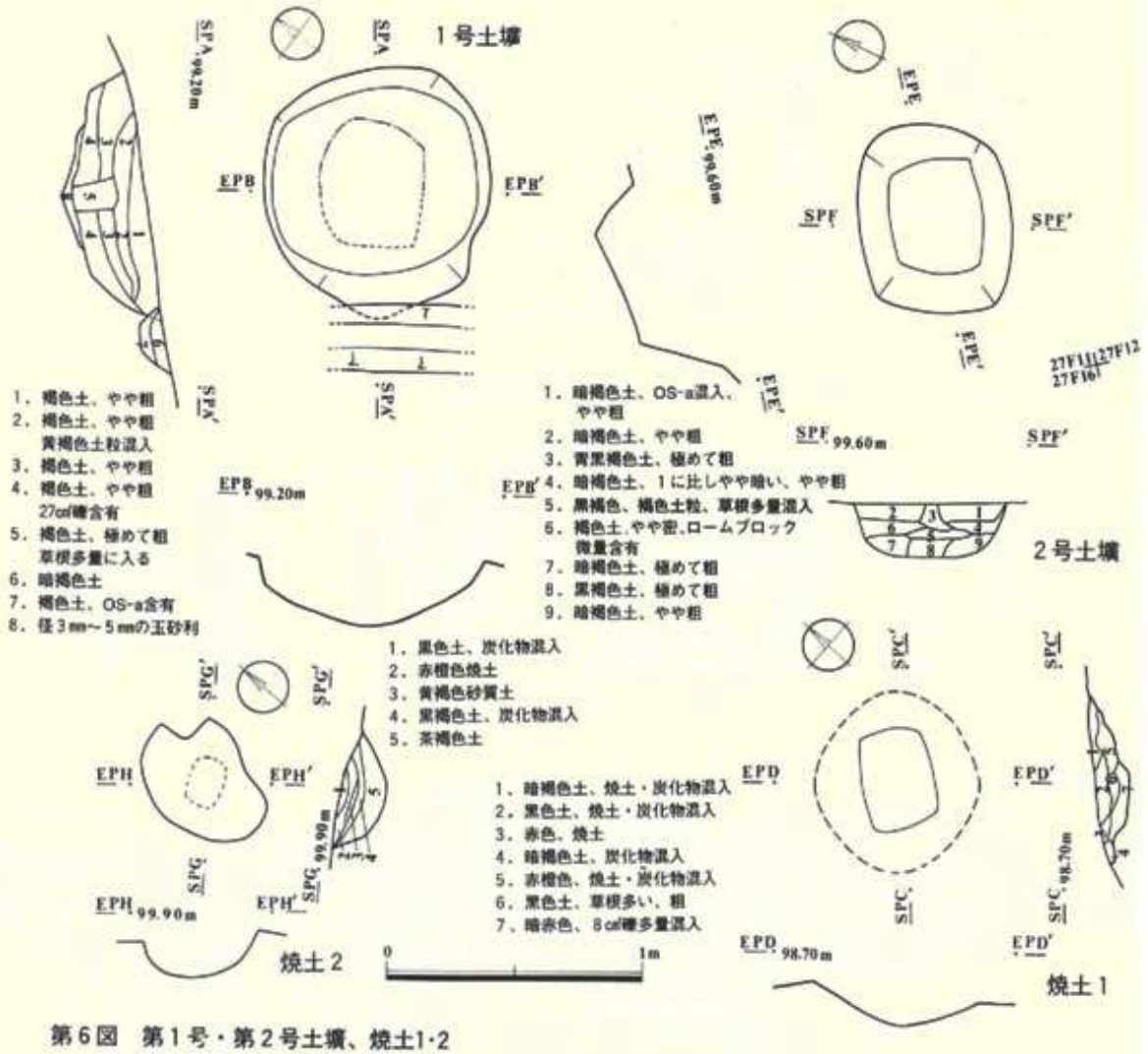


8

SPh′

1．暗褐色土、OS-a微量混入
2．暗褐色土＋黄褐色土（5：5）極めて粗
3．明褐色土、粗
4．明褐色土、極めて粗
5．褐色土、極めて粗
6．褐色土、極めて粗、5に比し暗い
7．褐色土、極めて粗
8．褐色土、樹皮多量含有、極めて粗
9．褐色土、黒色土粒多量混入、極めて粗

第5図　柱穴断面図



第6図　第1号・第2号土壌、焼土1・2

に混入し、ややしまっている。OS－aも混入する。下部は黄褐色土粒がやや少なくやわらかい。柱痕跡にも黄褐色土粒が微量混入しやわらかい。P44－掘り方は褐色土と暗褐色土が主体をなす。上部はややわらかいが下部はしまっている。柱痕跡はOS－a純層、暗褐色でありややしまっている。P43－掘り方は暗褐色土、褐色土が主体をなし黄褐色土粒が少量混入し、やわらかい。柱痕跡には黄褐色土粒の混入はなく極めてやわらかい。P39掘り方は褐色土に黄褐色土粒が混入する。ややしまっている。柱痕跡には黄褐色土粒の混入はない。上部はやわらかいが下部はしまっている。

二軒目は長軸3間、短軸2間の建物跡を想定した。柱穴配列は長軸ではP58－P68－P66－P76、P39－P52－P50、P25－P35－P32－P47で短軸はP58－P39－P25、P68－P52－P35、P66－P50－P32、P76－P47である。尚短軸P76－P47の中間に柱穴が存在しないことによりP76、P47は当建物跡を構成しないかもしれない。その規模は短軸4m、長軸6mでN58°Wに長軸をもつ。柱間は長軸ではP66－76、P32－47がそれぞれ2.5m、その他は1.7m～2.0mとややバラつきがある。短軸では間仕切りのある部分はP58－39、P68－52、P66－50はそれぞれ2.5m、P39－P25、P52－P35、P50－P32はそれぞれ1.5mであり規則性をもっている。柱の太さ、深さ、形状は太さではP58～P76はすべて18cmで一定するが他は10cm～25cmとバラつきがある。深さはP50、P52

Ⅲ 遺 構

1．調査方法

概要に述べている通り２ｍ×８ｍ幅の南北トレンチを27Ｈ10～15区、26Ｇ７～12区、27Ｇ10～15区に設定し、土層、遺構検出状況を把握後調査区を拡大していった。調査は基本的には一地割面の一建物ごとに行なった。表土剝ぎ、Ⅱ層除去後、Ⅲ層あるいはⅢ層が堆積していない地区ではⅣ層上面において遺構確認のための精査を行なった。さらに柱穴覆土と掘り込み面に色調の差がなく、見極めが困難である場合にはⅤ層ソフトローム面まで下げて遺構の確認を行なった。柱穴全体の形状、掘り方の覆土、柱痕跡、柱穴内礎石の有無、柱穴内詰石の有無、掘り込み面等をそれぞれ観察し別表（Ｐ1～Ｐ509）のように柱穴観察表を作成し、柱穴を掘り上げ、土壙等の調査を行なった。尚第１号地割面柱穴観察表の中では掘り方覆土、柱痕跡について、その有無のみ掲載しているが、表作成後各柱穴を半截しその覆土の状態を観察した。尚土壙も半截し覆土を観察した。また第３・第７号地割面の二地区は建物の建て替えがなかった地区であるが、その他の地割面はすべて建て替えが行なわれたと考えられるため、それぞれ柱穴観察表作成後、柱穴の掘り方覆土の成分、柱穴全体の形状、柱穴間の距離、方向を検討し、それぞれ１軒ずつ想定して調査を行なった。柱穴観察表作成と平行して柱穴配置略図を作成する方法をとった。また柱穴観察表内掘り方覆土の記述についてはそれぞれ主体となる覆土によって記号化した。すなわち褐色土－Ａ、暗褐色土－Ｂ、ロームブロック黄褐色土－Ｃ、黒褐色土－Ｄとした。また遺物の取り上げは調査開始当初Ⅰ、Ⅱ層は４ｍ×４ｍグリッドの一括取上げ、Ⅲ層以下については出土位置を図に落し、レベルを附して取り上げていったが、遺物の出現頻度が少ないため、調査後半９月頃より、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ層以下のすべてに対して４ｍ×４ｍグリッドをさらに１ｍ×１ｍにメッシュを切り、１ｍ×１ｍ毎の一括取り上げとした。

2．調査

調査の結果13の地割面とそれに伴なう建物跡、段、焼土、土壙が確認された。地割面は規模でみると第４号が最も大きく240㎡あり、第１・７・８号が100㎡をこえるほかはすべて40㎡～60㎡である。その長軸方向は第１・12号を除きほかはすべて北東方向をとるようである。また第２・３・５・６号については段の確認ができなかった。段の規模は長さは約６ｍ～12ｍであり、幅は20㎝～90㎝とバラつきがある。その長軸方向は殆んど北東方向をとる。土壙は８基確認された。形状は第３号地割面のものを除き円形～隅丸方形を呈し規模はバラつく。焼土は７基確認されたが、すべての地割にはない。また建物跡は第２号以外各々の地割面で想定され、重複も数えて計18軒程が考えられる。

1．第1号地割面

1．位置、概要

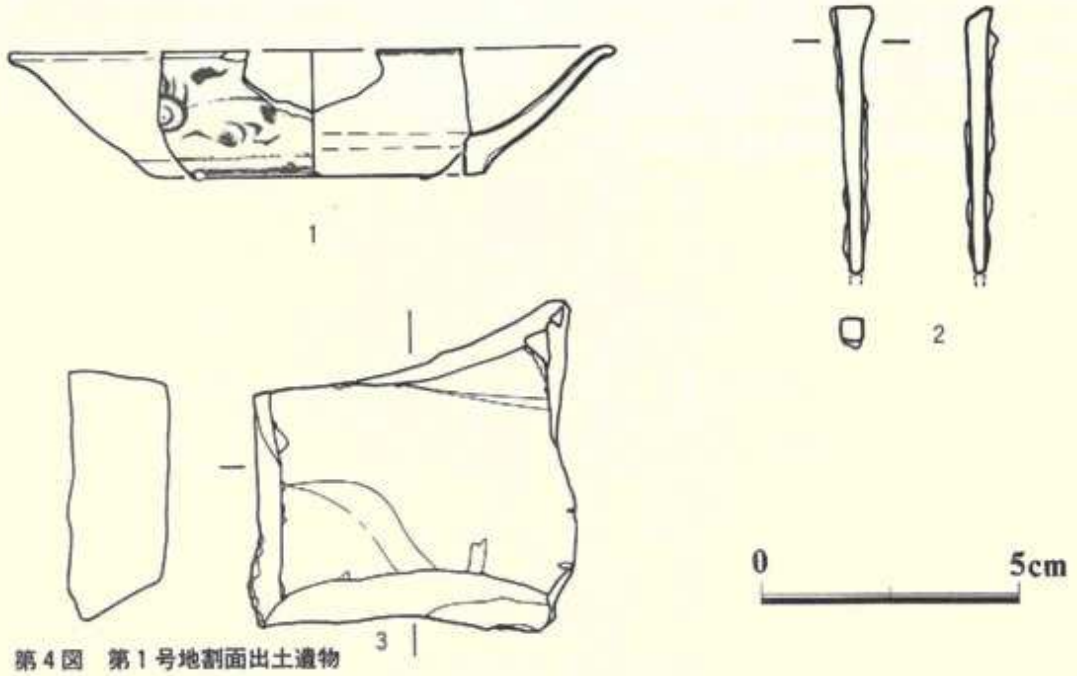
調査区南端27F1区、2区、6区、7区、11区、12区、16区、17区、27G4区、5区、9区、10区、14区、15区、19区、20区、標高99.9～97.6mの緩斜面に位置し短軸8.5m、長軸14.3mで面積121.55㎡であり、N50°Wに長軸をとる。調査はⅣa層上面で遺構確認のための精査を行なったが、遺構覆土とⅣa層の識別が明確に判断できなくⅤ層まで掘り下げ遺構の確認を行なった。その結果二本の段、柱穴群、二基の土壙、焼土が確認された。柱穴は配列状況より複数の建物跡があることが予想されたため、1軒ごとに建物跡を確認後掘り下げた。またそれぞれについてセクション図を作成した。

2．段（第7図）

地割を区画する段は2本検出されたが、1本は27F11区より27G19区まで幅40cm、長さ11.5mでN52°Wに長軸をもつ。南西端ではほぼ直角にカーブを描き、3.3m程で消滅してしまう。比高差10cmで30°の角度で立ち上がる。さらにもう1本は27F11区より始まり27G20区で前者の段と重複してしまう。幅20cm、重複箇所まで長さ3.6mでN78°Wに長軸をもつ。比高差は10cmで70°の角度で立ち上がる。この二本の段の新旧関係は不明である。

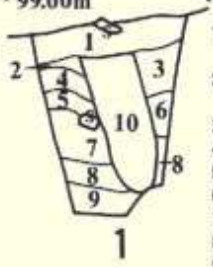
3．建物跡（第7図）

建物跡は二軒想定した。一軒目は短軸2間、長軸3間でその柱穴配列は長軸ではP83－P44－P43－P39、中央部分はP17－P15－P14－P25、さらにP9－P8－P7－P13で、短軸はP83－P17－P9、P44－P15－P8、P43－P14－P7、P39－P25－P13である。中央部内仕切はP15、P14である。その規模は短軸3.4m長軸5.1mでN51°Wに長軸をもつ。柱間は長軸外側はそれぞれ1.7mと一定であるが中央部分は1.5m～2mとややバラつく。短軸はP83－P17－P9はそれぞれ1.7mと一定であるが他のラインは1.2m－1.9mとバラつく。柱の太さ深さ、形状は、太さではP17－P15－P14－P25が10cm、その他は10－24cmとバラつきがある。深さはP83－P44－P43－P39では50cmとほぼ一定しているが、他は54cm～80cmとバラつく。形状は中央部間仕切部分P14、P15は円柱であるが、その他はすべて角柱を用いている。柱穴セクション図はP83、P44、P43、P39を図示した。P83－掘り方は褐色土にソフトロームと推される黄褐色土粒が上部で多量



第4図　第1号地割面出土遺物

SPa 99.00m



1

SPa′

1．褐色土、黄褐色土粒（細粒）多量混入
2．褐色土、黄褐色土粒（細粒）少量混入、やや密
3．暗褐色土、黄褐色土粒微量混入
4．黄褐色土、粗、暗褐色土粒微量混入
5．褐色土、やや密
6．黄褐色土、やや密、褐色土粒混入
7．褐色土、黄褐色土粒・OS-a混入、やや粗
8．褐色土、やや粗、暗褐色土粒・OS-a混入
9．黄褐色土、褐色土粒混入、やや密
10．褐色土、黄褐色土粒・OS-a（粒子大）混入粗

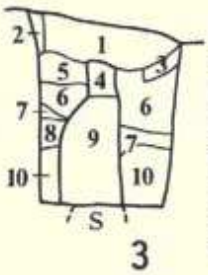
SPb 99.00m

2

SPb′

1．黄褐色土、やや粗
2．暗褐色土＋黄褐色土、やや粗
3．暗褐色土、やや密
4．褐色土、やや密
5．褐色土、2・3・4より明るい、やや粗
6．褐色土、やや密、5よりも若干明るい
7．OS-a純層、黄褐色土粒微量混入
8．暗褐色土、OS-a混入、やや密

SPc 99.00m

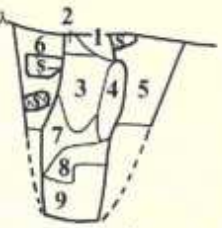


3

SPc′

1．暗褐色土、炭化物・焼土粒黄褐色土粒微量混入
2．暗褐色土、やや密
3．褐色土、黄褐色土粒多量混入
4．暗褐色土、極めて粗
5．暗褐色土、黄褐色土粒（大粒）混入、やや粗
6．褐色土、黄褐色土粒（大粒）混入
7．暗褐色土、極めて粗
8．黄褐色土、粗
9．暗褐色土、草根多量、極めて粗
10．褐色土、暗褐色土粒＋黄褐色土粒

SPd 99.00m

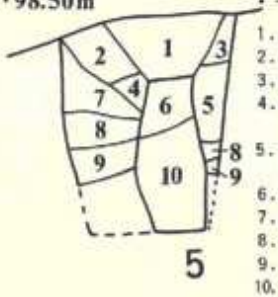


4

SPd′

1．暗褐色土、粗、OS-a混入
2．褐色土、粗
3．暗褐色土、OS-a混入、極めて粗
4．褐色土、やや密
5．褐色土、黄褐色土粒混入、やや密
6．褐色土、やや密、黄褐色土粒微量混入
7．灰褐色土、黄褐色土粒・OS-a混入
8．暗褐色土、OS-a多量混入、やや密
9．暗褐色土、OS-a少量混入、密

SPe 98.50m

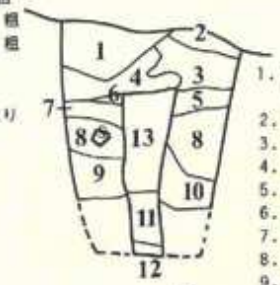


5

SPe′

1．灰褐色土、OS-a多量混入、極めて粗
2．暗褐色土、OS-a・黄褐色土粒混入、粗
3．暗褐色土、炭化物黄褐色土粒混入、粗
4．暗褐色土、2に比しやや暗い、黄褐色土粒混入
5．暗褐色土、OS-a混入、粗、2・3・4・7より暗い
6．褐色土、OS-a混入、極めて粗
7．褐色土、黄褐色土粒多量混入
8．黄褐色土、やや密
9．暗褐色土
10．暗褐色土、極めて粗

SPf 98.60m

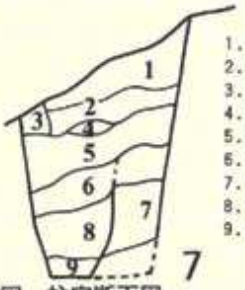


6

SPf′

1．褐色土、やや粗、黄褐色土粒（大粒）やや粗
2．褐色土、粗、1よりやや明るい
3．暗褐色土、1・2・4より暗い、やや粗
4．明褐色土、黄褐色土粒（大粒）混入、やや密
5．褐色土、黄褐色土粒（小粒）混入、極めて粗
6．褐色土、極めて粗
7．褐色土、炭化物混入
8．暗褐色土、粗
9．褐色土、やや密
10．褐色土、4と5の中間色、黄褐色土粒混入、やや密
11．黄褐色土
12．暗褐色土、やや粗

SPg 98.20m

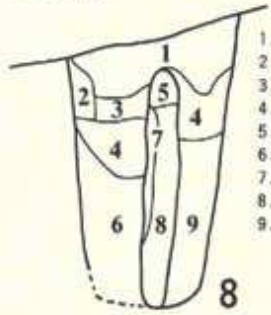


7

SPg′

1．褐色土、やや粗
2．暗褐色土、OS-a混入
3．褐色土、1・2より暗い、やや粗
4．褐色土、1より暗く2より明るい
5．暗褐色土、やや粗
6．褐色土、やや粗
7．暗褐色土、やや粗
8．暗褐色土、黄褐色土、やや粗
9．黒褐色土、やや粗

SPh 98.90m

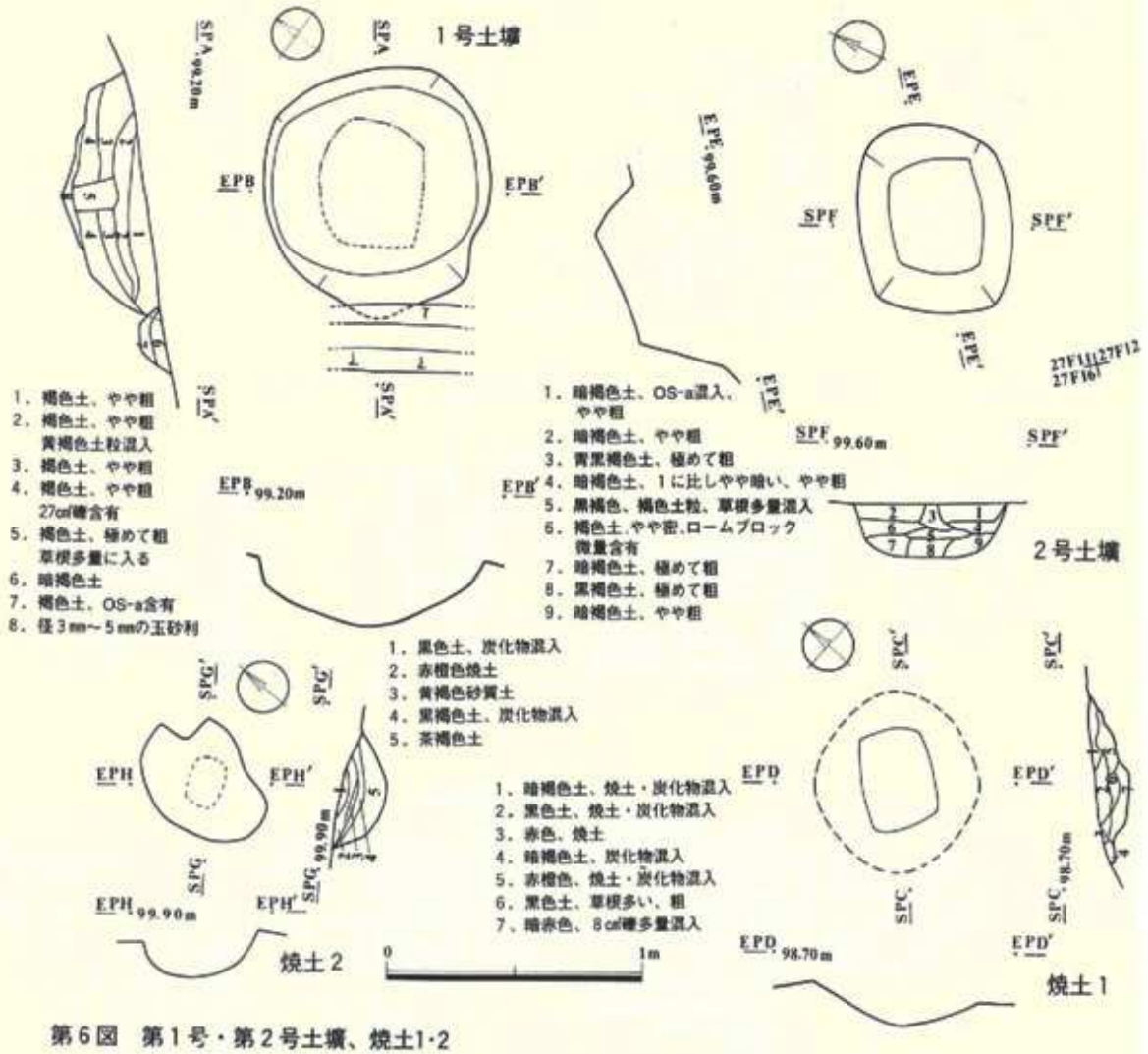


8

SPh′

1．暗褐色土、OS-a微量混入
2．暗褐色土＋黄褐色土（5：5）極めて粗
3．明褐色土、粗
4．明褐色土、極めて粗
5．褐色土、極めて粗
6．褐色土、極めて粗、5に比し暗い
7．褐色土、極めて粗
8．褐色土、樹皮多量含有、極めて粗
9．褐色土、黒色土粒多量混入、極めて粗

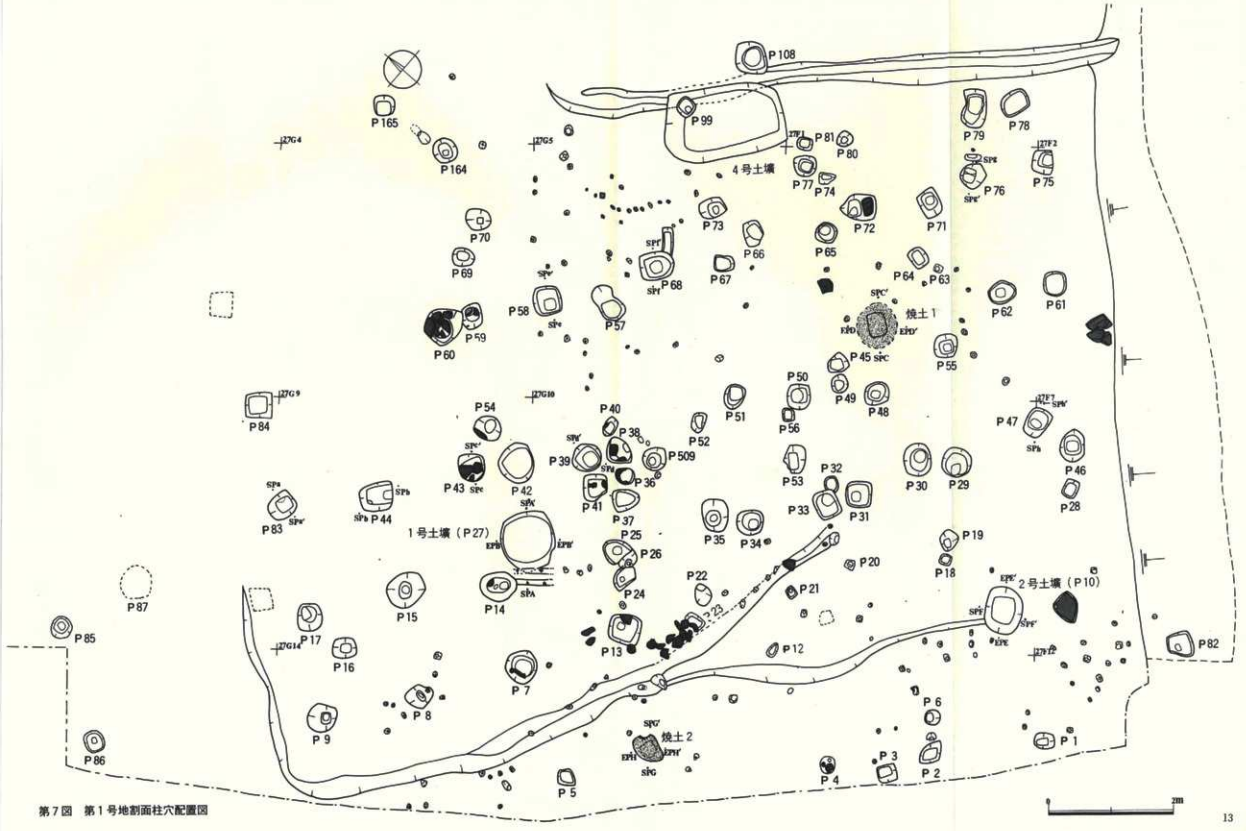
第5図　柱穴断面図



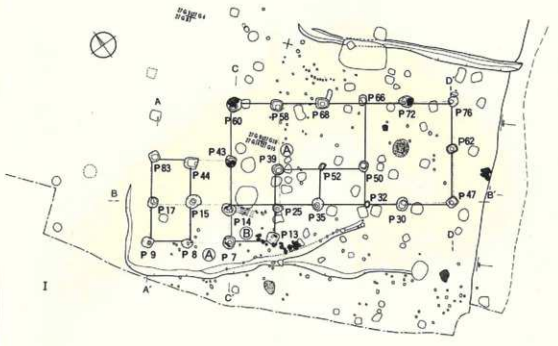
第6図　第1号・第2号土壌、焼土1・2

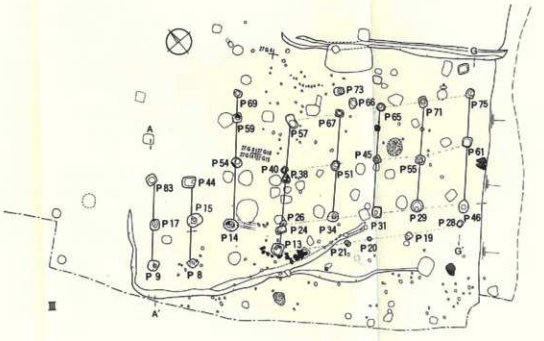
に混入し、ややしまっている。OS－aも混入する。下部は黄褐色土粒がやや少なくやわらかい。柱痕跡にも黄褐色土粒が微量混入しやわらかい。P44－掘り方は褐色土と暗褐色土が主体をなす。上部はややわらかいが下部はしまっている。柱痕跡はOS－a純層、暗褐色でありややしまっている。P43－掘り方は暗褐色土、褐色土が主体をなし黄褐色土粒が少量混入し、やわらかい。柱痕跡には黄褐色土粒の混入はなく極めてやわらかい。P39掘り方は褐色土に黄褐色土粒が混入する。ややしまっている。柱痕跡には黄褐色土粒の混入はない。上部はやわらかいが下部はしまっている。

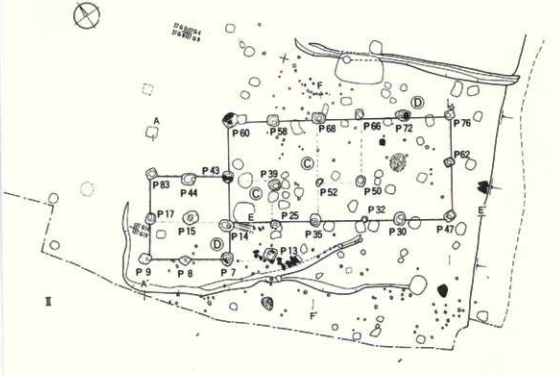
二軒目は長軸3間、短軸2間の建物跡を想定した。柱穴配列は長軸ではP58－P68－P66－P76、P39－P52－P50、P25－P35－P32－P47で短軸はP58－P39－P25、P68－P52－P35、P66－P50－P32、P76－P47である。尚短軸P76－P47の中間に柱穴が存在しないことによりP76、P47は当建物跡を構成しないかもしれない。その規模は短軸4m、長軸6mでN58°Wに長軸をもつ。柱間は長軸ではP66－76、P32－47がそれぞれ2.5m、その他は1.7m～2.0mとややバラつきがある。短軸では間仕切りのある部分はP58－39、P68－52、P66－50はそれぞれ2.5m、P39－P25、P52－P35、P50－P32はそれぞれ1.5mであり規則性をもっている。柱の太さ、深さ、形状は太さではP58～P76はすべて18cmで一定するが他は10cm～25cmとバラつきがある。深さはP50、P52

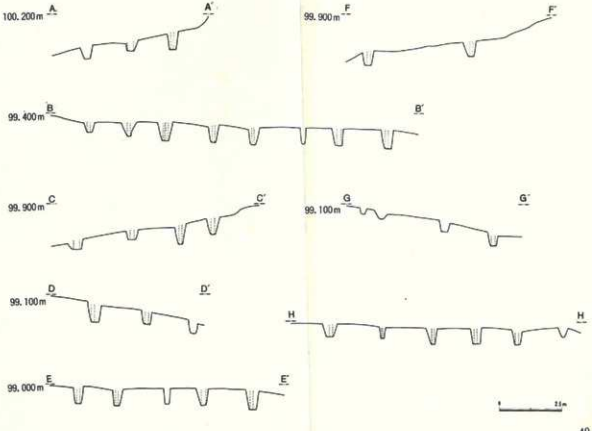


第7図　第1号地割面柱穴配置図









第40図　第1号地割面建物想定図

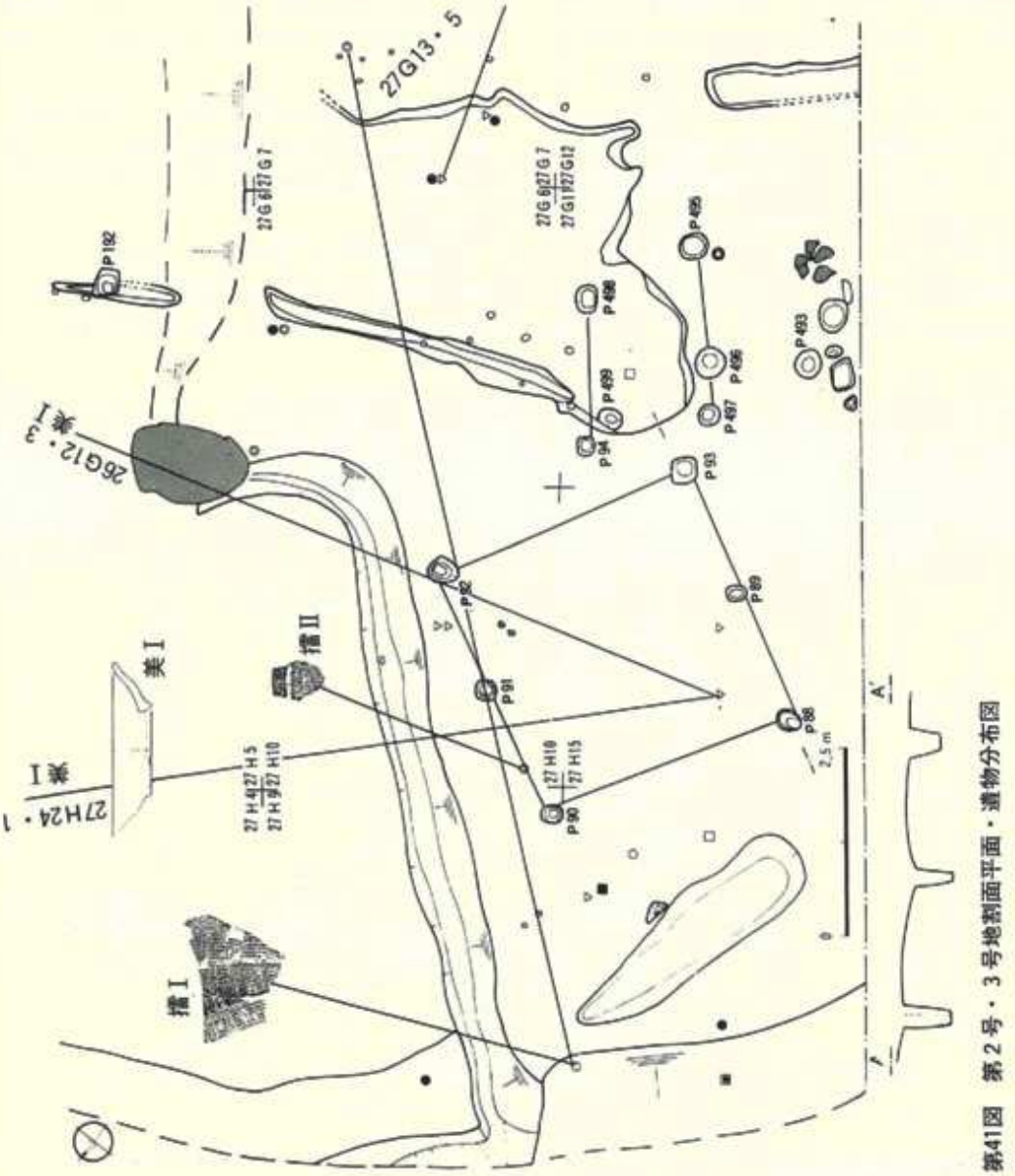
られる程の期間をその存続年代とすることができる。

(2) 第2号、第3号地割面

調査区南端中央から西側の華ノ沢までの一帯である。北側を除く三方を浅い段で画する5m×4m程のコの字型の凹地の2号と、その西側1×2間の建物跡と3×1m程の細長い土壙とからなる3号である（第41図）。

2号の浅い段は西側では溝状を呈し更に北へ延び1段下の6号地割面迄達し、柱穴（P192）によって切られている。既に述べられているようにこの凹地内の底面は粘土が固く締った状態で鉄分、炭化物等が密に見られた。この土壌サンプルから砂鉄状の磁着成分、鍛造剝片、鉄滓、クギ、木炭及び骨片を抽出した（表8、PL19）。

他に陶磁器が出土している。碗皿の舶載と国産の比は殆ど同じであるが、擂鉢が多く、甕も出土している。青磁稜花皿、外面芭蕉文の染付蓮子碗、端反り口縁の美濃灰釉皿、同菊の印花を有するもの等がみられる。いずれも16世紀前半の特徴を



第41図　第2号・3号地割面平面・遺物分布図

示す遺物である。釘は折損部に四角の空洞がみられる。鉄分を含む不定形の粒がある。高師小僧に似るが中の空洞の径が極めて細く形も不揃いである。鳴石が鉄の原料になるというが[注8]、本例の生成は不明であり写真を掲載した。鍛造剝片としたものは角張った極めて薄いものである。砂鉄状のものは、ガーゼによる篩作業によって得られた磁着成分で黒色味が強い。尚、粒径の大きい茶褐色の磁着成分もある。

骨は魚骨であろうか。

床面を裁ち割っていないのでその下部構造は不明であるが、小鍛冶程度の作業が行われているのではなかろうか[注9]。南側の浅い柱穴列は柱筋も通らないが、片流れの簡単な上屋[注10]の一部とも推される。1×2間の柱穴はこれに付属する作業場であろうか[注11]。尚、長方形の土壙が製鉄関連遺構として報告されている例があるが[注12]、この細長い土壙の覆土中、床、壁等からはそれを推測させる資料は得られなかった。僅かに東側壁上に炭化物が少量見られただけである。

以上遺物と溝・段状の遺構等から、本地割面は鍛冶遺構（小鍛冶）の可能性があると推される。

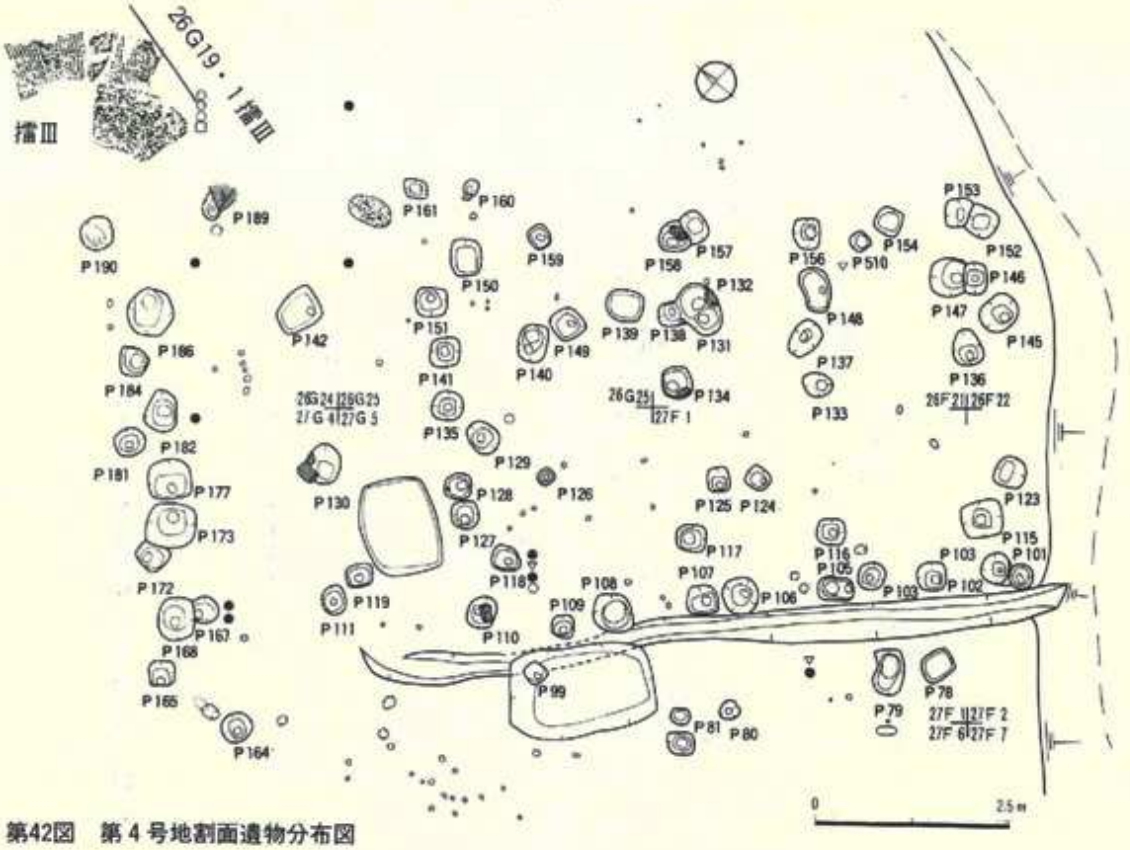
(3) 第4号地割面

第1号地割面の北側に位置する。その境には、段が形成され段の下部は溝状になり東側宮ノ沢へ達している。西及び北は不明である。

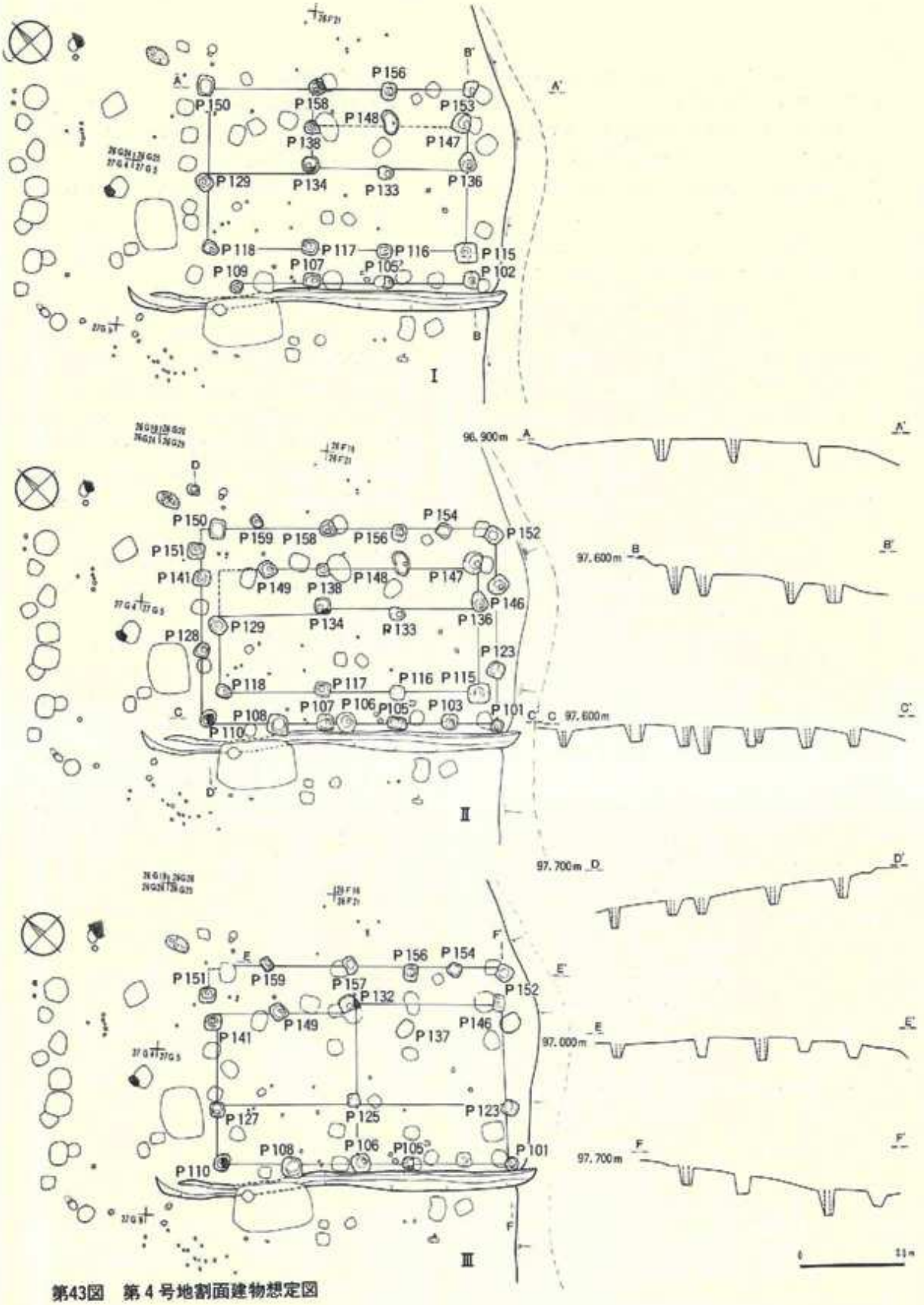
この面で推定された建物は2間×3間の東西棟で南側に塀又は庇が着き、北東部は間仕切りがされる1棟である。P138～P147の東西列は棚、台状の支え束と推される。P102、105、147、153、158、138は何れも隣接する柱穴より古く、本地割面における最初の建物跡を示すと思われる（第43図Ⅰ）

こうした柱穴の新旧関係を無視して母屋2間×3間、四面に庇の付く建物も想定出来よう。しかし北西隅に柱列の乱れがあり整ったものではない（同図Ⅱ）。

Ⅰの建物の後に建替えの柱列として想定したのがⅢである。2間×5間の東西棟で北側に1間×4間の庇の着く建物である。内部は間仕切りによ



第42図　第4号地割面遺物分布図



第43図　第４号地割面建物想定図

って4室に分けることができる。出入口は北側庇部で平入の建物であろうか。

これら柱穴列で想定される建物跡の北隅外側に焼土溜りがあった。この土壌の洗浄等を行った結果、木炭、焼骨、鍛造剝片、鉄滓、粒状滓？が抽出できた。(表8、PL.22、23)。骨片は小片で量も少く不明であるが魚骨等と思われる。鍛造剝片は2号出土のものと同様である。鉄滓は気泡に富み、1部ガラス質化して軽く磁着しない。粒状滓？としたものは最大径8㎜～2㎜の球状を呈し、内部が空洞化している茶褐色のもので磁着する[註13]。2号地割面で検出したものも磁着はするが内部に殆んど空隙がなく、球状を呈するものが少い等の違いがある。

又この焼土の南に対して浅い隅丸方形の土壌が検出された。この覆土中から第1号地割面と同様の小石及び木炭が抽出された。

この焼土及び土壌の属する建物跡として先述の4－Ⅰ等の西側に1間×4間の南北棟を想定することができる。柱筋は4－Ⅰに殆ぼ付合しており或いは4－Ⅰの建物跡を2間×5間の大きな1棟とすべきなのかもしれない。然し、焼土中の抽出成分は前述の如く鍛練鍛冶作業場の存在を強く示しており建物範囲と作業空間とが合致しない事も事実でありこの建物については決定し難い。(第44図)

本地割面から出土した他の主な遺物は陶磁器、陶錘、小柄である。青磁稜花皿、染付端反り口縁碗、白磁丸皿、端反り皿、反り皿、美濃刻線文灰釉碗、越前擂鉢である。染付碗、白磁丸皿、美濃碗等は勝山館跡では、古い時期に属するものである。全体からは16世紀前半とすることができよう。

以上の事から第4号地割面は東西棟が2回程建てかえられておりその年代は16世紀前半からのある期間とすることができる。又、この地割面内に於て鍛練鍛冶作業が行われ土壌もつくられている。尚この居住者について出土遺物から更に想像を付け加えると、鍛冶作業に従い乍らも漁具も所有するが他方、帯刀をしていた事が推測されよう。

(4) 第5号地割面

第4号地割面に隣接する一画である。木の根等があり明確にすることは出来なかったが、南及び東西をコの字に囲む段を持って画されていたと推される。2間×3間の総柱南北棟の建物1棟が想定される。中央に1個の柱穴が存在する（第46図Ⅱ）

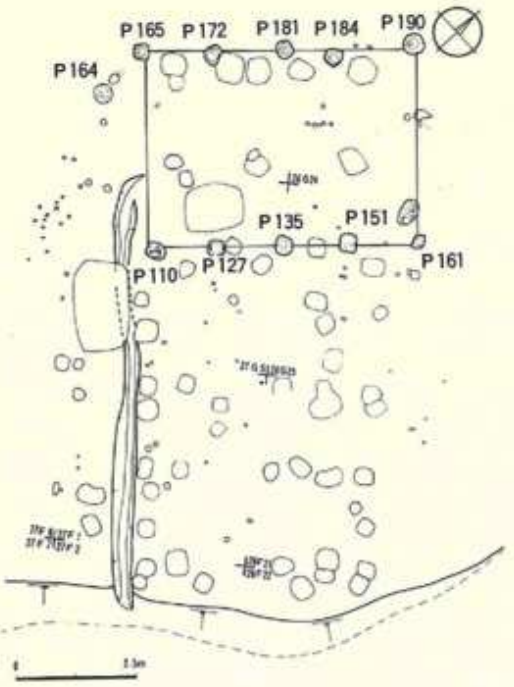
この建物の東側に下屋を想定したのが同図Ⅰである。又1部柱穴を共有する2間×2間の総柱建物跡との重複とすることも可能である。尤も、柱穴の重複使用の所見は得られていない。

この総柱建物跡と柱筋の異る建物跡の1部？と想定したのが、同Ⅲである。1間×2間で、その西側に1列柱穴が並び、塀様の存在を思わせる。

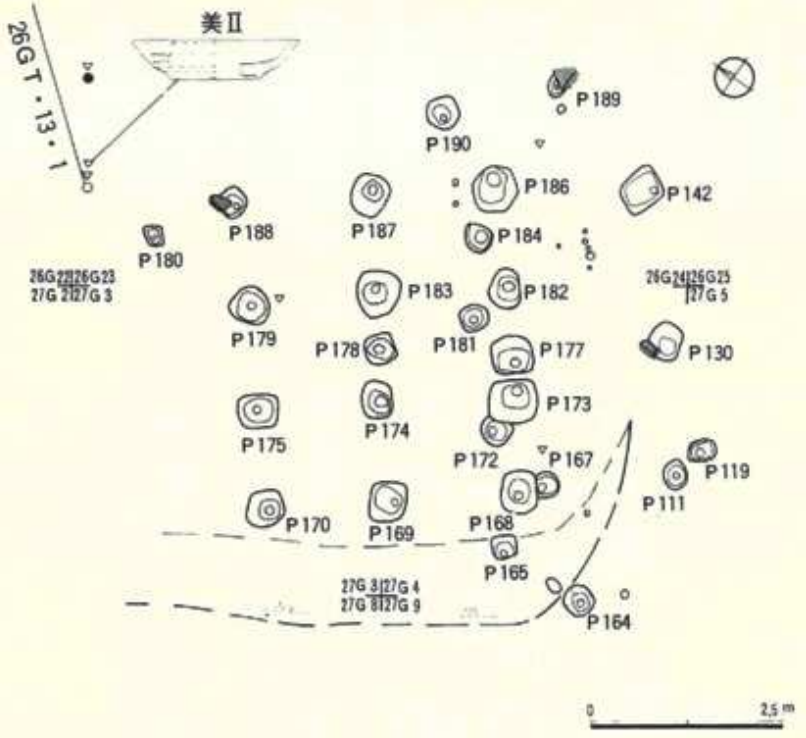
総柱建物の中央に更に柱を立てる例については2間×2間の高倉を8本柱で支え、更に必要があれば、中心に1本据え、2間×2間9本の総柱とする等上部の規模に応じて支柱の数を増していくアイヌの例があるが[註14]、これと同様の事とも解される。

本地割面出土の遺物は別表の通りである。染付は芭蕉文蓮子碗と筒底を呈すると思われる皿である。美濃焼きは端反りの中皿、刻線文碗他である。16世紀前半の年代を示すと思われる。

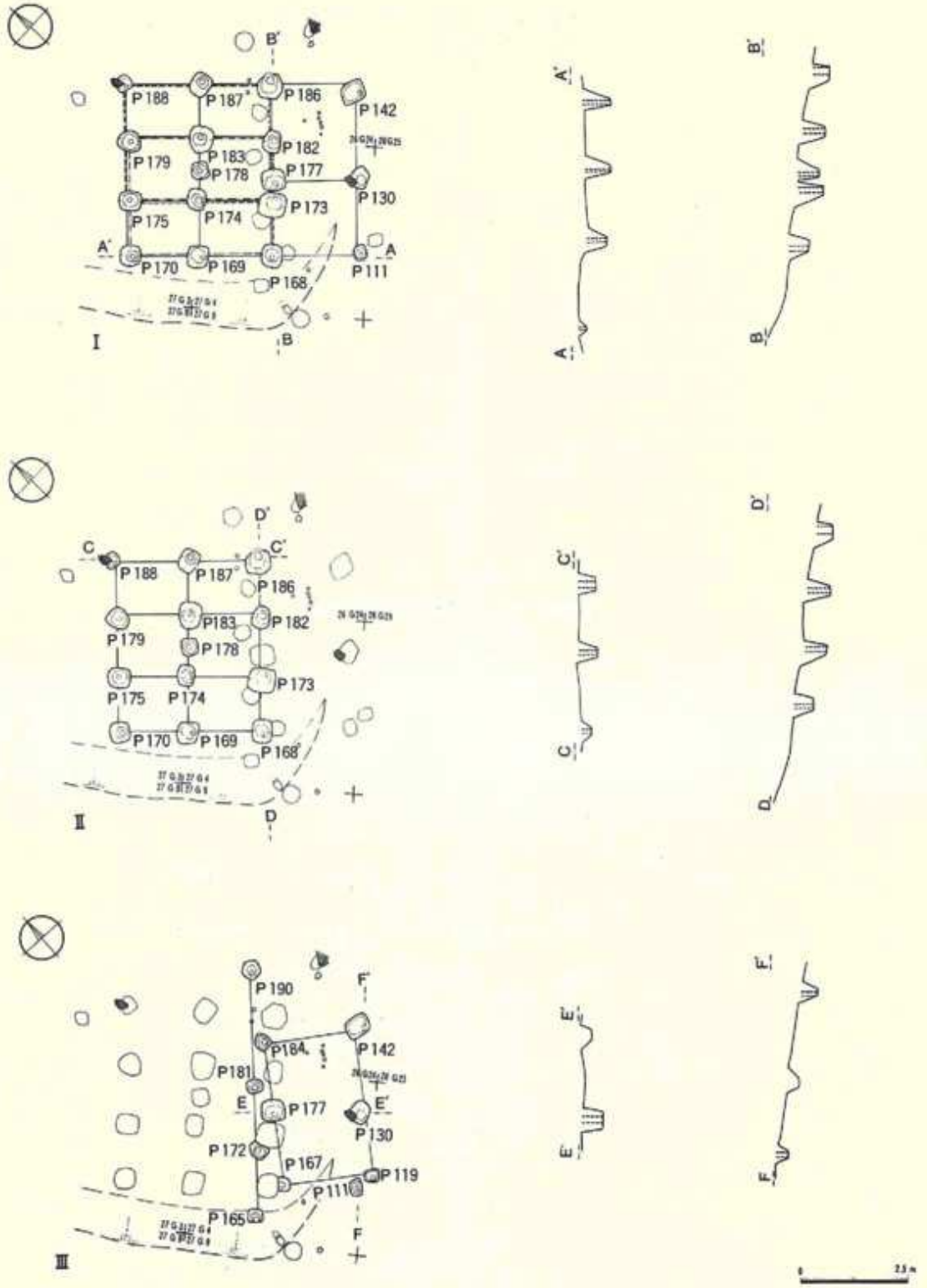
第5号地割面は、2間×3間の総柱建物が南北に建てられており、年代は16世紀前半である。13本柱で中央に1本多く掘えられる特徴がある。機能的には倉等が考えられる。



第44図　第４号地割面建物想定図②



第45図　第５号地割面遺物分布図



第46図　第５号地割面建物想定図

(5) 第6号地割面

第2号地割面の北に位置し第7号地割面の東に隣接している。第5号地割面との間には3m巾程の空間がある。南方に段の痕跡を認めたが明確に検出することができなかった。第2号地割面の延長と思われる溝が一部検出されている。柱穴P192と重複し柱穴が新しい。

本地割面で検出された柱穴から想定された建物跡は2間×4間総柱13本の南北棟である（第48図Ⅰ）。第5号地割面で想定した建物と同じ柱穴配置を示している。

Ⅰに対してやや軸線が東に傾く柱列が検出されている。2間×4間の南北棟と推される。北側の棟柱を検出できなかった事、後述の焼土がこの柱列の北側で検出されている事等から、或いは更に北側に拡がる建物であったのかも知れない。南側に間仕切りと思われる柱穴がある（同図Ⅱ）。

建物跡北部で検出された焼土中から焼骨及び木炭を抽出した(PL.26)。魚骨等を含む食料残滓と思われる。

Ⅰとした建物は5号地割面のそれと同じく倉庫等の施設を示すものと推される。

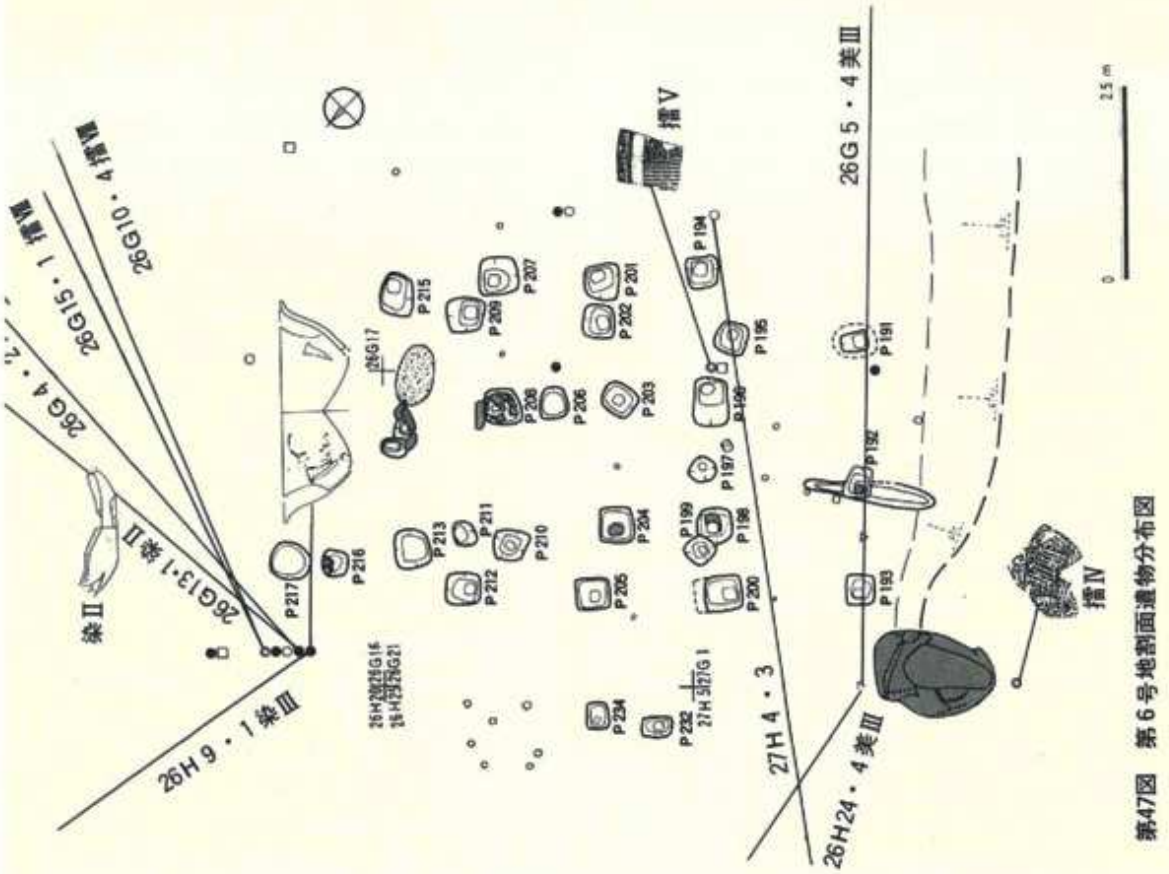
Ⅱとした建物については前述の通りであり、その規模等検討の余地がある。

焼土の帰属はⅠを倉庫等とすることができるならⅡ或いは他の遺構乃至は屋外炉と推される。屋外炉としての使用の実際は想定が難しい。

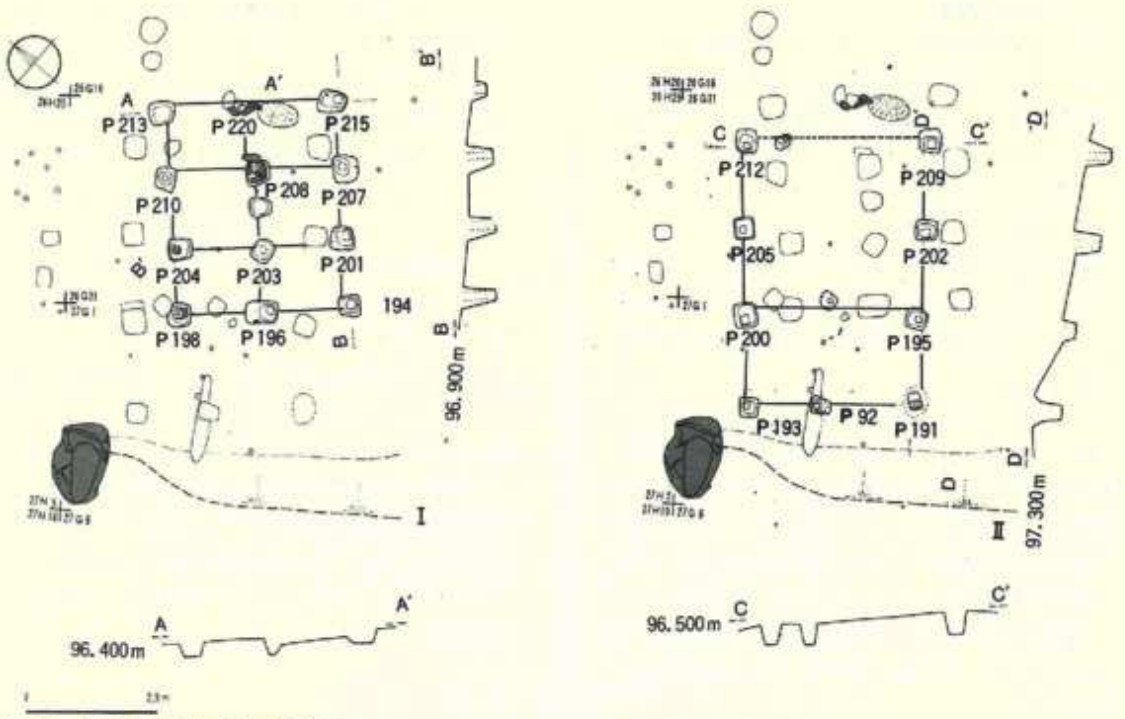
本地割面から出土している陶磁器は別表の通りであるが舶載品が多い。青磁碗、盤、染付端反り蝶文碗、獅子文皿、寿字文筒筒底皿等である(PL27)。染付碗は勝山館Ⅱとした本遺跡では古い時期に属するものである。これらの年代は16世紀前半に属するものであろう。

第6号地割面は総柱13本の南北棟倉庫と焼土、陶磁器等で示される居住、生活遺構の二者の存在を想定できる。その前後関係は明らかではない。

その年代はいずれにしても16世紀前半頃の事とできよう。



第47図　第6号地割面遺物分布図



第48図　第６号地割面建物想定図

(6)　第７号地割面

第３号地割面の北に位置する。西は華ノ沢傾斜面である。第３号地割面との境に１段を設け、段下に溝がつくられている。西は華ノ沢に切り落され、東はＬ字状に北へ延びる。大石と傾斜の為その全様は不明である。東側第６号地割との境も明らかではない（第49図）。

溝及び段に平行する２間×４間の東西棟の柱穴列が検出された。北側の小柱穴列Ｐ236～Ｐ232は、下屋の部分とも推される。この小柱穴列のうち西側３個は掘り方が確認されていない。又これから更に突出すＰ235、Ｐ234の柱穴は出入口部分を示すものであろうか。或いは、掘り方のない小柱穴列は家の外に設けられた生垣様の施設で、掘り方のある４個の柱穴が入口部の構造を示すものとすべきかも知れない。蝦夷島奇観に入口部分が母屋より飛び出す平入の家が描かれている。この入口部分の中間付近から桁行に沿って生垣様の小杭列がＬ字形に立つ様子は、内部や大きさを別にすれば本建物跡と酷似する柱穴配列となると思われる[註35]。

母屋の柱穴のうち北西の傾斜する部分の殆んどが底に石を据え柱の沈下を防いでいるのは、この地割面の北半部分に大規模な盛り土を行っている事（前述）と付合するものである。

母屋中央に焼土が、その南寄りに土壙がある。

焼土中からは骨片と木炭が抽出された。

土壙からは小骨片が検出された（PL.28）。

本地割面出土の遺物は別表の通りである。

陶磁器は国産品の方が多い。碗、皿の比較では国産品（美濃）が２倍と著しい特徴を示している。染付碗は口縁に波頭文、腰部に蓮弁文を描くもので勝山館跡Ⅲとしたものである。美濃皿は端反りするもので酸漿草？の印花のあるものもある（PL.29）。これらの年代は16世紀前半と考えられる。

本地割面東側の大きな石の付近から銅浅が６枚出土した。銭銘の判るものはない。孔廓が変形しているものもある（PL.28、29）。

陶磁器が屋内より屋外から多く出土しているのは、屋外での作業空間、居住者の行動範囲を示すものかも知れない。

屋内、焼土近くの土壙は、貯蔵穴とも考えられるが覆土からは人為的な埋め戻しが考えられるという（既述層序の項参照）。

本地割面では２間×４間、平入の東西棟が検出された。屋内には炉、土壙があり、屋外には生垣、作業空間等がある。その年代は16世紀前半である。

(7) 第８号地割面

第４号地割面の北側に位置し東は宮ノ沢斜面へと到る。南４号地割面との間に低い段差がありその下端は、溝となっている。東は宮ノ沢へおちるが、西方の全容は明らかでない。北西方面に鉤の手の段を検出したが、柱穴等は不明であった。その南には石で囲まれた焼土溜りがあった。

本地割面では溝と同じ軸線をもつ２間×２間の殆ど正方形の建物跡が想定された（第51図Ⅱ）。P280～P282はこの建物内部の仕切り、施設等の存在

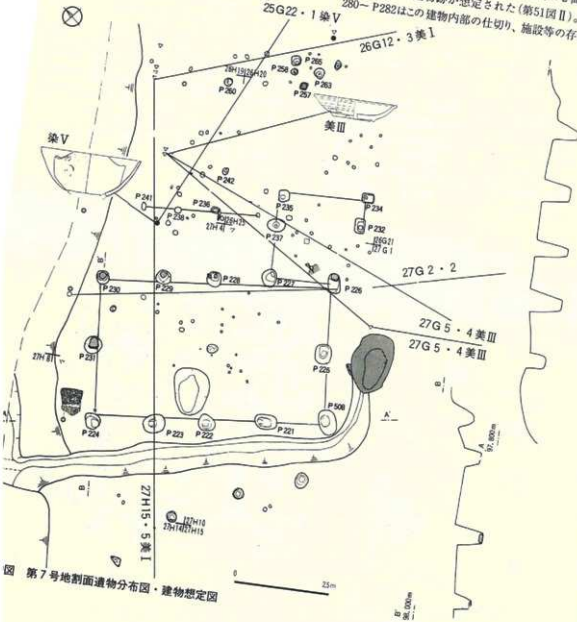


図　第７号地割面遺物分布図・建物想定図

を示すのかも知れないが基本的には後述するⅢの建物跡に属するとすべきであろう。

この建物跡Ⅱの後に建てられたと推定されるのがⅠである。(同図Ⅰ) 規模は殆んど変らない。この建物の軸線と南側P270～P272の軸線が一致するので、この柱列をⅠに伴うものと想定した。勿論、その差は僅かであり他の二棟の建物に伴う事を否定できるものではない。

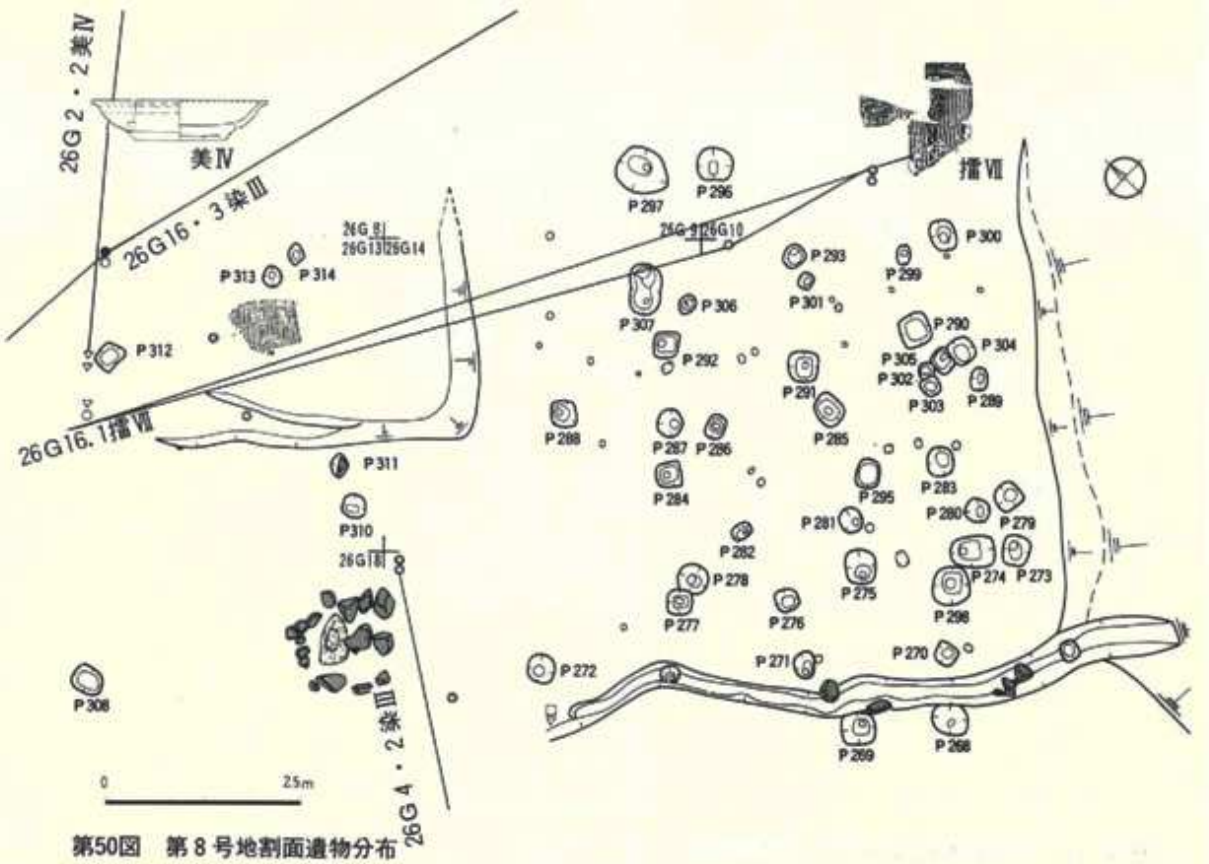
更に本地割面では2間×2間総柱のより新しい1棟が想定された。軸線が溝のそれと大部異っており、規模も前に比べると小さくなっている。規模の大きな建物は柱数も増える[註16]ということからは、逆の状態にあること等、若干無理とも思われるところである (同図Ⅲ)。

建物跡西側に石囲みの焼土溜りがあった。この焼土の洗浄等を行った結果、鍛造剝片、粒状滓？鉄滓、クギ、砂鉄？等の磁着成分、粘土塊を抽出した (表6、PL32、33)。鍛造剝片は、第2号、第4号地割面出土の物と同じく角張った偏平な鉄片を主にするものである。粒状滓？は内部が空洞化した不正の球状で、数個連った形のものもある。鉄滓はガラス質化して磁着しないものもある。粘土塊は径1cm～4cmの塊である。スサ等の混入は認められない。製錬に際しては、粘土がある種の溶媒剤の働きをし、柄美となる等、場所選定の要件の一となる[註17]との事であるが、本資料もそうした例を示すものであろうか。

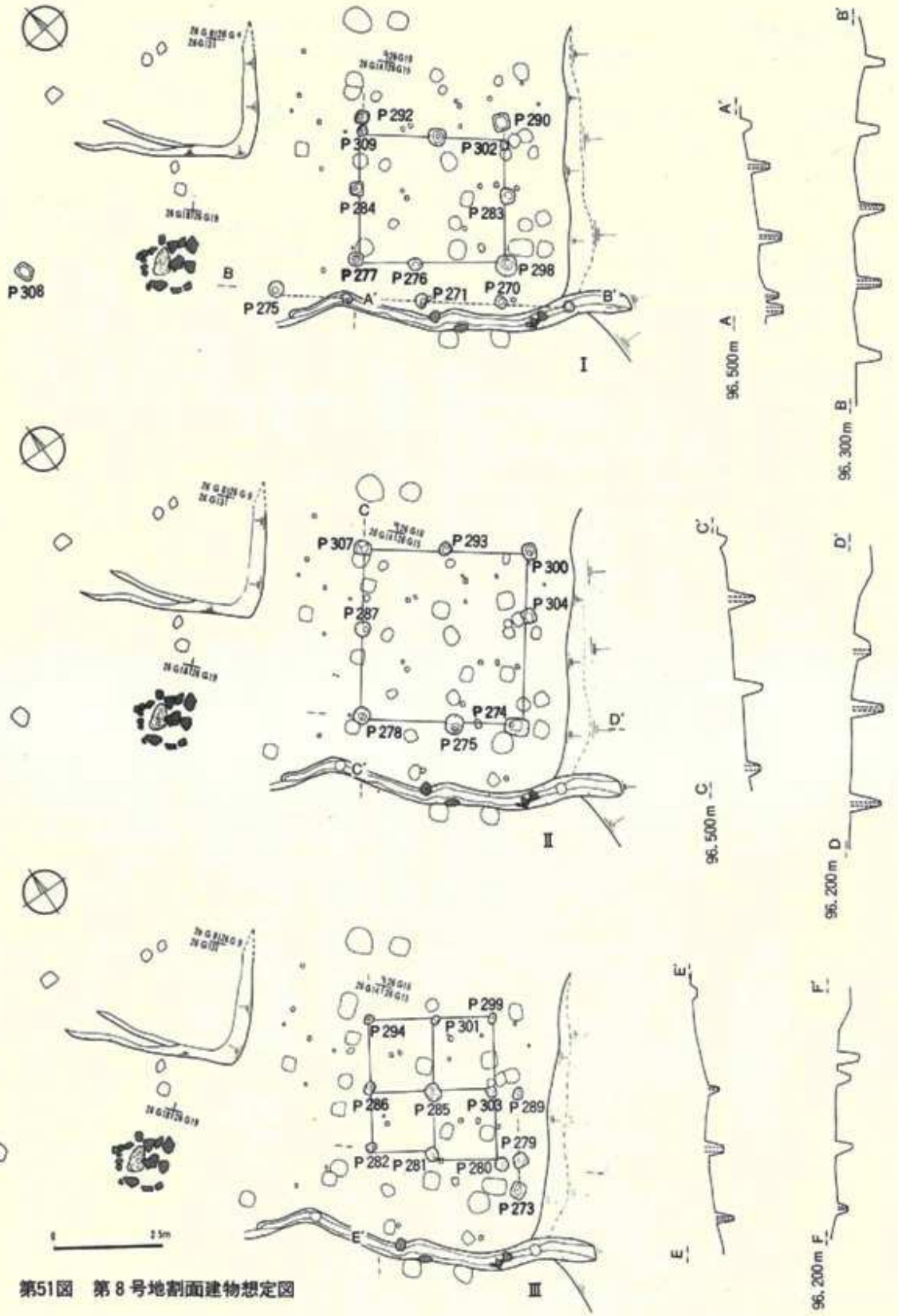
又この焼土溜りの周辺から輪羽口の破片が出土している。(第27図、PL.33)

本地割面出土の他の遺物は陶磁器である (PL31)。青磁稜花皿、白磁端反皿、美濃端反り皿、卸し目が胴下部で密になる擂鉢等である。何れも16世紀代の年代を示している。

本地割面からは2間×2間の正方形に近い建物跡の2回～3回建替えが行なわれた形跡が推定された。又その西半では鍛錬鍛冶作業の跡を示す焼土等を検出した。その作業場の範囲、上屋等を含めたその構造は明らかになし得なかった。これらの年代は16世紀であり、第4四半期迄は下らないであろう。



第50図　第8号地割面遺物分布



第51図　第8号地割面建物想定図

(8) 第９号地割面

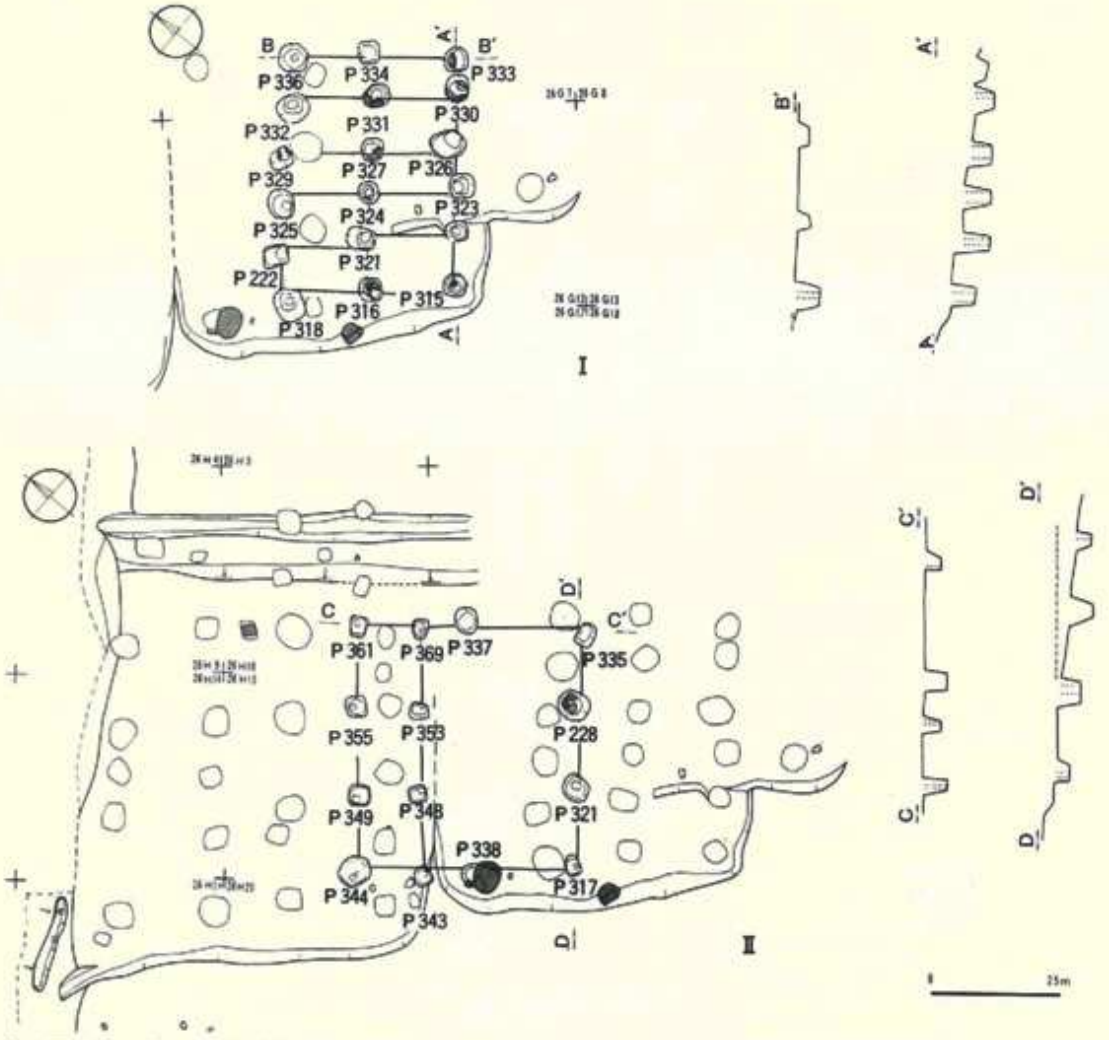
第６号地割面の北に位置し西は第10号地割面に接している。北及び東西に小さな段を設けコの字状に周囲と限っている。東側に別な段の一部を認めたが、全容を明らかになし得なかった。或いは、第８号地割面の焼土溜り北に一部認められたＬ字状の段と連なり、一区画をなすと想定されるところであるが、詳細は不明である。

本地割面で想定された建物跡は２間×３間総柱の南北棟１棟である。南北方向の柱間が非常に近接している。或いは２間×２間の総柱南北棟の二棟重複を示すものかも知れない。（第52図Ⅰ）

本地割面出土遺物の主なものは陶磁器及び骨角器である。筒底寿字文染付皿からは16世紀前半の年代が想定される。骨角器は鯨骨製と思われる刺突具中柄の折損品である。断面円形を呈している。

(9) 第９、10号地割面

第９号地割面と第10号地割面に跨がる建物跡が推定されるので、これについて述べる。２間×３間の南北棟で西に庇が着く建物である（同図Ⅱ）。９号地割面、10号地割面との前後関係は明らかになし得なかった。

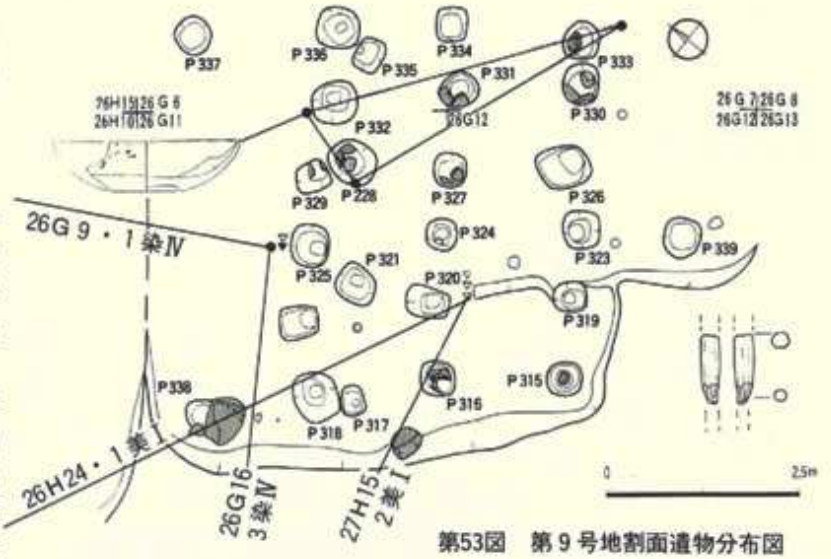


第52図　第９号・10号地割面建物想定図

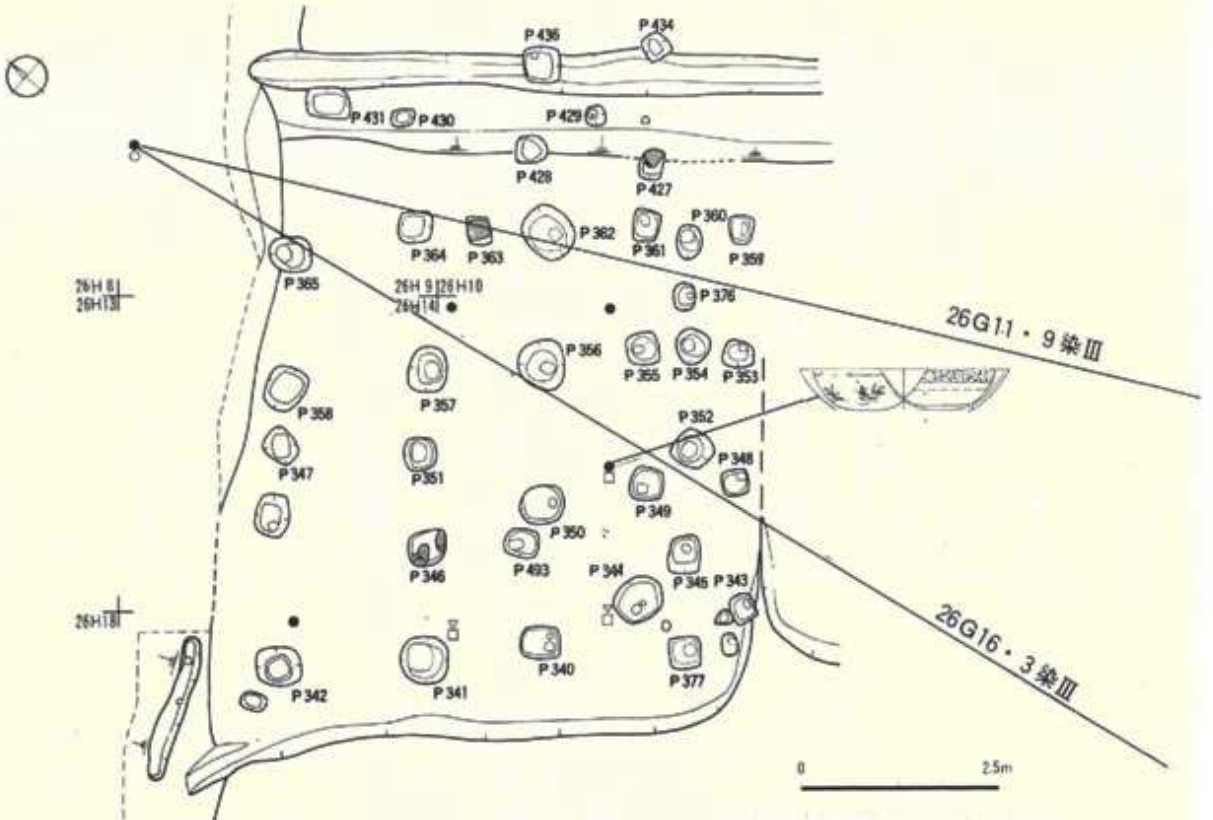
(10) 第10号地割面

第７号地割面の北に位置する。東は９号地割面に接し西は華の沢斜面となる。北側と東側に段が作られ、鉤の手状になる。西側華ノ沢斜面に50cm程溝状に延びている。斜面上部に沢に平行して短く、浅い段と小柱穴が認められた。９号の段との前後関係は不明でる。

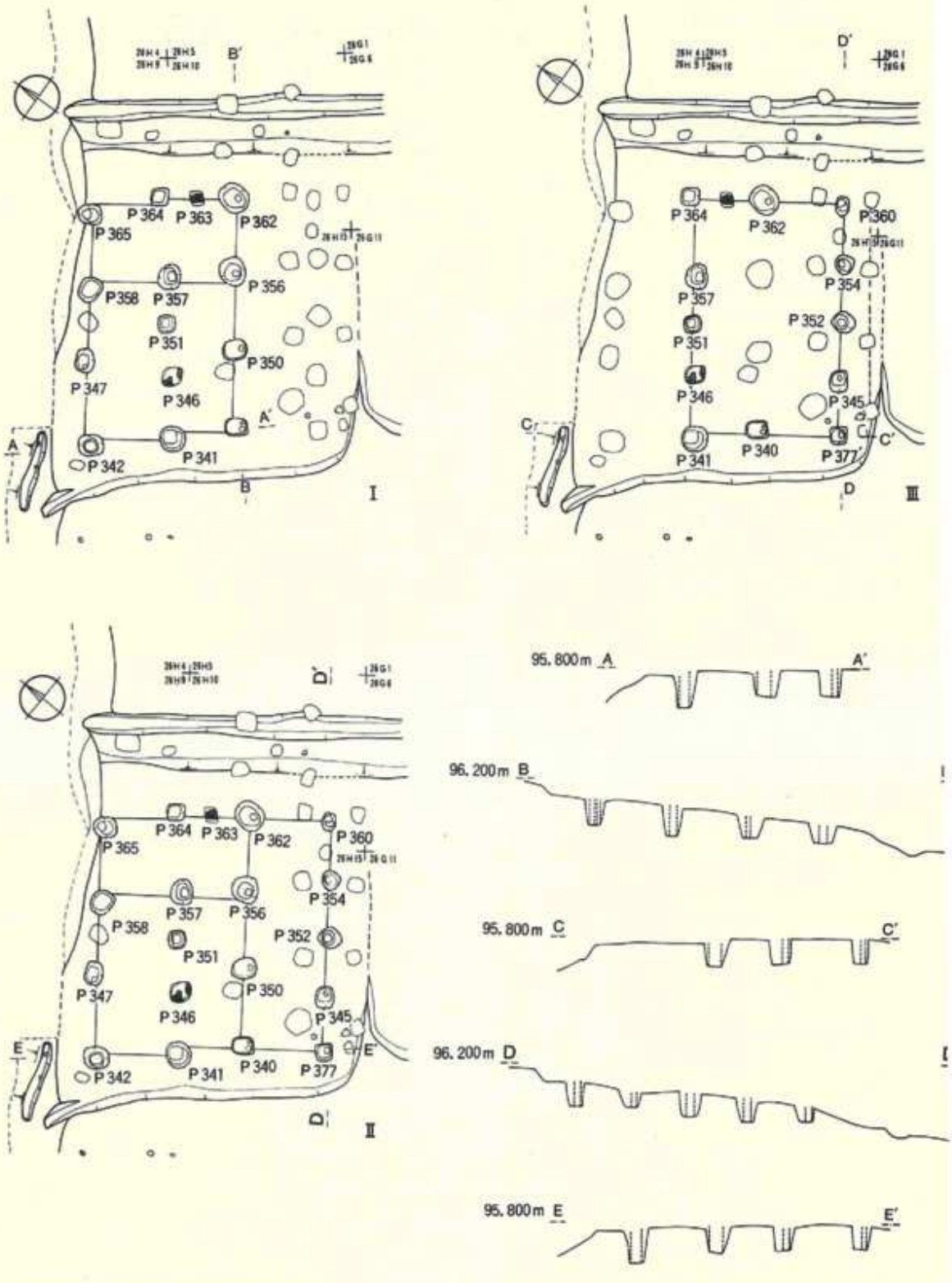
本地割面で想定された建物跡は２間×３間の南北棟で東に庇の付く建物である。母屋は間仕切りで二室に分かれる。P346、P351は掘り込みも浅く床束と考えられる。この事からこの一室は板張りであることが想定される（第55図Ⅱ[註18]）。又２間×３間の南北棟１棟の推定をしたが（同図Ⅰ）これも鈴木先生のお考えに従って、床束、板張りの一室が想定されるところとなった。他方２間×４間の南北棟としたのが同図Ⅲである。西側沢沿いの柱列を塀様のものとすることもできよう。



第53図　第９号地割面遺物分布図



第54図　第10号地割面遺物分布図



第55図　第10号地割面建物想定図

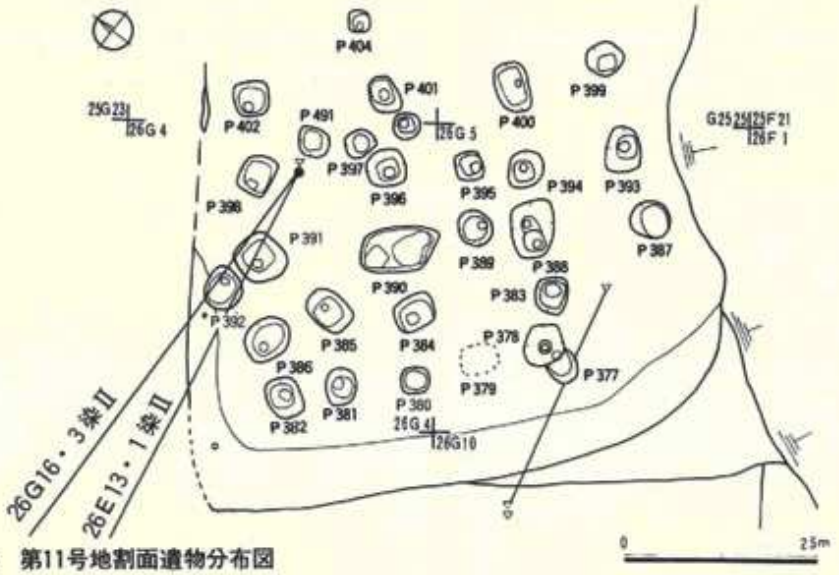
本地割面出土の陶磁器は、舶載品10片及び美濃灰釉2片である。口縁端反りになると思われる蝶文の碗、口縁に波頭文を描く蓮子碗、内面口縁下に四方襷文、外面に瑞果を描く丸皿等が主なものである。碗は勝山館Ⅱ、Ⅲとしたもの、皿はⅥとしたものである。これからのその年代の下限を16世紀中葉とすることができよう。

本地割面では床束で支えた床張りの一室を有する一棟を復原することが出来た。その年代は16世紀中葉を下限とすると推される。

(11) 第11号地割面

調査区北東端に位置する。南側、第8号地割面との境に一段を設ける。鉤の手に西側を画するが全容は明らかでない。東側は宮ノ沢斜面である。南側を画する段の東半は傾斜度の異る二面からなる。

本地割面で想定した建物跡は2（4）間×4間の南北棟である。東側に下屋が着くと推した。内部には南西と北東に、棚等の施設、或いは狭い小室に限る間仕切りを想定した。下屋部分を出入口とすることも考えられる。然し、本建物跡が殆ど正方形で小形であるのに比し、柱間が短く、密である事は普通の居住施設の構造としては頑丈過ぎるかとも考えられる。この点から他の施設（倉庫等）とする時には、間仕切り等の内部や、下屋とした部分の柱穴は建物柱穴から除く事が必要である。



第56図　第11号地割面遺物分布図

本地割面出土の美濃灰細皿は16世紀代のものである。

(12) 第12号地割面

第9号地割面の北に位置し西は第13号地割面に接する。東西と南を低い段でコの字型に画している。西は浅い溝状となる。

本地割面で想定された建物跡は2間×2間の南北棟でほぼ正方形を呈する。

本地割面から26片の陶磁器が出土している。舶載品と国産品が相半ばするが、国産品はその半数が擂鉢である。口縁が端反りする白磁碗、高台脇以下無釉の輪高台白磁皿、小杯？赤絵碗と、美濃灰釉皿等で、擂鉢には1点美濃と思われるものがみられる。輪高台の白磁皿は1号地割面出土の丸皿としたものと同様で勝山館Ⅰとしたものに属する。15世紀後半からみられるものである。他の遺物は16世紀代に属するであろう。

(13) 第13号地割面

調査区北西端に位置する。南は第10号地割面に接し西は華ノ沢斜面である。南に1段を設け、段下は溝となり、華ノ沢へ到っている。東は第12号地割面をコの字形に画する浅い溝となっている。

本地割画で想定される建物跡は2間×4間の東西棟1棟である（第60図Ⅲ）。これに北側庇を想定したのが同図Ⅱである。尚、他に1間×3間の柱筋を想定できるが（同図Ⅰ）、これはこの北側が未調査であり、建物としての全容は明確でない。同図Ⅲとした建物跡には、焼土、土壙を有する広い一室と小さく仕切られた三室とを想定した。

土拡内からは木炭と小石が検出された。

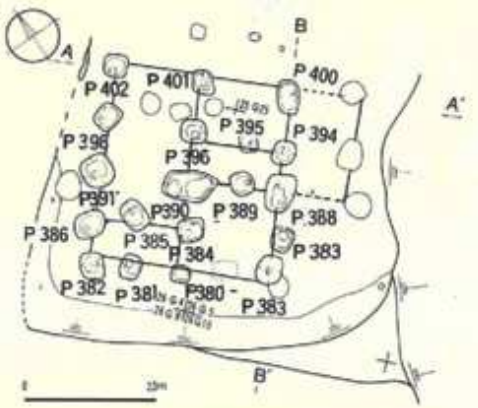
本地割面出土の陶磁器は16片である。端反りの白磁皿、内面に鎬のある美濃菊皿、端反り皿がある。又腰部破片1点は外面無釉で内面施釉のものである。端反り皿は釉調が淡く透明感が強く、端反りも僅かで、腰の張りもない。菊皿とともに勝山館跡出土の美濃製品の中では幾分新しい部類と推している。又腰部破片は勝山館Ⅰとした、腰折の皿に含めて表では集計してあるが、腰部の角度、厚さ、無釉部分の巾等に違いがある。腰部の上半部に横位に残る整形痕も明瞭である。或いは天目型の碗とも思われる。

これらの遺物から想定される年代は16世紀の中葉と思われる。

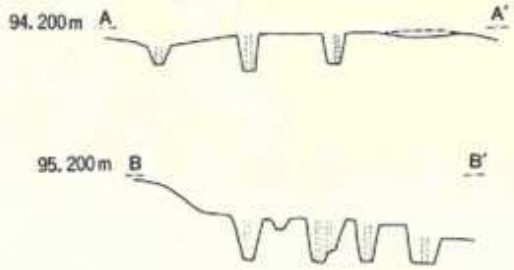
第13号地割面には2間×4間の東西棟1棟が想定された。その年代は16世紀中葉であろう。

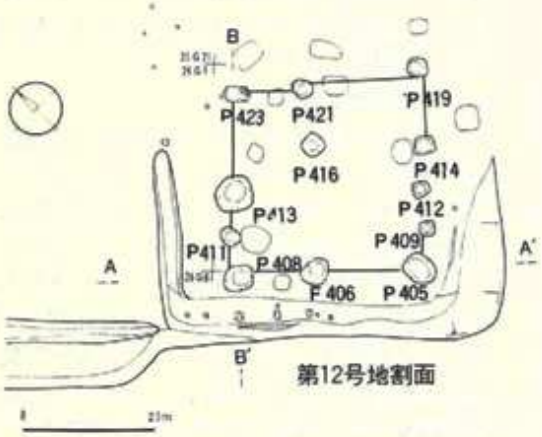
本稿は文化学院鈴木亘先生からの現地、及び筆者等が作成した遺構実測図に対するご指導を大きな拠りどころとしているが、誤り等は全て筆者等の責である。

又、本稿成稿中に鈴木先生から、遺構の想定復原図をご送付戴いた。紙面の都合上16図に模式的に示したのがそれである。只、これについては柱穴相互の切り合い関係、柱穴覆土の状態等の資料を先生に差し上げ得ないままに、先生に無理に想定して戴いた図であり、従って、この図には不完全な資料に基いた一試論とでもいうべき性質もあるのであって、諸資料との間に予盾を生じるとすれば、それは無理にお願いした筆者等の問題であることを明記するものである。

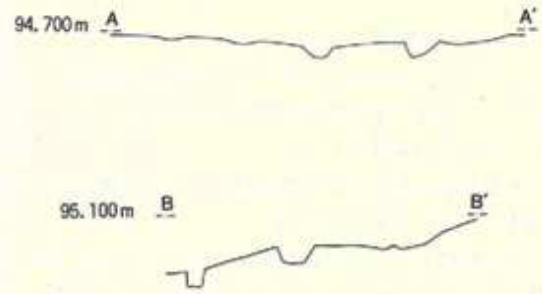


第11号地割面

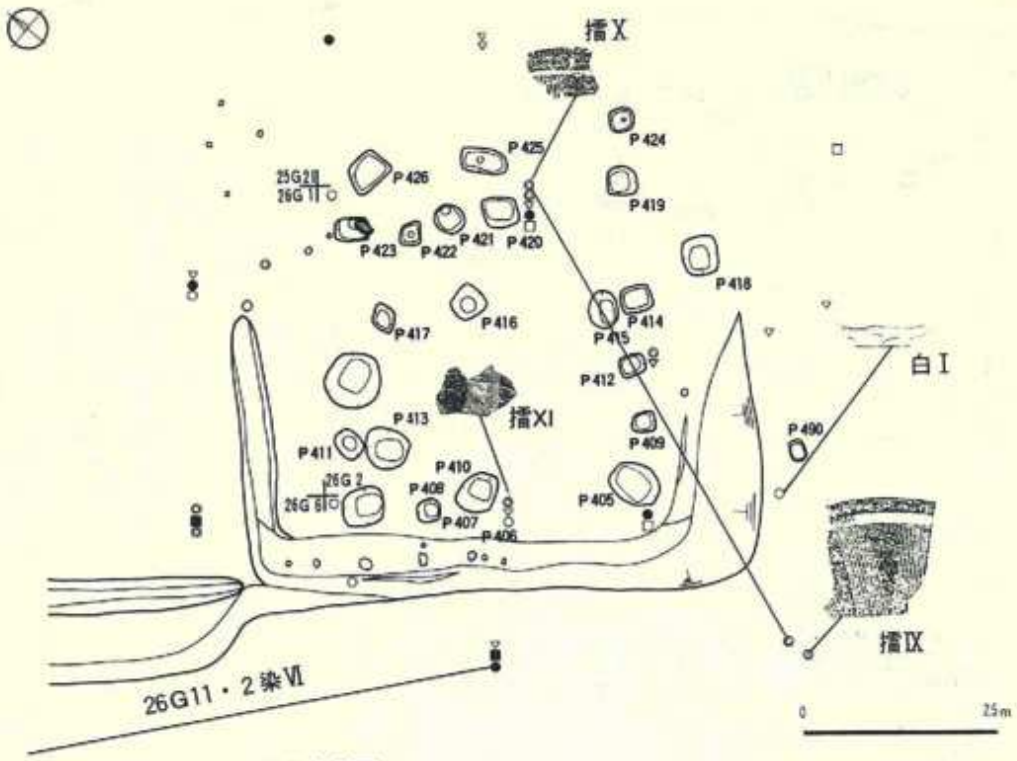




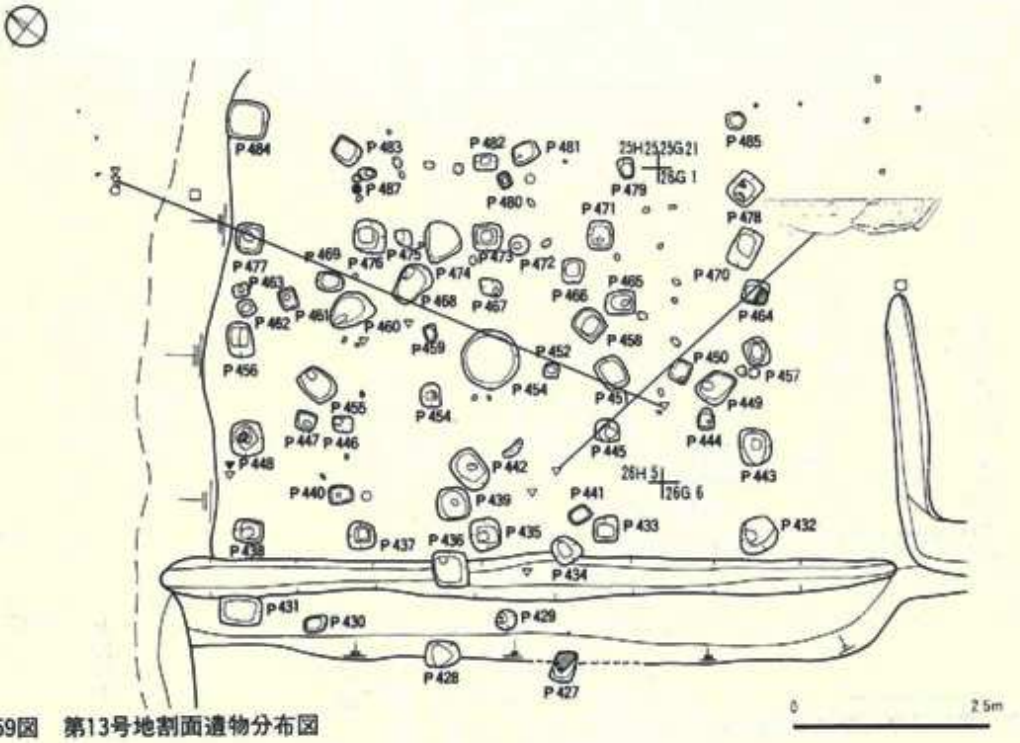
第12号地割面



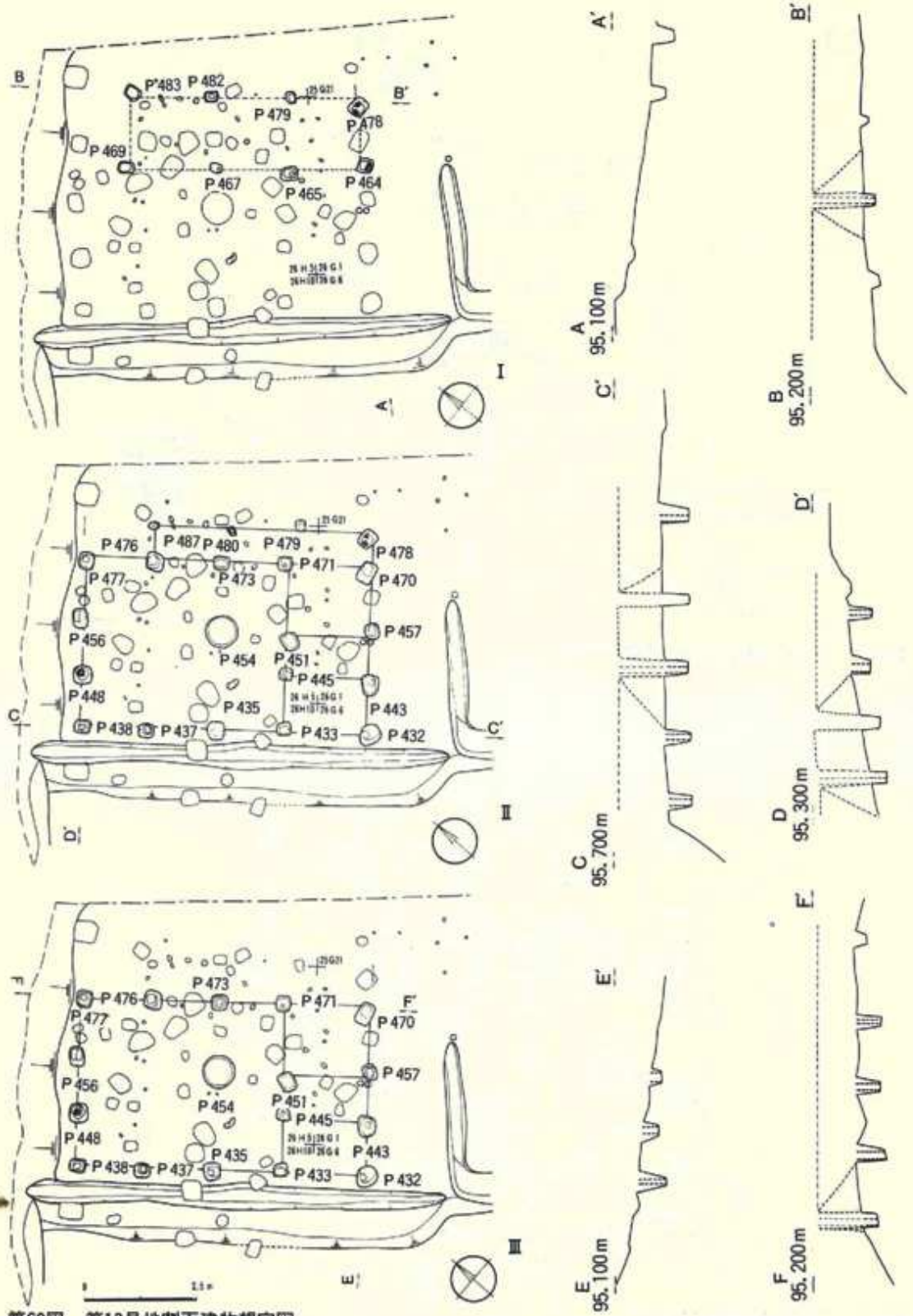
第57図　第11号・第12号地割面建物想定図



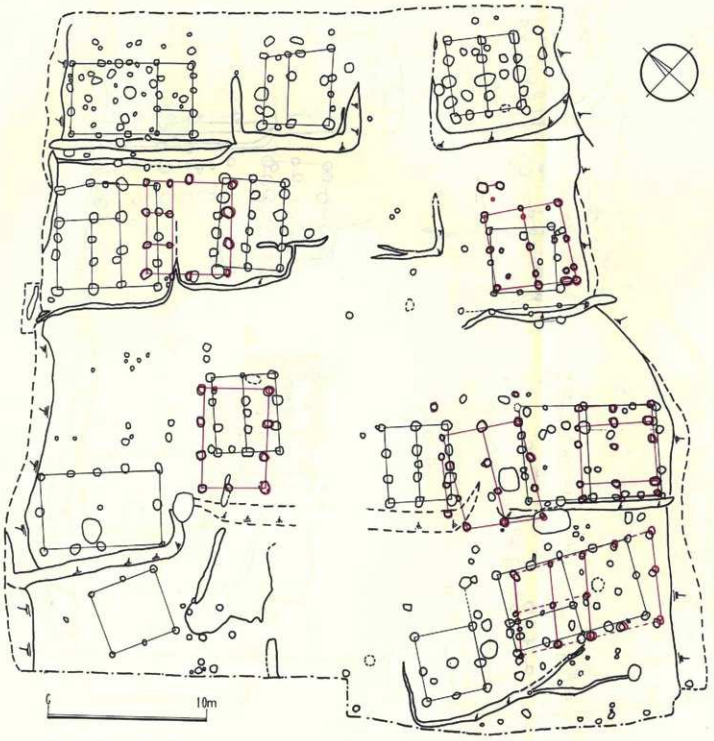
第58図　第12号地割面平面・遺物分布図



第59図　第13号地割面遺物分布図



第60図　第13号地割面建物想定図



第61図　建物跡想定復元図

2．遺構

(1) 地割面と建物跡

前項において各地割面毎にいくつかの建物を想定しその概略を述べた。その中には、建替え等の重複関係として把え得た例もある。中でも2つの地割面に跨がって想定した建物跡（第4，5号地割面、第9，10地割面）はその地割面形成時とは、当然時間差を有することになる。柱穴の切り合い関係からは明らかになし得ないが、一応、検出された地割面の形成には先行するものとしたい[註19]。地山迄の土層の堆積が薄い本地区において、地割を画する段を形成する時には地山面迄の掘り下げ作業が行われる筈であり、その時点でそれ以前の段差等は消失し、柱穴のみが残存すると推される。従って段状に残っている地割の遺構は当地区で最も新しい時のそれである可能性が高い[註20]。重複する建物跡として想定したいくつかについても、やはり時間差として把え得るものがあると推される。逆にその可能性が全くない、一地割面一回の構築と推されるものもある。第7号地割面などは、柱の建替えの形跡も伺い得ないものである。

当町付近は、アスナロヒノキの天然林の発達が著しく、江戸期には松前藩の重要な経済資源の一であった事は良く知られているところである[註21]が、この建物の構築にそのアスナロヒノキを使用したとしてもその耐用年数は30年前後であろう。とするならば、59年度の調査による限りは、この侍屋敷跡とされる地区の使用期間は60年前後とすることができるのではあるまいか。

想定された建物跡は、一部、柱穴内に偏平な石を敷いた例もあったが、全て掘立柱の建物跡である。建物の形状は、2間×3間、2間×4間等の長方形のものと、2間×2間等の正方形に近いか或いは長方形でも総柱の建物の二種に概括できる。又、前者は東西棟が多く後者は南北棟が多いとすることができる。更に前者が両沢寄りに位置し後者が中央よりに多い傾向がみられる。

内部の構造は、転がし根太や、床束等の上に板張りをした一室を有するもの、土座住いを思わせるもの[註22]等があり、室内に炉を有するものもある。放出様の飛びだした施設を出入口とする平入りと推されるものもある。家の周囲には生垣の巡る例もあると想定した。

土座住いについては、寛政二年頃、松前城下の地下侍が毎年歳暮に領主へ菅菰を献上するのを例としていたが、これは松前氏がはじめて渡海した時菅菰を敷いた小屋に仮住いしたことによっているとの記述[註23]が、その間を伝えるものかも知れない。

棚状の段、出入口、生垣等については、江戸時代の紀行文等に類似のものが認められることを既述した。

焼土のうち明らかに建物内部にあってその建物に付属すると出来るものは屋内炉であろう。

屋内炉の機能は、食料炊さんの場ではなく、土間の中央、或いは片隅にあって暖や明をとるのが本来である[註24]とされるが、本建物跡群には付属する竈の検出はなく、少量ではあるが獣？魚骨が焼土中から検出出来た事とも併せ、後世の風俗絵にも見られるように、既に煮炊きも兼ねた機能を果していた事が考えられる。

又勝山館跡からは自在鉤と思われる木製品、内耳、吊耳の鉄鍋、鍋の弦等が出土している。

壁、屋根については想像の外ないが、調査区一帯に大量の角礫が散乱していたことから、或いは石置き屋根であったかとも推される。

総柱の建物で更に中央に柱穴を有する例については、アイヌ人の倉庫建築の折上部の大きさ等によって柱の数を増す事のあった例を記した。

これらの建物跡が、各々地割りされ、一種の宅地造成の行われた区画毎に設けられている事は既にみた所であるが、その形状、位置等に違いが見られた。

これらを間仕切り、炉等の施設を持つ居住空間としての主屋と総柱、正方形に近い、倉庫等の付属屋として把える事ができるのではあるまいか。これらの二種の建物が大抵隣り合う形でたてられていることは示唆的である。つまり地割は建物1棟分毎に行われているが、その2棟分の地割面を1居住者単位が占有する範囲と推するものである。

その最大のものは、240㎡を推することができる。

第1号地割面はこの二棟を囲む形で1段が作られている例であるが、二棟の配置が、地割する時既に意識されていたとも考えられる。

この単位が屋敷(構)として一般的に規定される概念に小規模ながらも或いは該当させ得るのでは

あるまいか。勿論この単位がどれだけの自立性を持っていたかは未だ明らかではない。

この単位それぞれの規模等に大きな差のないことからその居住者単位間には、身分、貧富等の大きな差はないものと推される。

(2) 土壙

第1、4、7、12、13号の各地割面から隅丸方形乃至、不整円形の浅い土壙が検出された（第1、8、6、7号土壙）。このうち1号土壙からは骨片が出土した。1号土壙に於ては、壙底に小石の集積がみられる等、人為的所作が伺われた。その位置は1号土壙以外は建物内部とすることができる。

住居内の土壙については貯蔵穴、埋葬施設等が想定されるところであるが、骨片は小さく明らかになし得ない。1号土壙の覆土の堆積は壙底の小石を除くと、自然堆積に近いが、その成分は開地の堆積土とは異っている。2号土壙の覆土は短期間の埋没を示すもののようである。　強いて例を挙げるならば、夷王山墳墓群発掘調査の折、その墳丘上部に小石が散布されるもののあった[註25]ことが想起されるところであり、若干墓壙説に従いたいところであるが、断定は避けたい。住居内に墓壙等の設けられる例については木下氏等の諸説がある[註26]。

(3) 小柱穴列

建物内部、周辺等で小柱穴を検出した。小穴(杭)を間仕切柱列とする見方があるが[註27]、本年度調査区では、7号地割面で生垣状のものを推定し得た以外、積極的に把え得たものはない。段又は溝に沿って密集する例もない。

他の居住施設として井戸、便所等の存在が予想されるところであるが、検出し得なかった。本緩斜面の左右に小流があり、これを利用したものであろうか。

3．遺物

(1) 陶磁器

陶磁器の出土量は極めて少く、又小破片が多い。これらから本地区の全てに言及することは危険であるが、多少の傾向を看取することができる。

出土量の最も多かったのは第1、12号地割面である。舶載品と国産品の比率は1.6：1と舶載品の方が高い。舶載品の出現頻度が高いのは、4、6、10号地割面であり低いのは7、8、11号地割面である。

器種の比率では皿が過半を越え、碗、擂鉢、坏鉢・甕、その他の順である。甕類が極めて少いのが特徴である。舶載品の中では染付の占める割合が高い。国産品中志野、唐津のないのが特徴である。

舶載品中、青磁より染付の割合が多いのは16世紀代の傾向である。白磁で高台脇以下無釉の、抉りのある高台（或いは輪高台？）を持つと思われる丸皿は、勝山館跡Ⅰとしたもので、洲崎館跡、志苔館跡[註28]尻八館[註29]等にもみられ、15世紀代迄遡らせ得るものである[註30]。

染付の端反り碗は勝山館跡Ⅱとしたものである。恐らくは16世紀前半に位置づけられるものであろう。腰の角張る薄手の碗、饅頭心の碗等が出土しなかった事は、端反り碗、連子碗等の勝山館跡Ⅱ、Ⅲとしたものとの間に年代差のある事を示すと思われ、又、その使用期間を知る資料となろう。染付瑞果文の丸皿は、下限を示すものであろう[註31]。

美濃灰釉碗としたもののうち、刻線のあるものは瀬戸である可能性がある[註32]とされるが、ほぼ16世紀前半として良いのであろう。外面胴下半以下無釉の腰折皿（稜皿）も勝山館跡Ⅰとしたほぼ同時期を示すものであろう。端反りの灰釉皿に若干の変化が認められるが、小破片が多いため詳しくは述べられない。段の付く菊皿、折縁皿等はみられない。鉄釉の碗は勝山館跡Ⅰ、Ⅱとしたものが殆んどと推される。鉄釉の皿はみられない。

志野、唐津に属するものは認められていない。これらの焼造開始は16世紀の末葉からとされ[註33]殊に唐津焼については天正～慶長（1580～1600年代）をその初期とするようであり[註34]、本調査区の下限を知る目安とできよう。

以上によれば、出土陶磁器の示す年代は、一部前代からの伝世品を含み乍ら、その主体は、16世紀前半（初頭）から中葉（第3四半期頃）迄の70～80年間として良いのではあるまいか。

(2) 鍛造剝片、鉄滓等と小鍛冶遺構

本調査区内の広い範囲に亘って鉄製品と鉄滓が出土しているが、これとその分布状態を比較すると、鉄製品の分布範囲は調査区内のほぼ全地割面に亘っているのに対し、鉄滓の分布する範囲はよ

り狭くなっており、それの集中する地点も見られる（第63図）。これは鉄滓がより限定された場所で生じ、製品は生活、居住区域全体に散らばっている事を示していると思われる。

鉄滓の出土地区のうちの三ヵ所に於て鍛造剝片の抽出を見た。うち２ヵ所は焼土溜り（炉穴？）内からの抽出であり、粒状滓？鉄滓も検出されている。このうち第８号地割面の焼土（焼土６）中からは、粘土塊が、又その周囲からは輪の羽口片が出土した。粒状滓？としたものが鍛錬鍛冶作業に特有のものと推されることについては既に述べたところである。又粘土塊の出土は、粘土が柄美として重要な働きをする事[235]に関連するものと思われるところからこの焼土は鍛錬鍛冶作業場のそれとして差し支えないものと思われる。

他の二地点、特に２、３号地割面は、浅い溝があった事、一帯がやや固くしまっていた事等を挙げ得る程度で、資料に乏しいところではあるが、ほぼ同様の場として把え得るものと推する。

この作業形態は、既に触れたように簡便な野鍛冶を示すものであろう。近世樺太アイヌの例によれば、家の直ぐ近くに片庇程度の屋根を設ける簡単な施設で行われ、殆んどが古鉄物を再利用しているようである[236]。

これらの例は建物跡に比較的近い位置にある４、８号地割面等の焼土(炉)を使用しても、充分にこうした鍛冶作業が可能である事を示すものと言えよう。いわば、生活居住空間に作業空間を併せ持つ地割面として把え得ることになる。然し、それを個々の居住単位集団がその必要に応じて、自ずからの作業空間内に於て、鍛冶作業を行っていたと断じて良いのかは、ちゅうちょするところである。むしろ、本調査区内に於て三カ所の鍛冶作業場しか検出できなかった事を積極的にとりあげ、数単位（２～３）の居住者集団が１鍛冶作業場で共同作業を行ったと解すべきかと思うところである。

尚、鉄製品では、鍋、小柄等が目に着く遺物である。鍋は大沢氏が鍛冶作業の加工原料として特に触れているものである。小柄は小札とともに、居住者の階層を推測する一資料となる。

(3) 骨角器

鯨骨製の中柄欠損品が１点出土している。基部の作出に金属の使用が認められるものである。これについては、既報において勝山館跡におけるアイヌ文化的要素として又鮫崎氏とアイヌ人とが密接な関係にあったことを想わせる例として述べてきたところである[237]。

4．勝山館跡他地点との比較

勝山館跡の遺構確認調査は昭和54年から開始され、55－58年度迄は、館を形成する主尾根ともいうべき台地上平坦部をその対象として来た。59年度の調査区はこの台地の東側、１段低い所に位置する。

平坦部における遺構の検出状況は、調査が部分的であり充分とは言えないが、掘立柱の建物跡と竪穴状遺構から構成される。両者各々・相互に重複関係が認められるのは、本調査区と同じである。

建物の周囲・或いは三方に浅い溝が廻り、その溝に小柱穴が不規則に検出されているが、本調査区では小柱穴が伴う事はない。館神八幡宮跡北側では、土盛りをして階段上に平坦部をつくっているが、そこでも段下部等に小柱穴列がある。又台地側方の急斜面肩には櫓列が並ぶようである。段の下端には石積みをして強化している。

総じて、区画（地割）の形成に手数が加わっており、各々の独立性も強く規格化された建物とは異る感じがある。

出土遺物は質量共に台地平坦部が勝っている。

茶入、茶白、香炉（磁器、鋼製）、鏡、鉄鉋玉・硯・仏具等は、本調査区ではみられないものである。又陶磁器の示す年代も片刃彫り青磁蓮弁文碗から、志野唐津焼までと巾広いものとなっている。

鉄滓の出土量も多く羽口はほぼ原形に近いものもある。これらを分析の結果、後章に大澤氏によって述べられ、又既報でも触れているように、その場所は特定されてはいないものの、大鍛冶の行われたことも明らかとなっている。

骨角器は両方に共通するようである。

本調査区と平坦部とを、遺構、遺物の両者から比較してみると館の構成としては平坦部を主とし本調査区を従とする事が伺われる。本調査区の形成年代を16世紀前半から中葉頃迄と先にしたところであるが、その年代は又、勝山館の最盛期と推定している時期でもある。

勝山館の経済基盤が蝦夷交易にあることは再三述べているところであり、その対蝦夷供給物資の重要品目の一が鉄製品であることも述べてきた。

勝山館跡の内部に小鍛冶を枢要な職能とする集団の居住、作業空間の存在が想定され、しかもその形成年代が勝山館跡の最盛期に付合することが推測される事は、極めて示唆に富み重要である。

5．伝侍屋敷跡の位置づけ

前項に於て建物跡の重複、建て替え等からこの伝侍屋敷跡の存続期間を60年前後とした。又その実年代は陶磁器から、1500～1580年頃迄とした。

その間この侍屋敷跡に占地した居住集団は各々主屋と付属屋の建つ二区画をもって1単位とする居住空間を占有していた。その配置は少々斜行はするが、中央付近の空地を通路とし、ほぼ並列する整然としたものであり、その規模も規格化されている。2～3の居住者単位毎に鍛冶作業場を有し、恐らくは共同で鍛冶作業に従っていたと思われる。

彼らは、多くはない汁器を持ち、骨角器を製作、所有し、網漁に従う一方、小柄を身に付けるという身分、階層の集団である。

いわば一種の町割がなされ、そこに一定の職能集団が集住している状態が想定される。

これは、背景に集団を統御する大きな権力機構が存在する事を示しており、侍屋敷跡と伝えられる本地区はその家臣団の集住地区であり、それも平常は鍛冶作業に従う職能集団であるとすることができよう。

一方、北海道南部は15世紀半ば頃、安東氏—各館主という政治関係から、蝦夷管領たる安東氏—守護職—各館主という支配機構が確立し、各々の支配領域を単位として政治、経済活動が行われていたのであり、それは又、各々箱館、松前、上ノ国を拠点とする三つの商品流通機能を含んでいた[註38]とされる。

それが1457年のコシャマインの蜂起を契機にアイヌ人との抗争が続く過程で上ノ国武田、蠣崎(後松前)氏が抬頭した。同氏は各館主を臣属させる形で道南和人地を再編し、その領域を確保して次代への地歩を固めていったのである。[註37]それは道南地域内における他の支配領域を否定するものであり、蠣崎氏は蝦夷交易の統制独占化をすすめながら経済機構の直接支配を図り、その立脚基盤を強化していったと推することができる。

1551年蝦夷地商船往還之法度がなり、上ノ国から松前、知内の間が和人地と定められ、上ノ国と知内の沖では、通過する商船は帆を下して（停船し）一礼する、その時に商船に対する臨検が行われ、税が徴収されたとするのは穿ち過ぎてあろうか。他方交易によって得た利益の一部は夷役と称して、上ノ国と知内に置かれた東西のアイヌの長に分け与えられたという。

こうして成長していく蠣崎氏政権が、初期居館・脇館[註39]である勝山館内にその構成集団として、鍛冶作業を主たる職能とする一団を擁していた事は極めて重要な事と思われる。

中世前期の手工業者は独立の経営権を持ちつつ権門に従属し、課税免除等の特権を得て貢納生産を行い、その余剰を商品として生産販売した[註40]とされるが、後半に到ると特定地域への同業者の集住化が行われ、新興特産地の形成と商品生産の方向を辿るという。これは旧来の小規模産地の市場を奪い更には新興特産地相互の市場争奪という特徴を呈するところとなり、そこに必然的に新しい権力との結合、流通機構の確保が図られるところとなる[註41]。

勝山館内におけるその様相は、こうした職能集団を内部に取り込み、機構の一部として組み込んでいる状態であって、手工業者の分業集団という独立性はなく、蠣崎氏政権という機構が一体となって他の産地と市場を争奪し、流通機能を強化し遠隔地商業を掌握していく姿でもあるといえよう。手工業者を自ずからの中に組織し、その製品を領主層が吸収し商人という第三者の手を介することなしに直接商業活動を行っている所にこの期の北海道の時代的、地域的特徴があるといえよう。

筆者は既報に於て、勝山館内では消費と対蝦夷向交易品の両者として、鉄製品が位置づけられる事を述べたが、むしろ、こうした交易品の生産手段を保有することがその成長の要因であり、成長の過程は、それを拡大強化する過程と表裏をなすとすることができるのではあるまいか。コシャマインの蜂起を促す原因となった1456年の志苔鍛冶村の事件は、鍛冶屋とアイヌ人との直接取引きの様子を語るものであり、いわば中世後半に再編されていく道南社会の直前の姿を写しているとも言えよう。

本来漂泊、流動性の強い鍛冶・鋳物師集団が有する手工業技術がこの蠣崎氏という領主層の膝下

に定着して行く契機は捺辺に求め得るのであろうか。武田信広は若狭武田の嫡流で南部を経て渡海したという。両地ともに金屋集団が多いところとされている[11]ことと関係するのであろうか。

いずれにしても、北辺の勝山館という山城を拠点とした蠣崎氏は、強力な支配機構を持って自ずからのうちに手工業者集団を抱え、その生産品を交易機能の強化をはかる上での一大要素とすることによって、16世紀代に富の蓄積と支配権の掌握を絶対的なものとし、次代への発展の足固めを成し遂げたと言い得よう。

勝山館跡の鉄製品の出自について従来から注意して来たが、59年度の遺構確認調査、大澤氏による鉄滓の分析の結果、精錬、鍛錬鍛冶迄の作業の行われた事が確実となった。これをもとに勝山館繁栄の背景と蠣崎氏の経済基盤に推測を試みた。勿論勝山館跡の鉄が蝦夷交易品となったという確証はない。

しかし、農業生産にさしたるものを持たないこの期の北海道にあって交易により力を得ていく為には、その独占化は大きな要件であり、その手段として供給物資を掌握する事はこれ又大事な事である。恐らくは、幾つかのこうした交易品の流通機構を蝦夷に対しても、本州に対しても掌握することによって、蠣崎氏は成長していったと思われる。

確証のないままに当時の社会を推定することは、慎しむべきことであり、況して門外漢の筆者の行うべき事ではない。

然し、発掘調査によって得た遺構、遺物から、何が解るのかという関心、要求が高まっている。

北辺の城館について専門の諸先生に考察して戴く機会もまた少い。筆者が荒唐・無暴とも言える事を書き連ねることに対してその誤りをご叱正戴く事ができるならばそのことによってその要求が少しでも満たされる事とならないであろうか。そんな願いを持って小稿はまとめたものである。ご指導とご叱正を賜わることを心からお願い申し上げる。(松崎)

註

1 「屋敷」の用語は中世史に於ては一定規模の建造物や、上層人の住宅等に限られている。又古墳時代の「やしき」民家の「屋敷(構)」等の用例も見られるが、ここでは上ノ国町における言い伝えを示すものである。(浅香年木1975、後藤守一1956、太田博太郎1967)

2 磁着成分の抽出は土壌サンプルを洗浄し篩、ガーゼを通す過程で磁石に吸着させて行った(以下同じ方法によった)。

3 藤田元春 1928年 アイヌの住居には、屋根の途中から棟を出して入口部を張り出させたり、平入の入口部を外側に飛びださせたり、平入の入口わきに下屋の設けられたものもあるようである(蝦夷島奇観、アイヌ風俗絵巻、高倉新一郎1973)

4 建物規模の把握は掘り込み面、深さ、柱穴間の切り合い距離等の状況と併せて論じなければならないが、附表に示したこれらを総合して組立てることが充分ではなかった為、誤りもあると思われる(以下同じ)。

5 川島宙次 1978

6 拙稿 1983

7 楢崎彰一先生からご教示を頂戴した。

8 山本博 1975

9 「北夷分界余話」中に野鍛冶の風がある又、大鍛冶場の炉(火窪)について、簡単な構造で良いとする説もある。(高倉新一郎1973、奥村正二 1973 窪田蔵郎 1966)

10 窪田蔵郎 1979 186ページ図他

11 菅ノ沢製鉄遺跡では炉と作業場を含む18×10mの長方形の建物が想定されている。(飯島武次、穴沢義功 1969、71)

12 穴澤義功 1984

13 大澤正己氏のご教示によると鍛錬鍛冶作業を行う過程で羽口直下の赤熱高温部分でガラス質のものが球状を呈することがあり、鍛錬鍛冶作業に特有のものとされているが、呼称は定まっていないという。尚同氏には現物を実見して戴いていな

い。誤り等があれば筆者の説明に責がある。この種に近いものの名称として球状酸化鉄（窪田1969）、鳴石（山本前掲）鉄粒（飯島　穴沢1969）等があるが、いずれも本例とは異っている。穴沢氏が精練鍛冶、鍛練鍛冶に伴う遺物として粒状滓を挙げており（穴沢1984）本例もそれに類するかと推されたが定かでない為、「？」を付した。

14　鷹部屋福平　1933年

15　高倉新一郎　1973年

16　鷹部屋福平　1933年

17　窪田蔵郎　1966年

18　本建物跡の復原は鈴木亘先生から載いた図によった。

19　鈴木亘先生からご教示を頂戴した。

20　この場合９、10号地割面について言えば、この壁体は〝張壁〟であることが、条件となるが、それについて現場での確認はできていない。

21　上ノ国村史　1955年

22　註５に同じ

23　最上徳内　1790年

24　石野博信　1975年

25　夷王山墳墓群　1984年　上ノ国町教育委員会

25　渡辺誠　1970　佐原真　1971　堀越正行1976　木下忠　1981

27　石野博信　1975

28　志苔館跡Ⅰ、Ⅱ　函館市教育委員会　1983、84年

29　尻八館跡　尻八館調査委員会　1981年

30　志苔館跡の陶磁器の年代について13・14世紀とする説もあるが、伴出する瀬戸鉢、珠洲系擂鉢、等は15世紀中頃迄のものである。1457年築城の洲崎館跡採集の陶磁器との間で、組み合せに若干の違いがある等漸移的変化を伺わしめる。伏焼（三上次男博士のご教示による）の青白磁碗等、古いものも認められるが、恐らくは1457年陥落時の館跡に伴う遺物として良いものと思われる（註28他）。尚これについては稿を改めて論じてみたい。

31　筆者はかつて千歳末広遺跡の陶磁器と根城の竪穴出土遺物との年代位置づけをしたが、志濃、唐津等との共伴関係に対する認識が不充分であったため前者を新しいものとした。これは本調査区例からも推されるように、幾分末広例を古くする方が至当と考えられるので訂正しておきたい。尚、本調査区と末広遺跡とには、若干の違いはあるが、それを年代差として把えることはむずかしい。本調査区の終末頃に末広の例が重合してくるのであろう（史跡上之国勝山館跡Ⅳ）。

32　檜崎彰一先生のご教示による。美濃の製品について、瀬戸市歴史民俗資料館藤沢良祐氏、名古屋大学伊藤嘉章よりご教示を頂戴した。記して感謝申し上げる。美濃大窯開始の時期を1630年代とする説もあるらしい（伊藤嘉章氏）。

33　古瀬戸と志野織部1978　朝日新聞社

34　九州陶磁文化館　1984年

35　Ⅵ　大沢氏原稿、窪田蔵郎　1966年

36　間宮倫宗　1855年、尚、同書によればその際、継などをする時灰泥の類をふりかけるということであるが、一種の柄美の用をなすのであろうか。

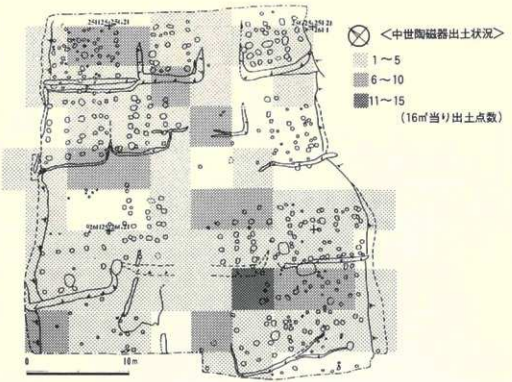
37　平岩親吉　1610年自序

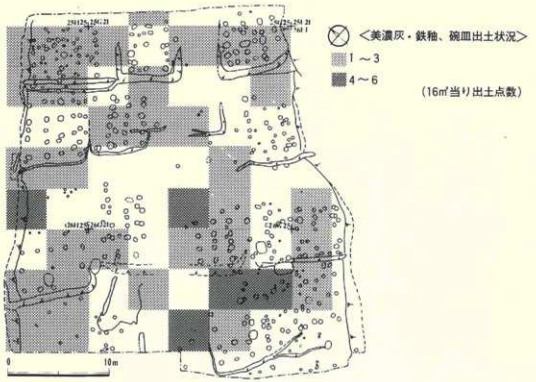
38　榎森進　1984

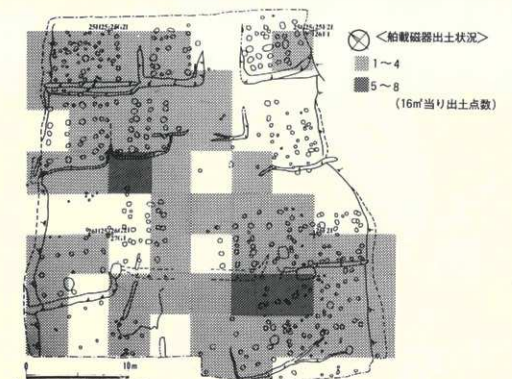
39　松前遷都後の松前に対する副城の意。上ノ国村史　1955

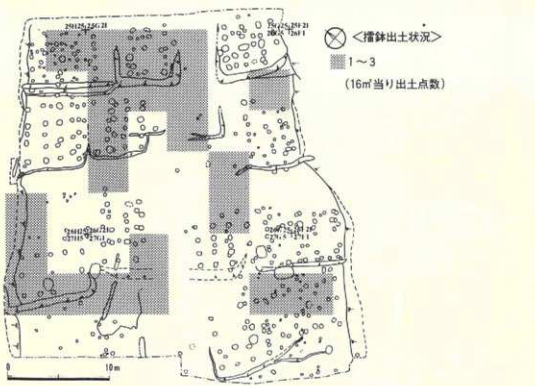
40　浅香年木　1975　佐々木銀也　1967

41　豊田武　1982

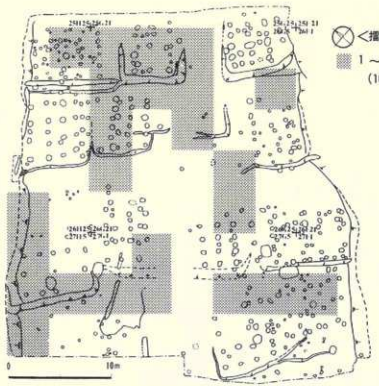


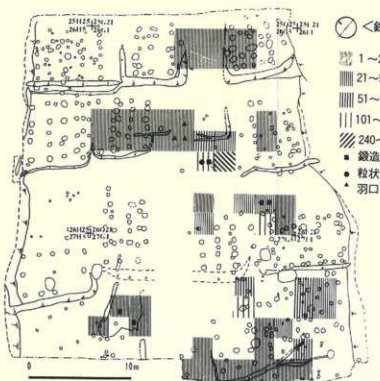


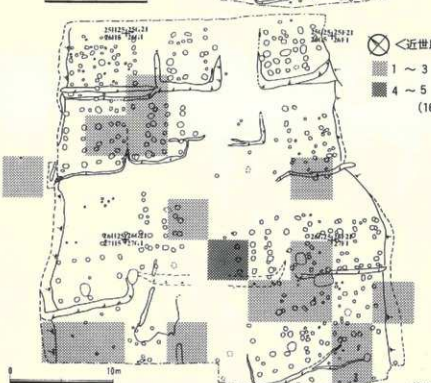


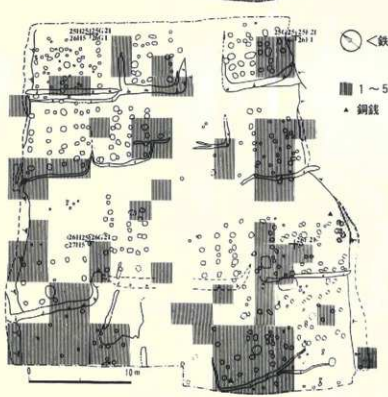


第62図　陶磁器出土分布図









第63図　陶磁器、鉄製品等出土分布図

表1　柱穴観察表1

	pitNo	グリッド	形状	掘り方覆土	柱痕跡	柱穴内礎石	柱穴内詰石	柱穴 深さ(cm)	柱穴 標高(m)	掘り込み面	備考
1号遺構面	1	27F17						25.9	99.554		
	2	27F16	円形			無	無	27.2	99.625		
	3	27F16						32.5	99.578		
	4	27F16				有		26.0	99.618		
	5	27G20						10.3	99.745		
	6	27F16						48.0	99.228		
	7	27G19	円形			無	無	66.1	98.724		
	8	27G19	方形			無	無	14.9	99.331		
	9	27G19	円形					71.0	98.790		
	10	27F11	円形	無	無			37.8	99.100		2号土壙 (削除)
	11	27G20									
	12	27G15						18.9	99.183		
	13	27G15		有B(褐色土粒)	有	無	有	37.7	98.948		
	14	27G14	円形	有	有			80.9	98.310		
	15	27G14	円形	有	有	無	無	61.6	98.517		
	16	27G14	円形					25.8	98.992		
	17	27G14	円形	有	有			54.4	98.607		
	18	27F11	円形	無	無	無	無	17.3	99.075		
	19	27F11	円形	無	無			12.8	99.045		
	20	27F11	円形	無	無	無		49.3	98.754		
	21	27F11	円形	無	無			16.8	99.045		
	22	27G15		無	無			15.2	98.895		
	23	27G15		無	無			147.0	97.658		
	24	27G15						4.8	98.943		pit26より新しい
	25	27G15						170.2	98.255		pit26と重複
	26	27G15						48.5	98.425		pit25より新しい・pit24、pit25と重複
	27	27G14	円形	有	有・円形			29.5	98.709		1号土壙
	28	27F12	円形	無	無	無		25.8	98.732		
	29	27F11	円形	有	有・隅丸方形			59.2	98.216		
	30	27F11	円形		有・円形			71.4	98.133		
	31	27F11						62.0	98.243		
	32	27F11	円形	無	無	無	無	68.0	98.203		底部にOS-a混入
	33	27F11	円形	無	無			69.0	98.170		
	34	27G15	円形					63.3	98.256		
	35	27G15	円形	有	有・円形			70.5	98.183		
	36	27G15						24.1	98.545		
	37	27G15						40.7	98.500		
	38	27G15	方形	有	有			18.2	98.358		
	39	27G15	円形	有・円形	有・OS-a(腐)・方形	無	有(柱根周囲)	49.1	98.329	暗褐色土	
	40	27G15						18.2	98.358		
	41	27G15						65.4	98.555		
	42	27G14	円形	無	無			13.7	98.603		
	43	27G14	方形	有・方形	有・方形	無	無				
	44	27G14	方形	方形	方形	無	無	53.0	98.455		
	45	27F6						22.0	98.445		
	46	27F12	円形	有	有	無	無	59.9	98.275		
	47	27F12						81.5	98.023		
	48	27F6	円形	有	有・円形		有	59.0	98.165		
	49	27F6	円形	無	無	無	無	32.2	98.372		
	50	27F6						14.4	98.486		
	51	27G10						33.4	98.336		
	52	27G15						25.9	98.395		
	53	27F11	方形	無	無			22.0	98.633		
	54	27G14	円形	無	無			82.1	97.974		
	55	27F6	円形	有	有・方形	無	有(3ケ)	45.1	98.189		
	56	27F11	方形	有	有			13.0	98.641		
	57	27G10						22.9	98.218		
	58	27G10	方形	B・OS-a混入	有・暗褐色土OS-a混入・方形	無	無	56.0	97.915		
	59	27G9						65.8	97.664		
	60	27G9	方形	B	有・OS-a混入・円形	無	有	41.0	98.100		
	61	27F7			無			57.8	97.797		
	62	27F6	円形	有	有・円形	無	無	57.3	97.907		
	63	27F6	円形	無	無			13.8	98.275		
	64	27F6	方形	無	無	無	無	14.5	98.225		
	65	27F6	円形	有	有・円形			49.5	97.767		
	66	27G10						34.3	97.869		
	67	27G20	円形		無	無	無	39.0	97.845		
	68	27G10	円形		有・円形	無	有	58.8	97.870		
	69	27G9	円形	無	無			38.8	97.706		
	70	27G9	円形	無	無			25.7	97.811		
	71	27F6		有	有・円形			155.6	97.665		
	72	27F6	円形	有	有・円形	無	無	51.5	97.695		
	73	27G10	隅丸方形	灰色LB混入	有・円形		有	70.3	97.386		
	74	27F6						18.6	97.893		
	75	27F7	方形	有	有			53.6	99.118		
	76	27F6	円形	有	有・方形	無	有(2ケ)	65.0	97.439		
	77	27F6	円形					31.0	97.701		
	78	27F1						17.1	97.602		
	79	27F1						69.5	97.444		
	80	27F1						30.4	97.665		
	81	27F1						16.9	97.630		
	82	27F12						28.1	99.012		
	83	27G14						52.0	98.455		
	84	27G14						17.7	98.433		
	85	27G13						55.8	99.177		
	86	27G18						133.3	99.587		
	87	27G13									
2号遺構面	493	27G11						20.9	98.421		
	494	27G11						10.1	98.499		
	495	27G11						3.3	98.575		
	496	27G11						29.0	98.328		
	497	27G11						15.5	98.455		
	498	27G11						15.5	98.325		
	499	27G11						28.1	98.229		
	501	27G11						12.7	98.325		
	502	27G6						16.3	98.114		
	503	27G6						10.8	98.009		
	504	27G12						25.1	98.237		
	505	27G12						18.2	98.167		
	506	27G7						1.5	98.059		
	507	27G7						11.6	98.054		
	94	27G11						15.8	98.317		
3号遺構面	88	27H15	円形	A・LB混入	有・褐色土・OS-a(帯状)			65.1	97.896	ハードローム	
	89	27H15	円形	A・LB混入	有・暗褐色土(腐)			54.3	97.836	ハードローム	
	90	27H9						35.7	97.790		
	91	27H10	円形	A・LB混入	有・黒色			36.6	97.694		
	92	27H10		A・LB混入				44.0	97.620		

表2　柱穴観察表2

	pit№	グリッド	形状	掘り方 埋土	柱痕跡	柱穴内 礎石	柱穴内 詰石	柱穴 深さ(cm)	柱穴 標高(m)	掘り込み面	備考
	92	27G11						48.0	96.014		
	99	27G5		C-LB混入				29.4	97.132		
	101	27F2		B	暗褐色土			47.7	96.899		
	102	27F2			有-暗褐色土-OS-a混入			67.0	96.702		
	103	27F1		B	有-暗褐色土-OS-a混入			56.6	96.861		
	104	27F1		A-LB混入				89.4	96.722	ソフトローム黄褐色土	
4	105	27F1			褐色土			37.8	97.054		
	106	27F1		B	暗褐色土			68.4	96.788	ソフトローム黄褐色土	
	107	27F1			OS-a混入			48.0	96.980		
	108	27G5	円形	B-OS-a混入	暗褐色土-炭化物有			54.2	96.974		
	109	27G5		A				38.7	97.084	ソフトローム黄褐色土	
	110	27G5		B-OS-a-LB混入	OS-a(帯状)			91.6	96.538	ソフトローム	
	111	27G4		A-LB混入				30.8	97.268	ソフトローム	
	112	27G4		OS-a混入	暗褐色土　OS-a混入			54.4	97.094	ソフトローム	
	115	27F2		B	暗褐色土			65.6	96.638	ソフトローム	
	116	27F1		B				62.0	96.741	ソフトローム	
	117	27F1		B-OS-a混入	暗褐色土			60.6	96.796	ソフトローム	
号	118	27G5		B-LB混入	暗褐色土			29.5	97.109	ソフトローム	
	123	27F2		B	暗褐色土			47.9	96.635		
	124	27F1		A				30.4	96.969		
	125	27F1		B	暗褐色土			45.6	96.770		
	126	27G5		B-LB混入	暗褐色土			64.4	96.818		
	127	27G5		B-OS-a混入	暗褐色土-OS-a混入			64.4	96.874		
	128	27G5		B-OS-a混入	暗褐色土-OS-a混入			57.5	96.818		
	129	27G5		B-OS-a混入	暗褐色土-炭化物有			41.9	96.818		
	130	27G4		B				28.7	96.996		
	131	26F23		A-LB混入	暗褐色土			52.4	96.558	茶褐色土	pit132より新しい
	132	26F23		B	暗褐色土			44.2	96.640		pit133と重複
地	133	27F23		B	暗褐色土			50.3	96.581	褐色土	
	134	27F23		B	暗褐色土-炭化物有			59.4	96.540		
	135	26G25		B-LB混入	暗褐色土			52.0	96.718		
	136	26F21		B-C	暗褐色土			52.7	96.416	茶褐色土炭化物	
	137	26F21		A	暗褐色土			61.8	96.444		
	138	26F21		B	暗褐色土			49.5	96.570		
	139	26G25		B-OS-a炭化物	暗褐色土			60.6	96.475		
	140	26G25		B-OS-a混入	暗褐色土			42.6	96.712	ソフトローム	
	141	26G25		B	暗褐色土			47.5	96.636	ソフトローム	
	142	26G25		D-OS-a炭化物	暗褐色土			14.5	96.896		
群	145	26F22		B	暗褐色土			59.6	96.110		
	146	26F22		B	暗褐色土			31.6	96.433		
	147	26F21		D	暗褐色土			44.1	96.403		
	148	26F21		B-LB混入	暗褐色土			35.7	96.557	茶褐色土	
	149	26G25		B-OS-a混入	暗褐色土			13.0	96.757	ソフトローム	
	150	26G25		B	暗褐色土			19.3	96.602		
	151	26G25		B-OS-a混入	暗褐色土			33.8	96.613	ソフトローム	
	152	26F22		B-LB混入				35.2	96.292		
	153	26F21		B-LB混入	暗褐色土			54.6	96.142		
	154	26F21		B	暗褐色土			32.0	96.472		
	155	26F21		B	暗褐色土			26.0	96.594	ソフトローム	
集	156	26F21		B	暗褐色土			61.4	96.260		
	157	26F21		B-LB混入	暗褐色土			50.4	96.408		
	158	26F21		B	暗褐色土			51.6	96.200		
	159	26G25		A				30.6	96.430		
	160	26G25		D				28.2	96.422		
	163	26G25		B-LB混入				47.4	96.344		
	164	27G24		B	暗褐色土-有			56.5	97.175	ソフトローム	
	165	27G4		B-OS-a混入	暗褐色土-有			54.4	97.094		
	167	27G4		A	暗褐色土			50.7	97.068	ソフトローム	
5	168	27G4		A	OS-a混入			59.0	96.826	ソフトローム	
	169	27G4		B-OS-a混入	暗褐色土-OS-a混入炭化物			69.1	96.788		
	170	27G3		B	暗褐色土-OS-a混入			67.2	96.768	ソフトローム	
	172	27G4		B-LB混入炭化物	暗褐色土-OS-a混入			29.6	96.937	ソフトローム	pit173と重複
号	173	27G4		A	暗褐色土-OS-a混入-有			69.0	96.611		pit172より新しい
	174	27G3		B-OS-a炭化物	OS-a混入			6.0	96.685	ソフトローム	
	175	27G3			暗褐色土-OS-a混入			59.2	96.649		
	177	27G4		B	暗褐色土-OS-a混入			51.5	96.738	ソフトローム	
地	178	27G3		C-LB混入	暗褐色土-OS-a混入			35.7	96.803		
	179	27G3						39.7	96.668		
	180	26G23		B	暗褐色土			23.2	96.608		
	181	27G4		B	暗褐色土-OS-a層状			39.8	96.805		
群	182	26G24			暗褐色土-OS-a混入			63.2	96.567		
	183	26G24		B	暗褐色土-OS-a混入			48.5	96.614		
	184	26G24		A-LB混入	暗褐色土			37.2	96.635	ソフトローム	
	186	26G24		C	暗褐色土			46.5	96.483	ソフトローム	
集	187	26G24		C-LB混入	暗褐色土			48.8	96.445		
	188	26G23		B-LB混入	暗褐色土-OS-a混入			25.8	96.587	ソフトローム	
	189	26G24		B	炭化物			42.9	96.360		
	190	26G24						42.9	96.379		
	191	27G2	隅丸方形	B-LB混入	暗褐色土			55.5	96.683		
	192	27G1	隅丸方形	B-LB混入	暗褐色土	有		36.8	96.830		
	193	27G1	隅丸方形	B-LB混入	暗褐色土-OS-a混入			47.1	96.724		
	194	26G26	方形		褐色土-LB混入			67.8	96.065		
6	195	27G2	隅丸方形	B-LB混入	OS-a			38.5	96.476		
	196	26G21	方形		暗褐色土-OS-a			54.9	96.227		
	197	26G21	方形					35.3	96.402	ソフトローム	
	198	27G1	隅丸方形	B	暗褐色土-LB混入			41.2	96.448		pit199と重複
	199	27G1	隅丸方形	B	褐色土			38.0	96.397		pit198より新しい
号	200	27G1	隅丸方形	B			有	39.0	96.520		
	201	26G22	方形					54.2	96.024		
	202	26G22	隅丸方形	B-LB混入	暗褐色土　LB混入			48.8	96.121		
	203	26G21	隅丸方形	B-LB混入	暗褐色土-LB混入			48.6	96.140		
	204	26G21	方形	B-LB混入	褐色土			50.9	96.138		
地	205	26G21	方形	B-LB混入	暗褐色土-LB黄褐色土	有		38.3	96.315		
	206	26G21	不整円形	B-LB混入				23.3	96.328		
	207	26G22	方形	B-LB混入				50.7	97.993	ソフトローム	
	208	26G22	方形	B-LB混入			有	46.6	95.975	ソフトローム	
	209	26G22	方形	B-LB混入				47.7	96.017	ソフトローム	
群	210	26G21	方形	B-LB混入	暗褐色土-LB混入			50.4	96.006	ソフトローム	
	211	26G21	方形	B-LB混入	暗褐色土-LB混入			41.3	95.900	ソフトローム	
	212	26G21	方形	B-LB混入	暗褐色土-LB混入			38.5	96.010	ソフトローム	
	213	26G21	不整方形	B-LB混入				27.3	95.997	ソフトローム	
	214	26G21	不整円形	B-LB混入				38.5	95.886	ソフトローム	pit220と重複
集	215	26G22	不整方形	B-LB混入				28.1	96.054	ソフトローム	
	216	26G16	不整円形					27.9	95.691		
	217	26G16	円形					45.6	95.658		
	220	26G16						24.5	95.983		pit214より新しい
	221	27M10	隅丸方形	A・OS-a混入	有-暗褐色土(層HS)-a混入円形			78.6	96.793	褐色土・ソフトローム	

表3　柱穴観察表3

	pit№	グリッド	形状	掘り方 覆土	柱痕跡	柱穴内 礎石	柱穴内 詰石	柱 深さ(m)	穴 標高(m)	掘り込み面	備考
7号竪穴建物跡	222	27H10	円形	A	有・OS-a(層状)・円形			86.3	96.646	暗色土、ソフトローム	
	223	27H9	円形	A・OS-a混入	有・OS-a(層状)			87.2	96.637	黄褐色土	
	224	27H9	円形	B・OS-a混入				64.2	96.836		
	225	27H5	方形	A				80.7	96.670	目幅黒色	
	226	27H5		A・LB混入				65.6	96.389	黄褐色ソフトローム	
	227	27H5	方形		有・方形			60.4	96.522		
	228	27H4	方形	B・OS-a混入・炭化物含有	有・隅丸方形			59.6	96.512	黄褐色ソフトローム	
	229	27H4				有		61.5	96.532		
	230	27H4	隅丸方形	B・OS-a混入・炭化物混入				59.3	96.519	黄褐色ソフトローム	
	231	27H4	方形					78.7	96.525		
	232	26H25		B				34.0	96.365	ソフトローム	
	233	26H25	円形	A・OS-a、LB混入	有・OS-a混入・円形			55.5	96.332	ソフトローム	
	234	26H25	方形	A	有・暗褐色土・OS-a混入・方形			30.5	96.500	ソフトローム	
	235	26H25	方形					69.0	96.152		
	236	26H24	隅丸方形					30.5	96.452		
	237	26H24						7.1	96.847		
	238	26H24	円形					56.5	96.357		
	239	27H4	円形	OS-a混入				29.8	96.604		
	240	27H4	円形					18.2	96.822		
	241	26H24	円形					29.6	96.362		
	242	26H24	円形					33.8	96.436		
	243	26H24	円形					21.0	96.606		
	244	26H24	隅丸方形					16.8	96.669		
	245	26H24	隅丸方形					12.9	96.757		
	246	26H24	円形					29.0	96.572		
	247	26H25	隅丸方形					23.2	96.340		
	248	26H25	円形					31.2	96.494		
	249	26H25	隅丸方形		有・暗褐色土・隅丸方形			35.0	96.070		
	250	26H25	円形					13.5	96.467		
	251	26H24	円形								
	252	26H24	円形					19.7	96.465		
	253	26H24	隅丸方形					39.0	96.260		
	254	26H24	隅丸方形		OS-a混入			37.5	96.182		
	255	26H25	円形					29.5	96.367		
	256	26H25	円形					36.5	96.337		
	257	26H20	円形	A・OS-a混入				22.0	96.207		
	258	26H20	円形	B・OS-a混入				50.7	95.868		
	259	26H20	円形	B・LB混入				22.1	96.305		
	260	26H24						23.4	96.283		
	261	26H24						10.8	96.310		
	262	26H19						16.0	96.197		
	263	26H20	円形	B				45.6	95.971		
	264	26H20	円形	B・OS-a混入				49.7	95.924		
	265	26H20						35.1	96.056		
	266	26H20						15.0	96.287		
	267	26H19		B				19.6	96.224		
8号竪穴建物跡	268	26G20		A・OS-a混入				68.8	95.853		
	269	26G20		B・焼土炭化物				61.5	95.811		
	270	26G20		B・焼土炭化物				64.0	95.701		
	271	26G20		A・LB混入				59.0	95.561		
	272	26G19		B・OS-a混入				67.3	95.603		
	273	26F11		B・LB混入				65.8	95.427		
	274	26G15		A				44.9	95.682		
	275	26G20		B・OS-a混入				85.3	95.359		
	276	26G20		A・LB混入				23.0	96.011		
	277	26G19	方形	B・LB混入・炭化物				70.1	95.526		pit278より新しい
	278	26G20		B・OS-a、LB混入				85.4	95.434		pit277と重複
	279	26F11		B・LB混入				51.4	95.452		
	280	26G15		A・OS-a、LB混入				133.2	95.429		
	281	26G15		B・焼土炭化物				55.8	95.593		
	282	26G15		B・OS-a混入				29.6	95.695		
	283	26G15		B・焼土炭化物				54.0	95.526		
	284	26G14	方形	B・LB混入				71.2	95.429		
	285	26G15		A・LB混入				79.6	95.226		
	286	26G15		B・LB混入・炭化物				49.5	95.589		
	287	26G14		B・LB混入・炭化物				69.5	95.336		
	288	26G14		A・LB混入				51.2	95.386		
	289	26G15		A				44.5	95.364		
	290	26G15		B・焼土炭化物				22.9	95.639		
	291	26G15		B・LB混入・炭化物				53.0	95.448		
	292	26G14		B・OS-a、LB混入				45.4	95.376		
	293	26G15		B				361.9	94.999		
	294	26G14		B・OS-a混入				42.6	95.341		
	295	26G15						22.6	95.875		
	296	26G10						25.3	95.159		
	297	26G9						31.9	95.149		
	298	26G20	方形					70.8	95.680		
	299	26G15						18.7	95.498		
	300	26G10						65.6	95.041		
	301	26G15						23.6	95.506		
	302	26G15						25.0	95.571		pit303と重複
	303	26G15						45.1	95.510		pit302より新しい
	304	26G15						22.8	95.454		pit305と重複
	305	26G15						29.3	95.418		pit304より新しい
	306	26G14						46.5	95.291		pit307と重複
	307	26G14						55.0	95.206		pit306より新しい
	308	26G18						17.2	95.929		
	309	26G14	方形					41.6	95.489		
	310	26G13						17.7	95.650		
	311	26G13						13.3	95.634		
	312	26G13						12.5	95.342		
	313	26G13						32.4	95.038		
	314	26G13						15.3	95.107		
9号竪穴建物跡	315	26G12	方形	A・OS-a混入	有			45.8	95.111		
	316	26G11	方形	A・OS-a・LB混入	有		有	54.9	94.997		
	317	26G11	方形	B・OS-a混入				28.5	95.292		
	318	26G11	隅丸方形	B・OS-a・LB混入	有			62.7	94.962		
	319	26G12	隅丸方形	A・OS-a混入	有		有	69.7	94.834		
	320	26G11	方形	A・OS-a混入	有		有	52.4	94.907		
	321	26G11	方形	A・OS-a混入				47.6	95.047		
	322	26G11	隅丸方形	A	有・暗黒色土			67.2	94.879		
	323	26G12	隅丸方形	A・OS-a混入	有		有	50.7	94.828		
	324	26G11	隅丸方形	A	有			50.4	94.854		
	325	26G11	隅丸方形	A	有			43.2	94.990		
	326	26G12	方形	A・LB混入				45.1	94.836		
	327	26G11	方形	A・OS-a、LB混入	有			41.3	94.826		
	328	26G11	方形	B・OS-a混入	黒	有	有	44.4	94.837		

表 4　柱穴観察表 4

	pit№	グリッド	形状	掘り方 覆土	柱痕跡	柱穴内 礎石	柱穴内 詰石	柱穴 深さ(cm)	柱穴 標高(m)	掘り込み面	備考
9号竪穴建物跡	329	25G 11	方形	A-OS-a混入				39.9	94.937		
	330	26G 7	方形	A-LB混入		有	有	41.0	94.767		
	331	26G 7	円形	A-OS-a、LB混入	有		有	51.0	94.670		
	332	26G 6	円形	A-LB混入	有		有	60.9	94.693		
	333	26G 7	方形	B-LB混入				23.5	94.934		
	334	26G 7	円形	B-LB混入				24.0	94.897		
	335	26G 6	円形	A-OS-a、LB混入				39.5	94.870		
	336	26G 6	隅丸方形	B-LB混入	有		有	51.9	94.690		
	337	26G 12						16.2	95.159		
	338	26G 6						49.5	94.699		
	339	25G 11						22.6	95.389		
10号竪穴建物跡	340	26H 20	方形	B-OS-a、LB混入	有			63.0	95.156		
	341	26H 19	隅丸方形	B-OS-a、LB混入	無			60.0	95.142		
	342	26H 19	隅丸方形	A-OS-a、LB混入	無			86.9	94.876		
	343	26H 15	円形	A	有			40.0	95.432		
	344	26H 20	円形	A-OS-a混入	有			40.4	95.358		
	345	26H 15	隅丸方形	A-LB混入	有			45.2	95.223		
	346	26H 14	隅丸方形	A-OS-a混入	有			53.4	95.066		
	347	26H 14	隅丸方形	B	無			69.4	94.826		
	348	26H 15	円形	B	有			31.2	95.195		
	349	26H 15	隅丸方形	A-OS-a混入	有			43.7	95.133		
	350	26H 15	隅丸方形	B	有			70.2	94.917		
	351	26H 14		A-OS-a混入	有			59.8	94.892		
	352	26H 15	隅丸方形	A-OS-a混入	有			52.9	95.051		
	353	26H 15	円形	A-OS-a、LB混入	有			30.5	95.045		
	354	26H 15	円形	B-OS-a混入	有			51.7	94.908		
	355	26H 15	円形	B				35.9	95.036		
	356	26H 15	円形	B-OS-a、LB混入	有			59.0	94.870		
	357	26H 14	方形	A	有			57.2	94.926		
	358	26H 14	隅丸方形	A-OS-a混入	無			43.5	94.805		
	359	26H 10	円形	A-LB混入	有			37.7	94.848		
	360	26H 10	隅丸方形	A				39.3	94.907		
	361	26H 10	円形	A-LB混入				51.7	94.736		
	362	26H 10	方形	A				47.2	94.771		
	363	26H 10	方形	A		有					
	364	26H 9	方形	A-OS-a、LB混入				30.4	94.886		
	365	26H 9	方形	A				40.1	94.684		
	368	26H 10	円形	B-OS-a混入				37.1	94.564		
	373	26H 19						17.0	96.124		
	374	26H 19						27.5	95.839		
	375	26H 15	方形	A				36.2	94.945		
	376	26H 20	隅丸方形	B-OS-a、LB混入	有		有	57.9	95.232		
11号竪穴建物跡	377	26G 5						22.5	94.178		
	378	26G 5						80.9	93.569		
	379	26G 5						39.2	93.960		
	380	26G 4						13.8	94.150		
	381	26G 4						56.0	93.816		
	382	26G 4						49.7	93.898		
	383	26G 5						27.9	94.093		
	384	26G 4						89.2	93.470		
	385	26G 4						58.4	93.759		
	386	26G 4						104.5	93.296		
	387	26G 5						44.5	93.823		
	388	26G 5						86.8	93.508		
	389	26G 5						65.1	93.461		
	390	26G 4						75.8	93.606		
	391	26G 4						74.5	93.600		
	392	26G 4						76.8	93.544		
	393	26G 5						119.1	93.402		
	394	26G 5						76.9	93.539		
	395	26G 5						43.6	93.686		
	396	26G 4						76.1	93.375		
	397	26G 4						75.3	93.331		
	398	26G 4						62.1	93.436		
	399	26G 24						73.5	93.283		
	400	26G 25						74.8	93.480		
	401	26G 24						79.2	93.323		
	402	26G 24						42.8	93.471		
	403	26G 25						13.4	93.775		
	404	26G 24						85.8	93.101		
12号竪穴建物跡	405	26G 3		B-OS-a混入	無			30.6	94.193		
	406	26G 2		B-OS-a混入	無			25.4	94.200		
	407	26G 7			無			14.3	94.374		
	408	26G 2		A-OS-a、LB混入	無			18.1	94.346		
	409	26G 3		B-LB混入	無			48.2	93.972		
	410	26G 2		B-焼土炭化物	無			49.6	94.028		
	411	26G 2		B-OS-a混入	無			38.4	94.148		
	412	26G 3		B-LB混入	無			28.4	94.092		
	413	26G 2		B-OS-a混入	無			34.1	94.183		
	414	26G 3		C-LB混入	無			29.8	93.870		
	415	26G 2			無			42.2	93.813		
	416	26G 2		B-焼土炭化物	無			55.7	93.819		
	417	26G 2		B	無			21.8	94.164		
	418	26G 3			無			29.4	93.938		
	419	25G 22			無			52.9	93.500		
	420	26G 2			無			25.9	93.665		
	421	26G 2		A-OS-a、LB混入	有			68.0	93.828		
	422	26G 2		B	有			40.0	93.813		
	423	26G 2			有			36.0	93.714		
	424	25G 22			有			20.3	93.764		
	425	25G 22			有			21.9	93.719		
	426	25G 22						36.7	93.631		
13号竪穴建物跡	427	26H 10	隅丸方形	B-OS-a混入							
	428	26H 10	隅丸方形	B-OS-a混入				28.7	94.776		
	429	26H 10	隅丸方形	B-OS-a混入				55.7	94.238		
	430	26H 5	隅丸方形					31.5	94.480		
	431	26H 10	隅丸方形	B-OS-a混入				32.8	94.467		
	432	26H 9	円形	B				65.6	94.062		
	433	26H 9	方形	B-LB混入				160.8	94.020		
	434	26G 6		B				117.1	94.471		
	435	26H 10		B-OS-a混入				155.3	94.041		
	436	26H 10		B-OS-a混入				56.0	94.094		
	437	26H 10		B-OS-a混入	OS-a層状			60.2	93.982		
	438	26H 10	隅丸方形	B-OS-a混入				51.6	93.974		
	439	26H 10	隅丸方形	B-OS-a、LB混入				32.3	94.302		
	440	26H 9		C-LB混入	暗褐色土			18.5	94.285		
	441	26H 10	隅丸方形	A-OS-a混入				21.6	94.447		

表5　柱穴観察表5

	pit№	グリッド	形状	掘り方覆土	柱痕跡	柱穴内礎石	柱穴内詰石	柱穴 深さ(cm)	柱穴 標高(m)	掘り込み面	備考
33号地割溝	442	26H 9						35.0	94.242		
	443	26H 10	方形	A-OS-a混入	黄褐色土			41.1	94.232		
	444	26H 5	円形					37.6	94.357		
	445	26G 1		A	暗褐色土			62.9	93.952		
	446	26G 1		B	暗褐色土			24.4	94.233		
	447	26H 5	円形	A-LB混入	暗褐色土			62.8	93.847		
	448	26H 4		A-OS-a、LB混入	暗褐色土-OSa混入			52.4	93.935		
	449	26H 4		C-LB混入	暗褐色土			9.3	94.280		
	450	26H 4		C-LB混入	暗褐色土			38.8	93.993		
	451	26G 1	B					24.0	94.165		
	452	26G 1						19.2	94.168		
	453	26H 5						31.2	94.180		
	454	26H 5						51.1	94.011		
	455	26H 5	円形	A-LB混入	暗褐色土			125.2	94.030		
	456	26H 5	方形	A-OS-a混入				156.4	93.773		
	457	26H 4		B-LB混入				4.0	94.045		
	458	26H 4		C-LB混入	暗褐色土			30.3	94.032		
	459	26G 1		B		有		23.7	93.992		
	460	26H 5			暗褐色土-OS-a混入			16.2	93.935		
	461	26H 5						53.0	93.790		
	462	26H 5		b-OS-a混入	暗褐色土			43.8	93.869		
	463	26H 4						14.1	93.929		
	464	26H 4						34.5	93.945		
	465	26H 4						52.0	93.795		
	466	26G 1						27.9	93.961		
	467	26H 5		C-OS-a混入	OS-a混入			50.1	93.871		
	468	26H 5		B	暗褐色土柱根有り			16.2	93.935		
	469	26H 5	円形	B-OS-a混入				53.0	93.790		
	470	26H 5		B	暗褐色土			28.3	93.997		
	471	26H 4		B-LB混入	暗褐色土			54.5	93.695		
	472	26G 1		C				30.9	93.891		
	473	26H 5		C	暗褐色土			54.3	93.706		
	474	26H 5			暗褐色土			35.1	93.772		
	475	26H 5	円形	C-LB混入	暗褐色土			25.5	93.817		
	476	26H 5		B				67.7	93.590		
	477	26H 5						159.8	93.598		
	478	26H 5	方形	C-OS-a混入	暗褐色土			46.7	93.733		
	479	26H 4		C-OS-a混入	暗褐色土			26.0	93.813		
	480	26G 1		B				34.7	93.688		
	481	26H 5						110.7	94.080		
	482	26H 5						148.3	93.701		
	483	25H 25		B				21.5	93.667		
	484	25H 24						17.8	93.582		
	485	26G 21						18.8	93.813		
	486	26G 1						29.4	94.068		
	487	25H 25						131.4	93.632		
	488	25H 25						13.8	93.822		
	489	25H 25						18.8	93.813		
その他	490	26G 3						16.5	94.306		
	491	26G 4						32.0	93.766		
	492	26G 4						64.2	93.509		
	508	27H 10									7号地割溝
	509	27G 15	隅丸方形	有	有・円形						

凡例

掘り方覆土分類	
A	褐色土
B	暗褐色土
C	黄褐色土
D	黒褐色土
表中略号	
LB	ロームブロック
OS-a	渡島大島噴出白色火山灰(1741年)

表6　土壙・焼土・土壌サンプル分析表

地割面	抽出成分 / 土壙・焼土・Pit	サンプル総量	磁着成分	鉄滓	鉄製品	木炭	骨(獣魚)	備考
第1号	焼土1号	11.5kg	220.7g		鉄片4.3g	19.9g	3.1g	小石
第1号	4号土壙	39.5kg	333.13g			21.3g		小石
第1号	1号土壙(P21)	1.5kg	15.4g			1g		小石
第2号		58.8kg	2,305.66g	鍛造剥片1.5g 鉄滓 12.9g	クギ2本9.7g	15.3g	少	未処理残量[illegible]kg 小石
第4号	焼土3号	3kg	103.4g	鍛造剥片2.1g 粒状滓 5.7g 鉄滓 14.2g		9.5g	0.4g	小石
第6号	焼土4号	1.7kg	32.5g			1.1g		小石
第7号	焼土5号	2.2kg	18.3g			0.2g	0.05g	小石
第7号	5号土壙						少	
第8号	焼土6号	2kg	44.4g	鍛造剥片3.8g 粒状滓 0.1g 鉄滓 7.5g	クギ4g	0.4g	少	小石
第12号	6号土壙(P400)	22.1kg	187.33g			21.6g		小石
第13号	7号土壙(P63)	4.2kg	62.6g			0.8g		小石
第13号	焼土	2kg	18.1g			0.1g		

表 7　地割面別出土遺物集計表 1

No	種別 / 器種	中世 陶器 青磁	白磁	染付	赤絵	計	美濃 灰釉	美濃 鉄釉	越前	計	合計	その他 鉄器	羽口	骨角器	その他	合計	近世陶磁器	総計
第一号	碗	7		8		15	4	5		9	24	釘10						
	皿	2	11	6		19	12			12	31	鍋3					3	
	坏		1			1					1	銅銭3						
	ハチ								1	1	1	刀子1						
	擂鉢								2	2	2	鉄製品5						
	袋物																4	
	その他											スラッグ 560.91g			と石1	1		
	計	9	12	14		35	16	5	3	24	59	22			1	23	7	89
第二・三号	碗	1		2		3	1	1		2	5	釘4					1	
	皿	1	1	3		5	5			5	10	鍋2						
	坏											銅1					2	
	カメ								1	1	1	小札1						
	擂鉢								4	4	4	鉄製品4						
	袋物																	
	その他											スラッグ 99.6g			石製品1	1	2	
	計	2	1	5		8	6	1	5	12	20	12			1	13	5	38
第四号	碗			4		4	1			1	5	釘1						
	皿	2	4	4		10	1			1	11	銅銭2						
	坏											小札1					1	
	カメ											鉄製品1						
	擂鉢								2	2	2							
	袋物																	
	その他											スラッグ 149.2g			とうすい2	2		
	計	2	4	8		14	2		2	4	18	5			2	7	1	26
第五号	碗			1		1	1			1	2							
	皿			2		2	7			7	9							
	坏																4	
	カメ																	
	擂鉢																	
	袋物																	
	その他											スラッグ 45.79g						
	計			3		3	8			8	11						4	15
第六号	碗	1		4		5	1			1	6	釘3						
	皿	1	3	3		7					7	鍋1					1	
	坏											銭1						
	カメ											鉄製品3						
	擂鉢								2	2	2							
	袋物																	
	その他	盤1				1	1				1				と石1	1		
	計	3	3	7		13	1		2	3	16	8			1	9	1	26
第七号	碗	1		2		3	3			3	6	釘3						
	皿		1			1	5			5	6	鍋1						
	坏											小札1						
	カメ											鉄製品3						
	擂鉢								4	4	4	3						
	袋物																	
	その他																	
	計	1	1	2		4	8		4	12	16	8				8		24
第八号	碗											鍋1						
	皿	1	2			3	4			4	7	鉄製品5						
	坏																	
	カメ																	
	擂鉢								5	5	5							
	袋物																	
	その他											スラッグ 496.06g	3			3	とうすい1	
	計	1	2			3	4		5	9	12	6	3			9	1	22

表 8　地割面別出土遺物集計表 2

No.	種別＼器種	中世 陶磁器 青磁	白磁	染付	赤絵	計	美濃 灰釉	美濃 鉄釉	越前	計	合計	その他 鉄器	羽口	骨角器	その他	合計	近世陶磁器	総計
第九号	碗						1	1		2	2	釘3						
	皿		2	1		3	2			2	5	鍋2						
	坏											鉄製品1						
	カメ																	
	擂鉢								1	1	1							
	袋物																1	
	その他											スラッグ 105.9g		1		1		
	計		2	1		3	3	1	1	5	8	6		1		7	1	16
第十号	碗	2		4		6	1			1	7	釘1						
	皿	1	1	2		4	1			1	5	鍋2						
	坏											小札1					1	
	カメ																	
	擂鉢																	
	袋物																	
	その他																かわら2	
	計	3	1	6		10	2			2	12	4				4	3	19
第十一号	碗											釘3						
	皿		1			1	3			3	4							
	坏																	
	カメ																	
	擂鉢																	
	袋物																	
	その他											スラッグ 27.3g						
	計		1			1	3			3	4	3				3		7
第十二号	碗	2	1	1	2	6	1			1	7	釘1						
	皿		3	2		5	5			5	10	鍋2						
	坏		2			2					2	鉄製品1						
	カメ																	
	擂鉢							1	6	7	7							
	袋物																	
	その他											スラッグ 2g					1	
	計	2	6	3	2	13	6	1	6	13	26	4				4	1	31
第十三号	碗	1		1		2		1		1	3	釘2						
	皿		4			4	8			8	12	鍋1						
	坏											くさび1						
	カメ																	
	擂鉢								1	1	1							
	袋物																	
	その他																	
	計	1	4	1		6	8	1	1	10	16	4				4		20
表採	碗			3		3					3							
	皿		3	4		7					7							
	坏																	
	ハチカメ																	
	擂鉢																	
	袋物																	
	その他																	
	計		3	7		10					10							10
全体	碗	15	1	30	2	48	15	8		23	71						1	
	皿	8	35	27		70	52			52	122						4	
	坏		4			4					4						8	
	ハチカメ								2	2	2							
	擂鉢							1	27	28	28							
	袋物																5	
	その他	盤1				1					1						6	
合	計	24	40	57	2	123	67	9	29	105	228	82	3	1	5	91	24	343

V　保存処理

昭和54年度より現在まで勝山館跡より出土した多数の金属製品及び木製品の処理を昭和58年度より国の補助を得て10ヶ年計画で行なっている。今年度は木製品、鉄製品を対象に実施した。

1．木製品

総出土量は3650点である。一部を除きＰＥＧ含浸処理によった。常温含浸は昨年度20％溶液浸漬中のもの822点をすべて40％に濃度を上げ浸漬中である。その他昨年度までホウ酸、ホウ砂0.5％溶液浸漬中のものはすべて20％溶液浸漬とした。また昭和57年度用水施設より検出された樋及びその土台材については発掘現場では乾燥を防ぐため低濃度ＰＥＧ水溶液を塗布していたが、現在は簡易水槽の中で20％溶液浸漬中である。恒温含浸により今年度、最終処理の100％浸漬まで行なったものは156点である。方法は昨年度同様恒温乾燥機を用いてＰＥＧ溶液内を65℃にして恒温含浸を行うとともに含浸終了の時期を把握するために従来まで行なっていた液面、比重の他に濃度、木製品の重量も合わせて測定した。尚測定は週１回を原則としＰＥＧと水との置換完了時期は濃度及び重量の一定化を目安とした。

①常温含浸

第64図は40％溶液浸漬を７ヶ月間行ない液面、比重、重さ、濃度の推移をグラフ化したものである。これに従い含浸完了の時期の検討を行なってみた。比重は浸漬当初1.076でる。その後木製品より水分流出のため１ヶ月後には1.066まで下がる。しかしその後上がり４ヶ月後に1.076、６ヶ月後に1.081で２回の一定化がある。重量は浸漬当初92ｇである。その後木製品内の水とＰＥＧの置換により３ヶ月後には96ｇに上がる。以後微増し４ヶ月後に96.5ｇ、６ヶ月後97.0ｇで２回の一定化がある。濃度は浸漬当初42％である。比重と同様木製品より水分流出のため１ヶ月後には38％まで下がる。しかし以後微増し４ヶ月後に40％、７ヶ月後41％と２回の一定化がある。これらより考えると比重、重量、濃度の一定化は４ヶ月後及び６～７ヶ月後の２回あることが確認されるが、重量は４ヶ月以降微量の変化よりなく含浸完了の時期は４ヶ月後であると考えられる。

②恒温含浸

第64図は80％溶液浸漬を４ヶ月間行ない、液面、比重、重さ、濃度の推移をグラフ化したものである。これに従い含浸完了の時期の検討を行なってみた。比重は浸漬当初1.096である。その後木製品より水分流出のため１ヶ月後には1.093まで下がる。しかしその後上がり２ヶ月後に1.110で一定化する。重量は浸漬開始より１ヶ月半後からの測定である。測定当初は90ｇである。測定開始より半月後93ｇに上がる。しかしその後下がり測定開始より１ヶ月後には88ｇになる。濃度も重量同様浸漬開始より１ヶ月半後からの測定である。測定当初は79％である。測定開始より半月後木製品より水分流出のため77％まで下がる。しかしその後上がり測定開始より１ヶ月後80％にほぼ一定化する。これらより考えると浸漬開始２ヶ月後頃重量が最も上がり比重も一定化する。ちょうどこの頃が含浸完了の時期と考えられる。第64図は100％浸漬を３ヶ月間行ない液面、重さ、濃度の推移をグラフ化したものである。これに従い含浸終了の時期の検討を行なってみた。尚比重は常温ではＰＥＧが凝固してしまい測定不能であった。重量は浸漬当初94.6ｇである。その後徐々に下がり１ヶ月後－２ヶ月後94ｇに下がる。しかし３ヶ月後再び94.6ｇに上がり一定化する。濃度は浸漬当初99％である。その後木製品より水分流出のため約２週間後より１ヶ月半頃まで97％に下がる。しかしその後上がり３ヶ月後に98％で一定化し始める。これらより考えると重量、濃度が３ケ月後に一定化し始めることよりこの頃が含浸完了の時期と考えられる。

2．その他の木製品

①漆器

総出土量は63点である。

来年度より処理予定であるが実験的にアルコールキシレン樹脂法により処理を試みた。まず脱水処理はメタノール20％浸漬より徐々に濃度を上げ100％浸漬まで行ないさらに徐々にキシレンに置換し最後にパラロイドＢ72のキシレン溶液に浸漬させ含浸、強化するものである。出来上がりはやや光沢をもつが、比較的強度があり漆皮膜の剥離もあまりみられず良好な状態である。

3．鉄製品

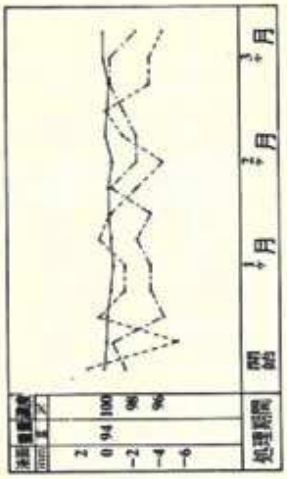
総出土量は約2900点である。今年度は400点の処理を行なった。処理は昨年と同じく合成樹脂減圧含浸である。今後の問題点として鍋の他の鉄製品に比し劣化が著しく、錆除去後シリカゲルを入れ密封して２～３ヶ月で粉状に崩れてくるものが多く、材質、製法的なことが起因していると思われ、早急な処理の必要性を痛感した。

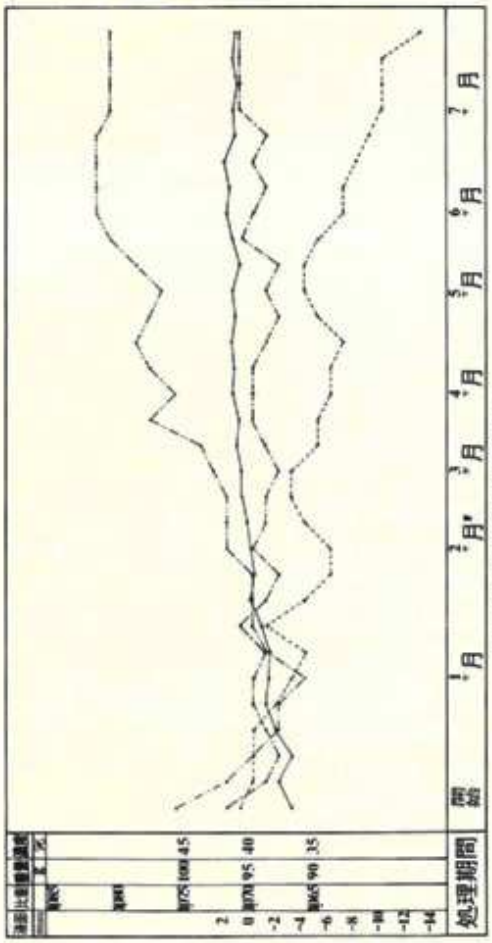
4．来年度の予定

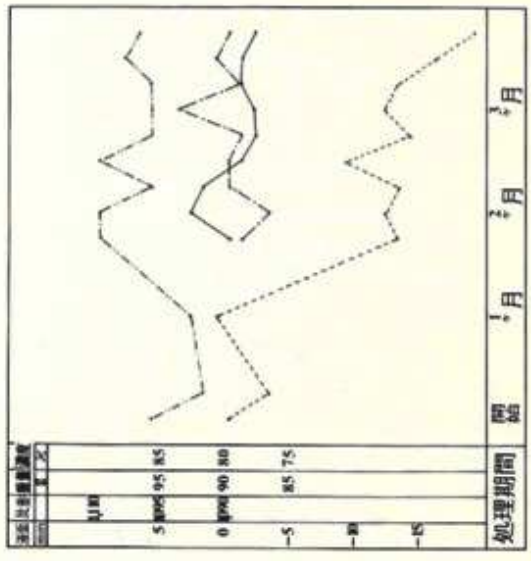
木製品は80点をＰＥＧ含浸により処理を行なう。また漆器は30点をアルコール・キシレン樹脂法により処理を行う。鉄製品は今年度同様400点の処理を合成樹脂減圧含浸により行なう予定である。

北海道開拓記念館三野紀雄氏、小林幸雄氏には多大なる御指導を賜わった。文末ではあるが深く感謝の意を表します。

（斉藤）







第64図　木製品保存処理推移グラフ

Ⅵ　上之国勝山館跡出土鍛冶関係遺物の金属学的調査

大澤正己

1　概要

遺跡は桧山郡上ノ国町字勝山390番地・他に所在する。中世に比定される旧沢地（27K２・７地区とその周辺）出土の製鉄関係遺物のうち、鉄滓・カスガイ・鉄鍋破片らの調査依頼を上ノ国町教育委員会より要請された。そこで各遺物について、光学顕微鏡組織、ＥＰＭＡ（Electron Probe Micro Analyzer）及び化学分折らで鉱物組成や化学組成を調査し、その結果にもとずいて遺跡の性格を明らかにしたので若干の考察を加えて報告する。調査結果は次の通りである。

〈1〉　鉄滓は２種類の鍛冶滓である。１つは素材の成分調整の加熱時に生成された精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）であり、他は鉄器製作時、鉄素材を鍛打加工するための加熱時に鍛冶炉内で生成した鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓または加工鍛冶滓ともいう）である。両者の鉱物組成は、鍛冶滓特有晶癖であるヴスタイト（Wüstite: FeO）＋フェアライト（Fayalite: $2FeO \cdot SiO_2$）を基本とする。化学組成は、全鉄分（Total Fe）が高目で造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）が少なく、また二酸化チタン（TiO_2）も低目傾向で、これも鍛冶滓の特徴を現わす。なお、精錬鍛冶滓の方は、鉄と滓の分離を促進させる添加物（溶剤）の使用が考えられた。これの化学組成は、全鉄分が低目、造滓成分が高目傾向にあり、鉱物組成にモノカルシウム・フェライト（Monocalcium ferrite: $CaO \cdot Fe_2O_3$）が認められる。一方、鍛錬鍛冶滓を形成させた素材は、鉱石系と砂鉄系の二者の存在が明らかになった。これら鍛冶滓の大半は、鍛冶炉の炉底に排出堆積されるので外観上椀形状となる。このため、通称椀形鍛冶滓と呼ばれている。

〈2〉　鉄製品のカスガイは、炭素（C）含有量からみて半軟鋼（0.28％C）に分類できる。カスガイの尖頭部は滲炭処理が施され、歪とりの焼なましも十分で高度な鍛冶技術といえる。素材の原料は、化学成分に二酸化チタン（TiO_2）をはじめ燐（P）銅（Cu）硫黄（S）らが低目なので、鉱石系の赤鉄鉱が想定される。これはＥＰＭＡによる非金属介在物（鉄の製造過程で金属鉄と分離しきれなかったスラグや耐火物の混じり物）の調査結果からも指摘できる。この製品の製鉄方法は、低温還元の直接製鋼法がとられたと推定できる。

〈3〉　鉄鍋破片は共晶組織の白鋳鉄（White Cast Iron: 鋳物）で、炭素（C）含有量が4.59％であった。化学組成のうち、燐（P）が0.29％、チタン（Ti）0.047％を含有されるので、鉱石系の磁鉄鉱が原料と推定される。製鉄法は高温還元法である。

当遺跡において、鉄鍋破片が大量に出土するのは、加熱酸化によって脱炭し（たたら用語の下げ法）、鉄器鍛造加工の素材にあてたと考えられる。

〈4〉　上之国勝山館における遺跡（鉄生産）の性格は、鉄生産工程第１次の製錬作業ではなくて、それ以降の鍛冶作業と結論づけられる。すなわち、鉄鍋破片を加熱酸化脱炭して鍛造素材とし、各種小型鉄器のカスガイをはじめとして釘、鏃、刀子等を鍛造加工したものと推定される。この時点で、生成排出されたものが〈1〉で述べた鍛錬鍛冶滓である。上ノ国町では鉄鉱石や砂鉄らの鉄資源は賦存するが[註1,2]、今回の調査鉄滓には第１次滓の製錬滓は存在せず、製錬（Smelting）を裏付けるまでのデータを得ることができなかった。

鉄鍋破片を大量（鉄鍋の総重量39.3033kg、＋ナベ及びその他を含む量1.509kg）に集積させた背景には、製錬による鉄素材の供給が得られなかった証であって、現状出土品での上ノ国町の中世での鉄製錬は否定的にならざるをえない。しかし、鍛冶加工の素材成分はバラエティに富んでいて、複数以上の鉄生産地からの搬入品と考えられ、鍛冶技術も優れたものであった。それらは鉱石系は赤鉄鉱や磁鉄鉱、また砂鉄系が存在し、製鉄法も低温還元の直接製鋼法（塊錬鉄）から高温還元法の鋳物まであり、これに溶剤添加の痕跡を残すという中世製鉄技術の興隆を物語る試料であった。

2．調査試料

表10に供試試料の履歴を示す。試料は鉄滓８個、鋳鉄酸化物（錆化物）３個、カスガイ１本、鉄鍋破片５点でこれらについて調査を行なった。（表１のUEN18、UEN19は割愛）

3．調査方法

(1) 肉眼観察

(2) 光学顕微鏡組織

検鏡試料は、ベークライト樹脂に埋込み、エメリー研摩紙の#150～#1.000と順を追って研摩し、ダイヤモンド仕上げで被研面を得ている。

(3) X線マイクロアナライザーによる調査

鉄中に含有される非金属介在物から製鉄原料や製造履歴を解明する方法に利用した。X線マイクロアナライザー（Electron Probe Micro Analyzer, 以下ＥＰＭＡと略記）系分析装置の原理は、真空中で試料面に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得る分析法である。〔これが最近ではＣＭＡ（Computeraided X－ray Micro Analyzer, 以下ＣＭＡと略記）という新しい総合状態分析装置が開発された。原理はＥＰＭＡと同じであるが、標準試料とのX線強度の対比から元素定量値をうることができるコンピューター内蔵の新鋭器機である。後述データーで一部記載。〕本報告ではＥＰＭＡとＣＭＡの中間的分析結果の得られるＳＥＭ（Scanning Electron Microscope: 走査型電子顕微鏡）に装置されたエネルギー分散型X線分析のＥＤＡＸ分析により鉄中の非金属介在物の相の同定に利用している。

(4) 化学分析

鉄滓は次の方法による分析である。

重量法……二酸化硅素（SiO_2）

赤外吸収法……炭素（C），硫黄（S）

原子吸光法……全鉄分（Total Fe），酸化アルミニュウム（Al_2O_3），酸化カルシウム（CaO），酸化マグネシウム（MgO），二酸化チタン（TiO_2），酸化クロム（Cr_2O_3）バナジウム（V），銅（Cu）

なお、鋳鉄酸化物、鉄鍋破片及びカスガイらもほぼ上記分析法に準ずる。

(5) ビッカース断面硬度

金属鉄の組織同定のため、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）による硬さの測定を行なった。試験は鏡面琢摩した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもってその荷重を除した商を硬度値としている。

4．調査結果

調査結果のうち、組織写真はPL. 47－52までに光学顕微鏡組織を、PL.53にカスガイに含有される非金属介在物を走査型電子顕微鏡に内蔵したＥＤＡＸ分析で調査した結果を、また表11に鉄滓の分析結果を、表12にカスガイ、鉄鍋破片の化学分析結果を示す。

4－1．鉄滓の調査結果、

外観特徴からグループ分けして述べる。

(1) 椀形鍛冶滓，UEN 1 ,UEN 7 ,UEN11

肉眼観察：3個の鉄滓の外観は、ほぼ共通して円形の椀形状を呈している。これは、鍛冶作業における鉄器製作で、鉄素材を赤熱鍛打するために、鍛冶炉で加熱した時に生成した滓で鍛冶炉炉底に堆積したものである。

各鉄滓の表裏ともに赤褐色を示し、肌はやゝ粗鬆で局部に木炭痕を残しており、裏面はゆるくカーブを描く。UEN11鉄滓の裏面は一部に高熱で青灰色に変色した炉材粘土を付着する。破面は黒褐色で気泡少なく緻密である。

顕微鏡組織：UEN 1 はPL.47の最上段にUEN 7 はPL.53の最下段に、UEN11はPL.49の最下段に示す。鉱物組成はいずれも大量の白色粒状のヴスタイト（Wüstite:FeO）と、灰色盤状結晶もしくは長柱状結晶のフェアライト（Fayalite: 2 FeO・SiO_2）が晶出し、基地には暗黒色ガラス質スラグが存在する。鍛冶滓特有の晶癖である。

化学組成：　表２に示す。いずれも全鉄分（Total Fe）が高く58.3～62.6％で、このうち酸化第１鉄（FeO）が59.3～62.8％，酸化第２鉄（Fe_2O_3）が17.4－25.2％の割合で占められる。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）は逆に低目で14.52～22.18％あり、他の随伴微量元素もおしなべて少な目である。第１次滓の製錬滓に比べると脈石成分らの不純物は少なく、大部分が酸化鉄で占められる成分系の鉄滓は鍛錬鍛冶滓に分類できる。

しかし、この３個の鉄滓で注目すべき成分は二酸化チタン（TiO_2）である。UEN 1 は0.3％と低値に対して，UEN 7 ，UEN11は1.29～1.44％と高目で鍛錬鍛冶滓として両者は明らかに原料素材の相違が現われている。前者の素材原料は鉄鉱石系，後者は砂鉄系と推定されて原料素材の履歴の異なるものが搬入されている。

(2) 楕円3段状椀形鍛冶滓，UEN 2

肉眼観察：横長に伸びて厚みをもつ椀形鍛冶滓である。羽口を両側から挿入し、鉄素材を加熱することにより椀形滓の該品が形成された可能性が大きい。また、3段の重なりがあって、3回の操業を継続したことを物語っている。表裏の色や肌、破面は(1)の鉄滓に準ずるものである。

顕微鏡組織：PL.47の2段目に示す。ヴスタイトが樹枝状に晶出し、その間隙をフェアライトが埋めて、わずかのガラス質スラグが基地となっている。これも鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

化学組成： 表11に示す。全鉄分がやゝ低目の42.9%，造滓成分は増加して38.1%であった。二酸化チタンは低目で0.27%，鉱石系であろう。酸化マンガン（MnO）0.062%、酸化クロム(Cr_2O_3) Nil，バナジウム（V）0.007%，銅（Cu）0.004%と随伴微量元素の大部分は少ないが、硫黄（S）0.124%，五酸化燐（P_2O_5）0.054%と高目である。燐や硫黄の増加は、鍛冶炉で使用される木炭成分からの影響であろう。鍛冶炉で使う木炭性状の検討も重要な課題である。

(3) 不定形小型鍛冶滓 UEN 3

肉眼観察： 外皮は黒色を呈して全体に大きく凹凸を有し、明瞭な木炭痕を残す不定形鉄滓である。破面も黒色で気泡はほとんど発生せず緻密で比重も大きい。

顕微鏡組織： PL.47の3段目に示す。
鉱物組成は、白色一面にヴスタイトが埋めつくし、その粒間のわずかの間隙にフェアライトが存在する。至って鉄分の多い鉄滓と予測がつく。

化学組成： 表11に示す。全鉄分は68%と高目であり，このうち酸化第1鉄が59.5%，酸化第2鉄が31.1%の割合である。造滓成分は極端に少なく8.65%，他の随伴微量元素らもすべて低値である。該品は鍛冶炉の炉壁にほとんど接触しなくて木炭に支えられ、生成したもので椀形鍛冶滓の初期の形成物である。二酸化チタンが0.11%と低値であるので、やはり鉱石系であろう。

(4) ガラス質鉄滓 UEN 4，UEN 5

肉眼観察： UEN 4は表裏ともに灰色粗鬆で軽質なガラス質鉄滓である。裏面は高温で青灰色に変色した炉材粘土を付着する。破面はわずかの漆黒色光沢部が存在し、微気泡が多発する。
UEN 5はカルメラ様のガラス質鉄滓が椀形状に形成されている。表裏は青灰色粗鬆であるが一部に緑白色釉薬状のなめらかな部分も存在する。破面は表層と同色で、5㎜以上の気泡を発している。2個の鉄滓は高温域での生成物である。

顕微鏡組織： UEN 4をPL.47の最下段に、UEN 5をPL.48の最上段に示す。両者とも鉱物組成は漆黒色のガラス質スラグが主体で、鉄酸化物はほとんど存在しないが、UEN 4の局部に白色微小結晶のマグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）が認められる。なおUEN 5の黒色球状部は気泡である。高温域の生成物である。

化学組成： 表11に示す。2つの試料は組成的に大差ないと考えられたのでUEN 5のみ分析を実施した。該品は鉄分が非常に少なく，全鉄分で4.65%であり、その大半はガラス質で造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）として83.01%含有される。この造滓成分のうち、酸化カルシウム（CaO）が11.75%と当遺跡出土鉄滓中で群を抜いて高目であり、何か溶剤（金属鉄と滓の分離をよくする役割りの添加物）の添加を思わせる。また、酸化マグネシウム（MgO）も3.38%と高目で酸化カルシウムに随伴していると考えられる。続いて五酸化燐（P_2O_5）が5.05%と他鉄滓と比べ一桁高い分析値を示している。これらの成分系からみると鍛錬鍛冶滓ではなくて精錬鍛冶滓に分類すべきと考える。江戸期のたたら用語でいうところの大鍛冶滓である。次に随伴微量元素のうち、酸化マンガン（MnO）が0.19%と既述鉄滓より一桁多く、これも精錬鍛冶滓を裏付ける成分で、やはり素材原料は鉱石系の可能性が高い。

(5) いびつ状椀形精錬鍛冶滓 UEN 6

肉眼観察： やゝ横長に伸びた椀形状の鉄滓である。表裏ともに淡灰色に赤褐色の鉄錆をを滲ませ、大気泡が破裂して鉄滓内部を露出さす。粗鬆さは左程強くなく木炭痕が認められる。破面は黒色で気泡少なく緻密質である。

顕微鏡組織：PL.48の2，3段目の2葉の写真で示す。鉱物組成は白色多角状のマグネタイトと、小粒状結晶のヴスタイト，淡灰色長柱状のフェアライトらであるが，一部に灰黒色盤状結晶（3段目写真）が認められる。この結晶はX線回析による組成の同定が終っていないので断定は出来ないが、モノカルシウム・フェアライト（Monocalcium ferrite:CaO・Fe_2O_3）ではないかと考えられる。

これも精錬鍛冶滓の可能性のある組織である。

化学組成：　表11に示す。全鉄分が29.0％と低目で酸化第１鉄27.7％，酸化第２鉄が10.64％の割合である。該品も造滓成分が54.77％と多く，このうち酸化カルシウムが6.30％，酸化マグネシウム2.01％と高目である。顕微鏡組織でチェックした時に鉄分が少なく，モノカルシウムフェライトが認められた様に分析値との対応がついている。次に酸化マンガン0.31％，酸化クロム（Cr_2O_3）0.013％と，UEN５鉄滓を除く他鉄滓より高目で鉱石系原料を素材にした材料の精錬鍛冶滓の成分系を表わしている。

(6)　鋳鉄酸化物　UEN８，UEN９，UEN10

肉眼観察：　各塊とも赤褐色で鉄塊に似た外観であるが，打欠いて破断面を観察すると，４～５㎜厚の板状鉄片である。破面は両表皮側が光沢をもつ黒色錆で中央部は赤褐色錆のサンドイッチ状を呈している。

顕微鏡組織：　PL.49の１～３段目に示す。酸化が進行して金属鉄は残留せず，本来の組織を失しているが，白鋳鉄組織で共晶組成のセメンタイト（Cementite）とパーライト（Pearlite）の痕跡が認められる。鉄鍋破片の錆化が進んだものである。化学組成は錆化が激しく夾雑物による汚染があるので割愛した。鉄鍋破片の詳細はPL.50、51で述べることにする。

(7)　カスガイ　UEN12

肉眼観察：　長さ95㎜，基部の幅と厚みは10×８㎜で片側の尖頭部を欠く鍛造品である。表皮は赤褐色に錆化しているが芯部はしっかりした金属鉄が残存し、強磁性を呈する。

顕微鏡組織：PL.50、51に示す。PL50－aは研磨のままで現われた非金属介在物である。非金属介在物は金属鉄中の混入異物であり，製錬過程で捲き込まれたり、鍛造中に酸化物として混入したりする。この非金属介在物を追求すれば、鉄鋼の製造履歴が或る程度割出せる。PL.50－aに示した非金属介在物の組成は暗灰色部に淡灰色粒状形態が存在する。これはヴスタイト（Wüstite:FeO）であり、低温還元の製錬時や鍛錬加熱時に混入する。また、他の介在物組成として非晶質珪酸塩系が単独存在し、全体に小さく分散した介在物が多く、反復鍛打の跡が伺われる。（詳細はEDAX分析で述べる）該品素材は、低温還元の直接製鋼法にもとづく塊錬鉄と推定される。

PL.50－b，cはピクラル（ピクリン酸アルコール溶液）で腐食（etching）した時に現われた炭化物組織である。bは鍛伸方向（Ｌ方向），cは鍛伸方向に対して直角方向（Ｃ方向）に研磨している。炭化物は白いフェライト（Ferrite）の地に不規則な形状のセメンタイト（Cementite:Fe_3C）が遊離散在する。bの検鏡位置は、尖頭部先端から外れており，炭化物は量的に少なく紐状に伸びている。cは尖頭部に位置し，ここは炭化物がbに比べて多く，滲炭組織となっている。炭化物の量は鋼中炭素量に比例する。そして両者の増加は材質硬化につながる。カスガイは尖頭部が硬化するよう炭素量を増加させ，鉄器としての機能化をはかっている。

PL.51は、ナイタル（硝酸アルコール溶液）で腐食した結晶粒組織を示す。２枚の組織写真は、鍛造方向とその直角方向の断面である。両方向とも尖頭部の結晶粒は滲炭組織で微細化し，内側に入るに従って斉粒化して結晶に大小が生じている。特に鍛伸直角方向断面では尖頭部よりの0.12㎜内側で結晶粒が成長し、0.17㎜では、また斉粒微細化する。0.17㎜点は鍛造の折り曲げた後の重ね鍛えの跡である。

尖頭部の滲炭組織の生成は、カスガイを木炭粉に包んで730℃以上の温度で加熱すると一酸化炭素（CO）ガスが鋼表面に浸入し、炭素が拡散によって内部へと浸透し、表層は内部より炭素量の高い鋼に変化する。こうすると鋼材は、硬度を増し、衝撃抵抗をもった特性の製品となる。滲炭処理の後は徐冷により鍛造の歪を除いて材質の均質化をはかっている。鍛造技術も一定の水準に達している事を裏付ける。

走査型電子顕微鏡による特性Ｘ線像とEDAX分析：　カスガイに含有された非金属介在物の組成を同定した結果について述べる。

PL.53（その１）の二次電子像に示す非金属介在物が、鉄製錬時に完全に分離しきれなかった異物のスラグである。非金属介在物の不定形暗灰色個所は、鉄かんらん石（鉄滓組織で述べたフェアライトと同一成分で２FeO・SiO_2）と非晶質珪酸塩である。非金属介在物を構成する元素は、PL.53（その１）の特性Ｘ線像で判る様に、けい素（Si）アルミニウム（Al）カリウム（K）鉄（Fe）

らに白色輝点が集中している。これらは酸素（O）が化合するので、それぞれが酸化物としてSiO_2－Al_2O_3－K_2O－FeOとなる。PL.53（その2）には、検出元素の強度ピーク及び分析結果を示している。

次に不定形暗灰色部のスラグに共存して淡灰色粒状部分が散見される。PL.53（その3）は、それの分析結果である。鉄（Fe）の特性X線像に認められる様に、白色輝点が淡灰色粒部分に集中しているので鉱物はヴスタイト（FeO）に同定できる。

以上の様に非金属介在物にはチタン（Ti）が、まったく検出されないので鉄製造過程で砂鉄装入がなされなかったと実証され、また燐（P）の検出も認められないので鉄鉱石も磁鉄鉱より赤鉄鉱の可能性が大と推定される。

肉眼観察：　分析結果を表12に示す。全鉄分（Total Fe）として99.6%あるので、金属鉄の分析結果とみなされる。炭素含有量は0.28%で半軟鋼に分類できるが、金属組織でチェックしたセメンタイト量より高目傾向である。分析個所は基部であり、検鏡は尖頭部なので試料間のバラツキも考慮しなければならない。

炭素（C）以外で随伴微量元素はすべて少ない。化学組成から製鉄原料を推定すればチタン（Ti）Nil，バナジウム（V）0.003%で砂鉄原料は否定され、標的（ターゲット）は鉱石系に向き、燐（P）0.025%，銅（Cu）0.012%，硫黄（S）0.003%も低値で磁鉄鉱より赤鉄鉱の可能性が濃厚である。カスガイは、微細な非金属介在物を多く含有するが、鉄の純度は高い材質であった。

ビッカース断面硬度：　カスガイの金属組織の確認目的で硬度測定を行なった。硬度値は基部低炭素域での測定である。PL.50－dはセメンタイトを少量析出している個所の圧痕で、硬度は77.5、PL.50－eはセメンタイトをほとんど析出しない個所で73.5であった。組織と硬度値はよく対応し、鍛造時の歪は焼なましで完全に除去され、結晶粒は斉粒となっている。硬度値は妥当な数値である。

鉄鍋破片　UEN13～UEN17

肉眼観察：　各試料は錆化して黒褐色を呈している。すべて不定形破片（15～50㎜）で厚みが4～6㎜を有し、鉄鍋破片と判別できる。

顕微鏡組織：PL.50の最下段およびPL.52に示す。組織からみた材質はがいずれも白鋳鉄（White cast iron）で白銑ともいう。（破面が銀白色を呈するところから、このような呼び名がある。これに対して別にねずみ銑がある。炭化物が黒鉛となり，破面は灰色を示す。）組織は白色板状結晶がセメンタイト，黒い部分はオーステナイト（Austenite）より変化したパーライト（Pearlite），蜂の巣状の部分はセメンタイトとオーストナイトの共晶のレデブライト（Ledeburite）である。各試料間では炭素（C）含有量にもとずく若干の組織差（亜共晶→＜4.3%C，共晶→4.3%C，過共晶→＞4.3%C）は認められるものの、いずれも白鋳鉄組織であった。

化学組成：　分析試料は、いずれも白鋳鉄であるのでUEN13でもって代表させた。結果を表12に示す。供試材は大半が黒錆化していて全鉄分（Total Fe）が52.2%であった。炭素（C）量は4.59%と高目で過共晶成分である。該品の特質は、燐（P）が0.29%と高目で、かつチタン（Ti）0.047%をわずかながら含有しており、この成分系は磁鉄鉱原料の可能性が考えられる。ニッケル（Ni）クロム（Cr）がNilでほとんど含有されず、既述のカスガイに比較すると母材成分の相違は明らかである。なお珪素（Si）が高目なので炭素量が低下しても白鋳化しやすい成分系である。

5．考察

上之国勝山館跡出土遺物からみた鍛冶作業の復元

(1)　鉄滓からの見解

古代・中世・近世を通じて鉄器製作の作業工程は、大局的にみて大きな差異はない。通常鉄器製作までには次の工程を経ている。①採鉱選鉱，②予備処理，③製錬，④精錬鍛冶，（大鍛冶），⑤鍛錬鍛冶（小鍛冶），⑥鉄製品。①②は原料調達までなので省略するとして，③の製錬とは砂鉄や鉱石らの製鉄原料を木炭でもって還元する一次作業で、この時点で排出される滓を製錬滓と呼ぶ。この製錬滓は上之国勝山館跡からは未検出で、存在しないものと考えられる。

製錬滓の鉱物組成は，マグネタイト（Magnetite:Fe_3O_4）や，チタン（Ti）分の高い砂鉄であればイルミナイト（Ilmenite:FeO・TiO_2）といった鉄ーチタン酸化物が晶出し，化学組成は表11の参考値に示す仮コウキャウヘン鉄滓の様に二酸化チタン（TiO_2）で6.46～7.71%，青森県狐

野遺跡出土滓で36.96%といった数値になり、明らかに鍛冶滓成分とは異なった組成を示す。この様に今回の調査鉄滓で砂鉄製錬滓的組成は存在しなかった。同様に鉱石製錬滓も見出す事が出来なかった[注3]。

次に鍛冶工程の④精錬鍛冶（大鍛冶）滓と⑤鍛錬鍛冶（小鍛冶）滓は存在する。前者の精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）は，製錬で生成された、まだ不純物の多い鉄塊らを再加熱し、成分調整を行なう時に排出される滓であり、UEN 5 とUEN 6 鉄滓がこれに相当する。このUEN 5 とUEN 6 鉄滓は、酸化カルシウム（CaO）が高目の特質をもっている。近世以前の製鉄では、製錬時に鉄と滓の分離をよくするため，石灰石やそれに相当する添加物（例えば潮泥灰→塩のアルカリ成分は脱硫作用と共に溶滓の凝固をおさえる効果がある[注4]）の装入有無が検討されている[注5]。筆者はその大半が砂鉄や鉱石の自媒溶成分（砂鉄でも酸化カルシウム（CaO）を脈石として内蔵している[注6]）と炉材粘土でまかなわれていて、特別の添加物はなかったと考えている。しかし、UEN 5，6 では酸化カルシウム（CaO）が6.30～11.30%と他試料に比べて高値を示すのは、何らかの溶剤添加の影響とみておきたい。また全鉄分（Total Fe）が少なく造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO）が54.77～83.01%と多く、ガラス質成分であるが精錬鍛冶滓に分類できると考える。特にUEN 6 における鉱物組成に，モノカルシウム・フェライト（Monocalcium ferrite:CaO・Fe_2O_3）が検出された事は，中世製鉄を考える上で大きな問題提起となってくる。鉱物同定はX線回析からの検討も必要となり，今後の研究課題としてゆきたい。

小鍛冶の鍛錬鍛冶滓は、原料素材の異なった2種類が存在する。その1つは鉱石系の素材を鍛錬加熱したUEN 1，2，3，の鉄滓であり、残りは砂鉄系のUEN 7，11鉄滓である。後者の砂鉄系は鍛錬鍛冶滓成分として二酸化チタン（TiO_2）が高目で1.29～1.44%含有されている。

以上の様に鉄滓成分からも鉱石系と砂鉄系の素材が使用されている事が予想される。

(2) 鉄器からの見解

カスガイを鍛造した素材は，二酸化チタン（TiO_2）や燐（P）、銅（Cu）、硫黄（S）らが少なく、赤鉄鉱原料と推定される。また製錬は非金属介在物の組成（ヴスタイトを含有）から低温還元による塊錬鉄の鍛造品と予測される。この製錬素材は炉内還元帯が短かいので吸炭時間が短縮され、低炭素鋼となる特質があり、工具や刃物用途に向けるには靱性不足となりがちで材質改善の対策が必要になる。これに対処して、カスガイは、滲炭処理を施し材質強化を計り、かつその後の歪取り焼なましの熱処理も十分に配慮され，高度の鍛造技術を擁していたと推定される。

次に鉄鍋破片である。これは煮焚用の炊事具とみるよりは廃品活用の鉄素材と考えたい。金属組織的には白鋳鉄であり，これを加熱酸化して鉄中炭素を除去すれば鍛造素材となる訳で，50㎜前後の破片が大量に出土するのに意味がある。直接、現地製錬による素材鉄の供給が困難な地域では、鉄鍋破片が鍛造素材として重要視される。他地域においても沖縄県をはじめとして幾つかの類例が挙げられており椀形鍛冶滓と共伴して出土する[注7]（表9参照）。

鍛冶遺跡における鉄鍋破片の存在は、鍛造素材に位置づけられて，その流通経路を追跡すれば，また新たな展開が起ってくると考えられる。

今回調査の鉄鍋破片の成分は，燐（P）が高目で，かつチタン（Ti）を微量含有するので、磁鉄鉱を原料とする鉄素材と考えられる。しかし，この鉄鍋破片を酸化脱炭してどんな鉄器に鍛造されたかまでの追跡調査はできなかった。恐らく刀子や釘といった小型鉄器でなかったかと考えられるが、これも今後の研究課題として残る問題である。

以上の観点を上之国勝山館跡の鍛冶作業に復元すれば第65図の如くなる。

6．まとめ

上之国勝山館跡では、製錬作業はなく、鍛冶加工が主体作業だったと推定される。しかし、搬入された素材は、その製造履歴が多種多様で、複数以上の供給源が存在したものと考えられる。製錬時の製鉄法は、低温直接還元法の塊錬鉄から、高温還元の鋳鉄までありこれらの原料も鉱石は赤鉄鉱、磁鉄鉱から砂鉄系まで確認できた。上之国勝山館跡は中世鍛冶工房跡の作業形態を検討する上で種々の問題を提供してくれる遺跡である。鉱石や砂鉄の産地同定から素材生産地の確認問題も残ったが後日を期したいと考える。(60，2，19)

註

1　北海道立地下資源調査所『上ノ国村の地質』桧山郡上ノ国村　1965

2　北海道立地下資源調査所『江差町の地質』江差町　1962

3　鉱石製錬滓に関する報告に次のものがあるので参照されたい。

大澤正己「野路小野山遺跡出土の製鉄関係遺物調査」『野路小野山遺跡発掘調査概報』滋賀県教育委員会・草津市教育委員会　1984

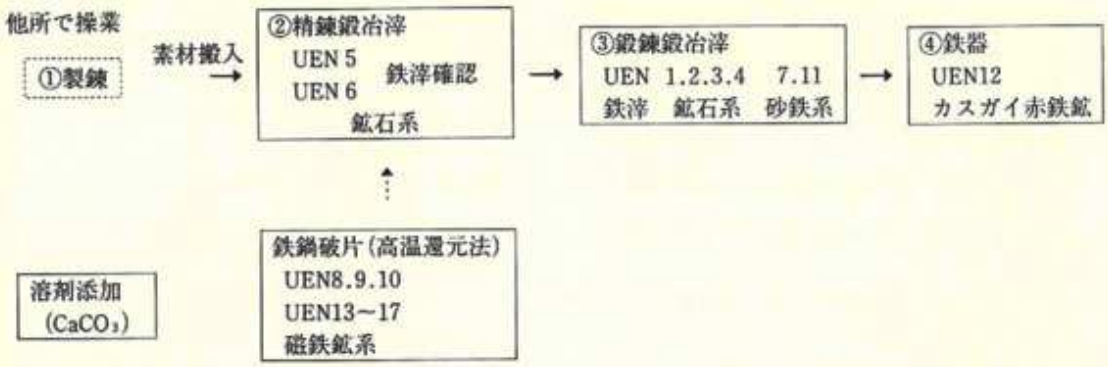
大澤正己「狐塚出土の鉄滓と鉄塊について」『狐野遺跡』（津山市埋蔵文化財発掘調査報告第2集）岡山県津山市教育委員会　1984

4　岸澤正雄「古代中国の炒鋼法とはいかなるものか」『古い製鉄の探求』　自費出版　1984

5　佐々木　稔氏は、炒鋼法鉄器には必らず造滓材を加えているという説をたてておられる。最近の報告には次のものがある。佐々木　稔「月の輪古墳出土鉄器の化学組成再考」『考古学雑誌』No　（本報告は現在考古学雑誌に掲載すべく投稿中のものであるが，佐々木氏より事前に知る機会を得たので引用させていただいた。）佐々木稔・村田朋美・伊藤薫「富の原常盤遺跡出土鉄戈鋳片の金属学的解析結果」『富の原遺跡群調査概報』長崎県大村市教育委員会　1985

6　大澤正己「大河原たたらの製鉄一貫作業に対する考察」『たたら研究会昭和59年度大会発表資料』たたら研究会　1984，12，1

7　北海道では鉄鍋破片を出土する遺跡は他に札前遺跡があり，他県においても幾つか指摘できる。それらをまとめて表で示すと表9のようになる。



第65図　上之国勝山館跡鍛冶作業復元図

表9　鉄鍋破片・鍛冶滓共伴出土地名表

No.	遺跡名	所在地	推定年代	報告書
1	宮国元島	宮古八重島	13～14C	1980.3
2	稲福	大里村	〃	1983
3	我謝	西原村	〃	1984
4	勝連城	勝連町	14～15C	1983
5	カンドウ原	石垣	15～17C	1984
6	フルスト原	石垣	16C	
7	金石城	長崎県対馬	近世	1977
8	花尾城	福岡県北九州市	中世	1979
9	中ノ坊	〃	〃	1976
10	札前	北海道松前町	平安	1985
11	上之国勝山館	〃 桧山郡	中世	1985

表10　上之国勝山館跡出土供試材の履歴及び調査項目

No.	符号	試料	出土位置				供試材の大きさ		調査項目			
			番号	グリッド	層位	出土月日	サイズ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	SEM※	断面硬度	化学組成
1	UEN 1	鍛錬鍛冶滓	364	27K19	I	56.9.26	93×75×22	317	○			○
2	UEN 2	〃	365	〃	〃	〃	145×90×50	617	○			○
3	UEN 3	〃	424	26K	I	56.11.4	70×40×30	105	○			○
4	UEN 4	ガラス質鉄滓	437	27K7	Ⅲb27	57.4.26	50×45×15	15	○			
5	UEN 5	〃	439	〃	〃	57.4.25	90×65×35	100	○			○
6	UEN 6	精錬鍛冶滓	443	27K2·7	I	57—	105×85×25	225	○			○
7	UEN 7	〃	455	〃	〃	57—	85×85×35	400	○			○
8	UEN 8	鋳鉄酸化物	K－3	27J17	茶褐色土	55.7.4	75×50×23	95	○			
9	UEN 9	〃	K-3M10-1	〃	〃	〃	65×50×20	85	○			
10	UEN10	〃	K3M10-3	〃	〃	〃	55×45×10	50	○			
11	UEN11	鍛錬鍛冶滓	4	27K19	表Ⅰ(魚貝層直上)	81.9.26	75×65×25	210	○			○
12	UEN12	カスガイ	3	K3M27K3	表採	57.4.17	95×10×8	40	○	○	○	○
13	UEN13	鉄鍋破片	K3	八M-129	23J16Ⅱ	58.6.3	80×80×5	90	○		○	○
14	UEN14	〃	K3M-6	23J18	I	58.5.20	75×50×5	50	○			
15	UEN15	〃	K3M-2	〃		58.5.20	50×32×5	20	○			
16	UEN16	〃	K3M-170	23K17	I	58.6.25	35×18×4	10	○			
17	UEN17	〃	K3M-20	23J18		58.5.21	27×20×4	5	○			
18	UEN18	〃	?	?			20×12×5	5	○			
19	UEN19	〃	K3M-40	23J3	I	58.5.24	15×17×3	2	○			

※SEM（Scanning Electron Microscope：走査型電子顕微鏡）内臓エネルギー分散分析による非金属介在物の分析

表—11　鉄滓の化学組成

	符号	遺跡名	出土位置	試料分類	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化けい素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分/Total Fe	TiO_2/Total Fe	注
	UEN 1	上之国勝山館跡	旧沢地周辺	鍛錬鍛冶滓	16C中葉	58.3	59.3	17.40	14.92	3.97	2.38	0.91	0.052	0.30	Nil	0.026	0.40	0.06	0.008	Nil	22.18	0.380	0.005	1
	〃 2	〃	〃	〃	〃	42.9	40.4	16.43	28.9	5.43	2.69	1.16	0.062	0.27	Nil	0.124	0.54	0.07	0.007	0.004	38.18	0.890	0.006	〃
	〃 3	〃	〃	〃	〃	68.0	59.5	31.1	5.90	1.61	0.77	0.37	0.023	0.11	Nil	0.020	0.19	0.05	Nil	0.003	8.65	0.127	0.002	〃
	〃 5	〃	〃	精錬鍛冶滓(ガラス質鉄滓)	〃	4.65	3.74	2.49	55.6	12.28	11.75	3.38	0.19	0.55	Nil	0.079	5.05	0.23	0.012	0.004	83.01	17.852	0.118	〃
	〃 6	〃	〃	精錬鍛冶滓	〃	29.0	27.7	10.64	34.5	11.96	6.30	2.01	0.31	0.57	0.015	0.074	0.88	0.12	0.012	0.005	54.77	1.889	0.020	〃
	〃 7	〃	〃	鍛錬鍛冶滓	〃	60.5	62.8	16.71	11.10	3.59	2.17	0.97	0.098	1.44	Nil	0.026	0.34	0.01	0.070	Nil	17.83	0.295	0.024	〃
	〃 11	〃	〃	〃	〃	62.6	57.8	25.2	9.20	2.83	1.71	0.79	0.077	1.29	Nil	0.051	0.27	0.20	0.060	0.003	14.52	0.232	0.021	〃
参考値	H-844	錦町5	SE 32	鍛錬鍛冶滓	10C前後	59.0	58.6	19.15	13.40	4.12	2.70	0.55	0.032	0.30	0.022	0.059	0.31	0.09	0.005	0.003	20.77	0.352	0.005	2
	8u-811	末広	IP-89土壙	〃	平安~鎌倉	65.1	59.6	26.8	6.70	4.23	2.01	0.52	0.036	0.15	Nil	0.004	0.55	0.19	Nil	0.011	13.46	0.207	0.002	3
	仮 A	仮コウキャウヘン	表面採取品	砂鉄製冶滓	近世？	34.79	41.44	3.66	35.56	5.25	1.15	1.81	0.563	6.46	—	0.044	0.121	—	0.178	—	43.77	1.258	0.186	4
	B	〃	〃	〃	〃	40.80	48.07	4.89	25.54	6.53	1.59	2.05	0.629	7.74	—	0.044	0.118	—	0.349	—	35.71	0.875	0.190	
	C	〃	〃	〃	〃	39.51	45.86	5.49	29.58	6.24	1.48	1.89	0.563	7.71	—	0.044	0.103	—	0.287	—	39.19	0.992	0.195	
	A	香深井	〃			35.29	28.85	17.91	35.11	6.16	2.73	(Na_2O) 3.86	—	1.14	—	—	—	—	—	—	47.86	1.356	0.032	5
	B	〃	〃			30.44	12.63	29.47	37.82	7.47	2.01	(Na_2O) 2.56	—	1.33	—	—	—	—	—	—	49.86	1.638	0.044	
	80-811	狐野	1号製鉄炉	砂鉄製錬滓	平安	21.32	20.26	7.97	21.20	6.12	2.30	4.64	0.91	35.96	0.11	0.015	0.034	0.09	0.072	0.006	34.26	1.607	1.687	6

表—12　カスガイ・鉄鍋破片の化学組成

符号	遺跡名	出土位置	試料分類	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	炭素 (C)	珪素 (Si)	マンガン (Mn)	燐 (P)	硫黄 (S)	ニッケル (Ni)	クロム (Cr)	銅 (Cu)	バナジウム (V)	アルミニウム (Al)	チタン (Ti)	マグネシウム (Mg)	カルシウム (Ca)	注
UEN 12	上之国勝山館跡	旧沢地	カスガイ	16C中葉	99.6	0.28	Nil	0.002	0.025	0.003	0.019	0.005	0.012	0.003	0.012	Nil	0.004	0.010	1
〃 13	〃	〃	鉄鍋破片	〃	52.2	4.59	3.00	0.030	0.29	0.070	Nil	Nil	0.003	0.010	1.40	0.047	0.088	0.19	〃

注
1. 大澤正己「上之国勝山館跡出土鉄滓及び鉄器の金属学的調査」『上之国勝山館跡Ⅵ』（昭和59年度発掘調査整備事業概報）上ノ国町教育委員会　1985. 3
2. 大澤正己「錦町5遺跡出土の鉄滓・小石溶着鉄塊・板状ガラス破片らの金属学的調査」『錦町5遺跡』Ⅱ（北海道旭川市埋蔵文化財発掘調査報告書第6輯）旭川市教育委員会　1985
3. 大澤正己「末広遺跡出土鉄滓の分析調査」『末広遺跡における考古学的調査』（下）千歳市教育委員会　1982
4. （イ）高木幸雄「古武井溶鉱炉に関する研究　—幕末期蝦夷地開拓と外国技術—」『北海道教育大人文論究』第27号　昭和42年
（ロ）大橋周治「蝦夷地　—古武井—」『幕末明治製鉄史』アグネ　1975　175頁
5. 石井邦宜「香深井A遺跡出土鉄滓様鉱物の分析」大場利夫・大井晴男編『香深井遺跡』下（オホーツク文化の研究3）東京大学出版会　1981
6. 青森県五所川原市教育委員会『狐野製鉄遺跡』（第2次発掘調査概報）1980
狐野遺跡の1号製鉄炉は平面形が長楕円形を呈し、炉高は約1m程度になる製錬炉である、炉内残留滓を分析した。

Ⅶ　まとめ

昭和52年、勝山館跡が国の史跡に指された頃、〝侍屋敷跡〟は背丈を越える笹藪に蔓草が密集し、容易に踏査の敵うところではなかった。木の幹に木の実取りに興じた若熊の爪跡が、今も残る程の自然？の姿を呈していた。華ノ沢という地番名がこの場所に付されていた事を発見し、〝侍屋敷跡〟の伝承[注1]を傍証する貴重な記録になるかも知れないと密かに胸を躍らせた。

昭和59年、文化庁の強いお勧めを頂戴して、〝侍屋敷跡〟の調査は開始された。

沢底の狭い緩斜面を計画的に地割し、建物を密に配する往時の姿が明らかとなった今、改めて勝山館の盛況を思い驚きを深くするところである。

建物跡の重複関係等から60年前後の存続期間が想定され、陶磁器から1500～1580年前後の実年代を求め得た。

小規模な住居様の掘立柱建物と総柱の倉庫状の建物２棟１対を所有する居住者の姿が想定された。

三か所の鍛錬鍛冶作業場が検出され、〝侍屋敷〟の様子を伺い得た。

建物は床張り或いは土座住いを思わせるものであり間仕切りがされ炉を持つものもある。

〝侍屋敷跡〟は検出された遺構全体を統割する階層の存在を示しており、その居住場所がこの沢地内の未調査部分にあって、本年度調査区と大きな区画でまとまるものであれば、それをこそ〝屋敷〟とすることができるのであろう。２棟１対の単位が占める範囲を〝屋敷〟とするのは少しく無理なようである。

その遺構の広がりは現指定地界を超えて更に南へ伸びる事が確実となり、文化庁が進めている指定区域の拡大計画にも取り入れて戴けるところとなった。

〝侍屋敷〟の居住者は、勝山館の構成者としては下位に位置し、鍛冶作業という特定の分野と強く関係わる人達であった。幾何かの武士的体質[注2]を併せ持つ彼等に、未だ階層差が確定していない勝山館の様相が伺える。

刀狩り、大閤検地を経て、兵農分離、近世封建社会の幕開けが告げられるのが通説と思われるが、農業生産が社会体制を支える基盤とはなり得なかった道南和人社会にあっては、交易品としての一次産品、二次産品を産する階層と武士階層との分離をそれに付合させ得ないであろうか。筆者は北海道に於いて〝中世〟の概念が成立することについて留保した事があるが[注3]この勝山館の状況は少くとも近世以前の、しかし古代とは異った状況を示すものとして良いのではあるまいか。

大澤正己氏から勝山館跡出土鉄滓の成分分析について玉稿を頂戴し、Ⅵ章として掲載させて戴いた。精錬、鍛錬鍛冶の存在が科学的に証明された事は、勝山館跡の内容を検討する大きな力となった。

勝山館跡の古環境を知るべく花粉分析を北海道開拓記念館山田悟郎氏にお願いした。同氏の分析によるとソバの栽培と薬草としてドクダミが持ち込まれている事が解ったという。

従前の発掘調査で炭化米が出土してはいたが、本州からの搬入とすべきものであり、他の穀物栽培等が食料全体に占める割合いに留意して来た。植生調査の目的の一に食用植物、薬用植物の種類、分量の把握を求めてきたところでもあった。花粉分析の結果、これらの一端が物的に証明された事は大きな成果である。

本書に第二編として勝山館跡環境整備実施計画設計報告書を掲載した。

天与の優れた景観と貴重な歴史遺産の活用が提言されている。

ツツジ8,000株余の植栽による勝山館主体部の立体表示は、蝦夷山ツツジの名所である夷王山に毎年６月各地から多くの人々が集い、武田信広等勝山館草創期の人々に思いを馳せる夷王山まつりに一層の彩りを与えることであろう。

又松前藩主、家臣等が夷王山山頂へと歩を進めた旧御代参道路を藤棚で導く設計は、夷王山のツツジが終った頃、上ノ国八幡宮から上国寺の裏山に花房を垂れる野ふじの美事さと相まって、訪れる多くの人々に喜ばれる事であろう。

花粉分析の結果に基いて、湿地性植物園の配置が、用水施設跡付近に設定された事は、史跡公園の多面的活用を企るものとして意義のあることと

おもわれる。

櫓列、建物跡等の整備、表示は北海道には殆んど例がなく、注目されるところであろう。

この実施設計に基き、勝山館跡の環境整備事業が1日も早く進捗を見、広く公開される事を切望するところである。

整備と併せ、勝山館跡の実体を解明をすべく更に調査を重ねて行かなければならない。今迄の調査で得られた遺構、遺物についても充分な検討、分析は未だなされていず課題は山積している。

諸先生、諸先学、各位の御指導を頂戴しながら更に微力を尽したく思う。宜しく御教導の程をお願い申し上げるものである。　（松崎）

註

1　桧山南部の遺跡　1955年　上ノ国村教育委員会

2　鍛冶、製鉄関係者集団の上層者は帯刀が許されたというが、ここでは、そうした特定の地位に立つ人物は想定していない。（窪田蔵郎他）

3　拙稿　1981年

第二編　環境整備実施設計書

第二編目次

Ⅰ　環境整備の基本理念……108
Ⅱ　勝山館跡周辺の自然環境 108
　Ⅱ－1　位置と地勢……108
　Ⅱ－2　気候……108
Ⅲ　勝山館跡周辺の社会環境 110
　Ⅲ－1　上ノ国町の沿革 110
　Ⅲ－2　人口……111
　Ⅲ－3　産業・土地利用 112
　Ⅲ－4　交通条件……112
　Ⅲ－5　文化施設-レクリエーション資源 112
Ⅳ　勝山館跡周辺の植生……113
　Ⅳ－1　勝山館跡周辺の植生現況……113
　　1．はじめに……113
　　2．調査の方法……113
　　3．植生の概況……113
　　(1)林地……113
　　(2)草原地……114
　　4．まとめ……114
　　(1)林地……114
　　(2)ススキ、ササ草原……114
　　(3)寺の沢湿潤地の草地……115
　Ⅳ－2　勝山館周辺の古環境について……133
　　1．試料及び処理方法 133
　　2．分析結果……133
　　3．古環境について 134
　　(1)古植生……134
　　(2)栽培植物について……135
　　4．まとめ……136
Ⅴ　勝山館跡周辺の景観……141
Ⅵ　勝山館跡の概要……147
　Ⅵ－1　歴史的背景……147
　Ⅵ－2　遺跡の概要……147
　　1．館神八幡宮跡 147
　　2．空壕跡……148
　　3．寺の沢内用水施設跡……148
　　4．侍屋敷跡……148
　　5．平坦部建物跡 148
　　6．荒神堂跡……149
　　7．夷王山墳墓群 149
　Ⅵ－3　出土品……149
　　1．陶磁器……149
　　2．金属製品……149
　　3．木製品……149
　　4．骨角器・石製品・その他……149
　Ⅵ－4　勝山館跡アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み……150
Ⅶ　整備実施計画……154
　Ⅶ－1　整備の基本方針 154
　　1．遺跡整備の方針 154
　　2．広域的整備……154
　　3．段階的規制による環境整備……154
　　(1)修景計画区域（史跡指定地） 154
　　(2)緑地保存区域 154
　　(3)景観保全区域 154
　　4．利便施設・園路・植栽……154
　　5．関連施設……155
　　(1)道路……155
　　(2)駐車場……155
　Ⅶ－2　整備実施設計 155
　　1．各遺跡の整備実施設計……155
　　(1)館神八幡宮跡 155
　　(2)空壕跡……161
　　(3)寺の沢内用水施設跡……161
　　(4)侍屋敷跡……161
　　(5)平担部建物跡 165
　　(6)荒神堂跡……165
　　(7)夷王山墳墓群 165
　　2．園路整備実施設計 165
　　3．利便施設整備実施設計……169
　　(1)案内板等……169
　　(2)休憩施設……169
　　4．植栽計画実施設計 178
　Ⅶ－3　勝山館跡アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み整備……180
　　1．アプローチ部分の整備と広場の設置 180
　　2．笹浪家の休憩施設への転用と周辺の整備……180
　Ⅶ－4　資料館……181
　　1．資料館の位置づけ 181
　　2．敷地候補地の条件 181
　Ⅶ－5　利用計画……188
　　1．関係地域の人口 188
　　2．上ノ国町周辺の観光動向……188
　　3．勝山館跡周辺の観光対象としての誘致性……188
　　4．来訪者数の予測 188

(1)日帰り客の想定 189
(2)宿泊客の想定 189
Ⅶ－6 事業のすすめ方 190
1．事業推進の体制づくり……190
2．土地の公有化 190
3．整備の段階計画 190
4．整備事業費の概算 190

表目次

Ⅱ－1 上ノ国町の気象……108
Ⅲ－1 上ノ国町年表……111
Ⅲ－2 世帯及び人口……111
Ⅲ－3 年令階層別人口……112
Ⅲ－4 人口移動……112
Ⅲ－5 土地利用の動向……112
Ⅳ－1 植生調査表1……119
Ⅳ－2 〃 2……121
Ⅳ－3 〃 3……123
Ⅳ－4 〃 4……125
Ⅳ－5 〃 5……127
Ⅳ－6 植生調査表6……127
Ⅳ－7 〃 7……128
Ⅳ－8 〃 8……129
Ⅳ－9 〃 9……130
Ⅳ－10 〃 10……131
Ⅳ－11 〃 11……132
Ⅳ－12 〃 12……132
Ⅳ－13 花粉・胞子の出現数 137
Ⅳ－14 花粉・胞子の出現数 138
Ⅶ－1 敷地候補地の条件 182
Ⅶ－2 必要諸室……185
Ⅶ－3 上ノ国周辺地域の人口 188
Ⅶ－4 道内の観光動向……188
Ⅶ－5 日帰りレクリエーション種類別参加率……189
Ⅶ－6 日帰りレクリエーション発生率の推定……189
Ⅶ－7 各年度の主要整備項目 193
Ⅶ－8 年度別整備事業費概算 194

挿図目次

図Ⅱ－1 勝山館跡位置図 109
Ⅳ－1 花粉ダイヤグラム 139
Ⅴ－1 地形断面位置指定図 145
Ⅴ－2 地形断面……146
Ⅶ－1 広域の整備計画図 156
Ⅶ－2 掘立柱建物跡の表現 157
Ⅶ－3 掘立柱建物跡断面詳細図……157
Ⅶ－4 掘立柱建物跡の表現（館神八幡宮跡）157
Ⅶ－5 掘立柱建物跡の表現 157
Ⅶ－6 礎石建物跡の表現（館神八幡宮跡）158
Ⅶ－7 礎石建物跡断面詳細図……158
Ⅶ－8 土塁と構跡、門跡の表現……159
Ⅶ－9 石積階段及び古道跡の表現……158
Ⅶ－10 構跡の表現……158
Ⅶ－11 寺の沢用水施設跡整備計画図……162
Ⅶ－12 置橋復元整備図 163
Ⅶ－13 溜井戸復元整備図 163
Ⅶ－14 侍屋敷跡建物遺構の表現……164
Ⅶ－15 園路断面図……166
Ⅶ－16 横断トラフ……166
Ⅶ－17 丸太階段……166
Ⅶ－18 木橋……167
Ⅶ－19 藤棚トンネル……168
Ⅶ－20 案内板……170
Ⅶ－21 誘導指示板……171
Ⅶ－22 説明板……171
Ⅶ－23 表示板……171
Ⅶ－24 四阿……172
Ⅶ－25 藤棚……173
Ⅶ－26 縁台……174
Ⅶ－27 スツール……174
Ⅶ－28 水飲台……175
Ⅶ－29 便所……176
Ⅶ－30 クズ入れ……177
Ⅶ－31 灰皿……177
Ⅶ－32 湿性植物園木道 179
Ⅶ－33 笹浪家の休憩施設への転用例……180
Ⅶ－34 資料館の位置づけ 182
Ⅶ－35 資料館敷地候補地 183
Ⅶ－36 ブロックプラン（1階）……186
Ⅶ－37 ブロックプラン（2階）……187
Ⅶ－38 土地所有区分図 191
Ⅶ－39 整備の段階計画 192
Ⅶ－40 各遺跡の主たる整備

年度……195

写真目次

Ⅴ－1　国見山型景観―夷王山から館跡、海を望む 142
Ⅴ－2　館跡全景……142
Ⅴ－3　墳墓群から館跡を望む 142
Ⅴ－4　館神八幡宮跡……143
Ⅴ－5　空壕跡周辺……143
Ⅴ－6　侍屋敷跡―土塁から建物跡を望む……144
Ⅴ－7　勝山館跡アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み……144
Ⅵ－1　館神八幡宮跡の全景 148
Ⅵ－2　館神八幡宮跡・土塁 148
Ⅵ－3　土塁頂部櫓跡……148
Ⅵ－4　空壕跡……149
Ⅵ－5　土葬墓群……149
Ⅵ－6　寺の沢用水施設跡 149
Ⅵ－7　寺の沢用水施設跡 150
Ⅵ－8　侍屋敷跡……150
Ⅵ－9　侍屋敷跡土塁跡……150
Ⅵ－10　平坦部建物跡……151
Ⅵ－11　平坦部建物跡全景 151
Ⅵ－12　荒神堂跡……151
Ⅵ－13　夷王山墳墓群……152
Ⅵ－14　上国寺……152
Ⅵ－15　笹浪家住宅……152
Ⅶ－1　空壕跡整備状況……213

巻末写真図版

PL.6（Ⅳ－1）　赤外線写真① 209
PL.7（Ⅳ－2）　〃　② 211
PL.8（Ⅶ－1）　空壕跡整備状況……213
PL.54（Ⅳ－3）　花粉顕微鏡写真①……260
PL.55（Ⅳ－4）　〃　②……261

附図目次

附図　2．勝山館跡植生図……
3．上ノ国勝山館跡整備計画図……
4．館神八幡宮跡整備計画図……
5．平坦部建物跡植栽計画図……
6．園路整備計画図……
7．勝山館跡アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み整備構想……

Ⅰ　環境整備の基本理念

上之国勝山館跡環境整備事業は、発掘調査によって遺跡の実体を究明し、「史跡公園」として保存し活用しようとするものである。すなわち、北海道中世史の舞台であるこの地区を遺跡の環境整備という方法を通して、広く一般に開放し、一人一人が遺跡の価値を知り、量感に富む歴史事実を確認できる社会教育の場の整備を図ろうとするものである。

また周囲の自然や雄大な景観を生かし、アメニティの高い野外活動のための地域レクリエーションの場の整備を図り、さらに知的好奇心を対象とする史跡観光や道南の歴史文化、海岸周遊観光ネットワークの核として、地域の活性化に役立てていこうとするものである。

これらを通して、地域住民のふるさと意識の高揚をはかり、風土にねざした地域づくりにつなげていくことを目的とするものである。

Ⅱ　勝山館跡周辺の自然環境

Ⅱ－1　位置と地勢

上ノ国町は、渡島半島の南西、桧山支庁管内の最南端にあって北は江差町、南は松前町に隣接し、東は渡島山脈の分水嶺をもって木古内町と境し、西は日本海に面している。総面積546.51㎢を擁し、地勢は概ね山岳地帯でその92％が山林で占められている。

河川は北部に天ノ川、南部に石崎川があり、天ノ川は12の支流が合流し流域には1,000余ヘクタールの平野を形成し、水田等の農用地に利用されている。南の石崎川上流には、マンガン等地下資源が豊富に埋蔵されている。しかも両河川とも上流地帯にうっそうたる林産資源を有している。南部丘陵は八幡牧野をはじめとする放牧適地があって家畜の飼養に利用されている。

海岸線は延長30kmの間に５つの漁港を拠点に漁業が盛んである。集落は主として両河川流域と海岸線に点在的に形成され、その数は24集落に及ぶ。

Ⅱ－2　気候

気象は、四季の変化が比較的少なく気候は温暖である。雨量は一般的に６月～10月にかけて多く、風向は５月～６月にかけて南の風が吹き、冬期間は北西の風が強い。初霜は10月中旬。初雪は11月中旬、根雪は12月中旬である。積雪は山間部で130cm、平野部は40cm。融雪は３月中旬である。

気象　観測地　中須田農協　気象観測所

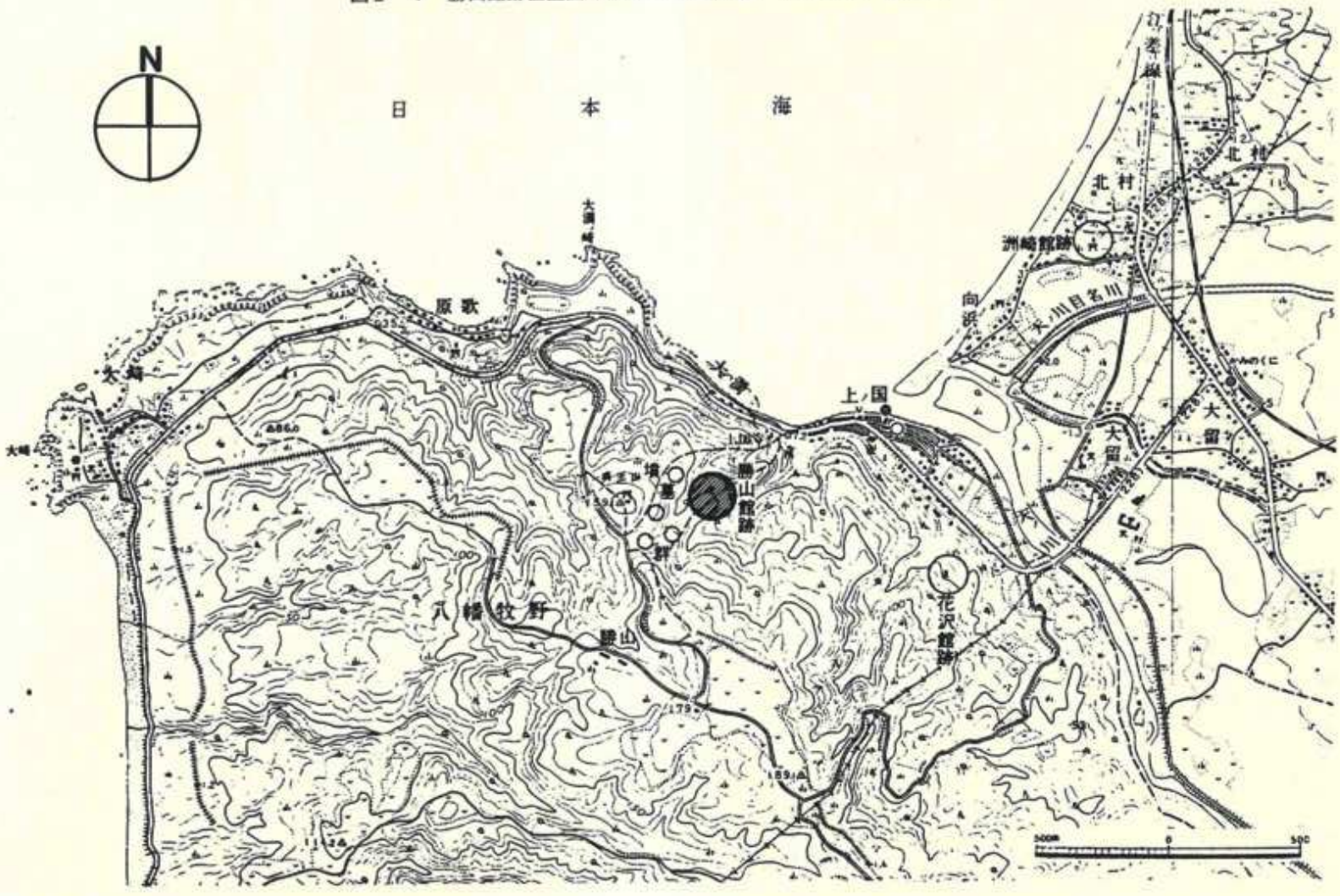
（位置　北緯41°46′　東経110°09′
　期間　昭和48年～昭和52年（60カ月））

降雪期間　10月31日～４月２日　根雪期間　12月３日～３月18日　積雪量1.06m　早霜　10月17日　晩霜　４月20日

表Ⅰ－1　上ノ国町の気象（資料　上ノ国町新総合発展計画　昭和56年）

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計	年平均
気温	平均(℃)	−2.9	−2.4	0.7	7.2	11.7	15.6	20.2	21.8	18.1	11.6	5.1	−0.9	105.8	8.8
	最高(℃)	0.3	1.2	4.0	11.5	16.6	19.1	24.0	25.7	22.5	16.5	9.0	2.0	152.4	12.7
	最低(℃)	−6.3	−6.1	−2.7	2.8	6.8	12.1	16.4	17.8	13.7	6.7	1.1	−3.9	58.4	4.9
湿度(平均%)		53	54	50	55	61	69	71	69	60	54	53	52	701	58
降水量(mm)		113.6	82.6	97.4	89.8	71.0	70.6	95.5	165.2	187.2	130.0	90.4	123.4	1,316.7	109.7
降雨日数		4	4	8	16	15	15	13	17	17	17	17	5	148	12
風方向		北西	北西	南東	南東	南東	南東	南東	南東	南東	南東	北西	北西	−	−

図Ⅱ－1　勝山館跡位置図（地図、国土地理院　1／25000　上ノ国）



Ⅲ　勝山館跡周辺の社会環境

Ⅲ－1　上ノ国町の沿革

地理的に本州に近接し、気候温和で産物の豊富な道南地方に和人が侵入定着するようになったのは、文治5年(1189)源頼朝が奥州藤原泰衡を追討した折、難を逃れて糠部津軽の人がこの地に逃げ渡った時よりと言われている。

その後、津軽北部に勢力を持つ安東氏が蝦夷管領として北海道（蝦夷地）を統治し始めた。

安東氏は、上ノ国、下ノ国の両勢力に分れ争うに至った。西海岸地方の総称であった上ノ国の呼び名が、この町に残り胎動を始めた。

康正2年（1456）和人の横暴に激怒したアイヌ達は大挙して和人の館を攻略した。これが有名なコシャマインの闘いである。

このとき道南地方には12の館があったというが―上ノ国には、厚谷右近将監重政の居館である比石館、蠣崎季繁の居館である花沢館があった―、上磯町茂別館と花沢館を除く10の館は落城した。

これより先、享徳3年（1454）若狭の国より花沢館に寄遇していた武田信広は、和人の将として戦い、勝利をおさめ、和人地帯の統一をはかった。

この戦いのあと、信広は季繁の養女を妻とし、天の川の北に新館を築き（洲崎館）更に寛正3年（1462）毘沙門天王堂（現砂館神社）を創建し、季繁の没後は、勝山館に館神八幡宮を建立した。

永正11年（1514）2代光広が居を大館に移してからは、慶長年間まで守護が置かれ、福山の副城的地位にあった。

永禄5年（1562）4代季広は、始祖信広の偉業を讃えて勝山館北西の夷王山山上に夷王山神社を建立して信広を祀り、毘沙門天王堂、勝山館内館神八幡宮、夷王山神社を上ノ国3社と称し一代一参をするのを例とした。

また各地に点在する諸館をその勢力下においた蠣崎氏は、名目上は安東氏の蝦夷地代官ではあったが、実質は領主的存在であった。天正18年(1590)5代慶広が豊臣秀吉と会い、蝦夷嶋々主として待遇され蠣崎氏はこれから安東氏の隷下を離れ、独立するに至った。越えて慶長4年（1599）慶広は徳川家康に会い、姓を松前と改め、本道における領主としての地位を確立した。

文禄2年（1593）5代慶広は国政の朱印と合せ津軽より大阪までの人夫伝馬の判を豊臣秀吉より貰い、毎年鷹を献上するよう命ぜられた。江戸時代幕末に至るまで鷹は松前藩の幕府への献上品であり、上ノ国には鷹待が置かれ重要な鷹の産地となっていた。慶長元年(1596)には、桧山番所が置かれ、天の川上流の桧が、蝦夷地の産物として本州に送りこまれ、元禄年間まで続いたと言われる。

また一方漁業は、鰊、白子、鱒が豊富にとれ、遠く中国、近江地方に出荷され、換価物として米などの生活必需品が本州より北前船（弁財船）によって移入され住民は大いにうるおった。

その後幕末の政情不安は、北辺の地にも及び明治元年（1868）11月鷲の木に上陸した幕府の脱走軍は、松前を陥し館城に迫り、小砂子大滝でこれを撃んとする松前軍と激突した。

明治2年6月松前藩は藩籍を奉還し館藩と改称した。翌7月には開拓使が設置され、従来の松前藩の政策主体であった漁業を通じての沿岸漁村場所の開発に対して、札幌に本府を置き石狩川流域地帯を中心とする農業を主力とした開発政策が推進されることになった。

この頃漁民の生活の糧である鰊が全く不漁となり、そのため税金の未払や生活苦がつのり漁民一揆が松前、檜山に発生し、開拓使や青森鎮台兵が出兵し鎮撫するということがあった。

農業の見直しがされ、新村久兵衛の共同社による天の川流域の開拓が行われる一方、木ノ子米が北海道三県物産共進会に2等に入賞するなどし、その声価を高めていった。鰊の不漁にともなって営農は次第に本格化した。

その後、昭和11年（1935）に国鉄江差線が開通するとともに、マンガン鉱の開発も進められていった。

昭和42年（1967）町制を施行し、昭和52年(1977)には、勝山、花沢館跡が国の史跡に指定された。

表Ⅲ－1　上ノ国町年表

西　暦	年　号	事　項
1189	文治５年	頼朝が奥州の藤原泰衡を追討し糠部、津軽の人多くこの国に逃げ渡り居住した。
1443	嘉吉３年	小山隆政が渡道し､上ノ国花見岱によった。真言宗（現浄土宗）上国寺が草創されたという。
1454	享徳３年	安東政季が武田信広らと共に渡道し蛎崎季繁の居た花決館によった。
1457	長禄元年	５月、東部の大将コシャマインが大挙して攻め、諸館陥落し（石崎の比石館も陥落）上ノ国花沢館、下ノ国茂別館だけが残った。６月武田信広が奪戦してコシャマインを討ち和人地の危機を救った。８月信広が蛎崎家を継ぎ新居・洲崎館を天の川北方に築き住んだ。
1462	寛正３年	信広が洲崎の館の北に毘沙門天王社を創立した。（今の砂館神社）
1473	文明５年	信広が勝山館に八幡宮を建立した(館神八幡宮と称した。今の上ノ国八幡宮)。
1494	明応３年	信広が勝山館で没し（64歳）夷王山に葬られた。
1719	享保４年	幕命により松前藩から上ノ国八幡牧野産馬２頭が献上された。
1766	明和３年	上ノ国に専念寺（いまの清浄寺）が建てられた。
1858	安政５年	北村に拓いた新村久兵衛の水田が大いに稔った。藩主に献上した。
1878	明治11年	勝山小学校が開校した。
1879	明治13年	上ノ国村に３戸長役場が開庁した。
1902	明治35年	上ノ国村外６ケ村合わせて上ノ国村として二級町村制施行。
1927	昭和２年	上ノ国村森林事務所が松前に移った。役場庁舎新築。
1935	昭和10年	国鉄江差線が湯ノ岱まで開通した。
1936	昭和11年	国鉄江差線が全通した。
1939	昭和14年	今井石崎鉱山（現在閉山)、八田鉱山（現在の中外鉱山）がマンガン鉱開発に着手した。
1956	昭和31年	「上ノ国村史」が発刊された。
1958	昭和33年	天ノ川永久橋が竣功した。
1964	昭和39年	夷王山墳墓群の第２次発掘調査をした。
1967	昭和42年	町制を施行した。
1971	昭和46年	町総合開発計画を策定する。
1977	昭和52年	勝山、花沢館跡国の史跡に指定される。

（資料「上ノ国町新総合発展計画」昭和56年から抜粋）

Ⅲ－2　人口

本町の人口は、昭和35年（国調、以下同じ）の14,674人をピークに以後、年々減少を続けて昭和50年では9,013人と約40％（平均年率3.3％）の減少である。世帯構成人員では昭和35年5.3人から昭和50年3.5人に減少し、核家族化への進行を示している。

年齢構成においても、昭和35年から昭和50年の15年間に若年齢層の激減､高年齢層の増加となり、特に15歳－29歳階層の減少率が56％となっている。この結果再生産年齢人口の相対的減少となり出生数も減少した。反面老人層（65歳以上）が21％増加し、高年齢化社会となっている。人口減少の主な理由は、マンガン鉱山の閉山と規模縮少、これに関連して国鉄自動車営業所が廃止されたことや、地元に労働力を吸収できる産業が乏しく、若年労働力が流出したことがあげられる。

しかし昭和50年以降、人口移動も鈍化の傾向を

表Ⅲ－2　国勢調査年次別世帯及び人口

年　次	世帯数	人　口		
		総　数	男	女
昭和35年	2,744世帯	14,674 人	7,448 人	7,226 人
昭和40年	2,682	12,132	6,059	6,073
昭和45年	2,679	10,275	4,935	5,340
昭和50年	2,549	9,013	4,220	4,793

（資料「上ノ国町新総合発展計画」昭和56年）

示し、住民登録人口では昭和51年9,998人、昭和52年9.890人と年率1.1%のわずかな減少にとどまって安定化の方向にある。

表Ⅲ－3　年齢階層別人口

年次	0～14歳	15～29歳	30～44歳	45～59歳	60～64歳	65歳以上
昭和35年	5,967人	3,358人	2,608人	1,568人	345人	628人
昭和40年	4,520	2,437	2,559	1,574	360	682
昭和45年	3,383	1,876	2,305	1,633	346	732
昭和50年	2,701	1,569	1,977	1,609	395	762

（資料：「上ノ国町新総合発展計画」昭和56年）　（国勢調査）

表Ⅲ－4　人口移動

年度	自然移動			社会移動			移動増減計
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減	
昭和50年度	130人	72人	58人	501人	585人	△ 84人	△ 26人
昭和51年度	123	68	55	469	681	△212	△157
昭和52年度	137	59	78	505	741	△236	△158
昭和53年度	118	75	43	524	685	△161	△118

（資料：「上ノ国町新総合発展計画」昭和56年）　（住民基本台帳）

Ⅲ－3　産業・土地利用

本町の産業構造は、農林漁と鉱業を主体としている。これを産業別就業人口構成でみると、昭和35年では就業者総数6,059人で、そのうち一次産業が62%（農業41%、漁業13%、林業8%）を占め、つづいて二次産業の鉱業就労者が15%であり以上をあわせると77%に達していた。

昭和50年の就業者総数では3,767人昭和35年比38%の減少をみている。産業別でみると一次産業では1,303人昭和35年比約60%（2,471人）減少し、このうち約68%（1,674人）は農業従事者の減少である。

次に二次産業をみると、マンガン鉱業は15%から6.7%と半減したが就業者総数では微増し、相対的に昭和35年の1.6倍にあたる37%となった。さらに三次産業は28%で二次産業同様相対的比率を高めている。

Ⅲ－4　交通条件

中心部は、点在する24の集落から形成され、都市的要素をもつ市街地の形成をなしつつある。他は国道228号線沿いに10集落、主要道々沿いに9集落が散在している。

道路網は、隣接する江差町、松前町を結ぶ国道228号線と木右内町を結ぶ主要道々があり、その延長線にある道南経済の中心都市である函館市と連絡している。また町道は、国道、道々から分岐して集落又は集落間を連絡している。

また交通機関は、函館市を起点とする国鉄江差線と民営バス路線がある。

Ⅲ－5　文化施設―レクリーション資源

社会福祉施設は、老人福祉センター、母と子の家、児童館、健康増進センター、生活改善センター、保育所等が各地域に設置されている。

社会教育施設も郷土館、町民体育館、球技場、陸上競技場、水泳プール、運場広場が設置され、集会施設として福祉センターがある。

観光は、館跡や町並み等の歴史文化財を有する他、夷王山地域を中心とした道立自然公園と自然文化観光地として渡島～桧山～後志にわたる広域観光ルート追分ソーランラインの一拠点を形成している。また湯ノ岱地区には温泉がある。今後の課題としては、自然景観と史跡や歴史的町並みなどの歴史的観光資源を有機的に結びつけ、まつりなどのイベントも盛り込み活性化しつつ、道南の回遊観光ルートとネットワークした観光地形成が必要となっている。

表Ⅲ－5　土地利用の動向

（単位：ヘクタール）

年次	総土地面積	農用地							林野				その他
		総数	耕地					草地	総数	森林	原野		
			耕地計	田	普通畑	樹園地					牧草・採草地	その他	
						果樹園	その他						
昭和35	54,650	1,744.79	1,326.02	625.48	694.48	6.06		418.77	50,142.4	49,993.4	84.3	64.7	2,762.81
40	54,650	1,690.91	1,342.13	713.92	617.65	10.56		348.78	48,829.0	48,633.0	36.0	160.0	4,130.09
45	54,650	1,415.18	1,235.38	812.27	410.47	12.64		179.80	50,156.0	49,450.0	89.0	617.0	3,078.82
50	54,651	1,247.41	1,146.14	769.79	364.80	11.55		101.27	49,714.0	49,115.0	75.4	523.6	3,689.59
同上の割合%	100.00	2.79	2.31	1.34	0.95	0.02		0.48	90.96	90.21	0.13	0.62	6.25

（農林センサス）

Ⅳ　勝山館跡周辺の植生

Ⅳ－1　植生現況

1．はじめに

本調査の対象は、上ノ国夷王山（標高159m）の山頂部から北及び北東にひろがる緩傾斜台地と、二本の沢（寺の沢、宮の沢）からなる地域である。現地調査は昭和59年9月2日から同年10月21日の期間に実施し、そのときに得た資料と赤外線航空写真（上ノ国町教育委員会所有）をもとに以下の植生概況として整理した(PL.6,7)。

2．調査の方法

本調査は、この地域内で行なわれている遺跡、墳墓等の発掘調査地（人為的に裸地化及び牧草やシバ地化されている。）以外の自然林地と草原地を主たる対象として行い、次の資料作成をおこなった。

1）群落ごとの調査区設定による植物組成表と群落断面図等。

2）1）にもとずいた概略植生図。

3）自生植物種のリスト。

1）の表示については自然環境保全基礎調査要綱の植生調査要領（環境庁自然保護局、1983年）にしたがっている。また組成表の被度と群度（D、S）はBraun−Blanquet法をもちいた。

※Braun−Blanquet法

- 被度の記号
  - r、ごくまれに出現。
  - ＋、少数で被度は非常に低い。
  - 1、多数だが被度は低い、あるいは少数だが被度はやや高い。
  - 2、非常に多数（被度$\frac{1}{10}$以下）あるいは被度$\frac{1}{10}$～$\frac{1}{4}$（個体数は任意）。
  - 3、被度$\frac{1}{4}$～$\frac{1}{2}$（個体数は任意）。
  - 4、被度$\frac{1}{2}$～$\frac{3}{4}$（　〃　）。
  - 5、被度$\frac{3}{4}$以上（　〃　）。
- 群度の記号
  - 1、単生する。
  - 2、群状または叢状に生育する。
  - 3、斑状に生育する（小斑あるいはクッション）。
  - 4、小さいコロニーをつくって生育するか、あるいは大斑かじゅうたんを形成する。
  - 5、大群をなす。

3．植生の概況（付図2）

この地の植生を景観的にみると、林地、草原地（ススキ原、ササ原）、湿潤地高茎草本地、に大別することができる。

この地域は道南の植生上におかれる位置からみてブナ林域に属すると考えられるが、低標高地であること、また人間活動の影響を受けてきたことなどによりブナの生態的立地がミズナラに置換されて「ミズナラ−ブナ群落」の過程を経て、さらに近年の積極的な人為的活動（択抜伐採、伐開、その後の放置等）により林相の変化、林域の後退及び草原化（ススキ、ササ草原）がすすみ現在の状態にあるとみることができる。

これは道南の一般的植生や近隣周辺地の植生との対比検討、及び現林地の組成、台地に発達するササ、ススキ草地の現況から推察される。

1）林地

夷王山山頂部から北東にひらける緩傾斜台地（傾度3°～15°）の端から海岸線にむかって、小規模な山襞をいくつかもつ急斜地（海岸段丘斜面）、及びこの地南東部に並列する二つの沢（寺の沢、宮の沢）の斜地には二次林的要素をもつ夏緑広葉樹林地が発達している。またその域には、スギ、トドマツ、カラマツ等の人工林が散在している。

この林地での帯状調査の結果は表Ⅳ−1−4にみられるとうりである。

ア）宮の沢斜面1（侍屋敷跡南側）（表Ⅳ−1）

ミズナラ、シナノキ、アオダモを高木層として林床はササが優占しており、また他の構成種の状態からも「イタヤ−シナノキ群落」のミズナラを主としたタイプの一つとみることができる。

イ）宮の沢斜面2（侍屋敷跡北側）（表Ⅳ−2）

斜面上部は館神八幡宮跡、下部はスギ植林地であることから人為的影響が大きいと考えられるが現在の組成からみて「宮の沢斜面1」と同じタイプとみることができる。林床のササ層が少ないのは人為と斜度の差によると考えられる。

ウ）寺の沢斜面（水飲み場跡上斜面）（表Ⅳ−3）

宮の沢斜面より林冠樹高の低い林地であり、またイタヤカエデの樹令差のある個体が混在している。ここは台地周縁部に近いため海岸段丘斜面の

立地要素も考えられるので、林構成などからみて日本海海岸地にみられる「イタヤ群落」のタイプに近いと考えられる。イタヤ群落は内陸に向うにつれて種数をふやし「イタヤーシナノキ群落」に移行していることが多いが、この地と宮の沢地とを関連させてみたとき、この地域にあっても（現在は裸地、草地等により寸断されているが）この移行が推察される。

エ）頂部台地の北側斜面（表Ⅳ－4）

この地の下部斜面にはスギ植林地が近接しているため等高線に平行した帯状調査区を設置した。林縁に近く、また海洋風のふきつけが恒常であるため矮生の樹木による林地であるが構成からみて他と同じ「イタヤーシナノキ群落」の林縁植生である。ササ層はとくによく発達しているが林縁であり隣接するササ草原とのつながりと考えられる。

2）草原地

この地域での草原は、発掘整備の墳墓群地と現在発掘中の裸地をのぞくと、林地周縁にみられるササ草原、頂部高原台地及び勝山館跡周辺にあるススキ草原、寺の沢湿潤地の高茎草本による草地に大別できる。

ア）ササ草原

ササ草原には限られた条件立地での「ササ自然草原」（高山帯もしくは亜高山帯）と林地後退による代償草原とがあるが、この地域のササ草原は林地の衰退もしくは伐開による代償植生とみられる。またササ草原の成立には風因子が関与し、恒常風（特に海洋風）により林地への回復が妨げられるが、この地の山頂台地周縁部のササ草地は同じ地にある矮生低木叢の存在とその生育状況からみて恒常風の影響も大であると推察される。

イ）ススキ草原（表Ⅳ－5～12）

北海道でのススキ草原は、火入れ跡地、山火跡地、伐採跡地、過放牧の乾燥地等に発達することが多い。またその構成も相観的にはススキが優占するが数多くの低木植物、草本植物が共存しているのが一般的であるが、この地でのススキ草地の構成等をみるとその特徴をよく示しているとみられるため、前記ササ草原と同じく林地後退による代償植生と考えられる。（表Ⅳ－5～10）

しかし勝山館跡地域のススキ草原については低木の混入がなく、高茎草本も種類、量ともに少ないが、これはこの地での人為的活動（伐開等）がごく最近にあったことによる新しい草地であるためと推察される。（表Ⅳ－11、12）

ウ）寺の沢高茎草本地

寺の沢にある水溜跡地から池跡地周辺にかけての湿潤地には、過去から人為の影響が大きかったためか林域が開けて高茎草本、湿潤土を好む草本が種数、量ともにこの地域としては比較的多く生育している。

この地の植生については、季節的に時期がおそく、また部分的に発掘による乱れがあるために群落構成や植相の季節的変遷をつかむことはできなかったが、生育種の主なるものをあげると次のようになる。

エゾアブラガヤ、エゾテンナンショウ、ギョウジャニンニク、オオウバユリ、タチギボウシ、シュロソウ、コバイケイソウ、ノハナショウブ、ムカゴイラクサ、オオイタドリ、エゾノギシギシ、アキノウナギツカミ、オオミゾソバ、オオイヌタデ、アキカラマツ、コンロンソウ、トリアシショウマ、オニシモツケ、ナガボノシロワレモコウ、ヤマブキショウマ、アマニュウ、エゾニュウ、ハナウド、サワアザミ、サワヒヨドリ、フキ、エゾハンゴンソウ、など。

またこの地域には融雪期には集水により池状となる地況もあり今回の調査期の資料では植相の考察には不充分と考える。

4、まとめ

この地域の植生は過去から長期にわたる人間活動の影響を大きくうけながら遷移を経てきた。

1）　林地

ミズナラ、イタヤカエデ、シナノキが優占し、サワシバ、ホオノキ、キタコブシ、ヤマザクラ、アズキナシ、ハウチワカエデ、ヤマモミジ、ミズキ、ハリギリ、アオダモ、などが構成樹木として混在している。低木層としては、ノリウツギ、ツリバナ類が多くまたササ層も発達している。これ等のようすからこの地域の林地は「イタヤカエデーシナノキ群落」とみることができる。また過去には現在の草地、沢地の部分もふくめて全域をしめていたと考えられる。

2）ススキ、ササ草原

林地の伐開もしくは衰退による代償植生であり、とくに夷王山山頂部から台地に広がるススキ、

ササ草地は、海洋性の恒常風により林地への回復が妨げられていると推察される。またススキ草地も現組成、現地の景観からみてササ地へ遷移している途上と考えられる。

3）寺の沢湿潤地の草地

この地域としては高茎草本、湿潤地草本の種数、量の多い地である。また土壌の湿潤度が季節によって異なることが推察され、季節ごとの構成種に差がある（優占種が異なる）植相を示す地であると考えられる。

〔補記〕

その地の植生を適確につかむためには年間をとうした季節ごとの観察と調査が必要である。このたびの調査期は、植物体にとっては季節的に適当でなく、地上部枯死、変形変色、破損等による同定不可の種や早春季の小形草本種の地上部消失による未確認、等もある。今調査資料には、以後の機会に春季から夏季にかけての調査資料を補足する必要があると考える。

宗像和彦
綿路栄一
工藤光信

上ノ国勝山館跡の植物リスト（1984年9月23日～10月21日）

シダ植物（Pteridophyta）
- ハナヤスリ科
  - フユノハナワラビ
- キジノオシダ科
  - ヤマソテツ
- ウラボシ科
  - クジャクシダ
  - イワガネゼンマイ
- シノブ科
  - オオレンシダ
  - シケシダ
- オシダ科
  - オシダ
  - シラネワラビ
  - イヌガンソク
  - クサソテツ
  - コウヤワラビ
  - コタニワタリ
  - リョウメンシダ
  - ジュウモンジシダ
  - エゾイワデンダ
- ワラビ科
  - ワラビ
- シシガシラ科
  - シシガシラ
- ゼンマイ科
  - ゼンマイ
- トクサ科
  - スギナ
  - トクサ
- ヒカゲノカズラ科
  - ヒカゲノカズラ
  - トウゲシバ

種子植物（Spermatophyta）

裸子植物（Gymnospermae）
- イチイ科
  - イチイ
- イヌガヤ科
  - ハイイヌガヤ
- モミ科
  - カラマツ（植林）
  - トドマツ（植林）
- マツ科
  - アカマツ（植林）
  - クロマツ（植林）
- スギ科
  - スギ（植林）
- ヒノキ科
  - ヒノキアスナロ

被子植物（Angiosprmae）

単子葉植物（Monocotyledoneae）
- タケ科
  - チシマザサ
- イネ科
  - カモジグサ
  - ヌカボ
  - オオスズメノテッポウ
  - ハルガヤ
  - コブナグサ
  - ヤマアワ
  - ホッスガヤ
  - カモガヤ
  - ヒロハウシノケグサ
  - オオウシノケグサ
  - シラケガヤ
  - ススキ（ムラサキススキ？）
  - チヂミザサ
  - チカラシバ
  - オオアワガエリ
  - キタヨシ
  - ミゾイチゴツナギ
  - スズメノカタビラ
  - ナガハグサ
  - オオスズメノカタビラ
  - キンエノコロ
  - エノコログサ
  - ハマエノコロ
  - アキメヒシワ
  - シバクサ
- カヤツリグサ科
  - エゾゴウソ（？）
  - ヒメカンスゲ
  - ケヤリスゲ
  - エゾアブラガヤ
  - ヒラギシスゲ
- サトイモ科
  - エゾテンナンショウ
  - ミズバショウ（未確認）
- ツユクサ科
  - ツユクサ
- イグサ科
  - ヒロハノコウガイゼキショウ
- ユリ科
  - ギョウジャニンニク
  - キジカクシ
  - オオウバユリ
  - ツバメオモト
  - ホウチャクソウ
  - チゴユリ
  - カタクリ
  - キバナノアマナ
  - エゾカンゾウ
  - タチギボウシ
  - クルマユリ
  - ヒメヤブラン

マイヅルソウ
クルマバツクバネソウ
ツクバネソウ
ミヤマナルコユリ
アマドコロ
オオアマドコロ
ユキザサ
オオユキザサ
サルトリイバラ
シオデ
タケシマラン
エンレイソウ
Trillium sp.
シュロソウ
コバイケイソウ
アヤメ科
ノハナショウブ
ラン科
ササバギンラン
サイハイラン
エゾスズラン
ツチアケビ
ハクサンチドリ
コケイラン
ノビネチドリ
ネジバナ

双子葉植物 (Dicotyledoneae)

ドクダミ科
ドクダミ
センリョウ科
フタリシズカ
ヒトリシズカ
ヤナギ科
ウラジロヤマナラシ（植）
ヤマナラシ
バッコヤナギ
イヌコリヤナギ
カラフトヤナギ
タチヤナギ
キツネヤナギ
クルミ科
オニグルミ
サワグルミ
カバノキ科
ミヤマハンノキ
ダケカンバ
ウダイカンバ
シラカンバ（植？）
サワシバ
ブナ科
クリ
ブナノキ（未確認）
ミズナラ
カシワ
ニレ科
エゾエノキ
オヒョウニレ
クワ科
ヤマグワ
カラハナソウ
イラクサ科
コアカソ
トキホコリ
アオミズ
ムカゴイラクサ
エゾイラクサ
ヤドリギ科
ヤドリギ
タデ科
イヌタデ
タニソバ
アキノウナギツカミ
オオイヌタデ
オオミゾソバ
ミゾソバ
ニワヤナギ
オオイタドリ
スイバ
ヒメスイバ
ノダイオウ
エゾノギシギシ
ミズヒキグサ
アカザ科
アカザ
コアカザ
ヒユ科
イノコヅチ
アオビユ
イヌビユ
スベリヒユ科
スベリヒユ
ナデシコ科
オオバナノミミナグサ
ミミナグサ
ナンバンハコベ
カワラナデシコ
ウシハコベ
ツメクサ
オオヤマフスマ
コハコベ
カツラ科
カツラ（未確認）
キンポウゲ科
エゾトリカブト
フクジュソウ
キクザキイチリンソウ
ニリンソウ
エゾショウマ（サラシナショウマ）
クサボタン
センニンソウ
ヤマシャクヤク
キツネノボタン
ハイキンポウゲ
アキカラマツ
ミヤオウソウ科
シラネアオイ
サンカヨウ
アケビ科
ミツバアケビ
メギ科
ヒロハノヘビノボラズ
シロバナノイカリソウ
モクレン科
コブシ（キタコブシ）
ホウノキ
クスノキ科
オオバクロモジ
ケシ科
クサノオウ
エゾエンゴサク（未確認）
ムラサキケマン（未確認）
ミヤマキケマン（未確認）
アブラナ科
ヤマハタザオ
ハマハタザオ
ヤマガラシ
ナズナ
タネツケバナ
コンロンソウ
スカシタゴボウ
ベンケイソウ科
キリンソウ
ミツバベンケイソウ
ユキノシタ科
トリアシショウマ
ツルネコノメソウ
ヤマネコノメソウ
ウツギ
エゾアジサイ
ノリウツギ
ツルアジサイ
エゾスグリ
クロクモソウ
イワガラミ
イバラ科
キンミズヒキ
オニシモツケ
オオダイコンソウ
ヒメヘビイチゴ
ミツモトソウ
キジムシロ
ツルキジムシロ

ノイバラ
ハマナス
ナワシロイチゴ
クマイチゴ
ナガボノシロワレモコウ
シモツケ科
ヤマブキショウマ
ナシ科
カマツカ
アズキナシ
ナナカマド
サクラ科
ウワミズザクラ
エゾノウワミズザクラ
ヤマザクラ（エゾヤマザクラ？）
マメ科
ヌスビトハギ
ヤブマメ
エゾヤマハギ
メドハギ
ミヤコグサ
ニセアカシア
クズ
アカツメクサ
シロツメクサ
クサフジ
Vicia sp.（ツルフジバカマ？）
オオバクサフジ
ナンテンハギ
フウロソウ科
ミツバフウロ
ゲンノショウコ
エゾフウロ
カタバミ科
カタバミ
タチカタバミ
ミカン科
サンショウ
タカトウダイ科
ノウルシ
ナツトウダイ
ツゲ科
フッキソウ
ウルシ科
ヌルデ
ツタウルシ
ヤマウルシ
モチノキ科
イヌツゲ
ハイイヌツゲ
ニシキギ科
ツルウメモドキ
ヒロハツリバナ
ツリバナ
ツルマサキ
コマユミ
ニシキギ
ミツバウツギ科
ミツバウツギ
カエデ科
ハウチワカエデ
イタヤカエデ
ヤマモミジ
トチノキ科
トチノキ
ツリフネソウ科
キツリフネ
ツリフネソウ
クロウメモドキ科
クロウメモドキ
ブドウ科
ノブドウ
ヤマブドウ
シナノキ科
シナノキ
オオシナノキ
アオイ科
ムクゲ（植）
マタタビ科
サルナシ（コクワ）
ミヤママタタビ
オトギリソウ科
オトギリソウ
スミレ科
タチツボスミレ
スミレ
スミレサイシン
ツボスミレ（ニョイスミレ）
ジンチョウゲ科
オニシバリ
カラスシキミ
グミ科
アキグミ
ミソハギ科
エゾミソハギ
ウリノキ科
ウリノキ
アカバナ科
タニタデ
ミズタマソウ
アカバナ
マツヨイグサ
ウコギ科
オニウコギ
ウド
タラノキ
ハリギリ
セリ科
アマニュウ
エゾニュウ
コシャク
ホタルサイコ
イブキボウフウ
ミツバゼリ
ハナウド
チドメグサ（オオチドメ？）
サワゼリ
ヤブニンジン
オオカサモチ
オニミツバ（ウマノミツバ）
ヤブジラミ
ミズキ科
ヒメアオキ
ミズキ
ハナイカダ科
ハナイカダ
リョウブ科
リョウブ
ツツジ科
アクシバ
ヒロハハナヒリノキ
ヤマツツジ
ホツツジ
オオバスノキ
サクラソウ科
オカトラノオ
コナスビ
クサレダマ
エゴノキ科
ハクウンボク
モクセイ科
ヤチダモ
アオダモ
イボタノキ
リンドウ科
ツルリンドウ
ハナイカリ
センブリ
ガガイモ科
イケマ
ガガイモ
ヒルガオ科
コヒルガオ
ネナシカズラ
ムラサキ科
ホタルカズラ
タチカメバソウ
クマツヅラ科
ムラサキシキブ
クサギ

シソ科
カワミドリ
ニシキゴロモ
ヤマハッカ
ウツボグサ
クルマバナ
イヌトウバナ
ナギナタコウジュ
オドリコソウ
エゾシロネ
カキドウシ
イヌゴマ
ナス科
イヌホウズキ
ゴマノハグサ科
ママコナ
オオミゾホウズキ
キリ（植）
ヒナノウスツボ
オオイヌノフグリ
エゾクガイソウ
ハエドクソウ科
ハエドクソウ
オオバコ科
オオバコ
エゾオオバコ
ヘラオオバコ
アカネ科
クルマバソウ
ヤエムグラ
キバナノカワラマツバ
スイカズラ科
タニウツギ
キンギンボク
エゾニワトコ
アラゲガマズミ
ムシカリ（オオカメノキ）
カンボク
オミナエシ科
オミナエシ
オトコエシ
ウリ科
アマチャヅル
キカラスウリ
キキョウ科
ツリガネニンジン
キク科
エゾノコギリソウ
ノブキ
ブタクサ
ヤマハハコ
カワラハハコ
ヤマヨモギ
オトコヨモギ
イヌヨモギ
ノコンギク
エゾゴマナ
シラヤマギク
ミミコウモリ
モミジガサ
ヨブスマソウ
ヤブタバコ
エゾノキツネアザミ
マルバヒレアザミ
オオノアザミ
サワアザミ
オニタビラコ
ヒメジョオン
ヒメムカシヨモギ
ヒヨドリバナ
サワヒヨドリバナ
センボンヤリ
キクイモ
ブタナ（タンポポモドキ）
エゾオグルマ
カセンソウ
ニガナ
ヂシバリ
アキノノゲシ
ヤマニガナ
エゾタカラコウ（トウゲブキ）
ヤクシソウ
フキ（アキタブキ）
コウゾリナ
アラゲハンゴンソウ
ハンゴンソウ(エゾハンゴンソウ)
ノボロギク
メナモミ
アキノキリンソウ
オオアキノキリンソウ
ハチジョウナ
オニノゲシ
オヤマボクチ
セイヨウタンポポ
オナモミ

植物リスト「注識」

1.「未確認」○カツラ，ブナについては対象地以外の近接地での生育は確認しているが、当地域での本調査期には確認できなかった。
○草本については春季の生育種がほとんどであり、近縁地で普遍的であるため春候に生育可能性大としてあげた。

2.「植」 ○栽植とみられるもの
栽植か自生かうたがわしいものには？を付した。

3.「植林」 ○人工林としてあるもの

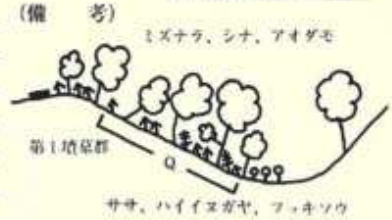
表Ⅳ－1　植　生　調　査　表　1

（地形）山　頂：尾　根：(斜面)：上・中・下・凸・凹・谷・平地
（土壌）ポド性・(褐色)・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他（　　）
（風当）強・中・弱
（日当）(陽)・中陰・陰
（土湿）乾・(適)・湿・過湿

（方位）	S 70 E
（傾斜）	27
（面積）	5 ×35㎡
（出現種数）	26

（階　層）	（優　占　種）	（高さm）	（植被率%）	（胸径cm）	（種数）
T1 高木層	ミズナラ	−16	70%	35cm	5
T2	亜高木層				
S 低木層	アオダモ	−8	20%		4
H 草本層	ササ	−1	100%		19
M コケ層					

（備　考）



'84年10月7日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
T	3·3	ミズナラ	H	5·5	ササ		+·1	ヒトリシズカ
	3·2	シナ		1·2	ハイイヌガヤ		r	ツチアケビ
	1·1	アオダモ		1·2	スゲSP.		r	コクワ
	1·1	コブシ		+·1	アオダモの芽生え		r	ヤマシャクヤク
		ℓイワガラミ		+·1	ノリウツギの芽生え		r	サラシナショウマ
S	2·2	アオダモ		+·1	オオバクロモジ		r	コマユミ
	1·1	ハリギリ		+·1	フッキソウ		r	ヤマブキショウマ
	1·1	クコウメモドキ		+·1	エゾアジサイ		r	ムカゴイラクサ
	1·1	アラゲガマズミ		+·1	クサソテツ		r	アキカラマツ
				+·1	イヌガンソク			

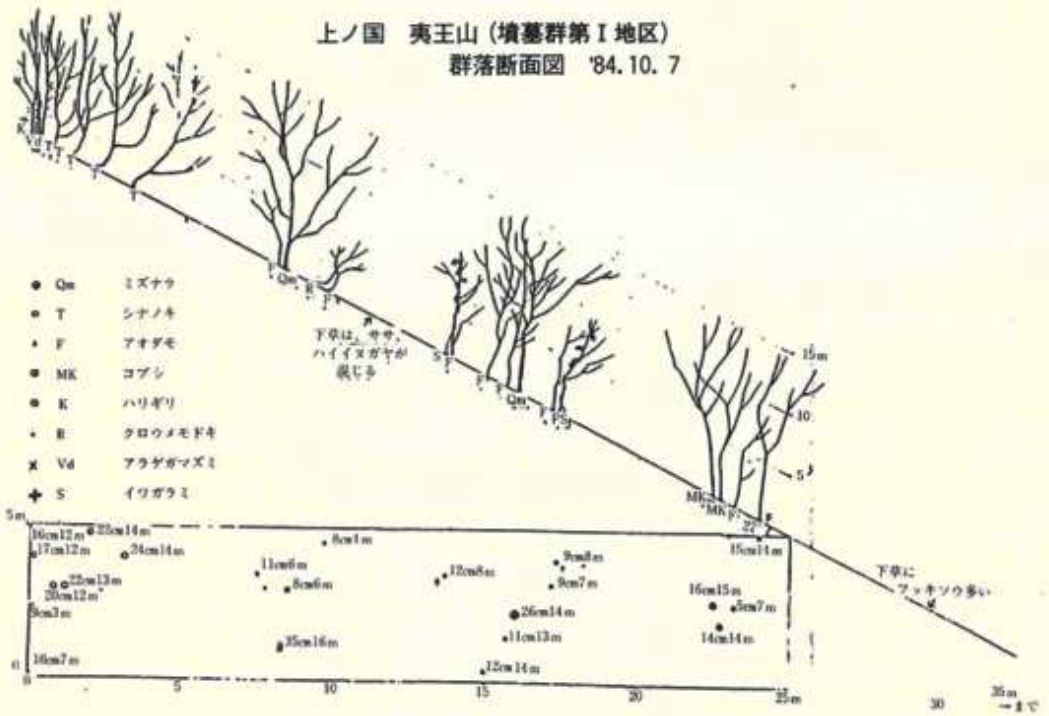
樹高階別本数配分表

植物名 ＼ 樹高(m)	2〜3	3〜4	4〜5	5〜6	6〜7	7〜8	8〜9	9〜10	10〜11	11〜12	12〜13	13〜14	14〜15	15〜16	16〜17	17〜18	18〜19	19〜20	20〜21	21〜22	Total
ミズナラ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	2
シナ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3	1	2	·	·	·	·	·	·	·	6
アオダモ	·	·	1	·	1	2	2	·	·	·	·	2	1	·	·	·	·	·	·	·	9
コブシ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	1	·	·	·	·	·	·	2
ハリギリ	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
クロウメモドキ	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
アラゲガマズミ	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
Total		1	1		2	3	2				3	3	5	1	1						22

胸高直径階別本数配分表

植物名 ＼ 胸高直径(cm)	2〜4	4〜6	6〜8	8〜10	10〜12	12〜14	14〜16	16〜18	18〜20	20〜22	22〜24	24〜26	26〜28	28〜30	30〜32	32〜34	34〜36	36〜38	38〜40	40〜42	Total
ミズナラ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	1	・	・	・	2
シナ	・	・	・	・	・	・	・	2	・	1	2	1	・	・	・	・	・	・	・	・	6
アオダモ	・	1	・	3	2	2	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	9
コブシ	・	・	・	・	・	・	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2
ハリギリ	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
クロウメモドキ	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
アラゲガマズミ	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
Total		1		5	3	2	2	3		1	2	1	1				1				22

上ノ国　夷王山（墳墓群第Ⅰ地区）
群落断面図　'84. 10. 7



表Ⅳ－2　植生調査表 2

(地形) 山頂：尾根：(斜面)：上・中・下・凸・凹・谷・平地	(風当) 強・中・弱	(方位) S 50 E
(土壌) ポド性・(褐森)・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (陽)・中陰・陰	(傾斜) 40
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他(　)	(土湿) 乾・(適)・湿・過湿	(面積) 5×15m²
		(出現種数) 25

(階層)	(優占種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T₁ 高木層	ハリギリ	～16	80%	40cm	2
T₂ 亜高木層	イチイ	～9	40%	46cm	2
S 低木層	ツリバナ	～3			1
H 草本層	ヒメアオキ	～0.5	20%		20
M コケ層					

(備考)

'84年10月7日　調査者 宗像、締路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
T₁	3·2	ハリギリ	H	1·3	ヒメアオキ		r	シオデ
	3·3	イタヤカエデ		1·2	ハイイヌガヤ		r	ツルマサキ
				+·1	ササ		r	チゴユリ
				+·1	コタニワタリ		r	オニウコギ
				+·1	オシダ		r	タケシマラン
T₂	3·2	イチイ		+·1	クジャクシダ		r	オオカメノキ
	2·2	アオダモ		+·1	ヤエムグラ		r	サイハイラン
				r	ヤマソテツ		r	ヨブスマソウ
				r	キツリフネ		r	ムカゴイラクサ
S	+·1	ツリバナ		r	オオバクロモジ		r	エゾニュウ

胸高直径階別本数配分表

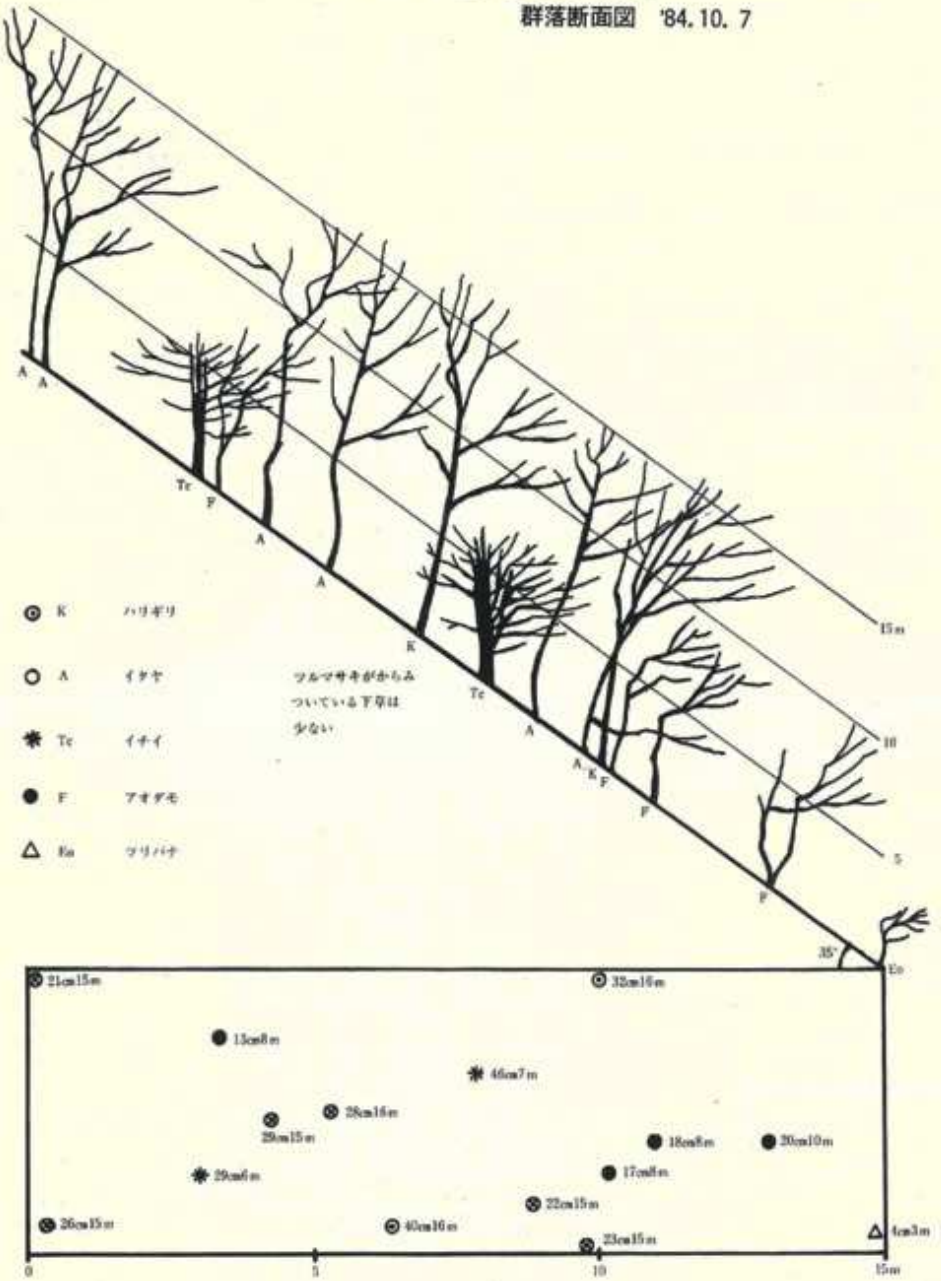
植物名 ＼ 胸高直径(cm)	4〜6	6〜8	8〜10	10〜12	12〜14	14〜16	16〜18	18〜20	20〜22	22〜24	24〜26	26〜28	28〜30	30〜32	32〜34	34〜36	36〜38	38〜40	40〜42	42〜44	44〜46	46〜48	Total
ハリギリ															1				1				2
イタヤカエデ									1	2		1	2										6
イチイ													1									1	2
アオダモ					1		1	1	1														4
ツリバナ	1																						1
Total	1				1		1	1	2	2		1	3		1				1			1	15

樹高階別本数配分表

植物名 ＼ 樹高(m)	2〜3	3〜4	4〜5	5〜6	6〜7	7〜8	8〜9	9〜10	10〜11	11〜12	12〜13	13〜14	14〜15	15〜16	16〜17	17〜18	18〜19	19〜20	20〜21	21〜22	Total
ハリギリ															2						2
イタヤカエデ														5	1						6
イチイ					1	1															2
アオダモ							3		1												4
ツリバナ		1																			1
Total		1			1	1	3		1					5	3						15

上ノ国　勝山館（侍屋敷跡）

群落断面図　'84. 10. 7



表Ⅳ－3　植生調査表 3

(地形) 山 頂：尾 根：斜面：㊤・中・下・凸・凹・谷・平地	(風当) 強 ・ 中 ・ 弱	(方位) S 80 E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) ㊦ ・ 中陰 ・ 陰	(傾斜) 26
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他 (　　)	(土湿) 乾・㊥・湿・過湿	(面積) 5×20㎡
		(出現種数) 21

(階 層)	(優 占 種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T1 高木層	イタヤカエデ	−13	70%	28cm	5
T2 亜高木層					
S 低木層	イタヤカエデ	−6	10%	7cm	5
H 草本層	ササ	−0.4	80%		13
M コケ層					

(備 考)

'84年10月7日　調査者 宗像、綿路、工藤

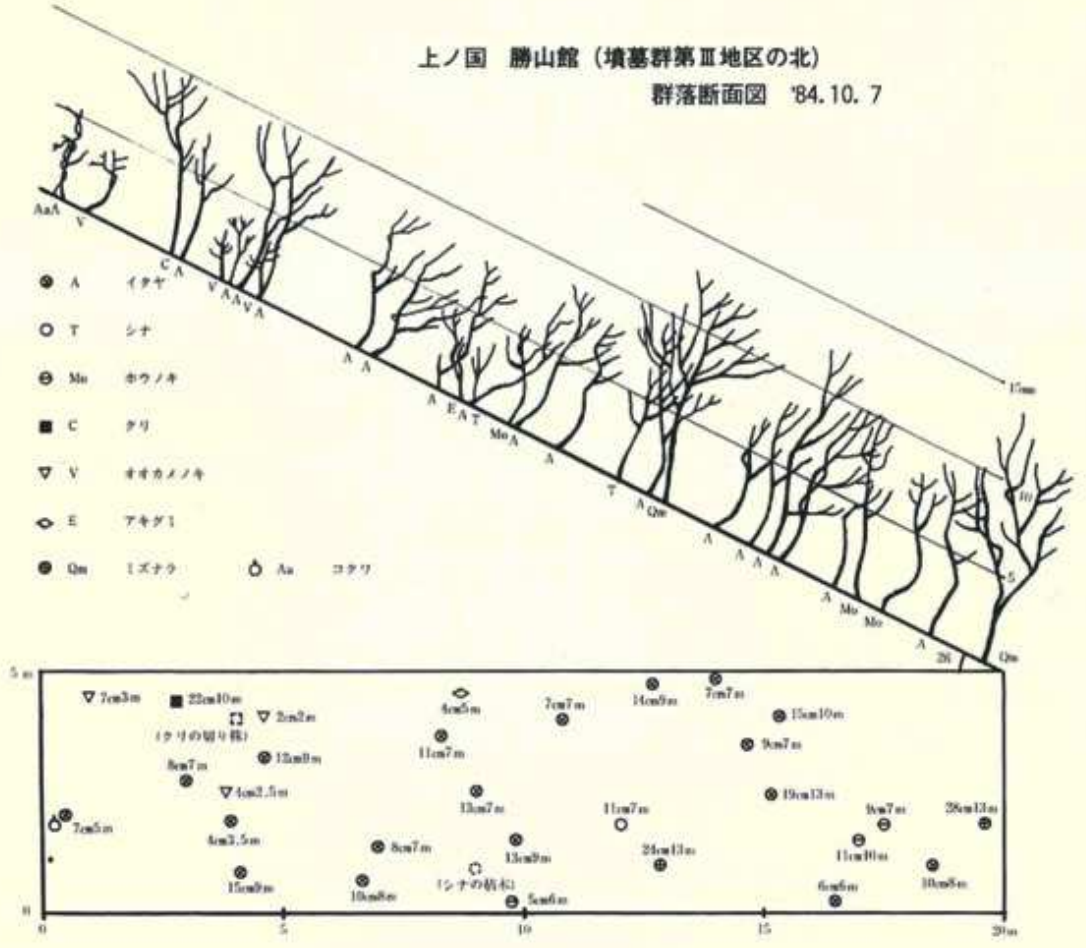
S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
T	3·3	イタヤカエデ	H	4·4	ササ		r	マユミ
	2·2	ミズナラ		1·2	ハイイヌガヤ		r	シラヤマギク
	1·1	クリ		1·2	ツタウルシ		r	イヌツゲ
	1·2	ホウノキ		+·2	スゲSP.			
	1·1	シナ		+·1	ノリウツギの芽生え			
S	1·2	イタヤカエデ		+·1	イワガラミの芽生え			
	1·2	オオカメノキ		+·1	ヒメアオキ			
	1·1	ホウノキ		r	サンショウ			
	+·1	アキグミ		r	オオバクロモジ			
		ℓコクワ		r	コマユミ			

樹高階別本数配分表

植物名 ＼ 樹高(m)	2〜3	3〜4	4〜5	5〜6	6〜7	7〜8	8〜9	9〜10	10〜11	11〜12	12〜13	13〜14	14〜15	15〜16	16〜17	17〜18	18〜19	19〜20	20〜21	21〜22	Total
イタヤカエデ	·	1	·	1	1	7	2	4	1	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	18
ミズナラ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	2	·	·	·	·	·	·	·	·	2
クリ	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
ホウノキ	·	·	·	·	1	1	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
シナ	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
アキグミ	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
オオカメノキ	1	2	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
Total	1	3		2	2	9	2	4	3			3									29

胸高直径階別本数配分表

植物名 ＼ 胸高直径(cm)	2〜4	4〜6	6〜8	8〜10	10〜12	12〜14	14〜16	16〜18	18〜20	20〜22	22〜24	24〜26	26〜28	28〜30	30〜32	32〜34	34〜36	36〜38	38〜40	40〜42	Total
イタヤカエデ	·	1	4	3	3	3	3	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	18
ミズナラ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	1	·	·	·	·	·	·	2
クリ	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
ホウノキ	·	1	·	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·		3
シナ	·	·	·	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
アキグミ	·	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	1
オオカメノキ	1	1	1	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	·	3
Total	1	4	5	4	5	3	3		1		1	1		1							29



表Ⅳ－4　植生調査表 4

(地形) 山頂：尾根：(斜面)：上・中・下・凸・凹・谷・平地	(風当) 強・中・弱	(方位) N90E
(土壌) ポド性・(褐森)・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (陽)・中陰・陰	(傾斜) 30
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他(　)	(土湿) 乾・(適)・湿・過湿	(面積) 5×20m²
		(出現種数) 27

(階層)	(優占種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T₁ 高木層	クリ	～11	60%	30cm	4
T₂ 亜高木層					
S 低木層	イタヤカエデ	～4	20%	5cm	7
H 草本層	ササ		100%		20
M コケ層					

(備考)

'84年10月10日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
T	2·2	クリ	H	5·5	ササ		r	シラネアオイ
	2·2	ミズナラ		1·2	ハイイヌガヤ		r	トリアシショウマ
	2·2	イタヤカエデ		1·2	オオバクロモジ		r	ヤマブドウ
	1·1	ハリギリ		+·1	ツルウメモドキ		r	コクワ
		ℓコクワ		+·2	スゲSP.		r	カマツカの芽生え
				+·1	ツタウルシ			
S	1·2	イタヤカエデ		r	イタヤカエデの芽生え			
	1·2	オオバクロモジ		r	ヨブスマソウ			
	1·2	ヤマツツジ		r	サラシナヒショウマ			
	1·1	ミズナラ		r	ノリウツギの芽生え			
	1·1	ヤマウルシ		r	クサソテツ			
	1·1	ツリバナ		r	シダSP.			
	+·1	ムラサキシキブ		r	ヒトリシズカ			
				r	ユキザサ			
				r	マユミ			

樹高階別本数配分表

植物名 ＼ 樹高(m)	2～3	3～4	4～5	5～6	6～7	7～8	8～9	9～10	10～11	11～12	12～13	13～14	14～15	15～17	17～18	18～19	Total
クリ	・	・	・	・	・	・	・	2	1	3	・	・	・	・	・	・	6(4)
ミズナラ	・	・	1	・	・	1	3	1	1	4	・	・	・	・	・	・	11(9)
イタヤカエデ	1	・	1	・	・	2	2	4	・	・	・	・	・	・	・	・	10(7)
ハリギリ	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	1
オオバクロモジ	15	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	16
ヤマツツジ	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2
ヤマウルシ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
ツリバナ	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
ムラサキシキブ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
Total	20	1	3			3	5	8	2	7							49(42)

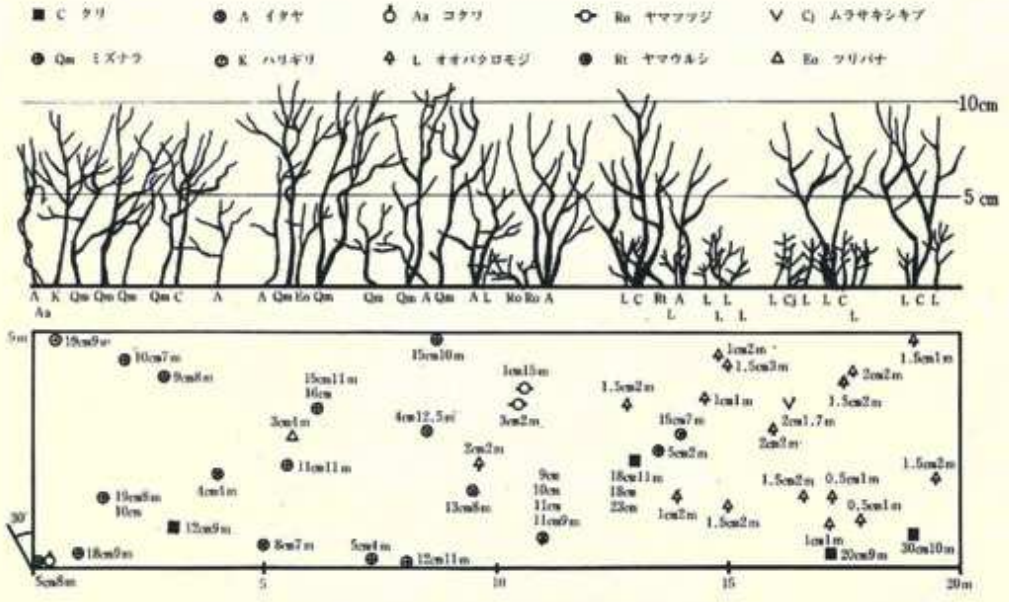
※2m未満は全て2～3mに含めた。
※叢状に生育している樹木が多いため、それぞれを1本として数えた。(　)内は、根元で数えた本数を表す。

胸高直径階別本数配分表

植物名 ＼ 胸高直径(cm)	2〜4	4〜6	6〜8	8〜10	10〜12	12〜14	14〜16	16〜18	18〜20	20〜22	22〜24	24〜26	26〜28	28〜30	30〜32	32〜34	34〜36	Total
クリ	・	・	・	・	・	1	・	・		1	1	・	・	・	1	・	・	6(4)
ミズナラ	・	1	・	1	3	1	2	1	2	・	・	・	・	・	・	・	・	11(9)
イタヤカエデ	・	3	・	2	3	1	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	10(7)
ハリギリ	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	1
オオバクロモジ	16	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	16
ヤマツツジ	2	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	2
ヤマウルシ	・	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
ツリバナ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
ムラサキシキブ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1
Total	20	5		3	6	3	3	1	5	1	1				1			49(42)

※2cm未満は全て2〜4cmに含めた。

上ノ国　勝山館（台地北側のすその林）群落断面図　'84, 10, 10



表Ⅳ－5　植生調査表 5

(地形) 山 頂：尾 根：斜面 ：㊤・中・下・凸・凹・谷・平地　(風当) 強・中・弱　(方位) N10E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・　(日当) 陽・中陰・陰　(傾斜) 12
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他 (　)　(土湿) 乾・適・湿・過湿　(面積) 5×5 m²
(出現種数) 25

(階 層)	(優 占 種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T1 高木層					
T2 亜高木層					
S 低木層	ツルウメモドキ	−0.6	40%	1 cm	4
H 草本層	スゲSP.	−0.3	100%	cm	21
M コケ層					

(備 考)

表王山北斜面 草地①

'84年10月10日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
S	3·3	ツルウメモドキ		+·1	トウゲブキ		r	カセンソウ
	1·2	アラゲガマズミ		+·1	ササ		r	オオノアザミ
	1·2	ハマナス		+·1	ワラビ		r	アマニュウ
	+·1	ナワシロイチゴ		+·1	シラヤマギク		r	アキカラマツ
				+·2	イネ科SP.		r	ノコギリソウ
H	5·5	スゲSP.		+·1	アキノキリンソウ		r	チゴユリ
	1·2	オカトラノオ		r	ツリバナ			
	1·2	エゾヨモギ		r	ツリガネニンジン			
	1·2	ヤマブキショウマ		r	イブキボウフウ			
	1·1	エゾニュウ		r	キバナノカワラマツバ			

表Ⅳ－6　植生調査表 6

(地形) 山 頂：尾 根：斜面 ：㊤・中・下・凸・凹・谷・平地　(風当) 強・中・弱　(方位) N10E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・　(日当) 陽・中陰・陰　(傾斜) 14
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他 (　)　(土湿) 乾・適・湿・過湿　(面積) 5×5m²
(出現種数) 25

(階 層)	(優 占 種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T1 高木層					
T2 亜高木層					
S 低木層	ツルウメモドキ	−0.5	20%		7
	ススキ	−1.8	5%		1
H1 草本層	スゲSP.	−0.3	100%		17
H2					
M コケ層					

(備 考)

表王山北斜面草地②

'84年10月10日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
S	1·2	ツルウメモドキ	H2	5·5	スゲSP.		+·2	イネ科SP.
	1·2	ノブドウ		1·2	オカトラノオ		r	クサレダマ
	1·2	エゾヤマハギ		1·2	エゾヨモギ		r	アマニュウ
	1·2	ハマナス		1·2	アキノキリンソウ		r	エゾフウロ
	+·1	ヒロハヘビノボラズ		1·1	ヤマブキショウマ		r	キバナノカワラマツバ
	+·1	ツリバナ		+·1	シラヤマギク		r	チゴユリ
	r	ナワシロイチゴ		+·1	ツリガネニンジン		r	ウマノミツバ
				+·1	ワラビ			
				+·1	ノコギリソウ			
H	1·2	ススキ		+·1	ナガボノシロワレモコウ			

表Ⅳ－7　植生調査表 7

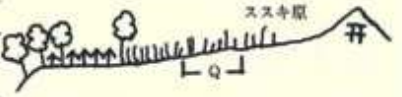
(地形) 山頂：尾根：(斜面)：上・(中)・下・凸・凹・谷・平地
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他(　　)

(風当) (強)・中・弱
(日当) (強)・中陰・陰
(土湿) (乾)・適・湿・過湿

(方位)	60 E
(傾斜)	12
(面積)	5×5 m²
(出現種数)	43

(階層)	(優占種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T₁ 高木層					
T₂ 亜高木層					
S 低木層	アラゲガマズミ	−1	5%	10	
H₁ 草本層	ススキ	−1.5	25%	1	
H₂	スゲSP.		75%	32	
M コケ層					

(備考)



'84年10月10日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
S	1·2	アラゲガマズミ		r	アキカラマツ			
	+·1	イタヤカエデ		r	アマニュウ			
	+·1	オオバクロモジ		r	マイズルソウ			
	+·1	サルトリイバラ		r	ツタウルシ			
	r	ヒロハヘビノボラズ		r	エゾフウロ			
	r	キンギンボク		r	ゲンノショウコ			
	r	イボタ		r	オオヤマフスマ			
	r	ツルウメモドキ		r	オドリコソウ			
	r	コマユミ		r	コウゾリナ			
	r	マユミ		r	ヘビイチゴ			
				r	オオバナノミミナグサ			
				r	オオハチツボスミレ			
H₁	3·2	ススキ		r	コバイケイソウ			
				r	チゴユリ			
				r	アカバナ			
H₂	3·4	スゲSP·		r	エゾコマナ			
	2·2	ササ		r	オオノアザミ			
	2·2	ワラビ						
	1·2	エゾヨモギ						
	+·1	ナガボノシロワレモコウ						
	+·1	シオデ						
	+·1	オカトラノオ						
	+·1	アキノキリンソウ						
	+·1	エゾノコンギク						
	r	ノブドウ						
	r	イヌヨモギ						
	r	キバナノカワラマツバ						
	r	ナワシロイチゴ						
	r	ツルキジムシロ						
	r	シラヤマギク						

表Ⅳ－8　植　生　調　査　表　8

(地形) 山　頂：尾　根：(斜面)：上・(中)・下・凸・凹・谷・平地	(風当) (強)・中・弱	(方位)　N30E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (陽)・中陰・陰	(傾斜)　14
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他(　　)	(土湿) (乾)・適・湿・過湿	(面積)　5×5 m²
		(出現種数)　27

(階　層)	(優　占　種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)	(備　考)
T₁ 高木層						
T₂ 亜高木層						
S 低木層	アラゲガマズミ	~1.2	10%		9	表土山東斜面草地4)
H₁ 草本層	ススキ	~2.3	35%		1	
H₂	ササ	~0.8	65%		17	
M コケ層						

'84年10月10日　調査者 宗像・綿路・工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
S	1·2	アラゲガマズミ		r	キバナノカワラマツバ			
	+·1	ヒロハヘビノボラズ		r	ホタルサイコ			
	+·1	マユミ						
	+·1	ツルウメモドキ						
	+·1	コマユミ						
	r	ツリバナ						
	r	イボタ						
	r	イタヤカエデ						
	r	カマツカ						
H₁	3·3	ススキ						
H₂	3·4	ササ						
	2·2	スゲSP.						
	1·2	ワラビ						
	+·1	オカトラノオ						
	+·1	アキノキリンソウ						
	+·1	シオデ						
	+·1	ノブドウ						
	+·1	シラヤマギク						
	+·1	ナガボノシロワレモコウ						
	r	ヤマブキショウマ						
	r	キジカクシ						
	r	アキカラマツ						
	r	エゾフウロ						
	r	ヤマハハコ						
	r	イネ科SP.						

表Ⅳ－9　植　生　調　査　表　9

(地形) 山　頂：尾　根：(斜面)：上・中・(下)・凸・凹・谷・平地	(風当) 強 ・ (中) ・ 弱	(方位) N50E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (陽) ・ 中陰 ・ 陰	(傾斜) 7
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他(　　)	(土湿) 乾・(湿)・湿・過湿	(面積) 5×5 m²
		(出現種数) 34

(階　層)	(優　占　種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)	(備　考)
T₁ 高木層						
T₂ 亜高木層						
S 低木層	エゾヤマハギ	~1.2	10%		9	上国寺へ下がる尾根に続く草地⑤
H₁ 草本層	ススキ	~2	55%		1	
H₂	エゾヨモギ	~0.8	45%		28	
M コケ層						

'84年10月13日　調査者 宗像・綿路・工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
S	1·2	エゾヤマハギ		r	チゴユリ			
	+·1	ツルウメモドキ		r	クルマバソウ			
	r	ハマナス		r	カセンセウ			
	r	ヒロハヘビノボラズ		r	ワラビ			
	r	カマツカ		r	キジカクシ			
				r	ヤブマメ			
				r	エゾフウロ			
H₁	4·4	ススキ		r	シラヤマギク			
H₂	3·3	エゾヨモギ						
	1·2	イネ科SP.						
	1·2	スゲSP.						
	1·1	フタバハギ						
	+·1	イヌヨモギ						
	+·1	オカトラノオ						
	+·1	ナガボノシロワレモコウ						
	+·1	アキカラマツ						
	+·1	キバナノカワラマツバ						
	+·1	ツルキツムシロ						
	+·1	アキノキリンソウ						
	r	ノコギリソウ						
	r	シュロソウ						
	r	コウゾリナ						
	r	イブキボウフウ						
	r	カモガヤ						
	r	ゲンノショウコ						
	r	ヘビイチゴ						
	r	オオバナノミミナグサ						
	r	クサフジ						

表Ⅳ－10　植　生　調　査　表　10

(地形) 山　頂：尾　根：(斜面)：上・中・(下)・凸・凹・谷・平地	(風当) 強 ・ (中) ・ 弱	(方位)　N60E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (陽) ・ 中陰 ・ 陰	(傾斜)　4
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他(　　)	(土湿) 乾・(適)・湿・過湿	(面積)　5×5 m²
		(出現種数)　25

(階　層)	(優　占　種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T₁ 高木層					
T₂ 亜高木層					
S 低木層	エゾヤマハギ	−1.4	20%		2
H₁ 本層	ススキ	−2	40%		1
H₂	エゾヨモギ	−0.8	60%		22
M コケ層					

(備　考)

草地5より東へ　草地6

'84年10月13日　調査者 宗像・綿路・工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
S	2·2	エゾヤマハギ		r	トウゲブキ			
	+·2	ツルウメモドキ		r	コバイケイソウ			
H₁	3·3	ススキ						
H₂	2·2	エゾヨモギ						
	2·2	フタバハギ						
	1·2	ワラビ						
	1·1	ナガボノシロワレモコウ						
	1·2	スゲSP.						
	1·1	アキノキリンソウ						
	+·1	アキカラマツ						
	+·1	ノコギリソウ						
	+·1	イブキボウフウ						
	+·1	イヌヨモギ						
	+·1	キバナノカワラマツバ						
	r	ツリガネニンジン						
	r	チゴユリ						
	r	ツルキジムシロ						
	r	ゲンノショウコ						
	r	オカトラノオ						
	r	カセンソウ						
	r	ハチジョウナ						
	r	シラヤマギク						
	r	エゾフウロ						

表Ⅳ－11　植生調査表 11

(地形) 山 頂：尾 根：斜 面：上・中・下・凸・凹・谷・(平坦)	(風当) (強)・中・弱	(方位) N80E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (強)・中陰・陰	(傾斜) 3
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他 (　　)	(土湿) (乾)・適・湿・過湿	(面積) 5×5 m²
		(出現種数) 11

(階 層)	(優 占 種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T1 高木層					
T2 亜高木層					
S 低木層					
H 草本層	ススキ	−2.5	100%		11
M コケ層					

(備 考)
勝山館跡草地⑦　ススキ原

'84年10月13日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
H	4·4	ススキ		r	オオノアザミ			
	3·3	エゾヨモギ						
	1·2	エゾニュウ						
	+·1	アマニュウ						
	+·1	アキノキリンソウ						
	r	シラヤマギク						
	r	ヒメジョオン						
	r	フキ						
	r	ノコンギク						
	r	コシャク						

表Ⅳ－12　植生調査表 12

(地形) 山 頂：尾 根：斜 面：上・中・下・凸・凹・谷・(平坦)	(風当) (強)・中・弱	(方位) N60E
(土壌) ポド性・褐森・赤・黄・黄褐森・アンド・グライ・擬グライ・	(日当) (強)・中陰・陰	(傾斜) 3
沼沢・沖積・高湿草・非固岩屑・固岩屑・水面下・その他 (　　)	(土湿) (乾)・適・湿・過湿	(面積) 5×5 m²
		(出現種数) 5

(階 層)	(優 占 種)	(高さm)	(植被率%)	(胸径cm)	(種数)
T1 高木層					
T2 亜高木層					
S 低木層					
H 草本層	ススキ	−2.5	100%		5
M コケ層					

(備 考)
勝山館跡草地⑧

'84年10月13日　調査者 宗像、綿路、工藤

S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.	S	D·S	SPP.
	5·5	ススキ						
	1·1	エゾニュウ						
	+·1	エゾヨモギ						
	r	アキノキリンソウ						
	r	スゲSP.						

Ⅳ－2　勝山館跡の古環境について

(1)　試料及び処理方法

ここで取扱った試料は勝山館跡の発掘調査に際して、25M24と26G 6の2ヶ所で採取されたものである。

25M24は寺の沢の谷筋にあたり井戸跡が発掘されている地点で、井戸跡近くに掘られた1m平方のテストピットの東壁からは5cm間隔で東1～4の試料が、北壁からは10cm間隔で北1～5の試料が採取されている。試料はいずれも青灰色砂をまじえた泥炭質シルトからなる湿地性堆積物で、上部の試料には植物繊維が下部の試料には亜角礫が含まれていた。

また26G 6で採取された試料は火山灰下から発掘された溝状遺構の覆土である。

試料処理にあたっては泥炭質の試料については50gを、26G 6で採取された試料については500gをビーカーにとり、次のように処理した。

アルカリ処理（24時間）→水洗（覆土については3週間）→沈澱法による砂礫の除去→混酸処理→水洗→アルカリ処理→水洗→比重分離→水洗→アセトリシス処理→水洗→時計皿処理→ＨＦ処理→水洗の順に行ない、グリセリンゼリーで封入し各3枚のプレパラートで作成した。
検鏡は位相差装置を併用して400倍で行ない、粒径測定は600倍、写真撮影は400倍で行なった。
(PL.54、55)

計数にあたっては樹木花粉（灌木も含む）が200個以上になるまでに出現した花粉、胞子を無作為に同定し計数した。

各試料からの花粉、胞子の出現数を表Ⅳ－14、15に示すとともに、樹木花粉と主な草本花粉・胞子については総花粉、胞子数を基数とした百分率でそれぞれの出現率を算出して花粉ダイヤグラムに表示した。また、樹木花粉にしめる針葉樹花粉と冷温帯落葉広葉樹の比率および樹木花粉、草本花粉、胞子の出現比率も表示した。

(2)　分析結果

その内訳および母植物に想定される樹木、草本、胞子は下記の通りである。

樹木：*Abies*（モミ属：トドマツ）、*Picea*（トウヒ属：エゾマツ）、*Pinus*（マツ属：ゴヨウマツ）、Cupeessaceae（ひのき科：ヒノキアスナロ）、*Cryptomeria*（スギ属：スギ）、*Salix*（ヤナギ属：ネコヤナギ・オノエヤナギ他）、*Juglans*－*Pterocarya*（クルミ属－サワグルミ属：オニグルミ・サワグルミ）、*Alnus*（ハンノキ属：ケヤマハンノキ・ハンノキ）、*Betula*（カバノキ属：シラカンバ・ウダイカンバ）、*Carpinus*（クマシデ属、サワシバ・アカシデ）、*Corylus*（ハシバミ属：ハシバミ・ツノハシバミ）、*Castanea*（クリ属：クリ）、*Fagus*（ブナ属：ブナ）、*Quercus*（コナラ属：コナラ・ミズナラ・カシワ）、*Celtis*（エノキ属：エゾエノキ）、*Ulmus*（ニレ属：ハルニレ・オヒョウ）、*Morus*（クワ属：ヤマグワ）、*Tercidiphyllum*（カツラ属：カツラ）、*Magnolia*（モクレン属：コブシ・ホウノキ）、*Hydrangea*（アジサイ属：ノリウツギ・ツルアジサイ）、*Elaeagnus*（グミ属：アキグミ）、*Sorbus*（ナナカマド属：アズキナシ・ナナカマド）、*Phellodendron*（キハダ属：キハダ・ヒロハノキハダ）、*Rhus*（ウルシ属：ヌルデ・ツタウルシ）、*Acer*（カエデ属：ハウチワカエデ・イタヤカエデ・クロビイタヤ他）、*Aesculus*（トチノキ属：トチノキ）、*Vitis*（ブドウ属：ヤマブドウ）、*Tilia*（シナノキ属：シナノキ・オオバボダイジュ）、Araliaceae（うこぎ科：ハリギリ・コシアブラ・タラノキ）、*Ligstrum*（イボタノキ属：イボタノキ・ミヤマイボタ）、*Fraxinus*（トネリコ属：ヤチダモ・アオダモ）、*Sambucus*（ニワトコ属：エゾニワトコ）、

草本：Saururaceae（どくだみ科：ドクダミ）、Chloranthaceae（せんりょう科：ヒトリシズカ・フタリシズカ）、Moraceae（くわ科：カナムグラ、カラハナソウ等）、Polygonaceae（たで科：オオイタドリ、ギシギシ・ミゾソバ他）、*Fagopyrum*（ソバ属：ソバ）、Chenopodiaceae（あかざ科：アカザ・シロザ）、Caryophyllacede（なでしこ科：エゾカワラナデシコ・エゾマンテマ・オオヤマフスマ・ハコベ他）、Nymphaceae（すいれん科：ヒツジグサ他）、Ranunculaceae（きんぽうげ科：ルイヨウショウマ・ニリンソウ・アキカラマツ・カラマツソウ他）、Cruciferae（あぶらな科：タネツケバナ・オオバタネツケバナ・ヤマガラシ・ナズナ他）、Saxifragaceae（ゆきのした科：エゾネコノメソウ・ネコノメソウ他）、Rosaceae（ばら科：オニシモツケ・ヤマブキショウマ・ワレモコウ・ダイコンソウ他）、Leguminosae（マメ科：ヌスビトハギ・クサフジ）、Balasaminaceae（つりふね

そう科：キツリフネ・ツリフネソウ)、Hypericaceae（おとぎりそう科：オトギリソウ・ミズオトギリ)、Epilobium（アカバナ属：ヤナギラン)、Haloragaceae（ありのとうぐさ科：アリノトウグサ・フサモ)、*Aralia*（タラノキ属：ウド)、Umbelliferae（せり科：ミツバ・ドクセリ・エゾニコウ他)、Labiatae（しそ科：ヤマハッカ・ヒメジソ・オドリコソウ他)、Scrophulariaceae（ごまのはぐさ科：イヌノフグリ他)、Plantaginaceae（おおばこ科：オオバコ)、Campanulaceae（ききょう科：ツリガネニンジン)、Cichorioideae（たんぽぽ亜科：オオバナニガナ・コウゾリナ・エゾタンポポ他)、Carduoideae（キク亜科：チシマアザミ・ヨブスマソウ・ノコギリソウ・フキ・ヨツバヒヨドリ・ヒヨドリバナ・ヤマハハコ他)、*Artemisia*（ヨモギ属：オオヨモギ・オトコヨモ等)、*Typha*（ガマ属：ガマ)、Potamogetonaceae（ひるむしろ科：ヒルムシロ他)、Alismataceae（おもだか科：ヘラオモダカ・オモダカ)、Gramineae（いね科：ヨシ・ススキ・エノコログサ・ヌマガヤ・ササ他)、Cyperaceae（カヤツリグサ科：クロアブラガヤ・ウキヤガラ・各種スゲ他)、*Lysichiton*（ミズバショウ属：ミズバショウ)、Commelinaceae（つゆくさ科：ツユクサ)、Liliaceae（ユリ科：エンレイソウ・マイズルソウ・ユキザサ・バイケイソウ・アマドコロ他)、Iridaceae（あやめ科：ノハナショウブ・アヤメ・ヒオウギアヤメ)、Orchidaceae（らん科：ネジバナ他)

胞子：Equisetaceae（とくさ科：スギナ・トクサ)、Osmundaceae（ぜんまい科：ゼンマイ・ヤマドリゼンマイ他)、Lycopodiaceae（ひかげのかずら科：ヒカゲノカズラ・ミヤマヒカゲノカズラ他)

形態分類胞子：Monolato type spore（シダ類)、Trilete type spore

全般に樹木のブナ属、コナラ属、クルミ-サワグルミ属、ハンノキ属、クマシデ属、ニレ属、シナノキ属、ヤナギ属、カバノキ属、クワ属、モクレン属、カエデ属、モミ属、マツ属、草本・胞子のヨモギ属、いね科、たで科、あかざ科、せり科、きく科、きんぽうげ科、ばら科、かやつりぐさ科とぜんまい科、シダ類を主とした花粉化石群集が確認された。

25M24のテストピットで採取された試料と26G6の試料で確認された花粉化石集はほぼ共通したものであるが、25M24の試料では出現率は低いものの水生植物花粉が含まれる点でわずかに違いがみられる。

樹木花粉では落葉広葉樹花粉が各試料共に80％と高い出現率を示し、なかでも冷温帯落葉広葉樹のブナ属・コナラ属が優勢である。針葉樹はモミ属、マツ属がそれぞれ10％前後の出現率を示すのみで、他に出現したトウヒ属、ひのき科花粉は1－2％の出現率でしかない。また、北海道には自生分布しないスギ属花粉が1－2％前後出現している。

草本花粉、胞子では、いね科、ヨモギ属、せり科が優勢で、25M19の試料では水性植物のすいれん科・ひるむしろ科・おもだか科・ガマ属と、湿った土地を好むありのとうぐさ科、かやつりぐさ科、あやめ科、ミズバショウ属、ゆきのした科とたで科やせり科の花粉が伴う。26G6ではヨモギ属ときく亜科、たんぽぽ亜科、きんぽうげ科の花粉が多く出現している。

さらに、25M24では北海道には自生分布しないどくだみ科花粉が連続して確認され、両地点では栽培植物のソバ属花粉と畑地雑草のあかざ科花粉、人里雑草のおおばこ科花粉が確認された。25M24の東1～4、北1～5でソバ属は連続して出現している。

(3) 古環境について

(3)－1古植生

各試料で確認された花粉化石群集から、井戸跡が発掘された寺ノ沢の谷筋にはブナ・ミズナラを主とし、これにオニグルミ－サワグルミ、ハルニレ、ハンノキ、サワシバ、シナノキ、ホウノキ、カエデ、ハリギリ、トチノキ、クリ、カバノキ、エゾエノキ、ヤチダモ等をまじえた冷温帯落葉広葉樹林がひろがり、林縁の陽地にはヤマグワ、タラノキ、エゾニワトコが生育していた。トドマツはわずかに点在し冷温帯林と混交していたようであるが、ゴヨウマツが生育分布していたとは考え難い。

林（1969）によるとゴヨウマツの垂直分布は北海道ではおよそ海抜600～800mで、勝山館周囲に分布していたとは考えられない。マツ属は花粉生産量が高く、空気嚢をもつことから周辺の山地か

ら風で飛来したものであろう。

ヒノキアスナロの花粉もわずかではあるが連続して出現している。ヒノキアスナロの北海道における垂直分布は林（(1969)によると海抜100～600mで、周囲に分布していた可能性を否定することはできない。勝山館が構築される以前の試料を得ることができず、構造材としての有用性が高いことから勝山館に居住がはじまった近世に伐採されたと考えることもできる。

スギについても一般的に花粉が増加しているものの、本来北海道に自生した樹木ではなく、また植栽されたと考えるのも早計で、本州方面から飛来したものである。

沢沿いに分布する冷温帯林の林縁および陽あたりのよい場所にはオオヨモギ、オオイタドリ、エゾニユウ、オニシモツケ、カラマツソウ、ウド、クサフジ、チシマアザミ、フキ、ススキ、ササ、シダ類を主とした陽地性のいくつかの群落が繁り、流水域にはヨシ、ミゾソバ、ドクゼリ、アリノトウグサ、トクサが、湿った地域にはクロアブラガヤ、アヤメ・ネコノメソウ、バイケイソウ、ツリフネソウ、キツリフネ、ゼンマイ等が繁っていた。

浮葉植物のエゾヒツジグサ、ヒルムシロと挺水植物のガマ、水中に生育するフサモや池のふちに生育するオモダカ、ヘラオモダカの花粉がほぼ連続して確認され、近くに池かこれらの水生植物の生育が可能な恒常的な水たまりがあったことを知ることができる。

また、井戸跡近くには本道には自生分布しないドクダミ科植物が生育していた他、道端にはオオバコ、タネツケバナ、ツユクサ等の人里雑草も生育していた。

更には近くで農耕も行なわれていたようで、栽培植物のソバ属や畑地雑草のアカザ、ハコベの花粉も確認されている。

寺の沢から離れた平坦地26G 6では25M24に比較してハルニレ、シナノキがいくぶん多く、草本類ではオオヨモギ、コウゾリナ、エゾタンポポ、チシマアザミ、エゾノギシギシ、カラマツソウが多く生育していた。

(3)－2　栽培植物について

a．ドクダミ

25M24の井戸跡近くのピットで採取された試料からドクダミ科の花粉が連続して確認された。北村、村田(1970)によると、日本に自生分布するドクダミ科にはハンゲショウとドクダミの2種類があり、いずれも山野の木陰や庭の湿地をそして低湿地に多い多年草で、東アジア一帯に分布するが北海道には自生分布していないとされている。

検出された花粉はドクダミの特徴をもつものでハンゲショウではない。

木村、木村(1980)によるとドクダミは別名ジュウヤクとも呼ばれ、十種の薬に値するという意味から十薬または重薬の字が通用しているとのことである。花期に地上部を採り直ちに陽乾したものをジュウヤクと呼び、煎剤を化膿・腫瘍・胎毒・蓄膿などの解毒薬として、また利尿薬や緩下剤としても使われている。

これらのことから寺の沢の井戸周囲に生育していたドクダミは薬草として中世にはすでに北海道の日本海沿岸に持ちこまれ植栽されていたと言えよう。

b．ソバ

ソバ属の花粉も25M24に掘られたピットの東および北の両壁で採取された試料と26G 6の溝の土からも検出された。出現率は1％弱と低いが、周囲にソバ属植物が生育していたことを示している。

ソバ属はタデ科に属し日本で栽培されているソバ属にはシヤテクリソバとソバの2種類があるがいずれも栽培種で、日本でその野生種は見つかっていない。シヤチクリソバは昭和のはじめ頃に薬用として薬草園等で栽培されはじめたもので、(長田、1979)それほど一般的に普及してはいない。勝山館跡では畑地雑草のアカザ、ハコベ等も連続して検出されることから、その母植物として普通に栽培されているソバをあげるのが妥当であろう。

ソバは虫媒花で花粉の生産量も少ない。偶然に風で本州方面から飛来したにしても、連続して出現するとは考え難く、すぐ近くにソバを栽培した畑があったと考えるべきである。

中世に本州から渡ってきた人々が食糧自給のため畑を作りソバ栽培を試みたのであろう。

北海道ではこれまでに縄文時代晩期から擦文時代にかけた遺跡からソバの花粉が検出され古代人の手によってソバが栽培されていたことがあきら

かになっている（岡田・山田、1982）。それらのソバと勝山館で栽培されていたソバとの関係は今のところ不明であるが、古代人によって栽培されていた在来のソバが栽培技術とともにひきつがれたのか、渡来してきた和人によって持ちこまれたソバなのか興味深いところである。

勝山館においては中世にはすでにソバを栽培するための畑がつくられ、井戸近くの湿った場所には薬草のドクダミが植えられていたのである。

(4)まとめ

勝山館の発掘調査に際して採取された10点の土壌試料の花粉分析を行った結果、次のことがあきらかとなった。

1．樹木花粉30属2科、草本花粉6属30科、胞子3科、形態分類胞子2種類が検出され、これらの花粉、胞子をもとにした花粉化石群集から、勝山館周囲にはミズナラ－ブナを主とした冷温帯落葉広葉樹からなる渓畔林が形成されていたことがあきらかとなった。

2．寺の沢沿いの林縁や陽当りのよい場所にはオオイタドリ、オオヨモギ、エゾニユウ、フキ、ススキ等を主とした陽地性高茎群落が繁り、小川沿いにはミゾソバ、ドクゼリ、クロアブラガヤ、ヨシ等を主とした群落が繁っていた。

3．井戸跡近くにはエゾヒツジグサ・ヒルムシロ・フサモ等の水生植物が生育可能な池や、恒常的な水たまりがあった。

4．井戸跡近くの湿った場所にはドクダミが植えられていた。

5．畑がつくられ、ソバの栽培が試みられていた。

（山田悟郎）

引用・参考文献

林　弥栄(1969)：有用樹木図説、誠文堂新光社

木村康一・木村孟淳(1980)：原色日本薬用植物図鑑、保育社

北村四郎・村田源(1970)：原色日本植物図鑑、草本編〔Ⅱ〕、離弁花類、保育社

北村四郎・村田源(1980)：原色日本植物図鑑、木本編〔Ⅰ〕、保育社

北村四郎・村田源(1981)：原色日本植物図鑑、木本編〔Ⅱ〕、保育社

北村四郎・村田源・堀　勝(1971)：原色日本植物図鑑、草本編〔Ⅰ〕、合弁花類、保育社

北村四郎・村田源・小山鐵夫(1970)：原色日本植物図鑑、草本編〔Ⅲ〕、単子葉類、保育社

長田武正(1979)：原色日本帰化植物図鑑、保育社

岡田淳子・山田悟郎(1982)：北海道における農耕の起源に関する予察、北海道における農耕の起源（予報）－文部省科学研究費による。

表Ⅳ－13　各試料から検出された木本花粉数

	25M24	東1	2	3	4	北1	2	3	4	5	26G6
Abies		18	15	12	17	16	22	14	20	16	2
Picea		2	2	2	4	2	5	2	2	2	2
Pinus		10	9	9	8	8	14	8	6	14	4
Cryptomerria		6	4	-	2	1	2	-	2	1	-
Cupressaceae		1	12	2	1	-	1	-	1	2	1
Salix		4	4	6	8	3	4	8	3	2	1
Juglans–Pterocaya		8	6	6	4	10	6	10	8	6	6
Alnus		14	16	18	21	20	14	12	28	18	18
Betula		2	2	4	2	6	6	4	4	6	2
Carpinus		6	5	5	4	10	8	8	8	8	8
Corylus		1	-	1	-	-	1	-	1	1	-
Castanea		4	2	1	1	2	2	2	-	3	1
Fagus		52	61	76	58	61	58	56	78	66	46
Quercus		48	58	64	62	52	52	58	72	74	54
Celtis		3	1	-	-	-	1	-	6	2	-
Ulmus		12	13	16	22	18	18	14	13	18	26
Morus		6	4	2	2	4	2	5	6	7	1
Cercidirhyllum		-	-	-	2	-	1	-	1	1	-
Magnolia		8	5	4	6	4	5	3	2	4	2
Hydrangea		2	1	2	2	2	2	2	2	1	1
Elaeagnus		-	-	-	-	2	1	-	1	-	-
Sorbus		1	-	-	1	1	1	1	-	1	-
Phellodendron		1	1	1	1	1	-	-	-	2	-
Rhus		3	1	2	4	3	1	2	4	-	-
Acer		2	3	2	12	2	4	4	6	4	4
Aesculus		2	1	1	2	6	2	2	1	2	1
Vitis		2	-	-	-	3	1	-	-	-	-
Tilia		7	8	6	6	6	5	4	6	4	18
Araliaceae		2	4	5	4	3	4	5	8	4	6
Ligstrum		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
Fraxinus		4	4	6	4	4	4	2	4	11	3
Sambucus		3	1	1	-	6	2	4	6	2	2
Total grains		229	232	255	260	256	249	230	299	282	229

表Ⅳ－14　各試料から検出された草本花粉胞子数

25M24	東1	2	3	4	北1	2	3	4	5	26G6
Saururaceae	6	1	1	2	3	-	3	6	-	-
Chloranthaceae	6	1	-	-	3	1	2	2	1	1
Moraceae	-	-	1	2	-	-	3	9	5	-
Polygonaceae	18	21	24	22	51	21	22	8	6	31
Fagopyrum	2	5	6	6	1	-	2	1	2	2
Chenopodiaceae	16	18	16	12	20	26	32	32	18	20
Caryophyllaceae	12	4	62	2	13	6	2	2	2	16
Nymphaeaceae	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2
Ranunculaceae	6	5	14	8	16	8	21	12	12	28
Cruciferag	18	9	8	18	32	18	12	8	6	8
Saxifragaceae	4	5	6	9	8	7	4	11	10	6
Rosaceae	22	15	16	16	30	16	14	12	16	8
Leguminosae	-	-	-	-	-	-	1	-	-	2
Balasaminaceae	1	3	2	1	6	6	6	1	2	-
Hypericaceae	-	1	3	-	-	-	1	1	1	-
Epilobium	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Haloragabeae	4	-	-	-	3	4	2	2	4	2
Aralia	-	2	7	-	2	-	3	3	2	4
Umbelliferae	74	28	16	21	164	92	66	24	18	32
Labiatae	2	1	1	1	4	2	-	2	3	-
Scophulariaceae	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Plantaginaceae	5	2	7	2	5	3	3	2	2	6
Campanulaceae	-	-	-	1	-	1	-	2	-	-
Cichorioideae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	12
Car duoideae	10	9	14	12	32	21	8	8	11	14
Artemisia	138	126	96	134	131	84	121	121	112	166
Typha	2	2	2	2	10	7	4	2	2	-
Potamogetonaceae	3	1	1	-	2	-	4	-	-	-
Alismataceae	-	-	1	-	1	5	3	2	-	-
Gramineae	326	415	482	710	383	329	354	608	562	335
Cyperaceae	20	21	31	24	26	48	46	21	11	3
Lysichiton	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-
Commelinaceae	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
Liliaceae	10	6	4	4	8	6	4	4	2	1
Iridaceae	2	1	2	2	4	2	2	2	1	1
Orchidaceae	2	1	3	-	2	-	-	-	-	-
Total grains(Herbs)	711	703	823	1011	962	714	748	908	815	727
	1	2	3	4	1	2	3	4	5	26G6
Equisetaceae	2	1	2	2	5	4	3	2	2	1
Osmundaceae	22	6	8	8	34	14	8	12	8	6
Lycopodiaceae	2	1	2	3	8	6	4	2	2	10
Monolate typespore	41	65	101	81	58	38	24	26	38	28
Trilete type spore	8	5	3	4	8	2	6	2	3	3
Total grains(Fern&Spores)	75	78	116	98	113	64	45	44	53	48
All total grains	1015	1013	1194	1369	1331	1027	1023	1251	1150	1004

Abies+Picea+Pinus
+Cryptomeria+Cupressaceae
Pterocarya-Juglans+
Carpinus-Corylus+
Castanea+Fagus+Quercus
+Celtis-Ulmus+Morus+
Aesculus+Tilia
Abies
Cupressaceae
Picea
Pinus
Cryptomeria
Salix
Juglans-Pterocarya
Betula
Carpinus
Corylus
Castanea
Fagus
Quercus
Celtis
Ulmus
Morus
Carpinus
Magnolia
Hydrangea
Elaeagnus
Sorbus
Photinia
Rhus
Acer
Aesculus
Vitis
Tilia
Araliaceae
Ligustrum
Fraxinus
Sambucus
Saururaceae
Polygonaceae
Fagopyrum
Chenopodiaceae
Caryophyllaceae
Ranunculaceae
Cruciferae
Rosaceae
Umbelliferae
Cichoriaceae
Artemisia
Gramineae
Cyperaceae
Osmundaceae
Monolate type spore
Trees& Shrubs
Herbs
Ferns & Spores
25M24
東
北
1
2
3
4
5
26G6
火山灰
下部の腐土
80%
16%
6%
8%
6%
6%
6%
6%
8%
6%
30%
28%
6%
14%
6%
6%
+
19%
29%
6%
6%
8%
6%
6%
6%
8%
6%
6%
6%
6%
14%
6%
16%
50%
6%
6%
6%
100%

・花粉ダイヤグラム

V　勝山館跡周辺の景観の分析

勝山館跡は、眼下に天ノ川を控え、日本海を一望する要害の地にあった。つまり標高１００m～２００mにかけて、天ノ川の南岸にひろがる広大な八幡牧野がその河口から海に向かって、ゆるやかな段丘状の斜面をつくる。その中に、両脇を深い沢で囲まれ、背後を山の斜面で守られた天然の要塞があった。さらにそれへ手を加え、空壕を掘り、平坦部を三段の構成にし強固にしたのが勝山館であった。「土」を生かした土木技術において、巧みな技と有機的な、環境造型をいまに伝える中世山城の遺構の中でも、その景観のスケールの大きさにおいて、特筆すべき遺構である。

この館跡周辺の景観を、樋口忠彦氏の景観型*の分類を借りて読むならば、国見山型の景観といえるだろう。北海道という広大な辺境の地を、なんとか治めようとする意志のようなものが読める。

以下、この館跡周辺の代表的な景観のタイプとおもわれるものを、写真Ⅴ－１－７に示した。写真Ⅴ－１は、夷王山山頂から、北東を望み、館跡、市街地、天ノ川、湾曲する海岸線、海を見たものである。なだらな緑の丘陵のラインと、湾曲する海岸線がスケールの大きな風景をつくりあげている。写真Ⅴ－２は、夷王山の山すそから、寺の沢越しに、館跡の平坦部台地の全景を眺めたものである。平坦部が三段に構成されているのがわかる。写真Ⅴ－３は夷王山墳墓群から、館神八幡宮跡の土塁を中心に館跡を背後から眺めたものである。周囲を沢で囲まれた天然の要塞地形であることがわかる。写真Ⅴ－４は館神八幡宮跡の土塁、石段跡である。土塁の向こうに夷王山の円錐形の形姿が見える。写真Ⅴ－５は館神八幡宮跡背後の空壕跡周辺の景観である。館を強固にするために掘られた空壕であるが、地形に調和した環境造型になっている。写真Ⅴ－６は、侍屋敷跡の景観である。周囲を完全に斜面で囲まれた見通しのきかない沢地である。写真Ⅴ－７は丘陵部のすそ野に海岸に沿って、上国寺、上ノ国八幡宮、笹浪家の歴史的町並みの並ぶ景観である。丘陵部の館跡とともに、上ノ国の歴史を表現している。

図Ⅴ－１、２は断面図によって、この景観をつくりあげる、丘陵部の館跡、夷王山に連なる地形を分析したものである。

＊　樋口忠彦「景観の構造」

写V－1　国見山型景観―夷王山から館跡、海を望む

写V－2　館跡全景

写V－3　夷王山墳墓群から館跡を望む

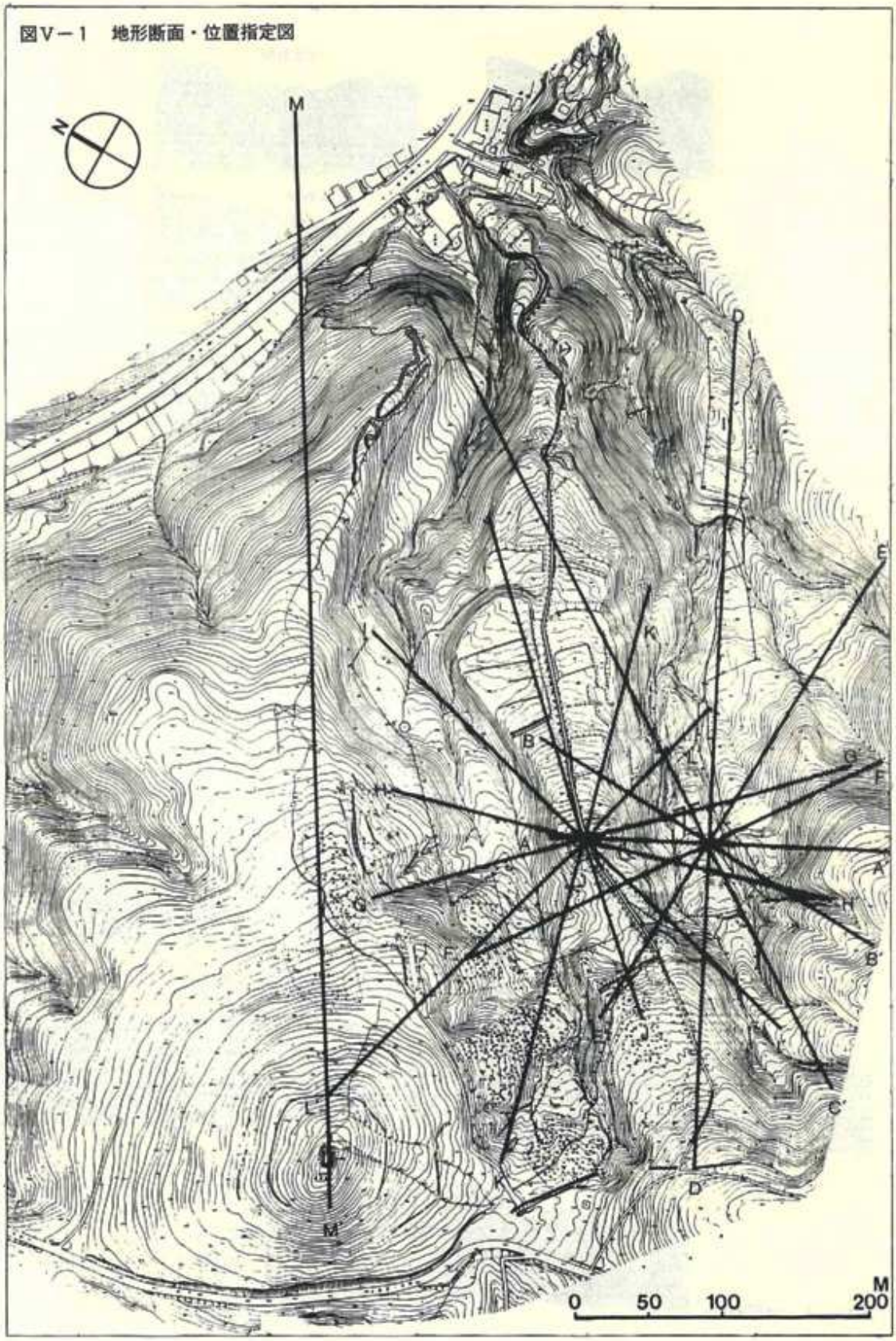
写V—4　館神八幡宮跡

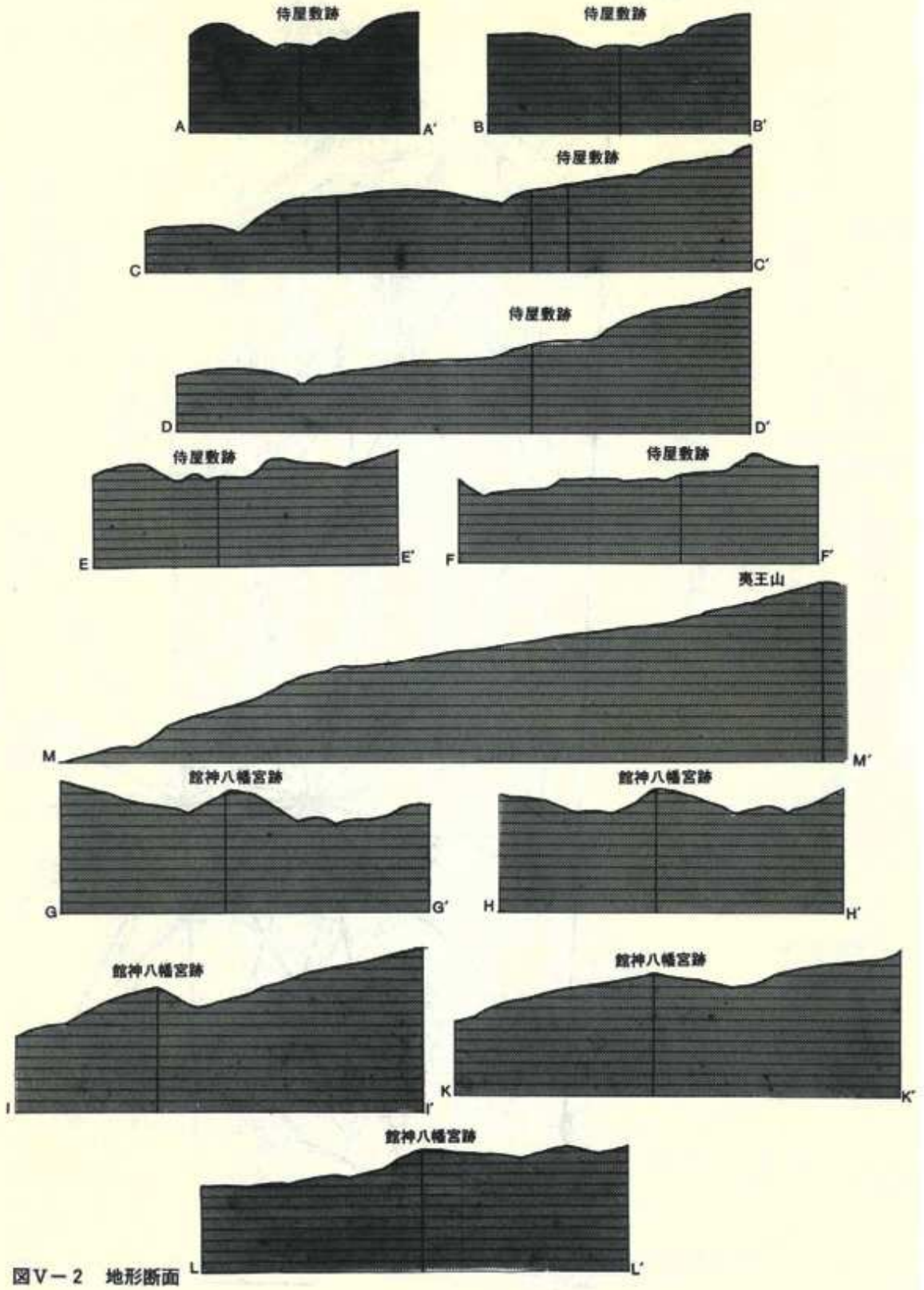
写V—5　空壕跡周辺

写Ⅴ－6　侍屋敷跡（土塁から建物跡をのぞむ）

写Ⅴ－7　アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み

図Ⅴ－1　地形断面・位置指定図




待屋敷跡
A
A'
待屋敷跡
B
B'
待屋敷跡
C
C'
待屋敷跡
D
D'
待屋敷跡
E
E'
待屋敷跡
F
F'
奥王山
M
M'
館神八幡宮跡
G
G'
館神八幡宮跡
H
H'
館神八幡宮跡
I
I'
館神八幡宮跡
K
K'
館神八幡宮跡
L
L'

図Ⅴ－2　地形断面

Ⅵ　勝山館跡の概要

Ⅵ－1　歴史的背景

史跡上之国勝山館跡は、松前氏始祖武田信広の居館であり、二代光広が松前大館に居を移すまで、北海道の政治、経済、文化の中心として位置し、その後は、西海岸最北の和人居住地として守護が置かれた中世の代表的館である。昭和34年（1959）9月に道指定史跡に指定され、昭和52年（1977）4月には国指定史跡に指定されている。

勝山館の歴史的背景の文献学的考証は「史跡上之国勝山館跡、花澤館跡・保存管理計画書（昭和53年上ノ国町教育委員会）」において、花沢館（国指定史跡）など他の館と関連づけておこなわれている。それによると『上ノ国の館は、各歴史的段階に応じて、その機能や役割に大きな変動がみられる。すなわちコシャマインの戦い以前に於ては、記録上の「花澤之館」が中心的役割を果し、終結後から数年間は、信広の政治的地位の上昇もあって、天ノ川の北側に築かれた洲崎の館が支配の拠点となり、季繁没の寛正3年（1462）以降再び支配の拠点になり、永正11年（1514）大館移転後は、上ノ国の館は大館の副城ないし支城に位置づけられ、蠣崎家の一族が守った。更に天文21年（1552）、上ノ国、知内を境に和人地が成立するや、異民族に対する防砦的性格を薄くし、大館を中心とする蠣崎氏領域支配の中で西部地域支配のための地方行政機関に変質していった。』とされている。

このように、歴史的にみて勝山館が重要な位置を占めるのは中世である。しかし、近世になってからも松前氏始祖居館の地として重要視され、藩主一代一度の上ノ国詣りや、毎年正月の藩主名代の上ノ国三社代参などが行なわれるなどした。

Ⅵ－2　遺跡の概要

勝山館は、背後に標高159mの夷王山を擁し両側面と正面は寺の沢と宮の沢によって深い急傾斜面となっている自然の要害を利用した山城である。

館前面に三段の平坦面が形成され、後方頂部に文明5年創立と伝える館神八幡宮跡とそれを囲む土塁、その背後南に空壕跡が残る。

館の台地平坦部東を流れる宮ノ沢川は、その上流で華ノ沢、宮ノ沢、桧ノ沢等にわかれる。華ノ沢と宮ノ沢に刻まれた一段低い台地は「侍屋敷」と伝えられており、土塁が残されている。

台地西を流れる寺ノ沢川には、木製の樋、溜井戸跡や石積みの貯水池跡が残されている。

台地東端には、謀反人として討たれた上ノ国城代基広を祀ったと伝えられる荒神堂跡がある。

館の西南には、寺ノ沢をはさんで標高159mの夷王山があり、622基からなる道指定史跡夷王山墳墓群が館の後方を囲むように6地区にわたって存在する。

以上のように勝山館の整備の対象となる遺跡として次の7つがあげられる。（図Ⅵ－1）

① 館神八幡宮跡
② 空壕跡
③ 寺の沢内用水施設跡
④ 侍屋敷跡
⑤ 平坦部建物跡
⑥ 荒神堂跡
⑦ 夷王山墳墓群

1　館神八幡宮跡　（写Ⅵ－1－3）

館神八幡宮跡には、社跡を中心に、中世と近世の遺構が混在してみられる。中世の遺構としては、土塁、土塁頂部の柵跡、土塁中央の門跡及び、土塁の内側にみられる竪穴状遺構と掘立柱建物跡の建物遺構及び柵跡がある。また近世の遺構としては、礎石建物跡及び土塁を横断するかたちで石積み階段、古道跡がある。

土塁は、直径約20mの半円形で、中央が自然研究路で両断されている。高さは最頂部で3m程である。土塁頂部の柵跡は、溝状遺構としてみられ木杭列があったと推測される。一部には、犬走様の石列もみられる。門跡は、自然研究路脇の他と異なる形状の柱跡から推測されたものである。

土塁の内側にみられる竪穴状遺構と掘立柱建物跡は位置的に重複しているものや、土塁の下に埋まっているものなどがみられるが歴史的経緯は不明な点が多い。掘立柱建物跡のうち西側にみられる4本柱の建物は位置的に、文明5年（1473）武田信広建立と伝えられる館神八幡宮の中世期のものと推測される。

また、これと隣接する近世の礎石建物跡は、明和7年（1770）建立とされる館神八幡宮本殿（現有ー上ノ国町指定有形文化財）のものと推測され、その前面に鳥居跡と考えられる柱跡がみられ、また周囲一帯には玉砂利敷の跡がみられる。

石積み階段及び古道跡は、東側土塁の一部をけずり土塁を横断している。

2　空壕跡　（写Ⅵ－4）

館神八幡宮跡の南方には3本の空壕跡がみられる。1つは八幡宮跡土塁の裾に沿うように大きくまわり、谷へ落ちる深さ1m程の薬研堀（空壕A）で、それより南側14～15mに空壕Aと平行する深さ1.2m、最大幅5m程の薬研堀（空壕B）がある。さらに、それらに交又するかたちで、深さ1.8m、幅1.8m程の箱薬研堀（空壕C）がある。

空壕の南西側には、遺物廃棄場所及び土葬墓群（写Ⅵ－5）がみられる。

3　寺の沢内用水施設跡（写Ⅵ－6．7）

空壕が寺の沢川に切り落とされている付近に木製の置樋、溜井戸、杭列の遺構からなる水飲み場跡がある。

置樋は1本の丸木をくり抜いて作った長さ4.9m、幅40cm程のもので、下に土台材を敷いてゆるい傾斜をつけ川の中央からやや斜めに固定されている。

溜井戸は、木で1.7m～2.3mの長方形に井形を組み、板で囲んだもので深さは80cm余りである。

さらに7本の杭列が川の流れに併行して井戸に向って打ち込まれており、井戸に水を誘導する施設の1部と考えられる。

溜井戸の北東150mの平坦地には「「つるの池」といわれる直径6m余りの暗渠排水施設を持つ石積貯水池がある。

4　侍屋敷跡（写Ⅵ－8、9）

館南東の旧華の沢地内に「侍屋敷跡」といわれる平坦部がある。この平坦部は段状に地割がされ、掘立柱建物跡の遺構が多数みられる。

また正面には、カギの手状に土塁が築かれ、中央が門のように空いている。

5　平坦部建物跡（写Ⅵ－10、11）

館中央の台地は、三段の大きな平坦面からなり、館の形態を特徴づけている。平坦面の一部発掘により、掘立柱建物跡、竪穴状遺構、溝跡がみられたが、全容は不明である。

写Ⅵ－2　館神八幡宮跡・土塁

写Ⅵ－1　館神八幡宮跡全景－近世礎石（左）

写Ⅵ－3　土塁頂部柵跡

6　荒神堂跡（写Ⅵ－12）

平坦部東端には、天文17年（1548）、謀反人として討たれた上ノ国城代基広を祀ったとされる荒神堂の跡と思われる石積み、石段がみられるが、未発掘で不明確である。

7　夷王山墳墓群（写Ⅵ－13）

勝山館の空壕の外側から夷王山山麓の一帯に620余りの墳墓が6地区にわかれ群在する。墓には、火葬した焼骨を木箱に納め、硯や銭、玉、木盃等の副葬品とともに埋め土饅頭状に土を盛りあげた例や、1.5m×1.2m、深さ0.8m程の土壙を掘り木棺に入れて土葬した例がある。

Ⅵ－3　出土品

勝山館からの出土品は、現在2万点余りを数える。これらの出土品には、本州方面及び中国大陸等から運ばれてきたものと、地元で作られたものの2種がある。

前者は陶磁器や銅製品、ガラス玉及び鉄製品・木製品・石製品の一部などで、後者は骨角器、鉄滓及び鉄製品・木製品の一部などである。

以下その主なものを示す。

1　陶磁器

碗や皿は中国製の青磁・白磁・染付及び国産の美濃・唐津焼であり、擂鉢や甕は越前焼である。

2　金属製品

刀・刀子・鏃・鐙の小札・鉄砲玉・笄・小柄などの武具をはじめ、鉤・釣針・鎌・火箸・燭台・火打金・鍋・毛抜き・鏡・香炉・キセル等の日常用具、釘・鏡・仏具・銅銭などがみられる。

また、鉄を作る時にでる鉄滓もみられる。

3　木製品

箸・くし・飯べら・折敷・漆椀・漆盃・組等の食膳具・曲物・建築部材などがある。

4　骨角器・石製品・その他

角角器では銛・鏃・中柄・針などがあり、石製品では石臼・砥石・茶臼・硯などがあり、その他のものとしてガラス玉などがある。

写Ⅵ－4　空壕跡

写Ⅵ－5　土葬墓群

写Ⅵ－6　寺ノ沢用水施設跡－木樋・井所

Ⅵ－4　勝山館跡アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み

勝山館跡の麓、アプローチ部分にあたる国道228号線沿いには、館跡の樹林を背景に、上国寺・上ノ国八幡宮・笹浪家住宅などの歴史的建造物があり、歴史的にも価値の高い町並みがみられる。（写Ⅵ－14、15）

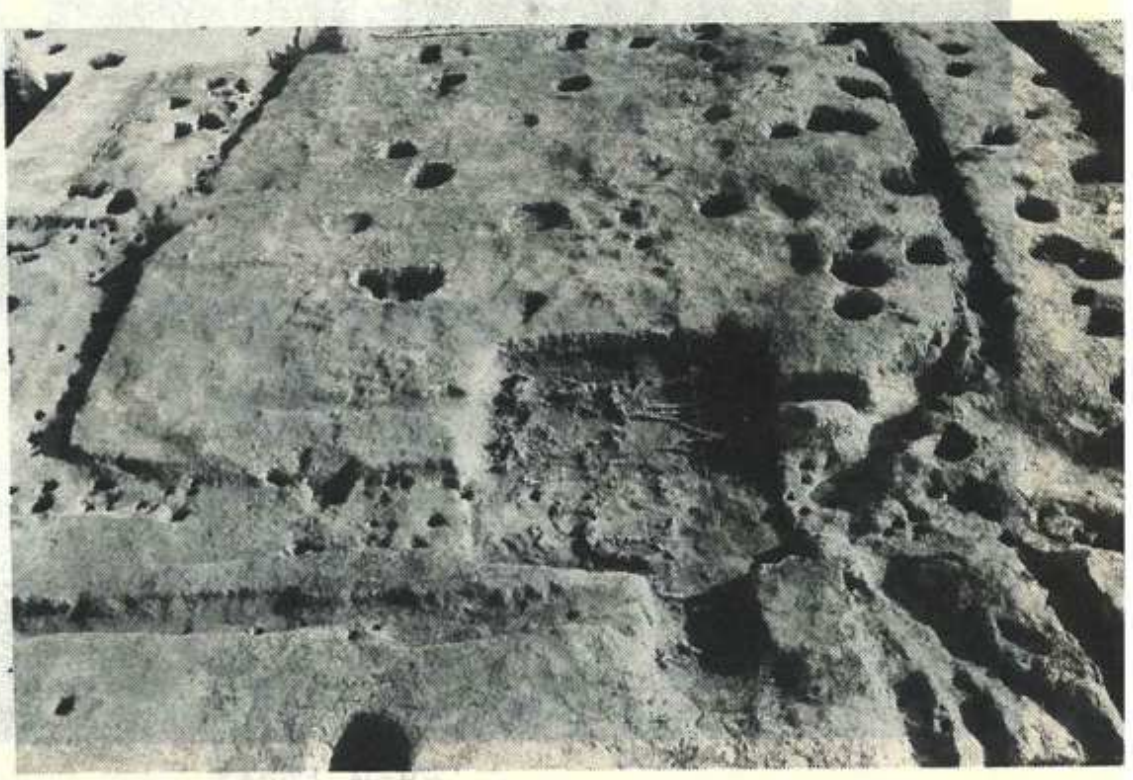
上国寺は、創建時期は明らかではないが、建築様式、建築手法からみて北海道最古のものに属する貴重な存在とされている。上ノ国八幡宮は、明和７年（1770）に館神八幡宮跡に建立されたものを明治９年（1876）に移築し、拝殿が加えられたものである。また笹浪家住宅は、石置屋根の住宅で北海道最古の住宅に属するものである。

写Ⅵ－７　寺ノ沢用水施設跡－石積貯水池

写Ⅵ－８　侍屋敷跡

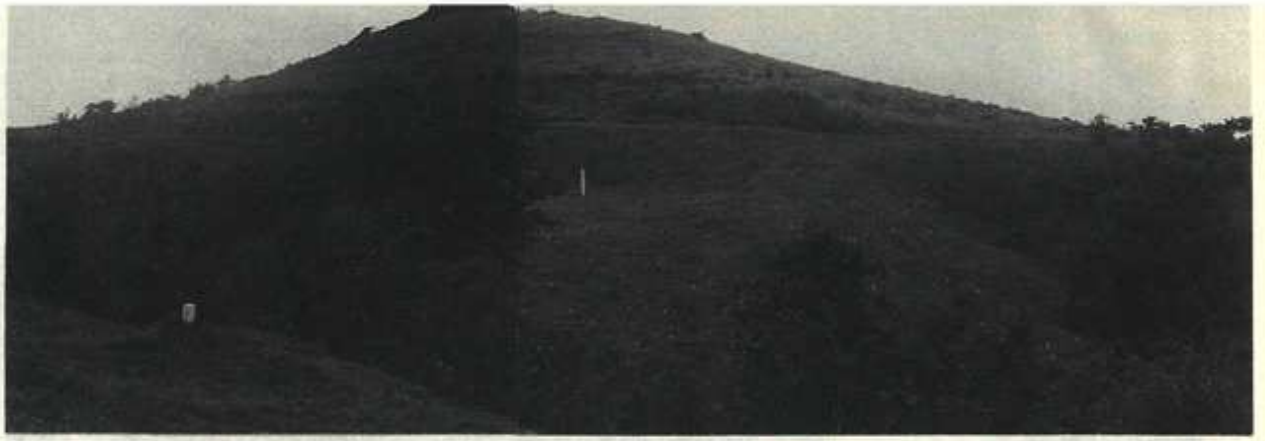
写Ⅵ－９　侍屋敷跡・土塁跡

写Ⅵ－10　平坦部建物跡



写Ⅵ－11　平坦部建物跡

写Ⅵ－12　荒神堂跡

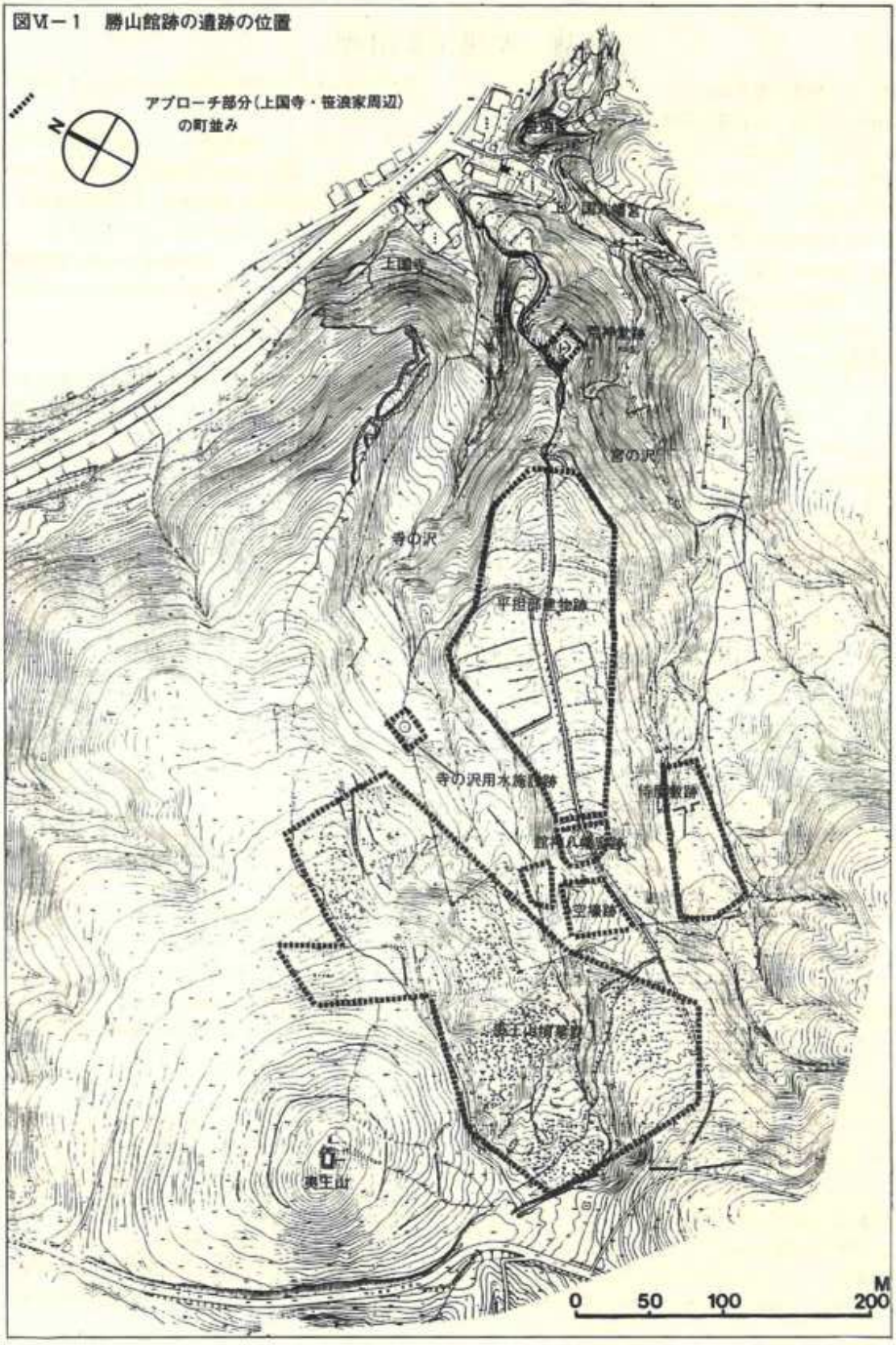


写Ⅵ－13　夷王山墳墓群

写Ⅵ－14　上国寺本堂

写Ⅵ－15　笹浪家住宅

図Ⅵ－1　勝山館跡の遺跡の位置



Ⅶ　整備実施計画

Ⅶ－1　整備の基本方針

中世の遺構である勝山館跡は、自然の地形を巧みに生かした環境にその大きな特徴がある。整備に際しては、この「土の造型」ともいうべき地形を最大限生かし、環境整備を図る。昭和52年度策定の保存管理計画書をふまえ、その後の発掘調査による知見を基礎に、整備計画を立案した。

1．遺跡整備の方針

夷王山地域を含め遺跡全体を野外史跡公園として整備し、広く親しみやすいものとする。整備にさいしては、以下の方針のもとに行う。

(1)　この地域では地下遺構が史跡の重要な部分を占めている。整備事業全体が調査と平行して進められなければならないが、とくに遺構の整備や園路、利便施設の建設の際には前もって十分な調査を行なうことが必要である。

(2)　遺跡の整備は4つの原則のもとに行う。

①遺跡の充分な保護
②遺跡内容の適確な表現
③遺跡の経てきた歴史の表現
④遺跡の規模の表現

(3)　過去の再現すなわち復元は、史料があきらかな場合でも、必要最小限にとどめ、「歴史の表現」を重視し、そのために現状を尊重する。

(4)　未発掘ではあるが史跡公園整備にとって重要となる場所については、仮整備を行なう。

2．広域的整備

(1)　整備は史跡指定地のみに限るべきでなく、一つの景観として広範囲にとらえる。指定地周辺では、国道228号線と夷王山の裏手から八幡牧野を通って天ノ川方面へぬける道路でかこまれる丘陵が景観的にも一つのまとまりをもっており、このまとまり全体を整備対象と考える。

(2)　上記丘陵以外にも、洲崎館、上国寺をはじめ数多くの史跡、伝説地が点在している。これらの史跡、伝説地やその周辺の整備、また全体をつなぐ見学コースの設定とあわせて考える。

(3)　これらの史跡をとりまく集落、とくに上ノ国集落の雰囲気もまた重要である。家並みは特別に昔風の外観を心がける必要はないが、丘陵ぞいの集落については、新築の際あまり奇をてらわぬ、ごく普通の外観の家並みをつくっていくよう住民の協力を求め助言や指導が行なわれることが望ましい。

(4)　このように大規模な一つの公園的施設がつくられると、施設自身の維持管理、周辺環境の整備、関連施設の計画（道路計画、資料館の配置等）に関連して、都市計画的手段にたよる必要の生じることが考えられる。（風致地区や一部で建築規制等）そのために、都市計画の策定についての準備を進める必要がある。

3．段階的規制による環境整備

広域的整備は、歴史的景観という点からみても、当然重要さも性格もことなるさまざまの要素を含むので、一律の規制を行うのではなく、対象の性格と重要さに応じて、さまざまの整備手段を講じることが必要である。

ここでは、修景計画区域、緑地保存区域、景観保全区域の3種の区域を設けて、歴史的環境の整備をはかる。

(1)　修景計画区域（史跡指定地）

史跡指定地を対象とし、保存計画にもとづいて「事業」によって整備をはかる。整備事業終了後は完全な凍結的保存を原則とし、必要な現状変更もすべて計画にもとづいて行う。対象は、勝山、花沢両館跡史跡指定地である。なおこの区域は公有化を進める。

(2)　緑地保存区域

丘陵内の上記修景計画区域以外の部分は、それ自身は史跡としてとくに重要というわけではないが、景観上重要な役割をもっており、たとえばもし現在の緑がはぎとられるようなことになると、館や墳墓群自身の価値も損われる。しかし一方、ここでは厳密な保存は不要であって「緑」が維持されればよい。そこで、この区域では現状変更をみとめつつ規制を行う。

(3)　景観保全区域

さきにふれたように、歴史的環境としては、集落の雰囲気は重要である。町民の理解と協力のもとに、適切な指導、助言によって落着いた町並みをつくることを目ざす。　　（図Ⅶ－1）

4．利更施設、園路、植栽

史跡整備に関連して、休憩施設、便所、案内板等の利便施設を設ける。これらの施設はいずれも

史跡の雰囲気を壊さぬよう位置、デザイン、周辺の環境整備に十分の注意を払う。

そのデザインにおいては、遺構の造型モチーフなども参考にする。また地域の素材（ヒノキアスナロ等）を積極的に活用する。

園路、植栽の計画は、自然の条件をできるだけ尊重し、既存の環境を補い高める方向で整備を図る。また丘陵外においても、国鉄上ノ国駅、資料館、館跡をつなぐ遊歩道のネットワーク化を図る。

5．関連施設

関連施設については、資料館、アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み整備、交通施設の整備が課題となる。資料館、上国寺・笹浪家周辺の町並み整備については各部計画で詳述するので、ここでは交通施設の整備の考え方について、ふれておきたい。

(1) 道路

車による接近は、国道228号線のほか、228号線から八幡牧野をぬけ、丘陵をまわって再び228号線へ出てくる道路とする。丘陵内の道路は舗装するのが望ましい。

(2) 駐車場

①主な駐車場の位置は、夷王山南側、夷王山頂上レストハウスに現在あるが、アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）にも必要である。

②収容台数は、当面各地点に乗用車10台分程度を想定し、夷王山南側に予備的なスペースも含めて、20台程度を考える。

Ⅶ－2　整備実施設計（付図3）

1．各遺跡の整備実施設計

(1) 館神八幡宮跡（付図4）

＜基本方針＞

館神八幡宮跡は、中世の遺構と近世の遺構が重複している。原則として中世の遺構を優先して表現するが、近世の遺構も歴史的に意味があり明確にあらわれているので煩雑にならない程度に共存させ表現する。なお、その場合歴史的経緯を説明板により解説する。

＜整備内容＞

遺構や遊歩道を除く全域に野芝を張付ける。

表現する遺構は、建物跡としては「掘立柱建物跡」3棟分（内1棟は中世の館神八幡宮跡）及び「礎石建物跡」1棟分（近世の館神八幡宮跡）とする。発掘では掘立柱建物跡に重複して竪穴状遺構がみられたが、相互の歴史的関係が明確でないうえ、重複して表現すると見学者に煩雑な印象を与えるので竪穴状遺構はあらわさない。

掘立柱建物跡の敷地境界を示す「柵跡（Ⅱ）」を表現する。また、礎石建物跡と一体の遺構である玉砂利及び鳥居柱跡を表現する。

「土塁」は近世にけずられたと考えられる部分を復元し、土塁と一体の「柵跡（Ⅰ）」及び「門跡」も復元してあらわす。

土塁を横断する近世の石積階段及び古道跡」は土塁の表現を優先させてあらわす。

これらの遺構の表現にあわせ、説明板・表示板を設置する。

また、館神八幡宮跡は勝山館跡の中心的遺構なので園路は2ｍ巾の玉石縁石砂利敷とし、他の園路と違いをもたせる。

＜設計＞

(i) 建物跡

ⓐ 掘立柱建物跡（図Ⅶ－2－5）

柱の形を縁石で囲い、色砂利敷で表現する。また周囲を縁石で囲い砂利敷とし、建物の大きさを表現する。なお土塁と重複する遺構は土塁を優先する。

ⓑ 礎石建物跡（図Ⅶ－6、7）

礎石列をあらわし、遺構を表現する。さらに周囲を縁石で囲い砂利敷とし、建物の大きさを表現する。なお礎石の欠損は種類の異なる石で補充して整備する。また、前面一帯に敷かれた玉砂利は、関連する遺構としてあらわす。

さらに、前面の鳥居柱跡も、柱を縁石で囲い表現する。なお、近世の石積の階段、古道での土塁が低くなっているところは土を盛り中世の土塁の形をあらわす。

(ii) 土塁（図Ⅶ－8）

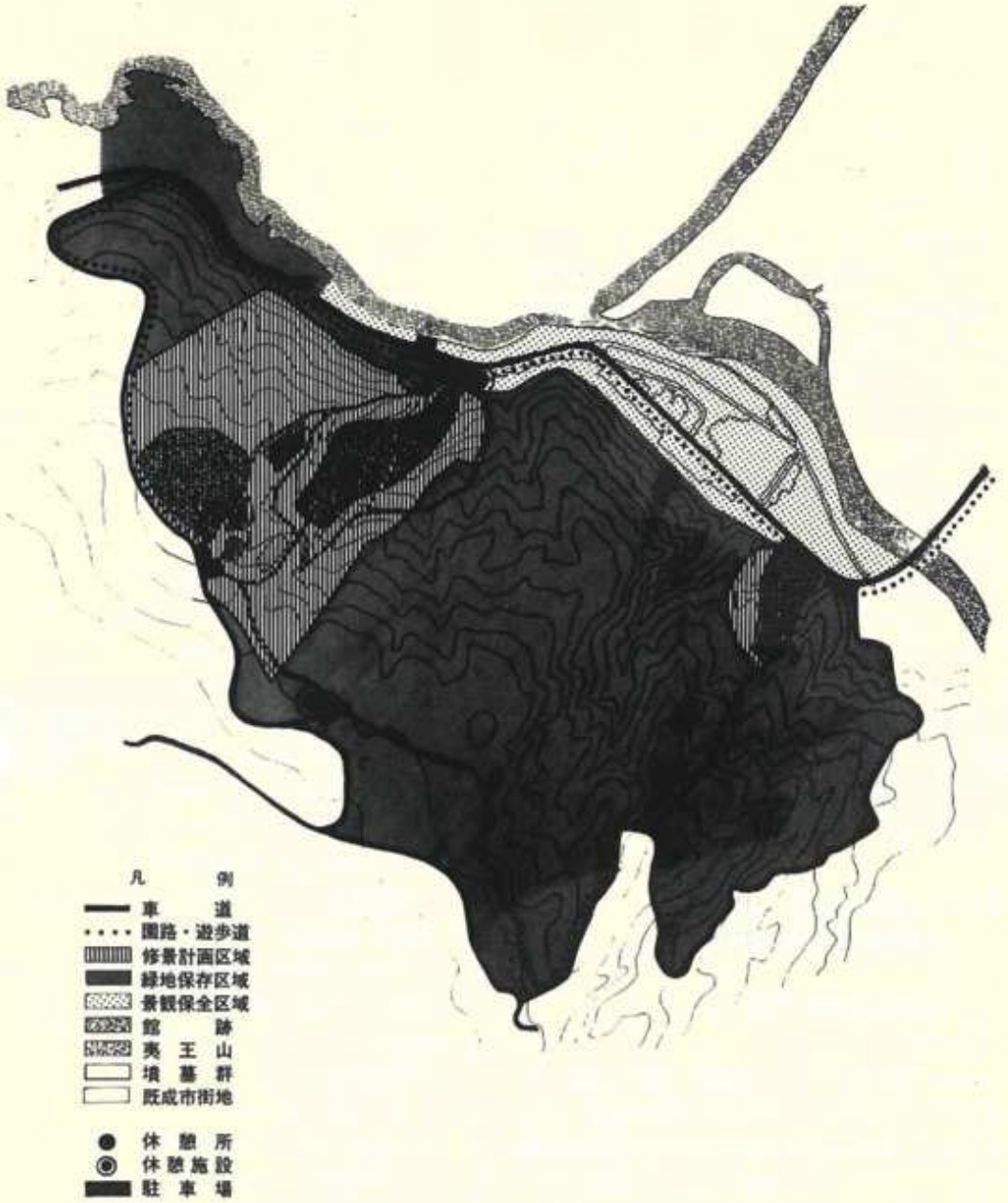
土塁は、現在の形状を尊重し、張芝で表現する。

(iii) 柵跡(I)（図Ⅶ－8）

土塁頂部の柵跡は、中世の館の遺構をほうふつとさせ、土塁と一体のものである。従って柵を桧丸太等で復元整備する。また、柵跡南西側に一部みられる石列は、柵と一体のものとしてあらわす。

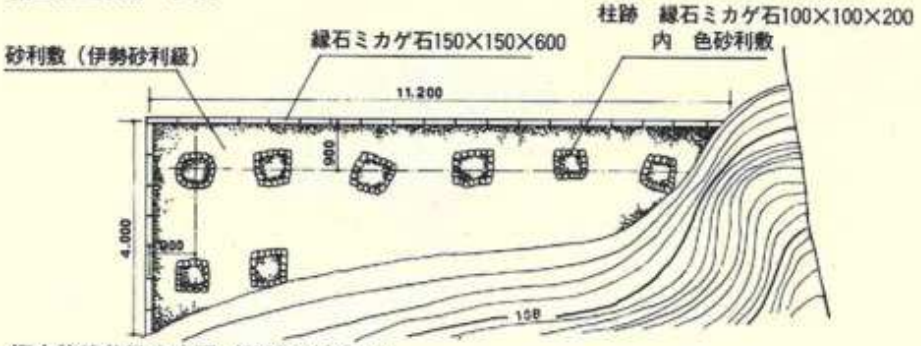
(iv) 門跡（図Ⅶ－8）

土塁中央の門跡は、柵跡(I)と一体であり、遺

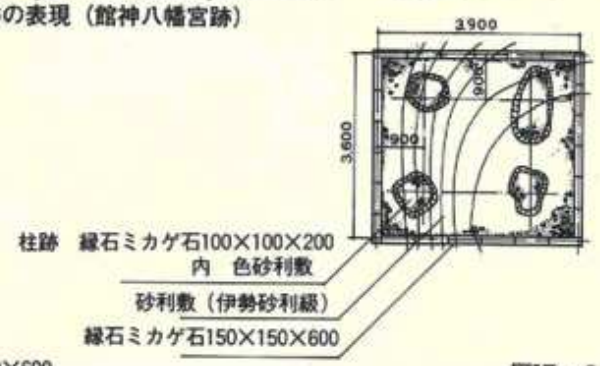


図Ⅶ－1　広域の整備計画図

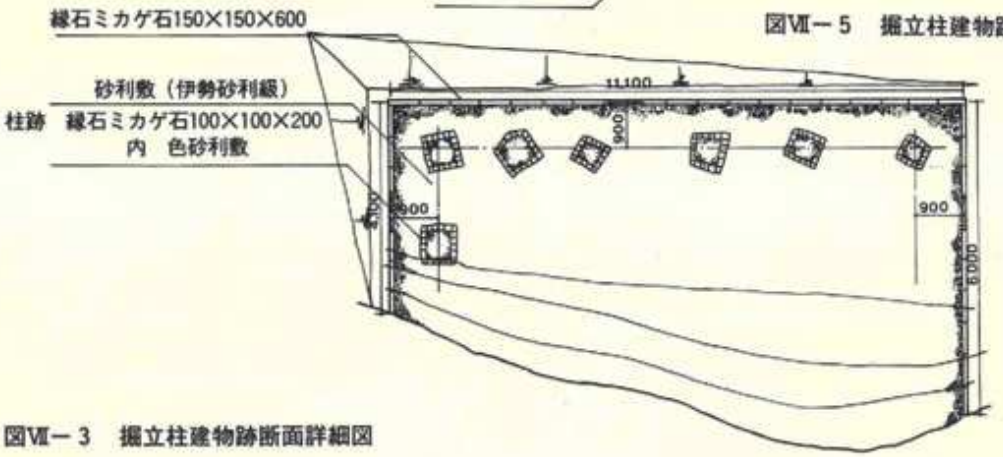
図Ⅶ－2　掘立柱建物跡の表現



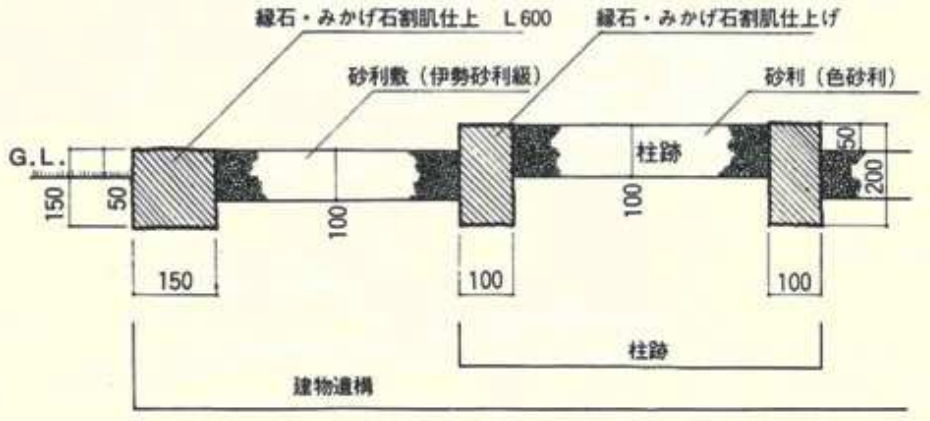
図Ⅶ－4　掘立柱建物跡の表現（館神八幡宮跡）



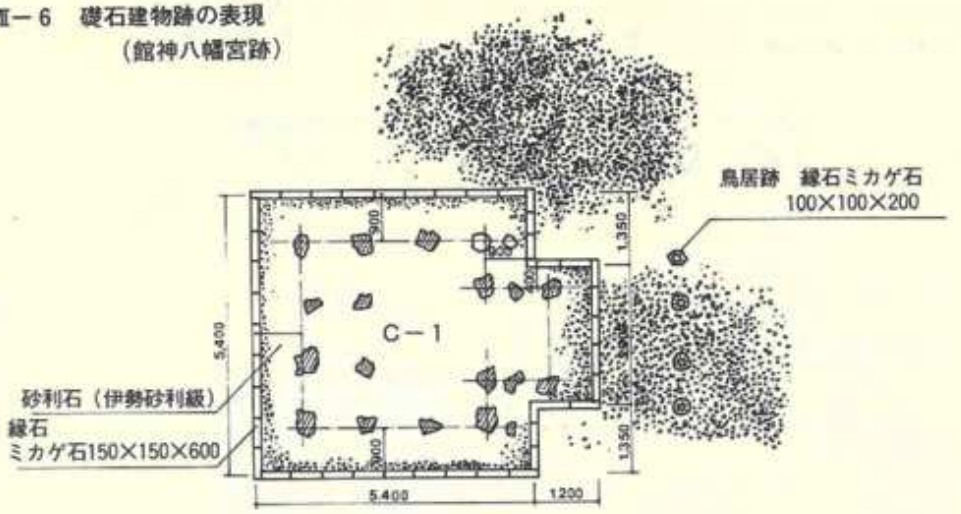
図Ⅶ－5　掘立柱建物跡の表現



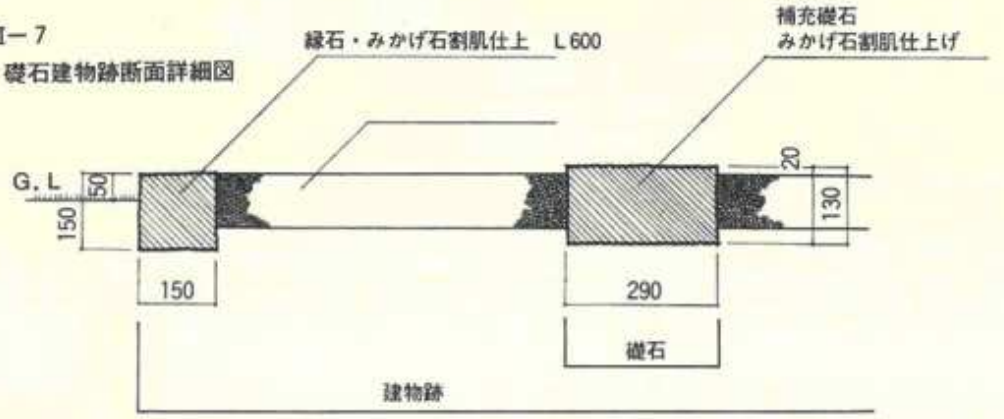
図Ⅶ－3　掘立柱建物跡断面詳細図



図Ⅶ－6　礎石建物跡の表現
（館神八幡宮跡）

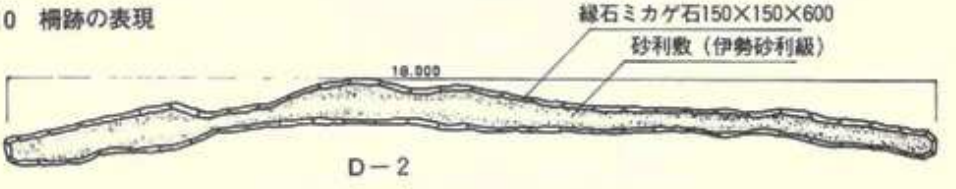


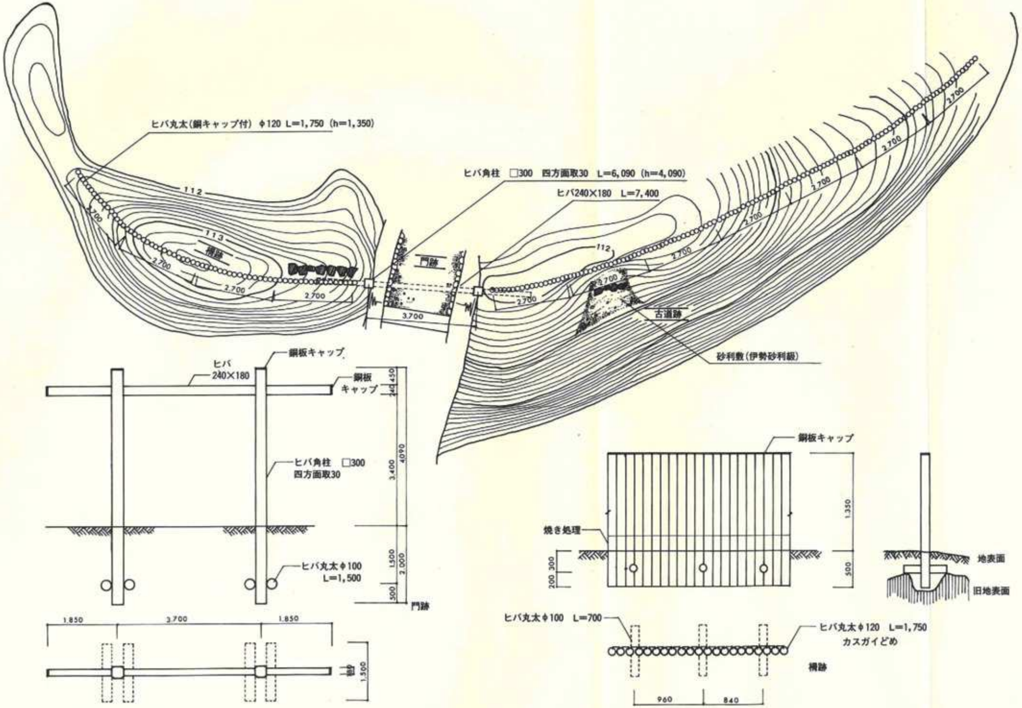
図Ⅶ－7
礎石建物跡断面詳細図



図Ⅶ－9　石積階段及び古道跡の表現

図Ⅶ－10　柵跡の表現





図Ⅶ－8　土塁と柵跡・門跡の表現

構表現として重要なものであるので、詳細な発掘調査のうえ復元する。

(v) 石積階段及び古道跡（図Ⅶ－9）

石積階段はそのままあらわし、階段に続く古道跡は砂利敷で表現する。

(vi) 柵跡(Ⅲ)（図Ⅶ－10）

掘立柱建物跡の北東側の柵跡は、ピットがよく残っており、敷地状況を把握する強い条件であるので、縁石で囲い砂利敷で表現する。

(2) 空壕跡

＜基本方針＞

空壕跡は、空壕A－Cの表現と遺物廃棄場所及び土葬墓群の表現をおこなう方針で、昭和58年度迄に整備が実施されている。（写Ⅶ－1）

＜整備内容＞

全域に野芝を張付け、各遺構を次のように整備している。

(i) 空壕

ⓐ 空壕A

掘りあげた状態に野芝を張り付けて表現する

ⓑ 空壕B及びC

空壕を埋めもどし、空壕の形に地被植物を植えることにより表現する。

(ii) 遺物廃棄場所

遺物廃棄場所は、丸太杭を4.5m間隔に打ち込み範囲を表現する。

(iii) 土葬墓群

土葬墓群は、丸太杭で各墓拡の輪郭をあらわし内部に地被植物を植え表現する。

なお、今後説明板等の整備を行なう。

(3) 寺の沢内用水施設跡

＜基本方針＞

寺の沢内用水施設跡は、館での生活を知るうえで重要な遺構であり、復元可能なものは、復元整備する。

「つるの池」は未調査のため、周辺を含め調査のうえ整備する。

＜整備内容＞

水飲み場の木製の置樋、溜井戸、杭は復元し、発掘地点に設置し、寺の沢川の水が流れるようにする。また周囲を芝張で整備する。

「つるの池」の貯水池跡は、調査のうえ石積を整備し、水をため貯水池として復元する。未調査の段階では、仮整備として草刈をおこなう。

なお、遺構整備にあわせ、説明板、表示板の設置をおこなう。

＜設計＞

(i) 水飲み場跡（図Ⅶ－11）

ⓐ 置樋（図Ⅶ－12）

置樋は発掘されたものをもとに新たに2基復元し、発掘場所から寺の沢川の方向に連ね、傾斜をもたせて設置する。設置は、各樋の台木2ヶ所にコンクリート基礎を設け固定する。

樋に寺の沢川の水をひくために、川と樋が交叉する地点まで発掘面の埋め戻しを行ない、樋の端部に川の落差をつくり、その水を受けるようにする。

ⓑ 溜井戸（図Ⅶ－13）

溜井戸は、発掘されたものをもとに復元するが次の点を変更する。①井戸深さは80cmと推定されるが、復元工事により地下遺構をそこなわぬよう60cm深さにとどめる。②井戸を囲む板は四隅の柱をつなぐ貫の内側に固定されているが、地表面が傾斜しているため最も土圧が大きくかかる南側の長辺の貫を一本増やし補強する。なお、貫は土に埋まるので外見的には補強の有無はわからない。③井戸の水をためるため、井戸をつつみ込むように防水シートを埋め、井戸の保水性を高める。

ⓒ 木杭列

寺の沢川に平行して設けられた木杭列も復元するが、発掘された7本のうち2本は樋を設置する際の一部埋め戻しにより土に埋まってしまうので復元しない。

(ii) 「つるの池」貯水池跡

貯水池跡は、未調査のため仮整備として貯水池の中心から半径6mの範囲の草刈をする。

(4) 侍屋敷跡

＜基本方針＞

侍屋敷跡は、調査が開始されたばかりであり、調査が完了し充分な考察を行なった後、整備する。それまでの間は仮整備をする。

＜整備内容＞

侍屋敷跡の整備は、詳細な発掘調査と考察を前提とするが、将来的に一応次のような整備を行なうことが考えられる。

発掘の埋め戻しにあたっては、建物敷地の段差を尊重して地表整備を行ない、建物遺構を全体に

煩雑にならぬよう選択して表現する。

また前面土塁も明確になるよう表現する。

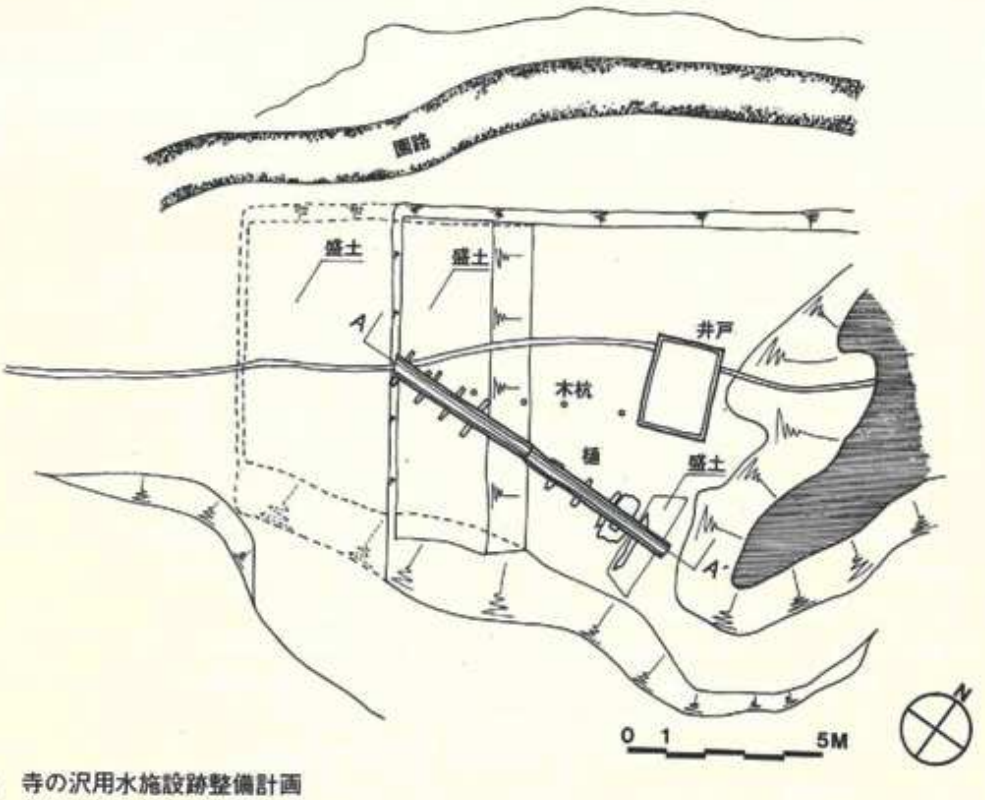
なお、詳細な調査分析が完了するまでの仮整備として、土塁を含めた未発掘地の草刈と歩行者路、説明板等の整備をおこなう。

<設計>（図Ⅶ－14）

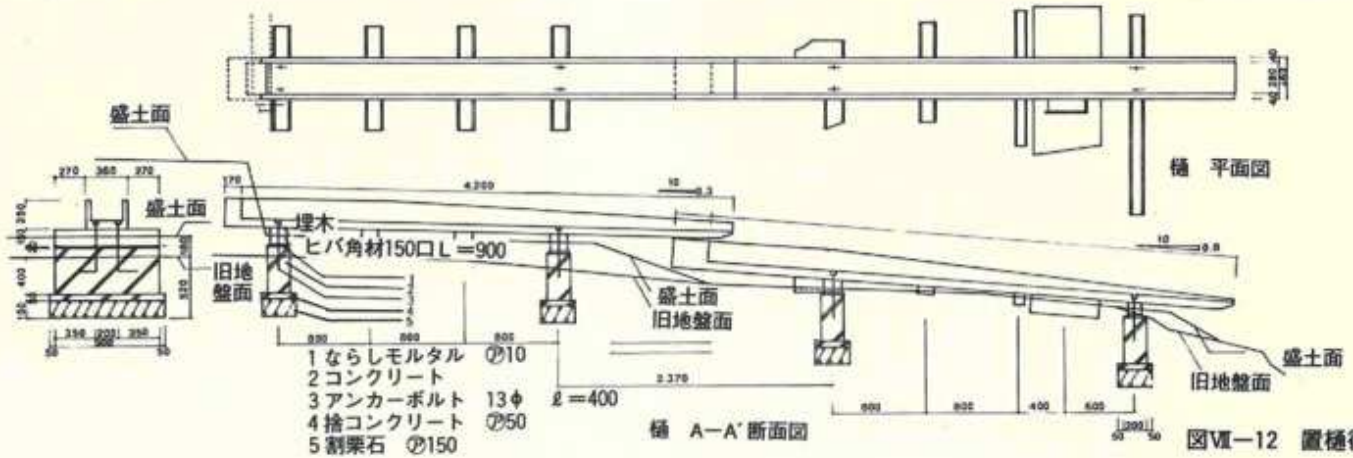
建物遺構は、掘立柱建物跡なので、館神八幡宮跡の場合と同様に、柱の形を縁石で囲い色砂利敷で表現し、周囲を縁石で囲い砂利敷とし、建物の大きさを表現する。

敷地は、芝張で表現し、周囲と区別する。

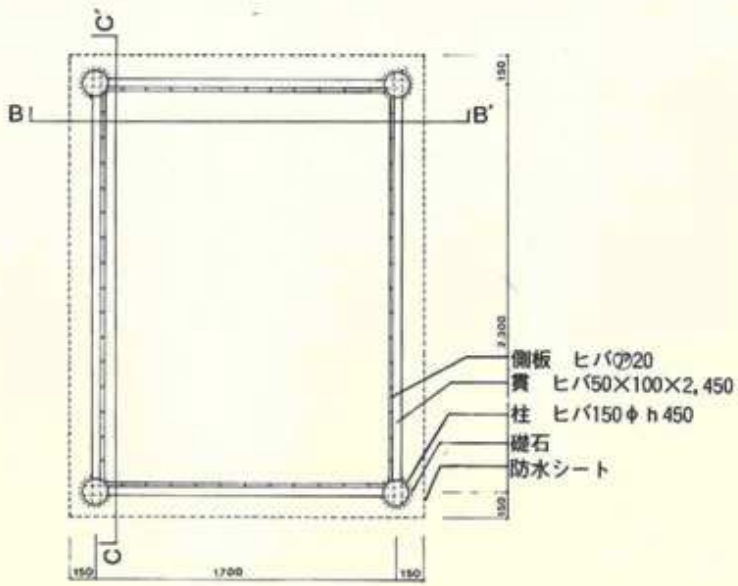
また、土塁も芝張で表現する。

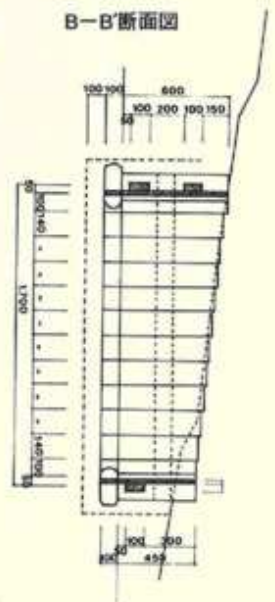


図Ⅶ－11　寺の沢用水施設跡整備計画

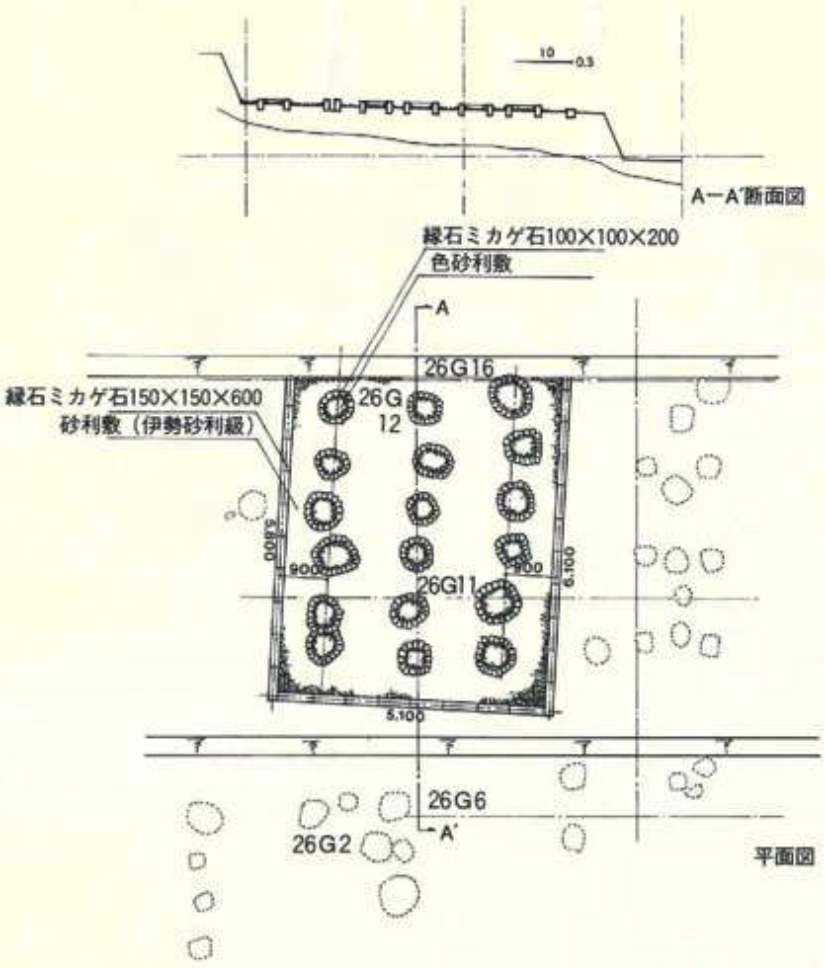


図Ⅶ－12　置樋復元整備図





図Ⅶ－13　湧井戸復元整備図



図Ⅶ－14　侍屋敷跡建物遺構の表現

(5) 平坦部建物跡

＜基本方針＞

平坦部建物跡は、勝山館跡の地形的特徴を表わす重要な部分であり、東西の沢に対して台地平坦面が明瞭に浮かびあがるよう植栽計画を行なう。

また、平坦部からの眺望がよいので休憩ゾーンとする。

建物跡などの遺構は、一部しか調査されていないため、遺構の整備は詳細な調査実施後とする。

＜整備内容＞

平坦面の地形が明瞭になるよう、クマザサ等の草や近年の植林になる樹木を伐採し、台地斜面に「町の花」であるエゾヤマツツジを群植する。

草刈り後の平坦面には、木陰を併う休憩施設などの利便施設を、地下遺構を損わない位置に設ける。

建物遺構の表現は、詳細な調査の結果を待つ必要があるが、将来的には竪穴状遺構、掘立柱建物跡及び柵跡の3者を互いの関係がわかるよう選択し、表現する。

これらの整備に合わせ説明板等を設置する。

＜設計＞（付図5）

クマザサ等の草を刈る範囲は平坦部を囲む園路の内側とする。樹木の伐採は園路の内側及びエゾヤマツツジを植える台地斜面部とするが、平坦部中央を通る自然研究路沿いの桜並木は、研究路の位置が中世においても道として使われていたと推測されるので残す。

エゾヤマツツジを群植するのは台地斜面及び平坦面が段をなす斜面とするが、その他園路の交差部や桜並木をひきたたせるため、数株ずつ植栽する。

平坦部の眺望の良い場所5ヶ所に縁台、スツール（大、中、小各1基）を設置し、エゾエノキ及びカツラを植樹し木陰をつくる。また平坦部中央西には四阿及び便所を設置し同様に木陰をつくる。中央東には、藤棚を面的につくり休憩スペースとする。

発掘調査実施後の建物遺構の表現は、掘立柱建物跡及び柵跡については館神八幡宮跡で行なう方式と同様にするが、竪穴状遺構については、埋めもどした後、竪穴の形状に従い30cm程掘りさげ縁を縁石で囲い内を張芝とする。竪穴内の柱跡は、縁石で囲い色砂利敷とする。

(6) 荒神堂跡

荒神堂跡は未調査であるため、詳細な発掘調査後、石積みの復元整備を行う。当面は仮整備にとどめる。

＜整備内容＞

仮整備として、荒神堂跡の石積み周辺の草刈りを定期的に行なう。

説明板等を設置する。

(7) 夷王山墳墓群

＜基本方針＞

現状の形態を尊重しつつ、墳墓群の特徴を表現する。

＜整備内容＞

6地区にわかれ群在する墳墓群の形状が明瞭になるよう、クマザサ等の草刈りを定期的に行なう。

説明板等を設置する。

2．園路整備実施設計（付図6）

＜基本方針＞

園路は基本的に地形、遺跡の形に従うように取りつける。

具体的には第一に史跡全体を大きく取り囲むように、第二に平坦部建物跡、館神八幡宮跡を中心に史跡を南北に縦断するように、第三に台地平坦部を取り囲むのと同時に段丘部で区分するように、第四に侍屋敷跡、寺の沢内用水施設跡等の遺構を結ぶように取りつける。

＜整備内容＞

園路の主なルートを次に示す。

①上国寺――夷王山北側丘陵部――夷王山墳墓群――自然研究路

②上ノ国八幡宮――かどこの水――桧の沢――侍屋敷跡

③上国寺――自然研究路（荒神堂跡―平坦部建物跡―館神八幡宮跡―空壕跡）――夷王山山麓

④平坦部建物跡回遊路

⑤平坦部建物跡――侍屋敷跡――館神八幡宮跡

⑥平坦部建物跡――寺の沢内用水施設跡――空壕跡――館神八幡宮跡

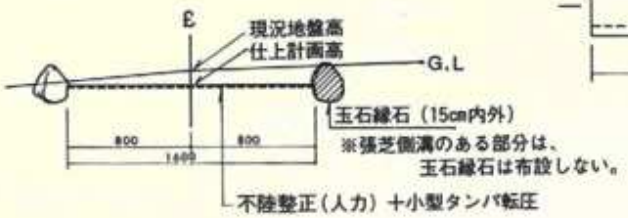
＜設計＞（図Ⅶ－15－18）

園路のうち主要なルートである③上国寺―自然

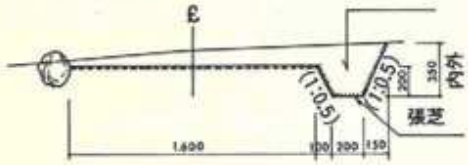
図Ⅶ－15　園路断面図

園路定規図

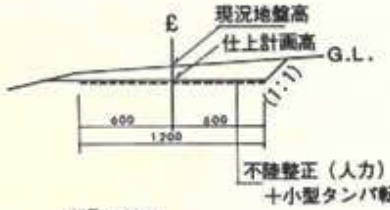
巾員1.60M



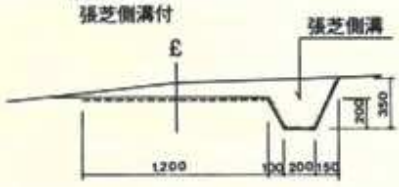
巾員1.60M
張芝側溝付（左・右あり）



巾員1.20M

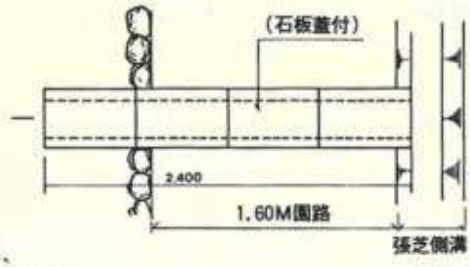


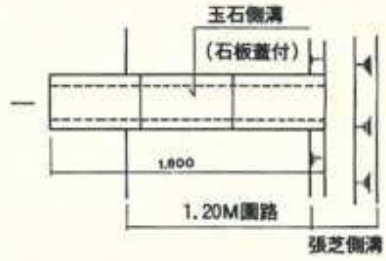
巾員1.20M
張芝側溝付



図Ⅶ－16　横断トラフ

横断トラフ平面図

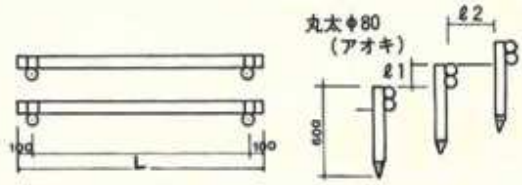




玉石側溝詳細図

図Ⅶ－17　丸太階段

丸太階段詳細図



園路巾員	L
1.60M	1.60M
1.20M	1.20M

※ℓ1、ℓ2は各ヶ所各の仕様による

研究路―夷王山山麓、④平坦部建物跡回遊路、⑤侍屋敷をめぐるルート、⑥寺の沢用水施設跡をめぐるルートは、巾員1.6mとし玉石の縁石をもうけ不陸整正の後、転圧する。

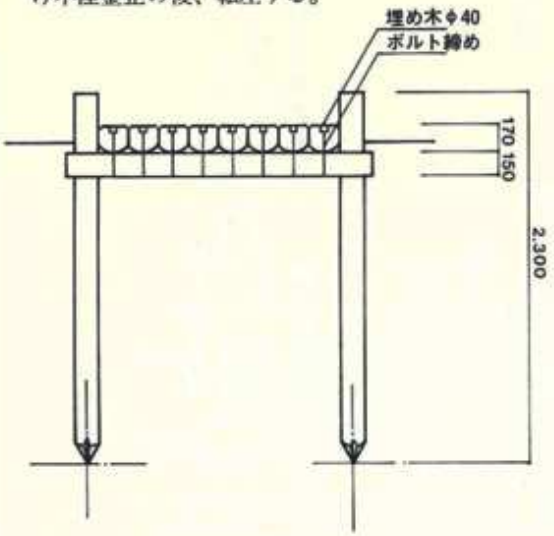
その他のルートは巾員1.2mとし縁石をもうけず不陸整正の後、転圧する。

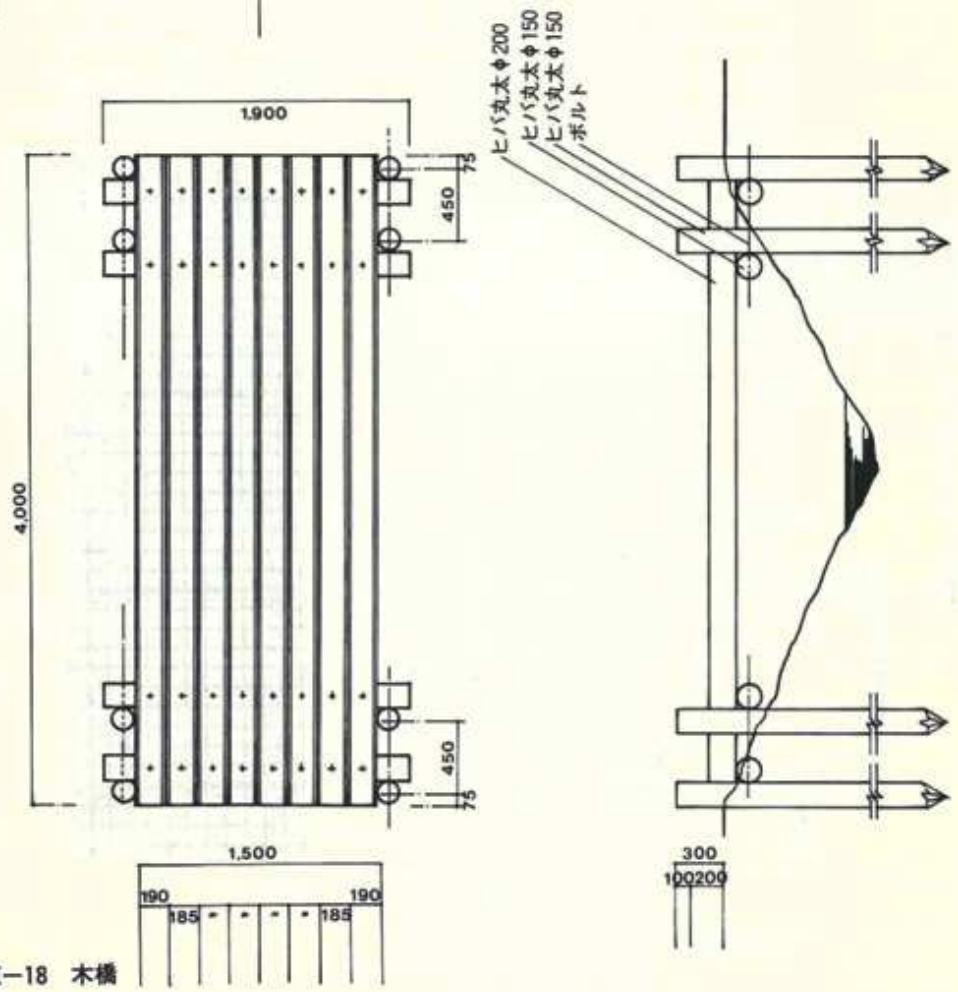
巾員1.6mの園路のうち、最も主要な上国寺―自然研究路――夷王山山麓のルートは、平坦部建物跡への下からのアプローチ部分及び館神八幡宮跡への上からのアプローチ部分に藤棚のトンネルを設け遺跡の存在を印象づける。

園路が桧の沢、宮の沢、寺の沢の川を横断する所には木橋を設ける。木橋は、巾1.5m長さ4mの丸太組みとする。

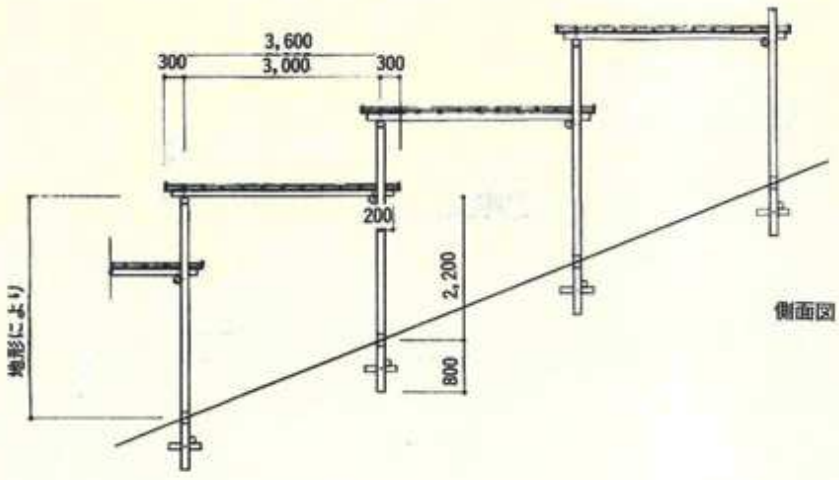
なお、谷筋を通る園路は雨水で流出するのを防止する為、張芝側構をもうけ要所で沢に排水する。

また、25%勾配以上になる斜面には階段を設ける。階段は丸太で土どめをし、転圧する。

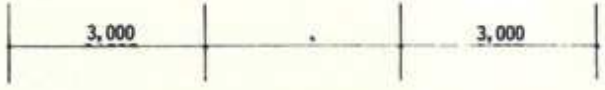


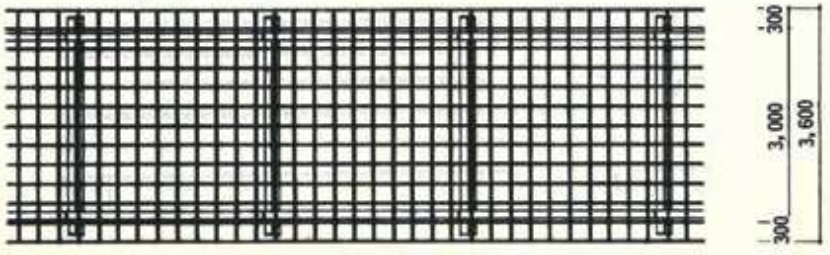


図Ⅶ―18　木橋

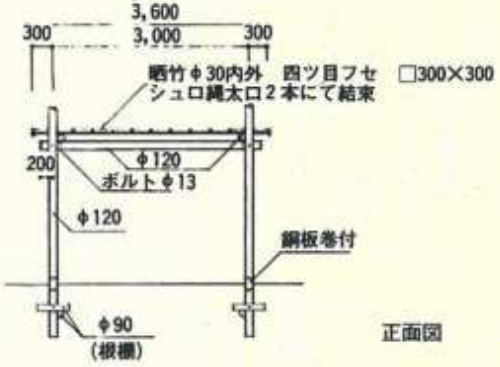


側面図





平面図



正面図

※仕様

○丸太はヒバ材とし、C.C.A防腐加圧注入加工処理とする。

○丸太はベズナー加工とし、うす焼き仕上げとする。

○ボルト、ナットはφ13メッキ仕上げとし、木部を座掘り し落し込みとする。

図Ⅶ−19　藤棚トンネル

3．利便施設整備実施設計

(1) 案内板等

＜基本方針＞

勝山館跡の見学者の利便を高めるため、遺跡の位置、歴史的意味、道順などの情報を提供する案内板等を設置する。案内板等は遺構と一体に目にふれるものであり、素材は重厚で永続性を感じさせるものとし、デザインも落ちついたものとする。

＜整備内容＞

設置する案内板等の種類は次の４つである。

①案内板――各遺跡の位置と道順を地図に示す。

②誘導指示板――園路の要所において各遺跡の方向を示す。

③説明板――各遺跡の歴史的意味等を解説する。

④表示板――遺構の近くに設置し名称を示す。

各々の配置は「上之国勝山館跡整備計画図」(付図３）に示す。

素材は、特に遺構と一体に設置される説明板、表示板は、みかげ石をつかい、その他は木製とする。

＜設計＞（図Ⅶ－20～23）

① 案内板――館神八幡宮跡の櫓跡をデザインモチーフに木丸太を壁状に連ね、アルミ板に各遺跡の位置と道順を示した地図をシルク印刷したものを取りつける

②誘導指示板―木丸太の支柱に遺跡の名称を印した矢印状の板を遺跡の方向を示すように取りつける。

③説明板―バーナー仕上げのみかげ石に、アルミ板に遺跡の歴史的意味等をシルク印刷したものを取りつける。

④表示板―白みかげ石を地上高16cmになるよう埋め込み遺構の名称をしるす。全体はビシャン仕上げとするが名板部のみ磨き仕上げとし名称を彫り込む。

(2) 休憩施設

＜基本方針＞

見学者の休憩施設として四阿、便所等を設ける。休憩施設のデザインは、中世様の建物デザインあるいは館神八幡宮跡の土塁頂部櫓跡をデザインモチーフに木の円柱形を基本とし周りに植樹を施し、目立たぬようにするとともに休憩者に木陰をつくる。

＜整備内容＞

休憩施設は四阿、藤棚、縁台、スツール、便所、水飲台、クズ入れ、灰皿を設置する。

四阿は中世の遺構をしのばせる板葺きとし、平坦部建物跡の中央西側と館神八幡宮跡南側に設置する。藤棚は、平坦部建物跡の中央東側に自然研究路をはさんで四阿と対称の位置に設置し、休憩ゾーンを形成する。

縁台、スツールは平坦部建物跡の眺望の良い場所に設置する。

便所、水飲台は、平坦部建物跡の四阿近く、笹浪家周辺、夷王山下に設ける。

クズ入れ、灰皿はこれらに併置する。

施設の位置は、「上ノ国勝山館跡整備計画図」(付図３）に示す。

＜設計＞（図Ⅶ－24～31）

四阿―大きさは２間×２間、屋根は寄棟板葺とし木材はヒバを使用する。床は洗い砂利敷とする。Ｌ字にベンチを設け、テーブルを３台置く。

藤棚―大きさが4.5m×９mの棚を３基組み合わせて面的にひろがりのある木陰をつくる。

材料はヒバ丸太と晒竹を用いる。

縁台―大きさは1.6m×1.6m。直径20cmの丸太をタイコ落しにし地表高40cmに敷き並べる。

木材はヒバを使用する。

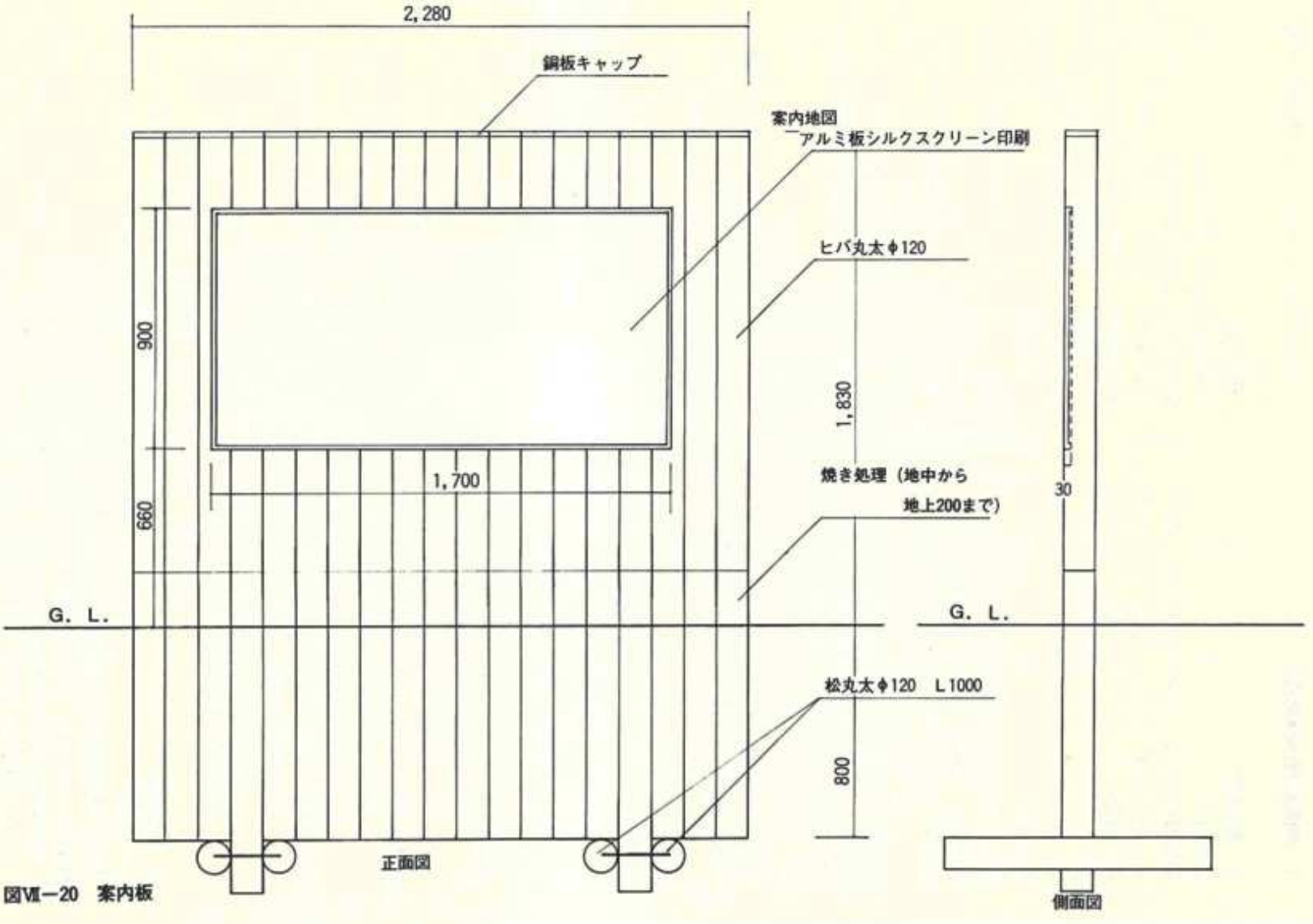
スツール―直径45cmのヒバの丸太を使用。高さ30cm、45cm、60cmの３種を組み合わせて設置する。

水飲台―直径35cmの円柱形。本体は磁器製とする。

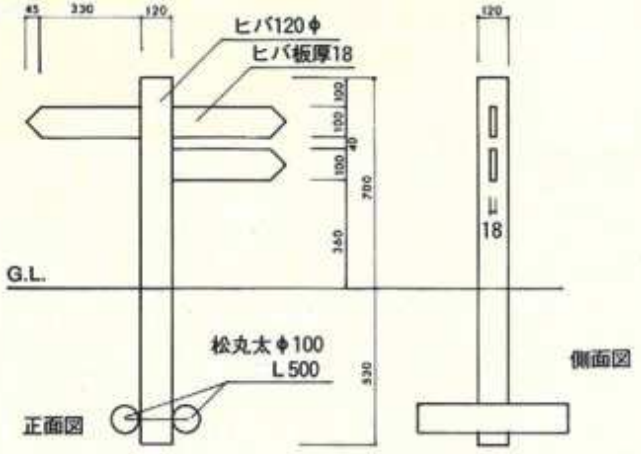
便所―大きさは２間×1.5間。屋根は寄棟板葺とし、形態は四阿と類似したものにする。材料はヒバを使用する。

灰皿―半割丸太をくりぬき、受皿を埋めこみ再接合し円柱状とする。木材はヒバを使用する。

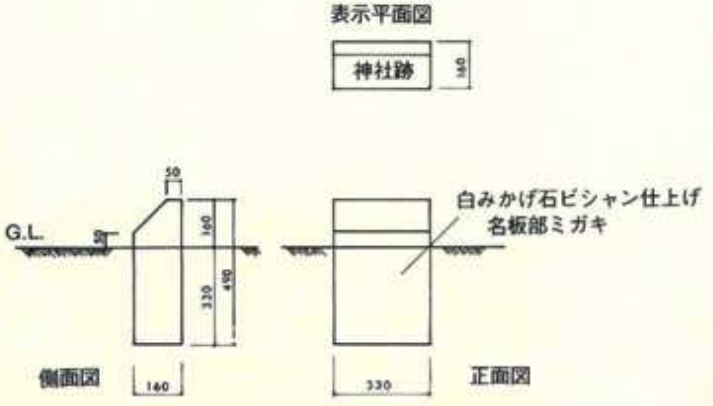
クズ入れ―円柱形の鉄のフレームに木板を羅張りする。木材はヒバを使用する。


2,280
鋼板キャップ
案内地図
アルミ板シルクスクリーン印刷
ヒバ丸太φ120
900
660
1,700
1,830
焼き処理（地中から
地上200まで）
G．L．
松丸太φ120　L1000
800
正面図
30
G．L．
側面図

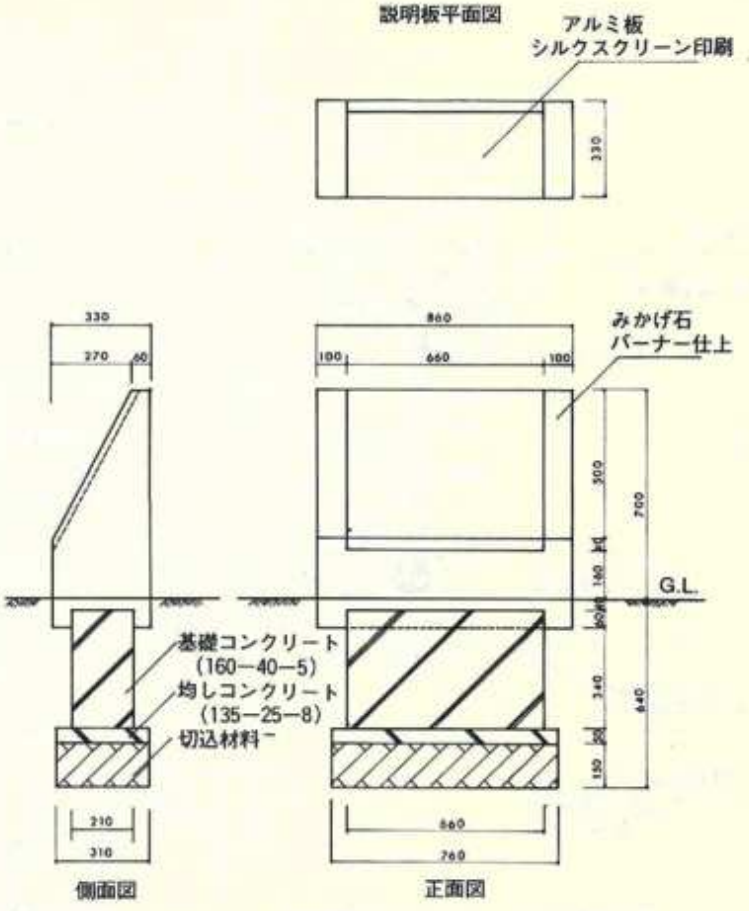
図Ⅶ－20　案内板



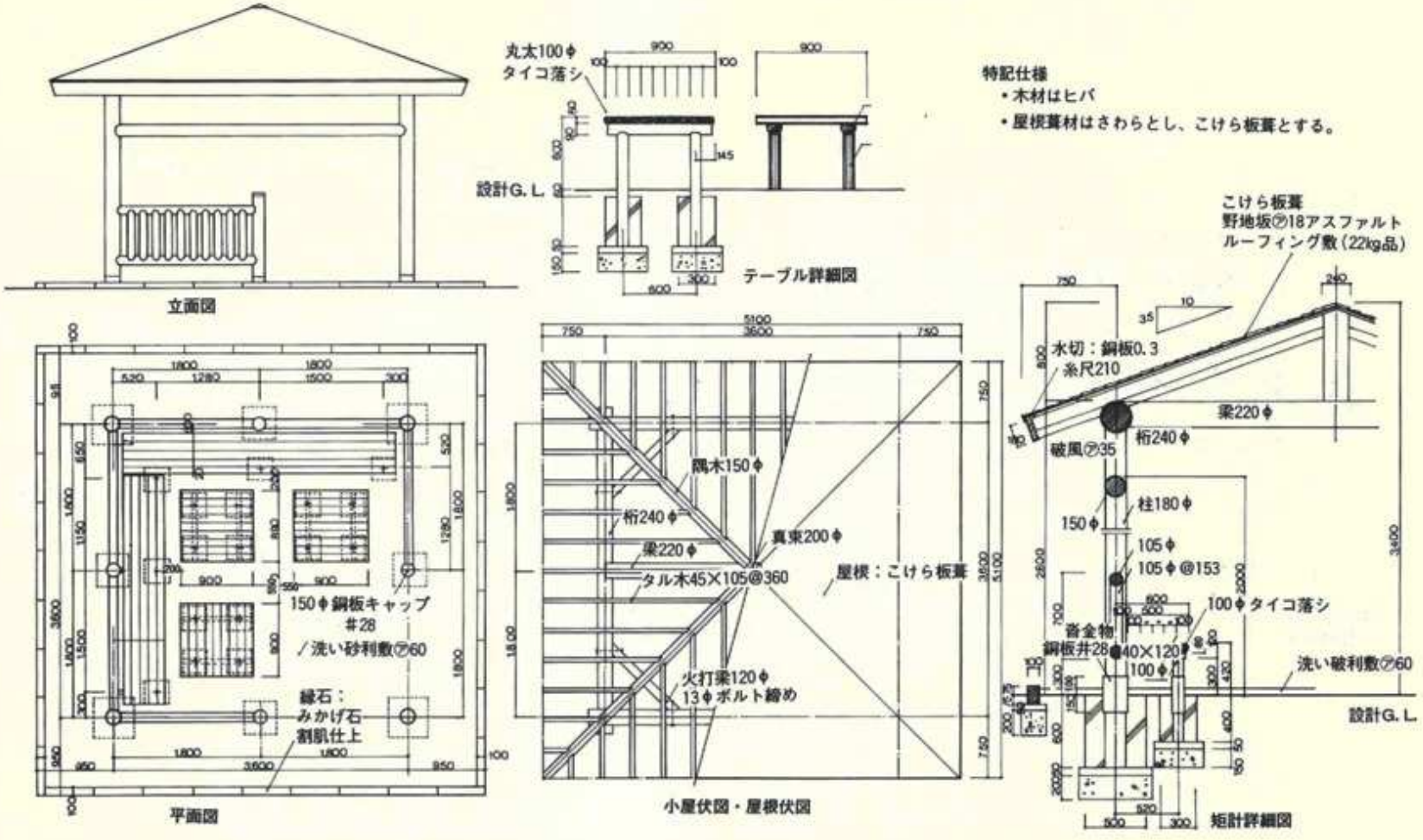
図Ⅶ－21　誘導指示板



図Ⅶ－23　表示板



図Ⅶ－22　説明板

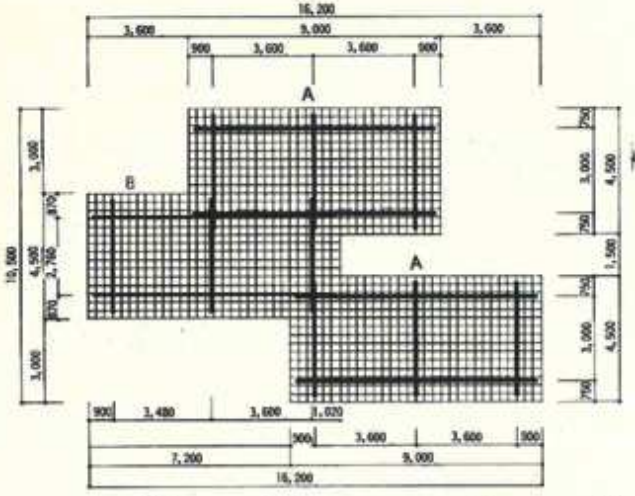

立面図
丸太100φ
タイコ落シ
900
100
145
設計G. L.
300
テーブル詳細図
特記仕様
・木材はヒバ
・屋根葺材はさわらとし、こけら板葺とする。
こけら板葺
野地板⑦18アスファルト
ルーフィング敷(22kg品)
水切：銅板0.3
糸尺210
梁220φ
桁240φ
破風⑦35
隅木150φ
桁240φ
梁220φ
真束200φ
タル木45×105@360
屋根：こけら板葺
火打梁120φ
13φボルト締め
小屋伏図・屋根伏図
柱180φ
150φ
105φ
105φ@153
100φタイコ落シ
金物
鋼板井28
40×120
100φ
洗い破利敷⑦60
設計G. L.
矩計詳細図
150φ鋼板キャップ
#28
/洗い砂利敷⑦60
縁石：
みかげ石
割肌仕上
平面図

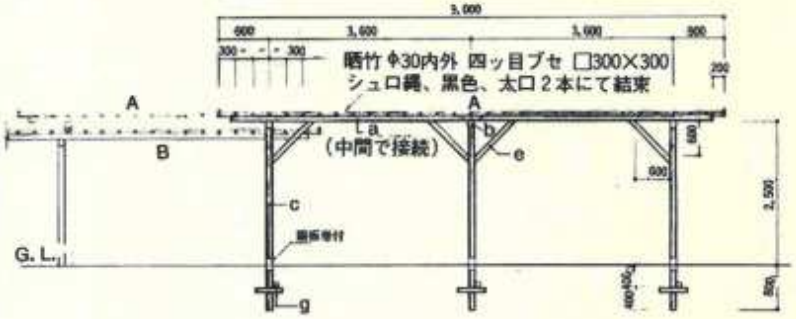
図Ⅶ－24　四阿

※仕様

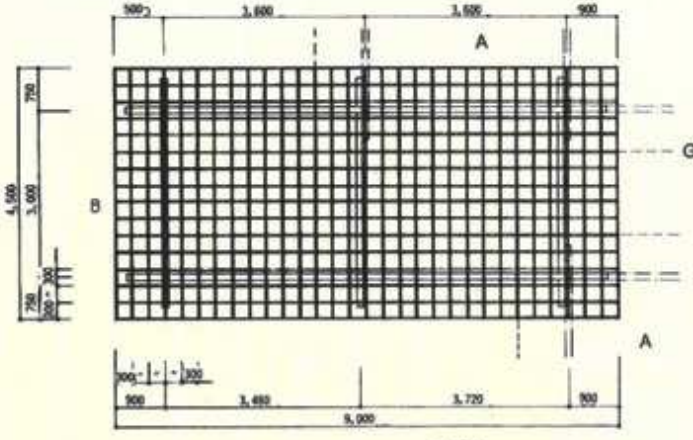
- 丸太はヒバ材とし、ＣＣＡ防腐加圧注入加工処理とする。
- 丸太はベズナー加工とし、うす焼磨き仕上とする。
- ボルト、ナットはφ13、メッキ仕上とし、木部を座掘りし落し込みとする。

配置図

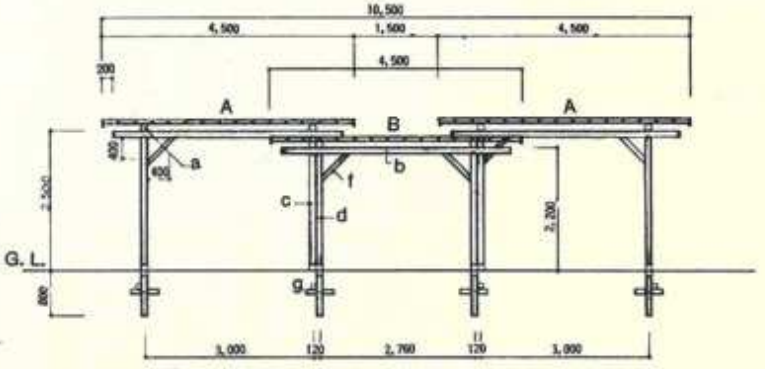




立面図



平面図

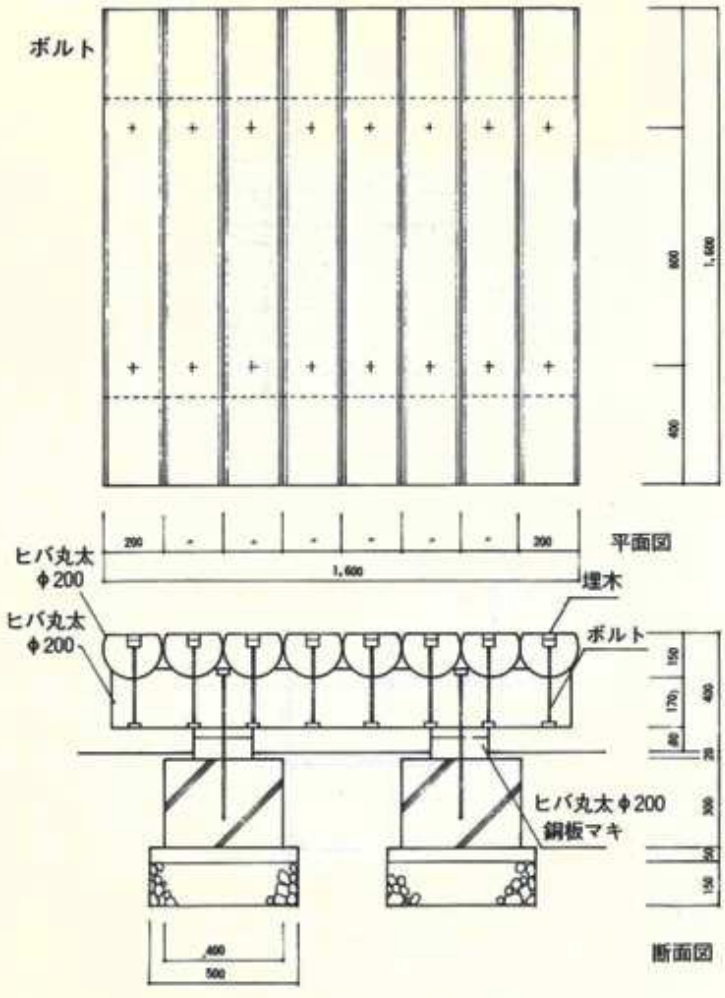


立面図

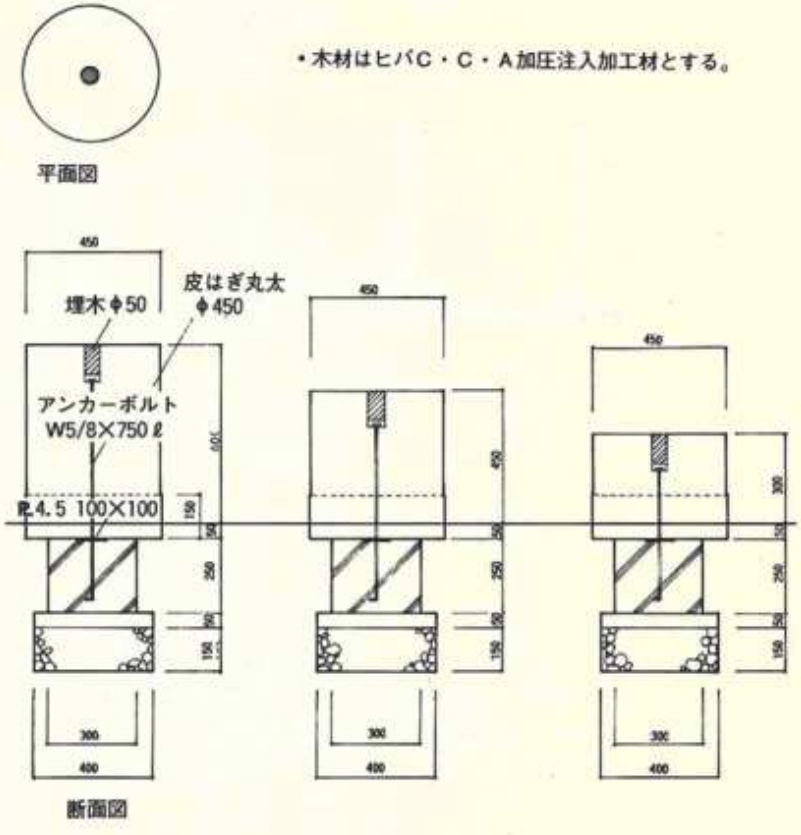
木材リスト表

記号	規　格	延　長	本数
a	φ120	4,500	12
b	〃	4,100	9
c	〃	≒3,250	12
d	〃	≒2,950	3
e	φ90	≒1,100	24
f	〃	≒ 800	18
g	〃	500	30

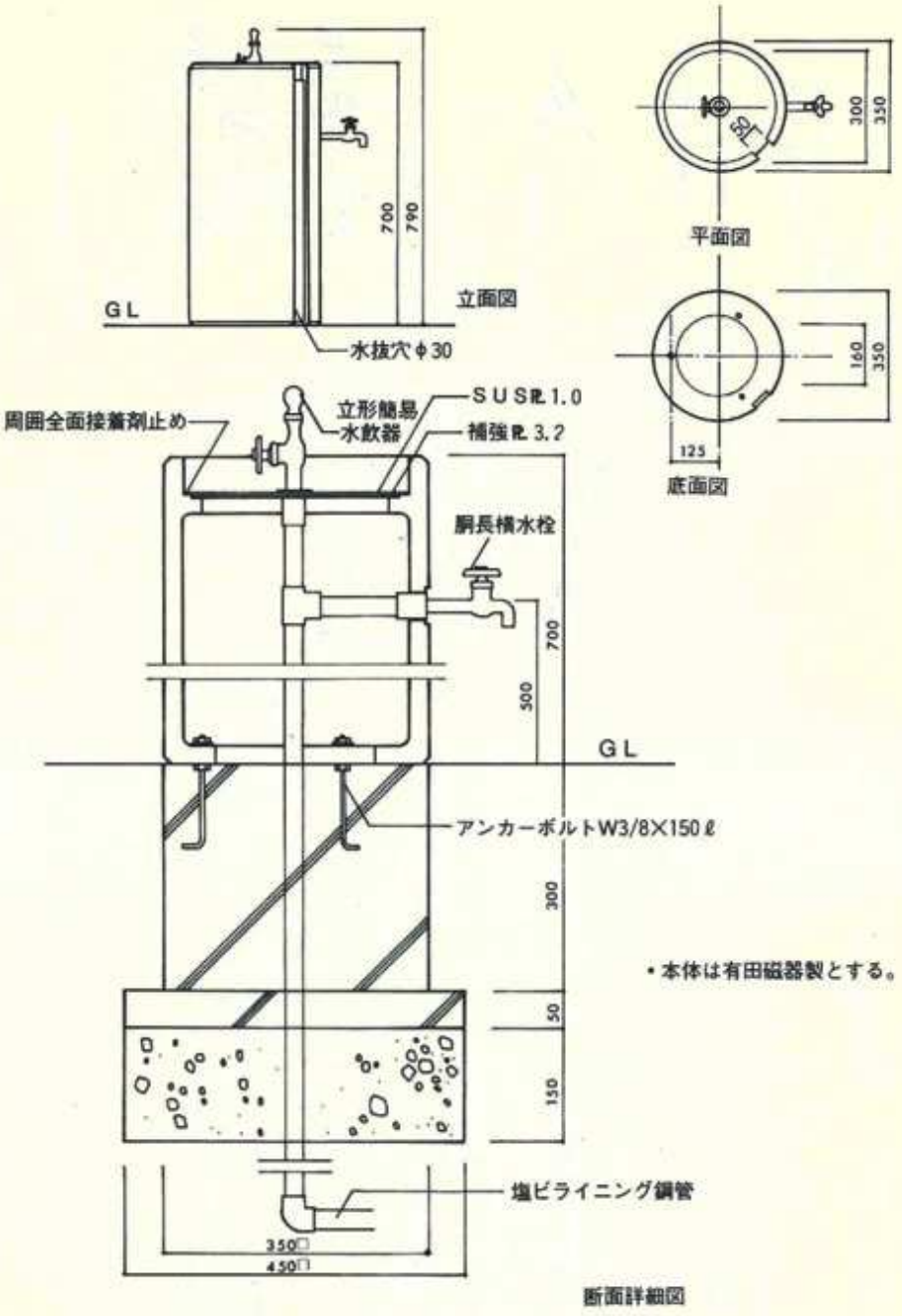
図Ⅶ－25　藤棚



図Ⅶ−26　縁台



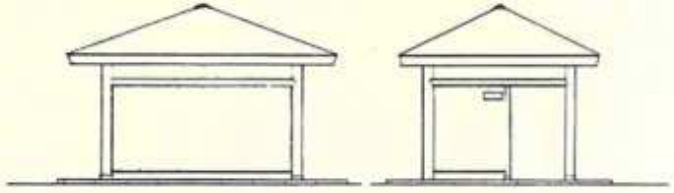
図Ⅶ−27　スツール


GL
700
790
立面図
水抜穴φ30
周囲全面接着剤止め
立形簡易
水飲器
SUSt1.0
補強t3.2
胴長横水栓
500
700
GL
アンカーボルトW3/8×150ℓ
300
50
150
塩ビライニング鋼管
350□
450□
断面詳細図
300
350
SL
平面図
160
350
125
底面図
・本体は有田磁器製とする。

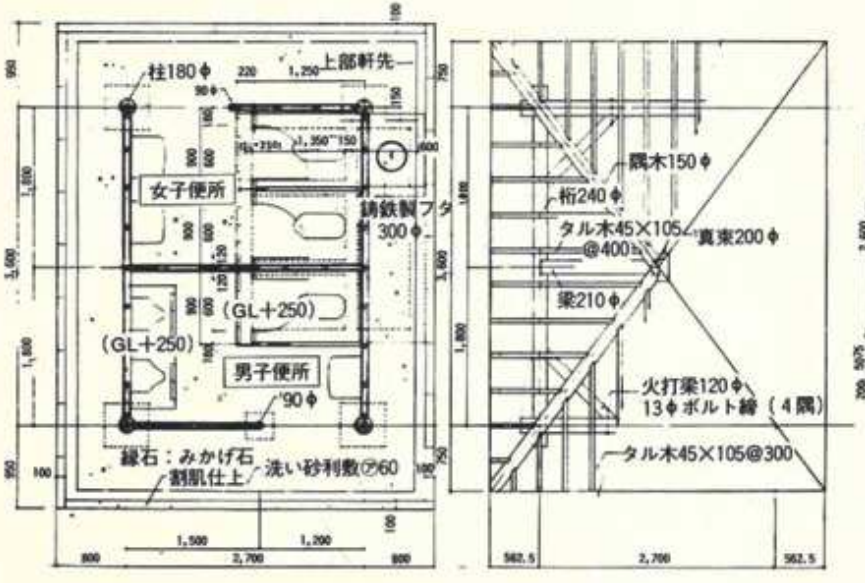
図Ⅶ－28　水飲台

図Ⅶ－29　便所

- 木材はヒバとする。
- 屋根葺材はさわらとし、こけら板葺とする。
- 衛生工事　男子便所…大便器１、小便器（中型ストール）２、洗面器１、化粧鏡１
  女子便所…大便器２、洗面器２、化粧鏡２
  - 便器は非水洗用、陶製とする。
  - 便槽は、科学無臭装置便槽とし、新栄科学工業、セイナン科学工業、または同等以上の責任施工とする。
- 表示板は350×150（２ケ処）。



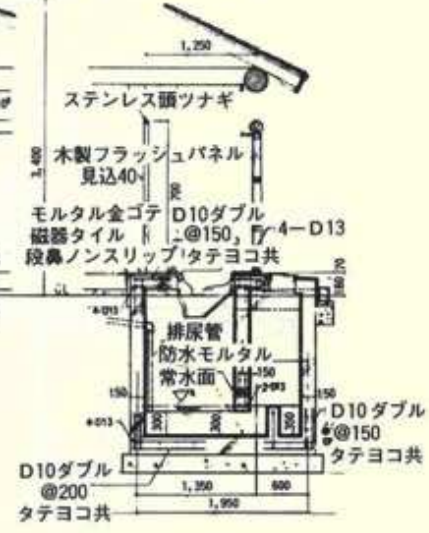
立面図



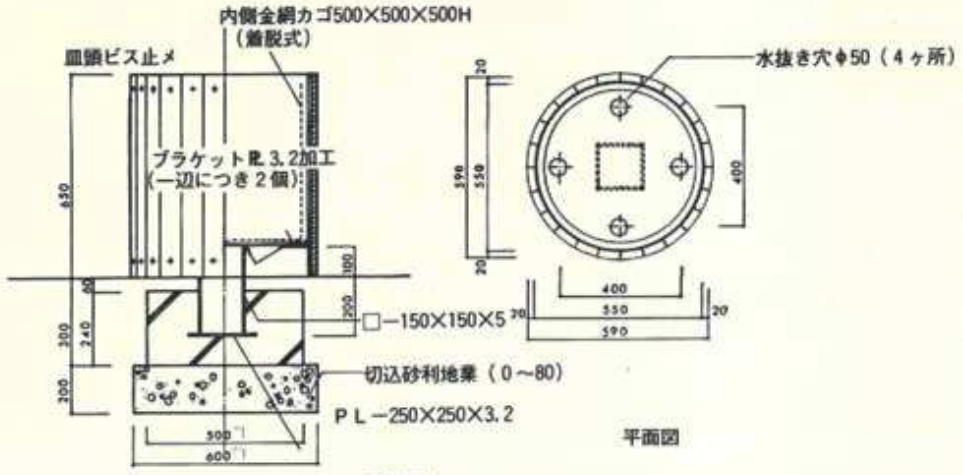
平面図

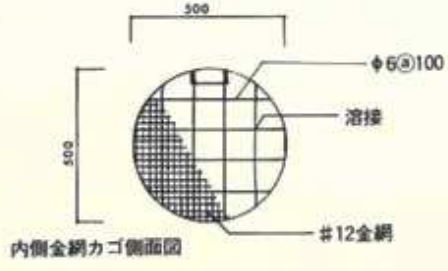
小屋伏図・屋根伏図

矩計詳細図



便槽断面詳細図

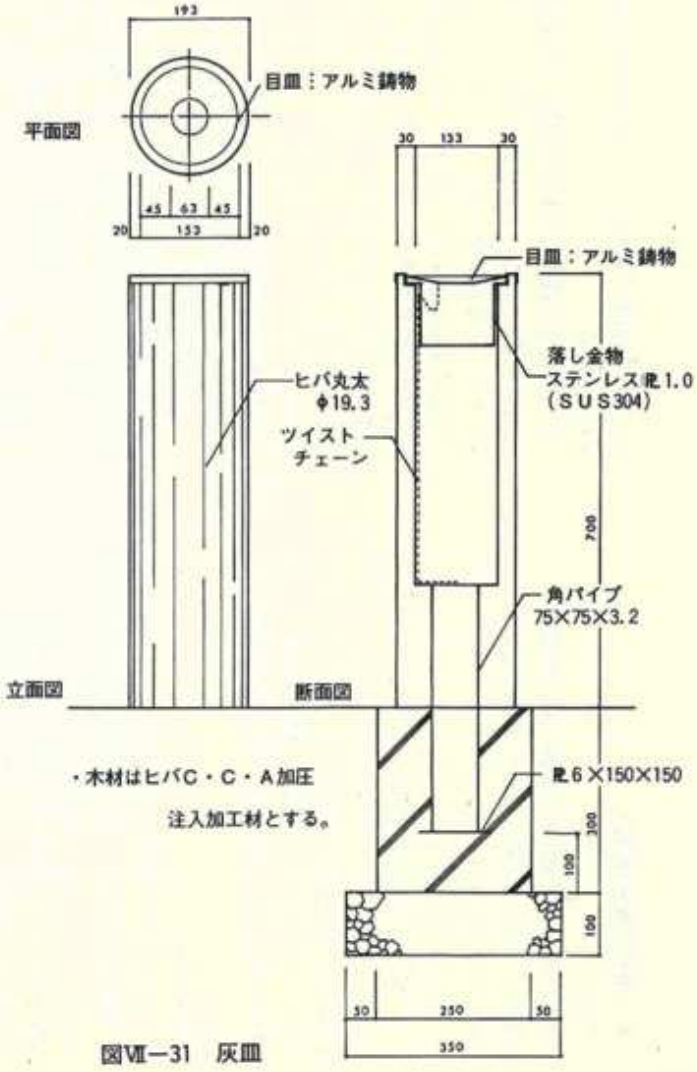




特記事項

- 鉄部の接合は、溶接とする。
- 鉄部は亜鉛メッキの上、メラミン焼付塗装とする。
- 金網は、亜鉛メッキ鉄線、#12。20mm目とする。
- 金網と丸鋼は、亜鉛メッキ鉄線にて結束する。
- 木部は、ヒバ。C・C・A加圧注入加工処理材とする。

図Ⅶ−30　クズ入れ



図Ⅶ−31　灰皿

4．植栽計画実施設計

＜基本方針＞

植栽計画は、勝山館跡の史跡公園的整備という性格から、地形的特徴を生かし遺跡の存在をうかびあがらせるのと同時に、レクリエーション資源として魅力を高めるように計画する。

その場合、勝山館跡の樹木は原則として現状の姿を生かすが、遺跡、遺構を表現するうえで必要な場合は充分に吟味し伐採する。

残すべき草木の種類、新たに植栽を行なう草木の種類の検討は植生調査及び花粉分析調査をもとにする。

＜整備内容＞

大きく3段の平坦面からなる平坦部建物跡と館神八幡宮跡の台地は、勝山館跡の地形的特徴をよくあらわしている。この形をあいまいにしている草木は伐採し、縁辺部に植栽を施し形を強調する。その場合、レクリエーション資源としての魅力を高めるよう「町の花」であるエゾヤマツツジを群植する。

また、平坦部建物跡と館神八幡宮跡の台地へのアプローチ園路に藤棚のトンネルを設け、遺跡の印象を強める。

休憩施設を設置する平坦部建物跡では休憩施設と一体に木陰をつくるよう枝張りのよいケヤキ、及びエゾエノキを植樹する。

沢地は現状の植生を生かすが、寺の沢の湿地部に、湿性植物の群落をつくり「湿性植物園」として沢地の印象を強めると同時に自然観察の場となるようにする。

＜設計＞

平坦部建物跡及び園路にかかわる植栽計画については、各々の整備実施設計の中で詳しいので、ここでは重複をさける。

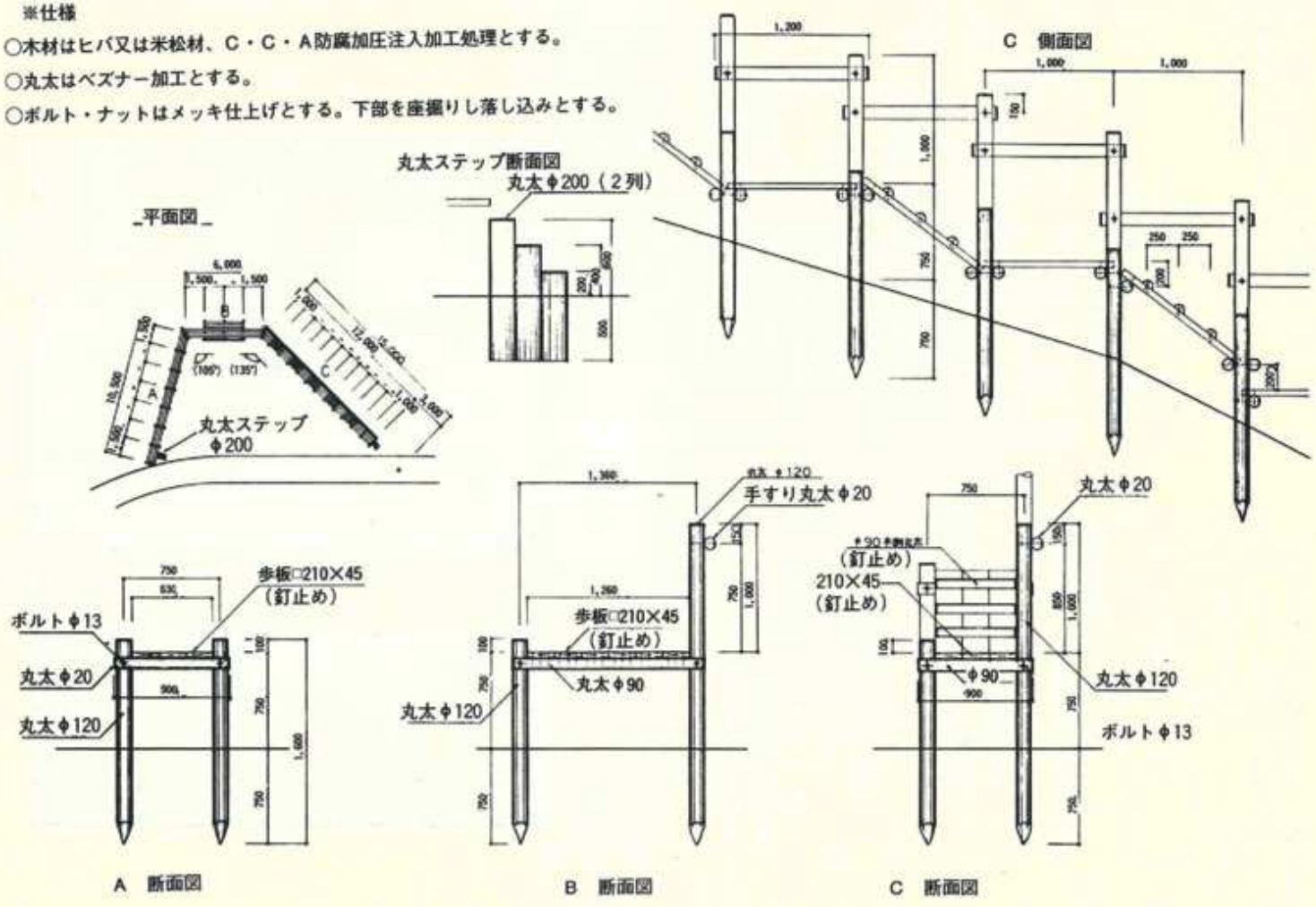
湿性植物園は、寺の沢内用水施設跡の水飲み場と貯水池跡の中間の湿地部につくる。植物の種類は、ミズバショウ、エゾノリュウキンカ、ザゼンソウを中心とする。園路から内法63cm巾の木道を渡し真近に観察できるようにする。(図Ⅶ－32)

※仕様

○木材はヒバ又は米松材、C・C・A防腐加圧注入加工処理とする。

○丸太はベズナー加工とする。

○ボルト・ナットはメッキ仕上げとする。下部を座掘りし落し込みとする。



図Ⅵ－32　湿性植物園木道

Ⅶ－3　アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺）の町並み整備

国道228号線から勝山館跡に登る入口付近には上国寺、上ノ国八幡宮、笹浪家住宅などの歴史的建造物が集積しており、周辺環境を整備することによって史跡全体の魅力は増すと考えられる。

整備にあたっては関係者の調整等が必要であり、ここでは整備の考え方を示すにとどめる。整備の対象としては一つにアプローチ部分の整備、もう一つは笹浪家住宅の休憩施設への転用があげられる。(付図7)

1．アプローチ部分の整備と広場の設置

①現在、上国寺庫裡横の道路が勝山館への国道からのアプローチになっているが、アプローチ道路としては狭い。

そこで、この道路の東側にある社務所を移転し跡地を広場としてそこからアプローチすることが考えられる。広場には四阿やベンチを設置し、植樹する。広場は細かい砂利敷とする。

社務所は、南側の老朽化した土蔵を取り壊し、その跡地に新築することが考えられる。その場合デザインは町並みに調和したものとする。

②上ノ国八幡宮のアプローチ道路は現在、アスファルト舗装になっているが、ここの環境にはなじまない。

これを、中央部約1.5mは石敷に、両端は縁石で境界をはっきりさせ、さらにまわりを細かい砂利敷とすることが考えられる。

2．笹浪家の休憩施設への転用と周辺の整備

①勝山館へのアプローチ付近に、休憩施設を設けることが必要であるが、ここでは建物を新築するよりも場所や建物自体としてふさわしい笹浪家の転用を考える。(図Ⅶ－33)

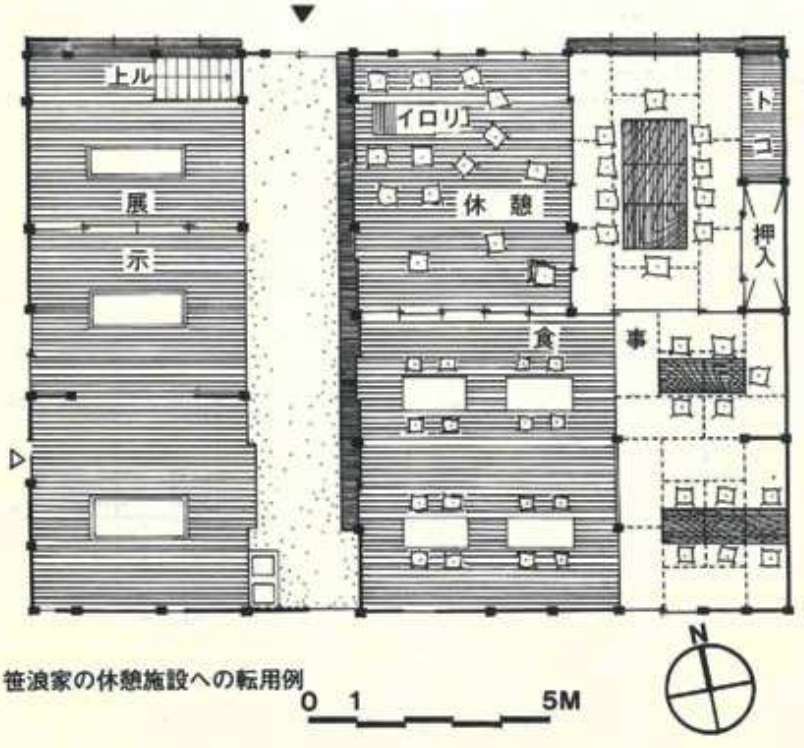
機能としては、単に休憩するだけでなく軽い食事もできるようにする。

将来の文化財指定の可能性や建物の歴史性などを考えると原則として元のプランを変更せず転用をはかるようにする。厨房は付属に設ける。

②笹浪家の南側に便所を設ける。その位置は、笹浪家の土間からアプローチできるように土間の直線上に設ける。デザインは和風とし、まわりを木立で覆う。

③笹浪家を休憩施設に転用すると同時に、笹浪家の周辺の整備も行なう。

(イ) 植樹、張芝等、まわりを造園する。
(ロ) 笹浪家のアプローチ道路は石敷とする。
(ハ) 厨房へのサービス路および便所へのアプローチ路を整備する。
(ニ) 川に橋を架け、広場と結びつける。
(ホ) 川の両側に植樹し、並木をつくる。



図Ⅶ－33　笹浪家の休憩施設への転用例

Ⅶ－4　資料館

1．資料館の位置づけ

一般にこの種の地形のみに痕跡をのこした遺跡や地下遺構などは、その価値を知るために歴史知識と想像力とが必要であるが、一般の見学者すべてにそれを期待するのは無理であり、歴史や遺構の全体について、予備知識を与える必要がある。また調査研究の推進、出土品や歴史資料の保護、展示のための施設も必要である。このための施設として、資料館を設ける。その位置づけをまとめると以下のようである。

①遺跡空間の環境造型の魅力を一層きわだたせる空間装置

②遺跡の表現をわかりやすく説明する、歴史との対話装置

③出土品を中心とした歴史資料の収蔵、展示装置

④道南における中世歴史文化研究センター

⑤地域づくりの核となる町の主要な文化施設

⑥道立規模の「中世資料館」あるいは「道南歴史資料館」の位置づけ

2．敷地候補地の条件

資料館は、市街地形成の核になるべき施設でその位置は、町の将来像を考慮した都市計画の中で考える必要がある。上記の資料館の位置づけと都市計画的視点をふまえ、資料館のあるべき環境として敷地候補地を８地区想定した。各地区の諸条件については、表Ⅶ－１に示す通りだが、とくに考慮すべきポイントについて二、三述べておく。

①敷地が広くとれ、遺跡とも有機的に連続し、かつ市街地に近く町民の利用が便利であるという三つの主条件をすべて満たす敷地は現地点において設定することは困難である。

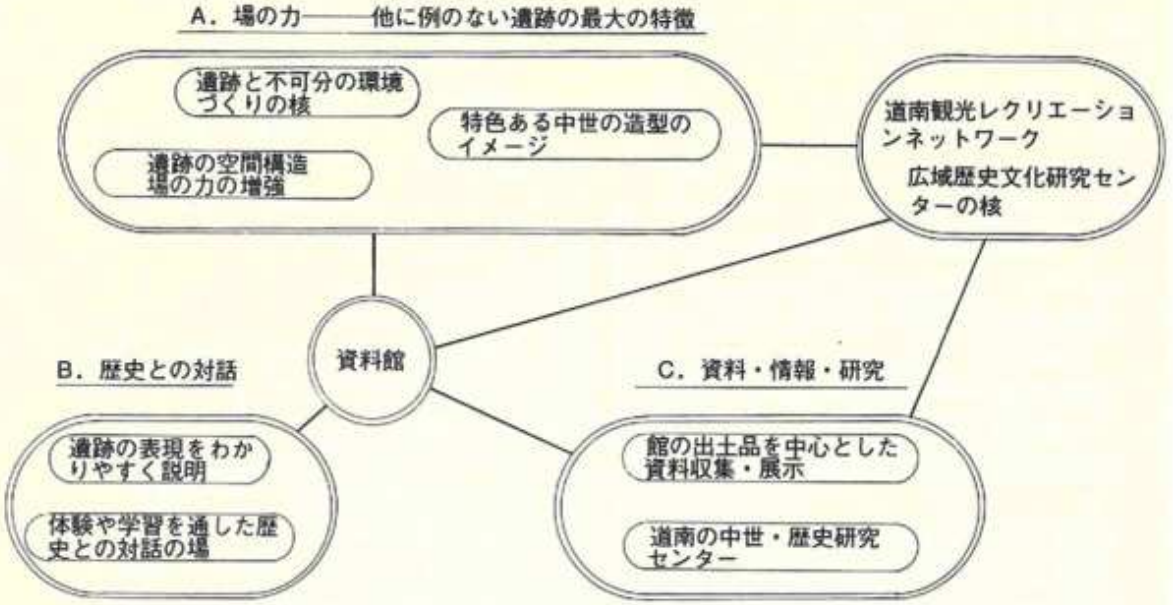
②敷地候補地を、主条件で分類すると、候補地１は敷地が広い、２は敷地が広く遺跡とも有機的に連続するタイプ、３は遺跡と有機的に連続し、市街地に近いタイプ、４－８はいずれも市街地に近く、かつ７－８が比較的広く敷地をとるタイプである。２つの条件を満たすものが２、３、７、８である。

③町民の利用しやすさもたしかに大きい条件だが「遺跡資料館」としてやはり遺跡との環境的つながりを重視したい。この点から２、３が条件を満たす候補地となる。

④３については上国寺・笹浪家等の歴史的環境と一体の資料館の位置としては申し分ないが、広い敷地が確保できない。

⑤２については、遺跡と隣接して館跡を一望できる環境、館が建っていたのと同様の丘陵地形、広い敷地、眺望、夷王山山麓などすぐれた環境条件をもつ。反面、アプローチ道路の確保、冬期間の除雪を含めた運営の問題などの課題もある。しかしその課題も運営上の面も含め解決できる点もあり、候補地として考慮されるべき地点である。

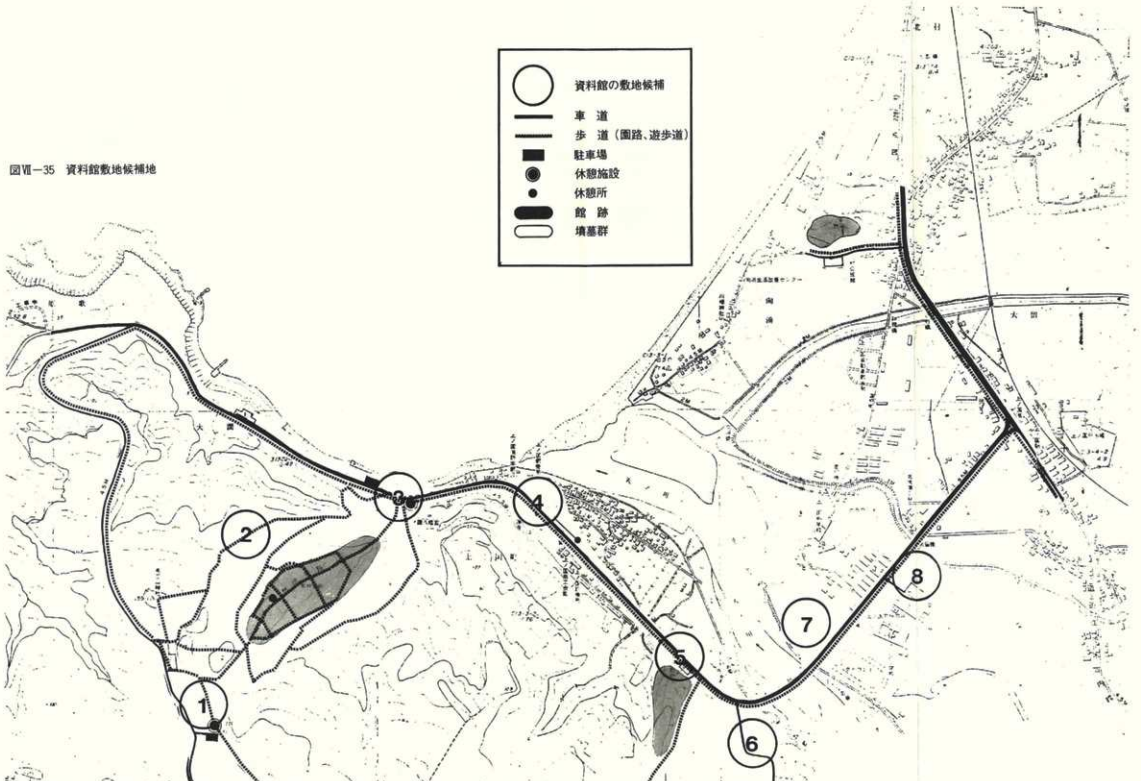
図Ⅶ－34　資料館の位置づけ



表Ⅶ－1　敷地候補地の条件

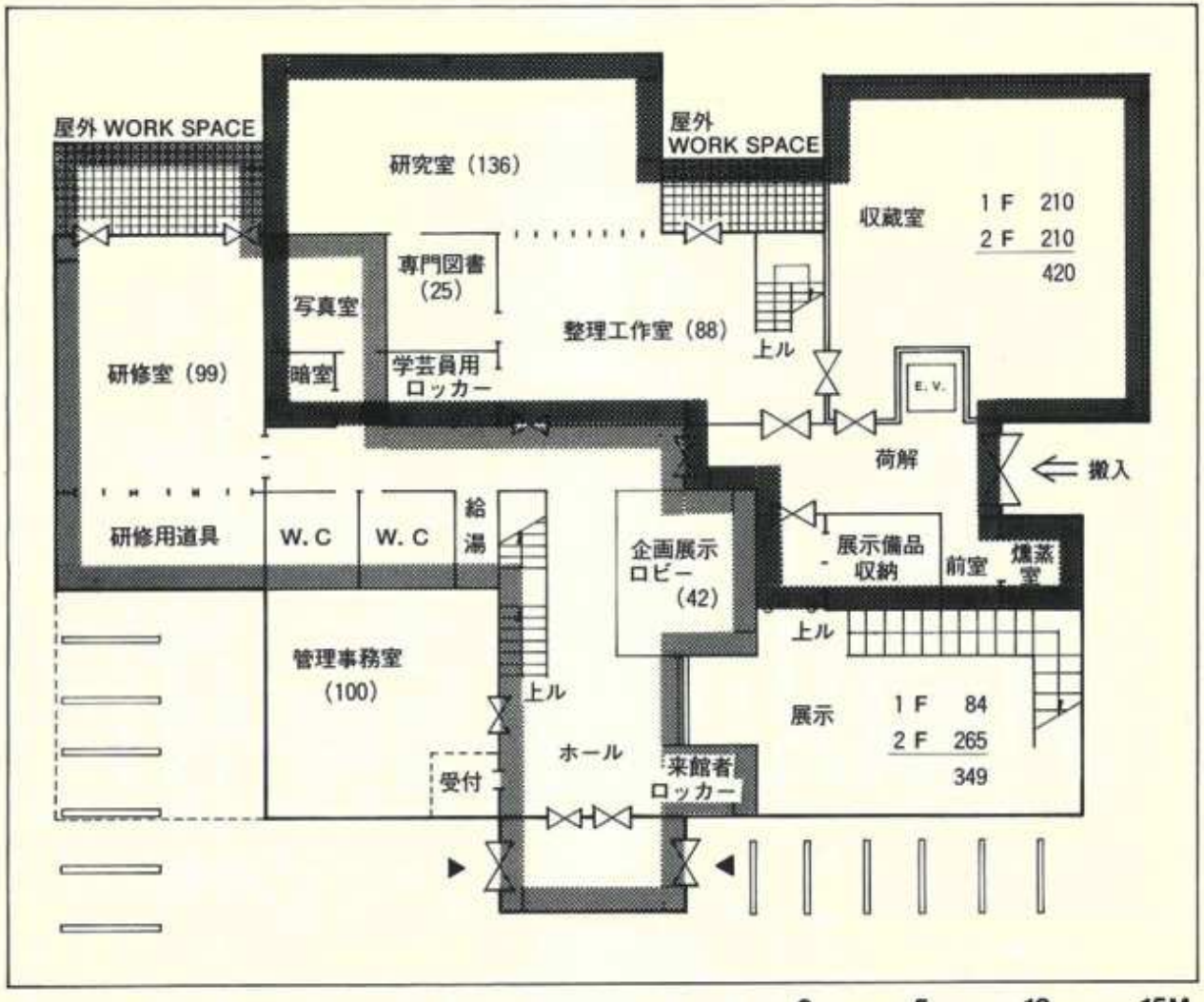
候補地	敷地面積	交　通	土　地	利用の形態	評価・その他
1	(㎡) 4,000	町道	展望台頂部 ゆるい傾斜地 1/10 眺望・良	資料館利用中心 冬期利用困難	敷地・広、 交通便・悪 冬期利用困難
2	4,000	町道＋アプローチ路の必要性	寿王山山麓 ゆるい傾斜地1/10 眺望・良	資料館利用中心 冬期利用困難	敷地・広、 交通便・悪 冬期利用困難
3	1,000 (50×20)m	国道 漁港整備道	海岸部 上国寺・埋立地 笹浪家 眺望・良	歴史文化財と一体利用　資料館＋公民館、図書館	敷地・狭小　歴史的環境のアメニティの向上 遺跡との連続性
4	1,000 (50×20)m	国道228号	郷土館 商工会館　平地 診療所	社会福祉施設との一体利用　資料館＋公民館、図書館	敷地狭小
5	2,500	国道228号	花沢館入口 農地	遺跡との連続性 資料館＋公民館、図書館	遺跡との連続性
6	1,000 (35×30)m	農道	花沢公園隣地 傾斜地	遊水公園の核 資料館＋図書館、公民館	敷地狭小 遊水公園構想の核
7	3,000	国道228号	天ノ川沿い 平地 グランド	遊水公園の核 資料館＋公民館、図書館	遊水公園構想の核
8	2,000	国道228号	役場＋ 公共施設ゾーン 平地	中心市街地の形成 資料館＋公民館、図書館	公共施設ゾーンの形成

図Ⅶ－35　資料館敷地候補地

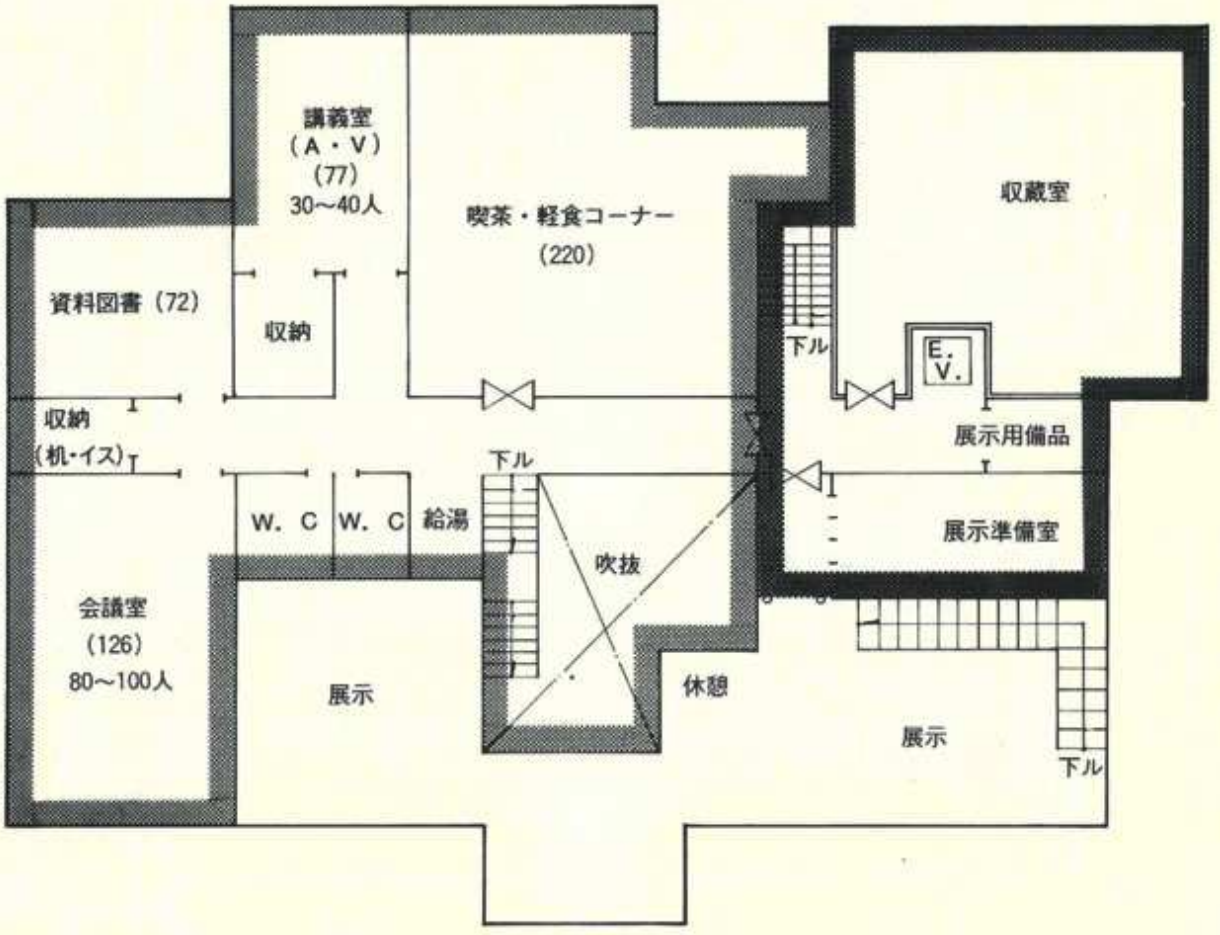


表Ⅶ－2　必要諸室

●展　示　室	原則として平屋、採光条件	
	倉庫（収納）ロビーとのつながり	
企画展示室	玄関ロビーとのつながり	面積不足のときは収納展示も
展示準備室	搬入口に近いこと	
	整備工作室を兼ねることも	
収　納　室	二重壁（二層も）独立性大・特別収蔵庫	
●研　究　室	展示、収納室とつながること	
	学芸員控え室・図書	一体 居住条件のよいところ
整理工作室	出土品の整理・展示の為の準備倉庫	
	必要小道具・屋外スペースとのつながり・水まわり	
燻　蒸　室	前室をつける、機械室とのつながり	
	整理工作室と機械室とのつながり	
写真室・暗室	整理工作室とつながる	
荷　解	搬入口と整理工作室・洗場	
●研　修　室	ロビーとのつながり・屋外スペースとのつながり	
	学習・実習のための器具	
屋外ワークスペース	学芸員の作業と屋外実習	
講　義　室	研修室とのつながり、会議室とのつながり	
視聴覚室	講義室にA.V装置をくむこと	
W.C.　給　湯		
●会　議　室	大・小	
資料図書	郷土資料・歴史資料	
談　話　室		
軽食喫茶		
W.C.　給　湯		
●ホール・ロビー	資料館見学者と会議、図書室利用者の動線分離、有機的結合	
管　理	施設全体の管理業務	
	研究室とのつながり	
W.C.		
広　場		



図Ⅶ−36　ブロックプラン（1階）



図Ⅶ－37　ブロックプラン（2階）

0　5　10　15M

Ⅶ－5　利用計画

1．関係地域の人口

整備施設周辺への入込み客の想定にあたっては、立地条件からマイカーを利用した日帰り客が大半を占めるものと予想される。自動車による日帰り圏域（距離にして90－100km）をベースに、上ノ国町の影響圏なども考慮して利用圏域を設定した。利用圏域内自治体を函館市、桧山支庁、渡島支庁の1市25町、1村の計27自治体と設定すると、利用対象となる人口は、表Ⅶ－3より587,484人を得る。

表Ⅶ－3　上ノ国周辺地域の人口

	世帯数	人口
函館市	116,091	321,988
桧山支庁	**22,176**	**72,816**
江差町	4,554	13,626
上ノ国町	2,772	9,135
厚沢部町	2,072	6,610
乙部町	1,958	7,092
熊石町	1,763	6,304
大成町	1,285	4,014
奥尻町	1,709	5,388
瀬棚町	1,147	3,982
北桧山町	2,315	7,895
今金町	2,601	8,770
渡島支庁	**56,747**	**192,680**
松前町	4,994	17,377
福島町	3,011	10,601
知内町	2,080	7,591
木古内町	2,975	9,363
上磯町	9,611	30,993
大野町	2,692	9,180
七飯町	6,516	22,261
戸井町	1,363	5,429
尻岸内町	1,727	7,323
椴法華村	617	2,450
南茅部町	2,598	10,229
鹿部町	1,324	5,087
砂原町	1,603	6,261
森町	5,559	17,920
八雲町	6,658	19,993
長万部町	3,419	10,622

資料：住民基本台帳　S58

2．上ノ国町周辺の観光動向の分析

道南地方の観光客の入込数は、表Ⅶ－4に示すとおりである。上ノ国に関係の大きい江差、松前については、総数は、それぞれ562,998人、412,100人であり、合計は、975,098人である。内、日帰客はそれぞれ412,919人、359,200人、で合わせて772,119人である。上ノ国町の観光資源が、江差、松前の「歴史の道」のルートにのって周遊する観光動向をつくり出せれば、上記の数字が上ノ国の入込数の目安となる。また、三町から函館にかけての観光資源を今まで以上に総合的に結びつけ、道南地域の歴史文化観光の印象性を全道・全国に高めることが必要である。

3．勝山館跡周辺の観光対象としての誘致性

勝山館跡周辺の観光資源としては、夷王山、夷王山墳墓群、上之国勝山館跡、花沢館跡、上ノ国八幡宮、上国寺、洲崎の館、洲根子岬、大崎海岸キャンプ場、湯ノ岱スキー場、湯ノ岱温泉があげられるが、いずれも現時点ではCランク（日本交通公社ガイドマップのランク）であり、誘致圏域は広くない。また、行中行事としては天ノ川夏まつり、夷王山まつり、湯ノ岱温泉まつりなどがある。これらのまつりは、松前の桜まつりや、江差の大祭、追分全国大会などとともに連動させ、積極的に上ノ国のイメージアップをはかるイベントとして育てていくことが必要である。

4．来訪者数の予測

現状での、上ノ国町の観光動向は資源としても評価が低く、広域の回遊観光ルートにもうまく乗っていないため、全般に不活発である。

しかし、勝山館跡を中心とする史跡・自然公園の潜在的魅力をあげれば、以下の点が数えられる。

(A)　歴史的価値――北海道中世創成期の重要な歴史舞台

(B)　回遊観光――函館から松前、江差と続く「歴史の道」ともいうべき歴史・文化観光の回遊路。さらに、道南に残る中世の12の館跡を歴史のネッ

表Ⅶ－4　道南の観光動向

都道府県	主要観光地	総数	県外客	県内客	宿泊客	日帰客	備考
北海道	昭和58年4月～59年3月	85,640,392	25,352,043	60,288,349	16,664,626	68,975,766	県内の主要観光地を有する市町村からの報告に基づき集計。(人)
	道南地域	7,737,081	2,295,685	5,441,396	2,034,603	5,702,478	
	函館	2,454,612	1,206,035	1,248,577	1,331,643	1,122,969	
	松前	412,100	88,900	323,200	52,900	359,200	
	大沼	1,981,740	578,733	1,403,007	220,745	1,760,995	
	恵山	618,732	144,742	473,990	49,587	569,145	
	長万部	445,920	116,168	329,752	15,549	430,371	
	江差	562,998	80,696	482,302	150,079	412,919	

資料：月刊「観光」85．1月号より㈶日本観光協会

トワークとして回遊路の核としたい。

(C) 雄大な自然景観――国見山型の景観構造をもち、かつダイナミックな自然海岸線の風景を合わせた雄大な自然景観

(D) 四季の味わい――5月の桜、6月の夷王山まつり、夏の天ノ川まつり、秋の八幡宮のまつり、冬の男性的な景観と、四季の変化がある。

(E) 緑の絨毯――台地平坦部、夷王山山麓は、芝生、野草の遊べる緑の絨毯とし、活発なレクリエーション空間をつくり出せる。

(F) ハイキングコース――自然研究路や、古道を利用した園路等の整備により、景色、自然、歴史等を多様に楽しめるハイキングコースが生まれる。

(G) 歴史的町並み――上国寺、八幡宮、笹浪家と続く町並みは、背後の鎮守の森の緑とともに、歴史的な景観をつくっており、整備が十分行なわれれば、文化財的にも価値が高い観光資源となる。

(H) 資料館――多様な出土品を中心に、生きた歴史学習、自己啓発的レジャー装置としての観光資源となる。

(I) 海、川――今後のレジャー空間にとって、海、川の水辺空間は大きな資源となる。

以上のように、多くのすぐれた観光的魅力を勝山館跡を中心とする環境は潜在的に保持している。この資源が十分に今後の環境整備やイベントによって開発されるという前提のもとに以下、来訪者数の予測を行う。

入込み客の想定に使用する各指標は、次のとおりである。

・国民1人当りの日帰りレクリエーション回数（北海道）1.86回

・国民1人当りの宿泊観光レクリエーション回数（北海道）1.30回

(1) 日帰りの客の想定

想定式＝利用対象人口×日帰りレクリエーション回数×発生率×吸引率

日帰りレクリエーション発生率を表Ⅶ－5を参考に推測すると、表Ⅶ－6の算定により、45.3%となる。吸引率を20～25%として、先の式より日帰り客を想定すると、99,000人～123,750人となる。

(2) 宿泊客の想定

想定式＝利用対象人口×宿泊観光レクリエーション回数×宿泊先比率*×吸引率×利用圏域外利用者の比率

宿泊先比率19%、利用圏域外利用者の比率10.0%、吸引率15～20%として宿泊客を求めると、24,160人～32,214人となる。

$$587{,}484^{人}\times1.30^{回}\times19^{\%}\times(15^{\%}\sim20^{\%})\times\frac{1}{1-0.1}=24{,}160\sim32{,}214^{人}$$

*宿泊先比率：宿泊する人が、どの種の施設を利用しているかを表わした表

ex.・ホテル28%　・旅館19%　・キャンプ5%

表Ⅲ－5　日帰りレクリエーション

レクの種類	参加率（%）	
	52年	54年
登山・ハイキング	15.1	11.0
ドライブ	36.4	40.4
海水浴・潮干狩り	35.7	41.9
釣	15.0	16.5
遊園地・レジャーランド	26.3	31.0
動植物園・水族館	30.0	31.0
スキー	20.2	27.9
スケート	10.8	13.4
水泳（プール）	10.5	14.5
ブドウ・キノコ・山菜採り	21.8	21.1
ゴルフ	6.3	6.3
ボーリング	12.8	18.4
サイクリング	4.4	7.7
その他のスポーツ	6.1	8.9
スポーツ見物	13.1	14.8
まつり見物	30.0	35.9
自然散策	13.6	16.6
温泉（日帰り）	17.2	18.9
その他	3.1	4.5

資料：市民の観光レクリエーション（札幌市）

表Ⅶ－6　日帰りレクリエーション発生率の推定

想定されるレクリエーションの種類	参加率	
登山・ハイキング	11.0	A
ドライブ	40.4	
動植物園・水族館	31.0	
ブドウ・キノコ・山菜採り	21.1	
サイクリング	7.7	
その他のスポーツ	8.9	
まつり見物	35.9	
自然散策	16.6	
計	172.6	
日帰りレクリエーション参加率計	380.7	B
発生率$\frac{A}{B}$＝45.3%		

$587{,}484^{人}\times1.86^{回}\times45.3^{\%}\times(20^{\%}\sim25^{\%})=99{,}000\sim123{,}750^{人}$

日帰り客と宿泊客をあわせると、123,160人～155,964人の入込み客が想定される。環境整備と肌理の細かい観光ソフト対策を進めることによ

り、入込み客の確保、ならびに増加は充分見込める数字である。

Ⅶ－6　事業のすすめ方

1　事業推進の体制づくり

（仮称）史跡上之国勝山館跡整備委員会を事業推進体制の核として設ける。構成は環境整備、設計、発掘調査（考古学）、歴史、建築等の専門委員と町の諸施設計画、財政等に精通しかつ決定権を有する役職員、及び事務担当者とする。さらには一般町民識者を加えることも検討する。

2．土地の公有化

環境整備事業を円滑にすすめるため、事業と平行して史跡指定地域内民有地を主体に必要なヶ所の土地買収をすすめる。

なお、現在までの土地公有化の状況について、土地所有区分図を図Ⅶ－38に示す。

3．整備の段階計画

整備対象となる区域は範囲が広く、また未調査部分も多い。従って整備は長期間に渡り、その間どの事業から優先的に進めていくかという整備の段階計画が重要となる。

事業期間は「史跡上之国勝山館跡、花沢館跡保存管理計画書」策定時点（昭和52年度）において昭和54年度を初年度に昭和63年度までの10ヵ年とされているが、その後の発掘調査の進捗状況や遺構の確認状況からして、事業期間の再検討が必要となっている。

従って、当初計画の10ヵ年を1次整備期間とし、昭和64年度から実施設計策定後10年目にあたる昭和69年度までを2次整備期間とする。（図Ⅶ－39）

1次整備期間で行なう事業の内容

○調査の完了している主要な遺跡、遺構の環境整備（空壕跡、館神八幡宮跡、寺の沢用水施設跡水飲み場跡、夷王山墳墓群）

○未調査遺跡の仮整備

○園路整備

○遺跡、遺構の整備にあわせた利便施設の一部設置

（昭和62年度初めには、空壕跡、館神八幡宮跡の部分公開を行なう）

2次整備期間で行なう事業の内容

○新たな発掘調査をもとにした遺跡、遺構の環境整備（侍屋敷跡、平坦部建物跡、寺の沢用水施設跡貯水池跡、荒神堂跡）

○植栽整備

○利便施設の設置

2次整備期間では、この他に条件が整い次第、資料館の建設及びアプローチ部分（上国寺、笹浪家周辺）の町並みの整備にとりくむ。

発掘調査はこれらの整備事業に平行しておこなう。

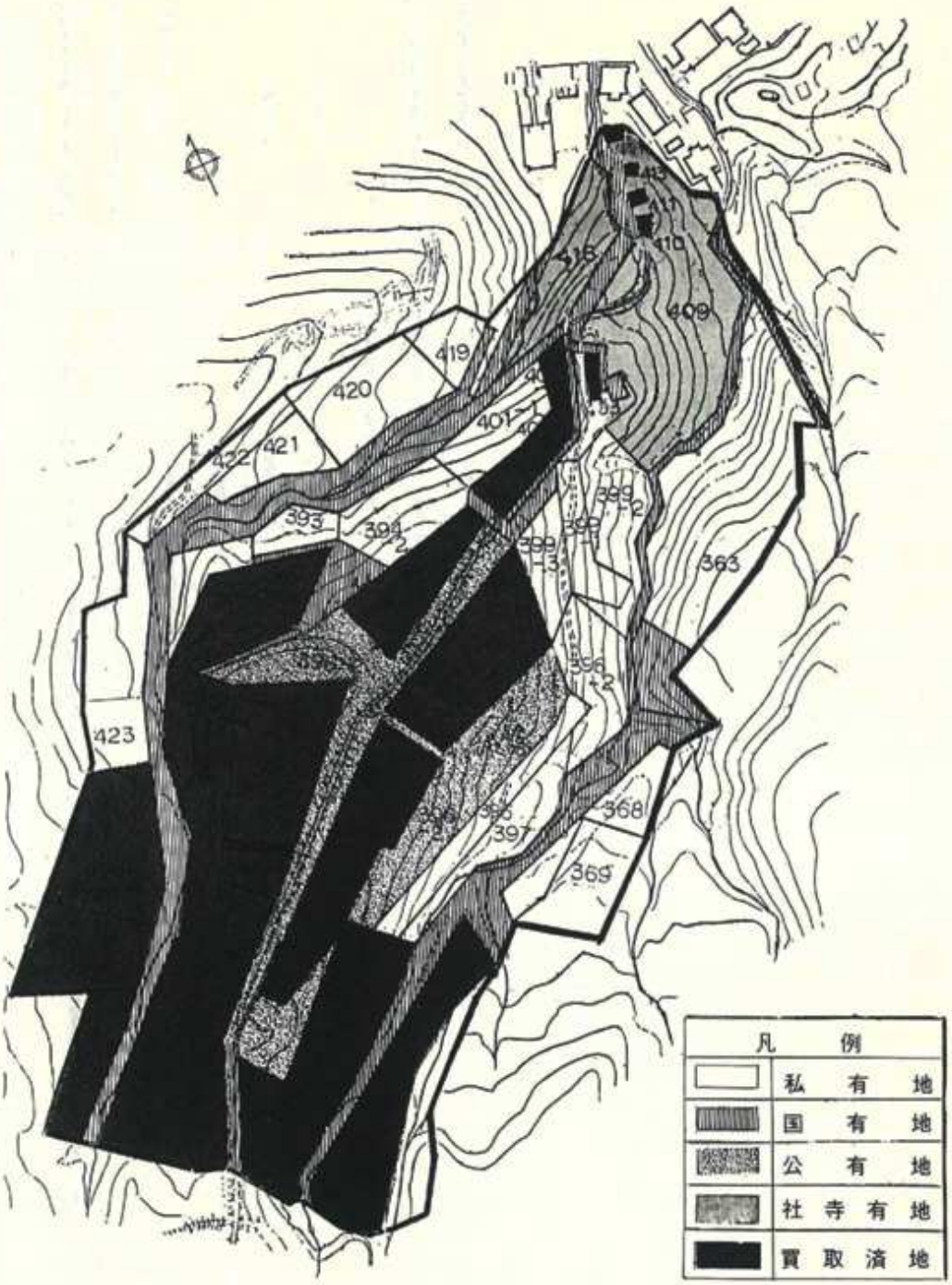
昭和60年度以降の各年度ごとの主要整備項目を表Ⅶ－7に示す。また、各遺跡の主たる整備年度を図Ⅶ－40に示す。

4．整備事業費の概算

昭和60年以降の各年度ごとの整備事業費の概算を表Ⅶ－8に示す。

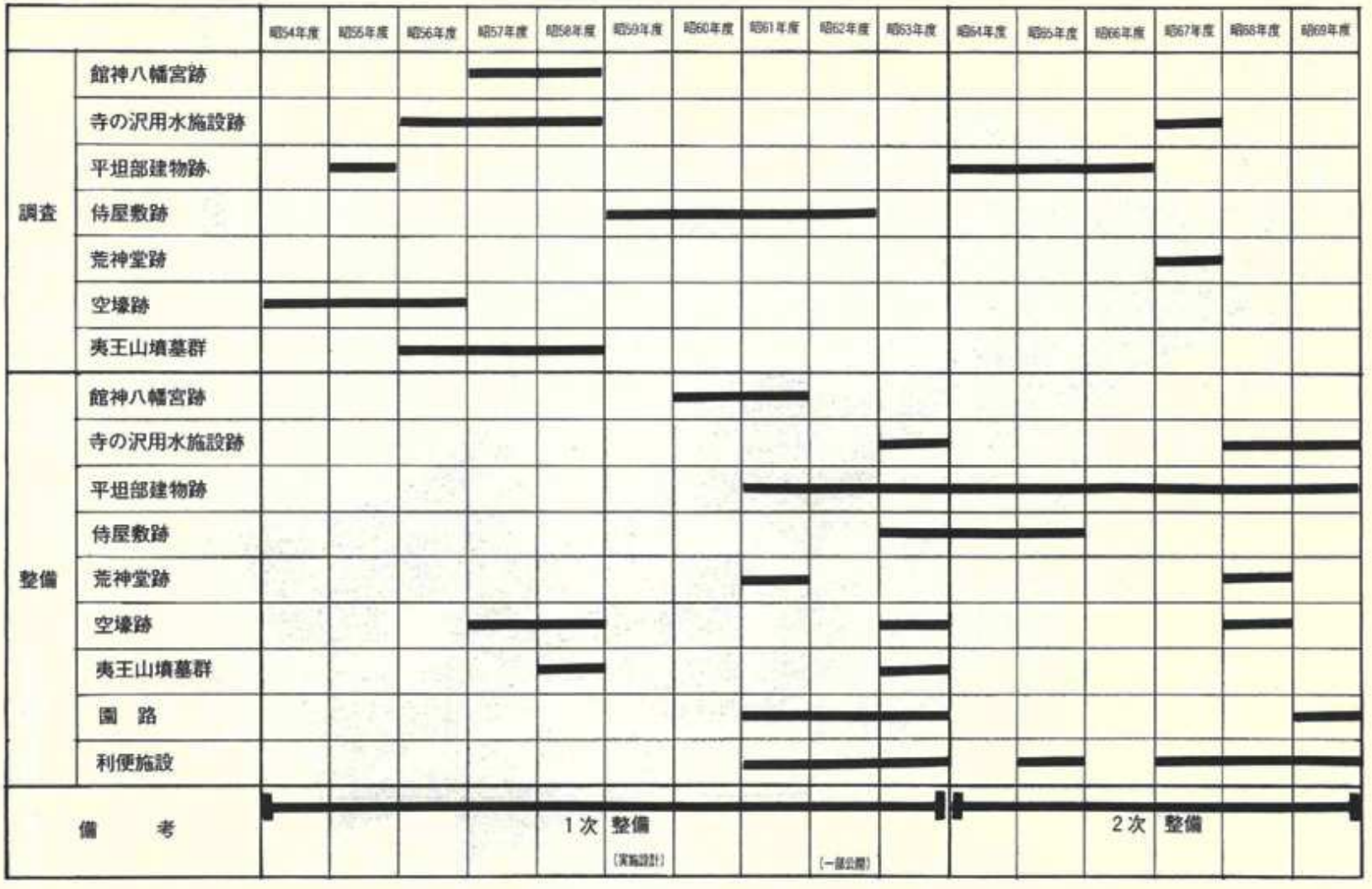
1次整備に要する事業費の総計は、昭和60年度以降で約1億1千万円

2次整備に要する事業費の総計は約2億6千万円で、その他資料館建設費（展示関連費用は除く）が約6億円、上国寺、笹浪家周辺の町並み整備事業費が約1千8百万円である。



図Ⅶ－38　土地所有区分図

図Ⅶ－39　整備の段階計画



表Ⅶ－7　各年度の主要整備項目

	昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	昭和64年度	昭和65年度	昭和66年度	昭和67年度	昭和68年度	昭和69年度
館神八幡宮跡	建物跡 柵　跡 その他 説明板	門跡 表示板								
寺の沢用水施設跡				水飲場跡 遺構整備 説明板・表示板 貯水地跡 草刈　説明板					貯水池跡 遺構整備	湿生植物園 植栽　木道 説明板
平坦部建物跡		草刈 樹木伐採・ 抜根	利便施設 四阿　便所 給水施設 クズ入れ	説明板	縁辺部植栽	縁辺部植栽	縁辺部植栽	建物跡 柵　跡 表示板	利便施設・縁台 スツールその他 利便施設 遇辺植栽	藤棚
侍屋敷跡				草刈 説明板	建物跡	建物跡 表示板				
荒神堂跡		草刈 説明板							階段石積 その他	
空壕跡				説明板 表示板					四阿 クズ入れ	
夷王山墳墓群				説明板						
園　路		館神八幡 宮跡	主ルート 整備	副ルート整備 案内板 誘導指示板						藤棚 トンネル
備　　考										

表Ⅶ－8　年度別整備事業費概算

		昭和60年度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	昭和64年度	昭和65年度	昭和66年度	昭和67年度	昭和68年度	昭和69年度	小　計	備　考
調　査	侍屋敷跡	9,700	10,500	9,800								30,000	調査面積 2,000㎡
	平坦部建物跡					12,000	12,000	12,000				36,000	2,400㎡
	寺の沢用水施設跡								1,500			1,500	100㎡
	荒神堂跡								1,500			1,500	100㎡
諸経費		2,300	2,300	3,300	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	3,400	31,700	
小　計		12,000	12,800	13,100	3,400	15,400	15,400	15,400	6,400	3,400	3,400	100,700	1次整備分 41,300
整　備	館神八幡宮跡	5,720	4,340									10,060	
	寺の沢用水施設跡				3,660					1,000	1,950	6,610	
	平坦部建物跡		2,690	9,960	350	9,000	9,000	19,500	26,160	22,390	11,990	111,040	
	侍屋敷跡				790	10,500	10,670					21,960	
	荒神堂跡		360							750		1,110	
	空壕跡				870					4,350		5,220	
	夷王山墳墓群				350							350	
	園路		420	5,000	15,140						14,980	35,540	
直接工事費計		5,720	7,810	14,960	21,160	19,500	19,670	19,500	26,160	28,490	28,920	191,890	
総工事費計		8,000	10,930	20,940	29,620	27,300	27,530	27,300	36,620	39,880	40,480	268,600	直接工事費 ×1.4
総　計		20,000	23,730	34,040	33,020	42,700	42,930	42,700	43,020	43,280	43,880	369,300	1次整備分 110,790

※資料館建設費（展示関連費用は除く）／2,000（㎡）×300（千円／㎡）　600,000　単位千円

アプローチ部分（上国寺・笹浪家周辺の町並み）整備費／笹浪家　54,000　1万円未満切捨

広　場　30,000

図Ⅶ－40　各遺跡の主たる整備年度

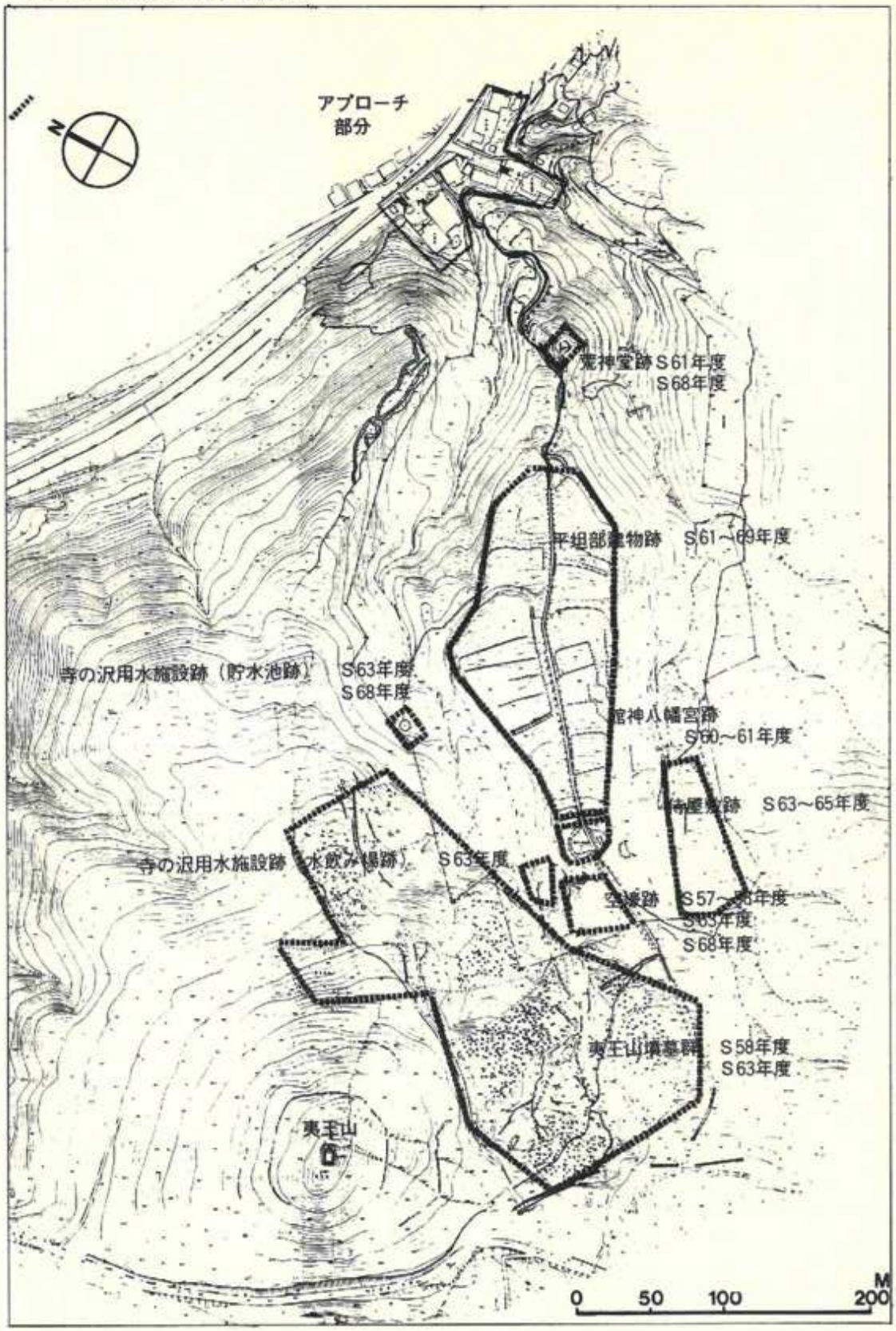
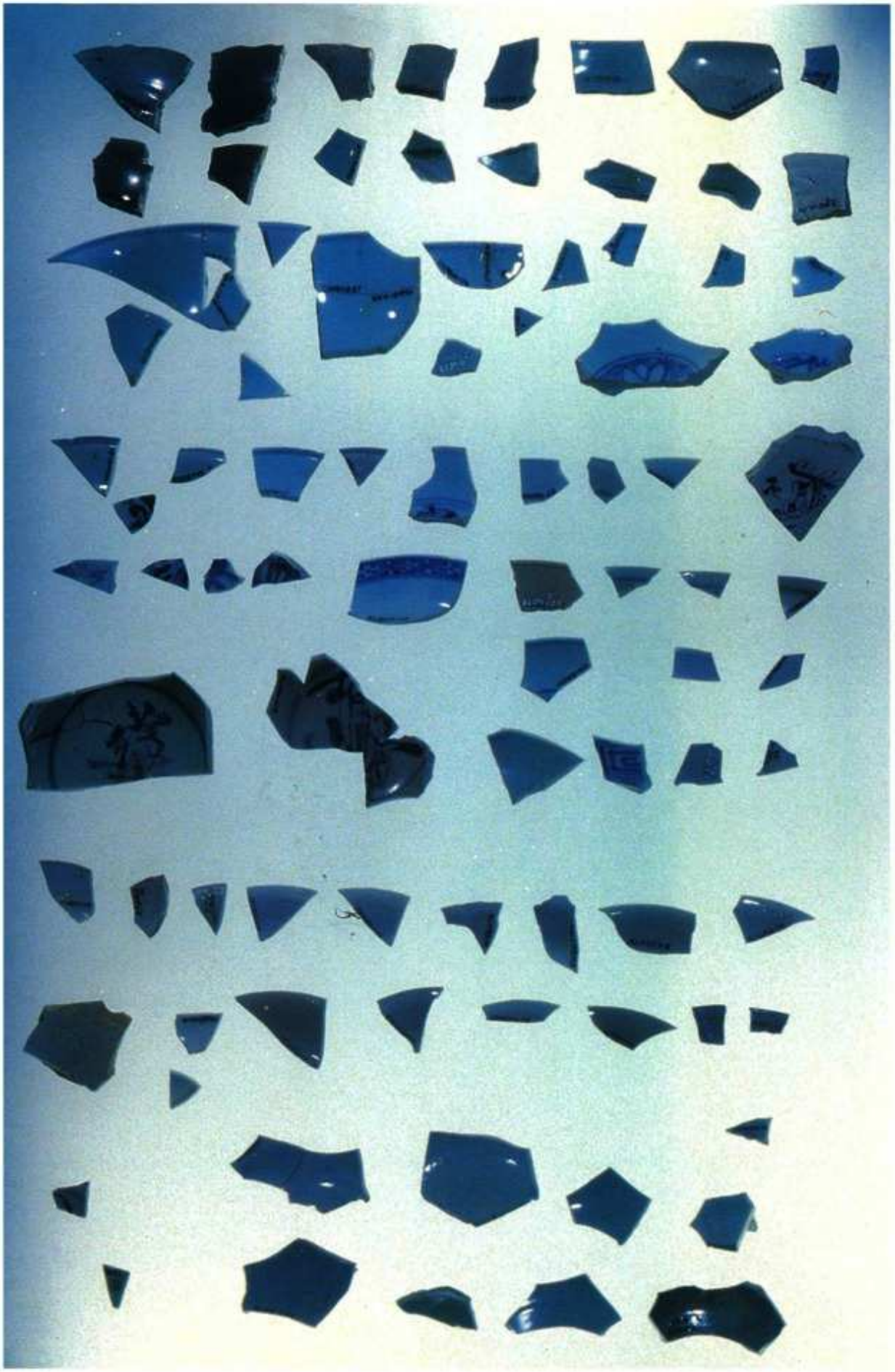


図　版

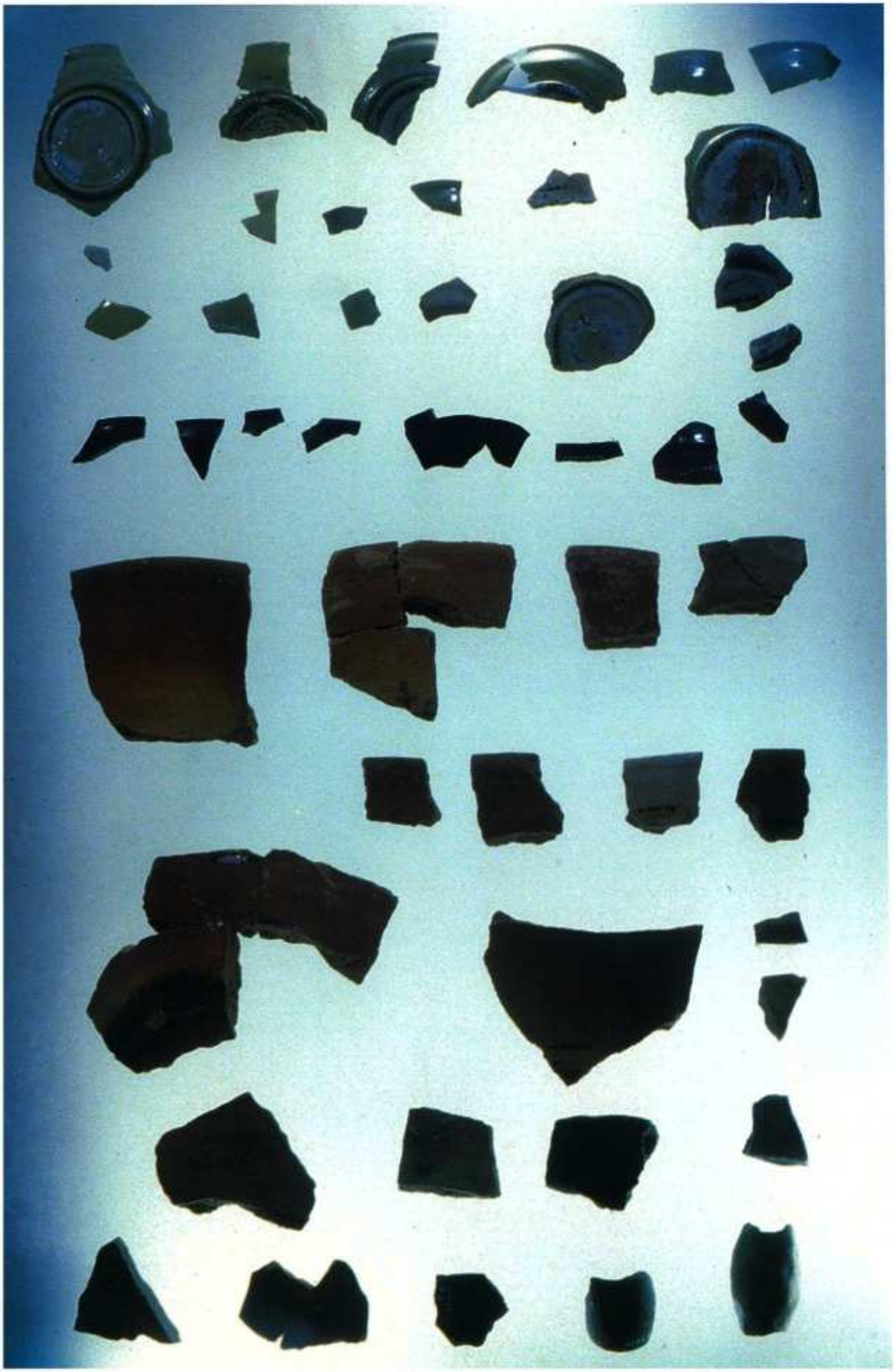
PL.1　侍屋敷跡全景（西より）

PL. 2　舶載磁器（外面）

PL. 3　船載磁器　(内面)

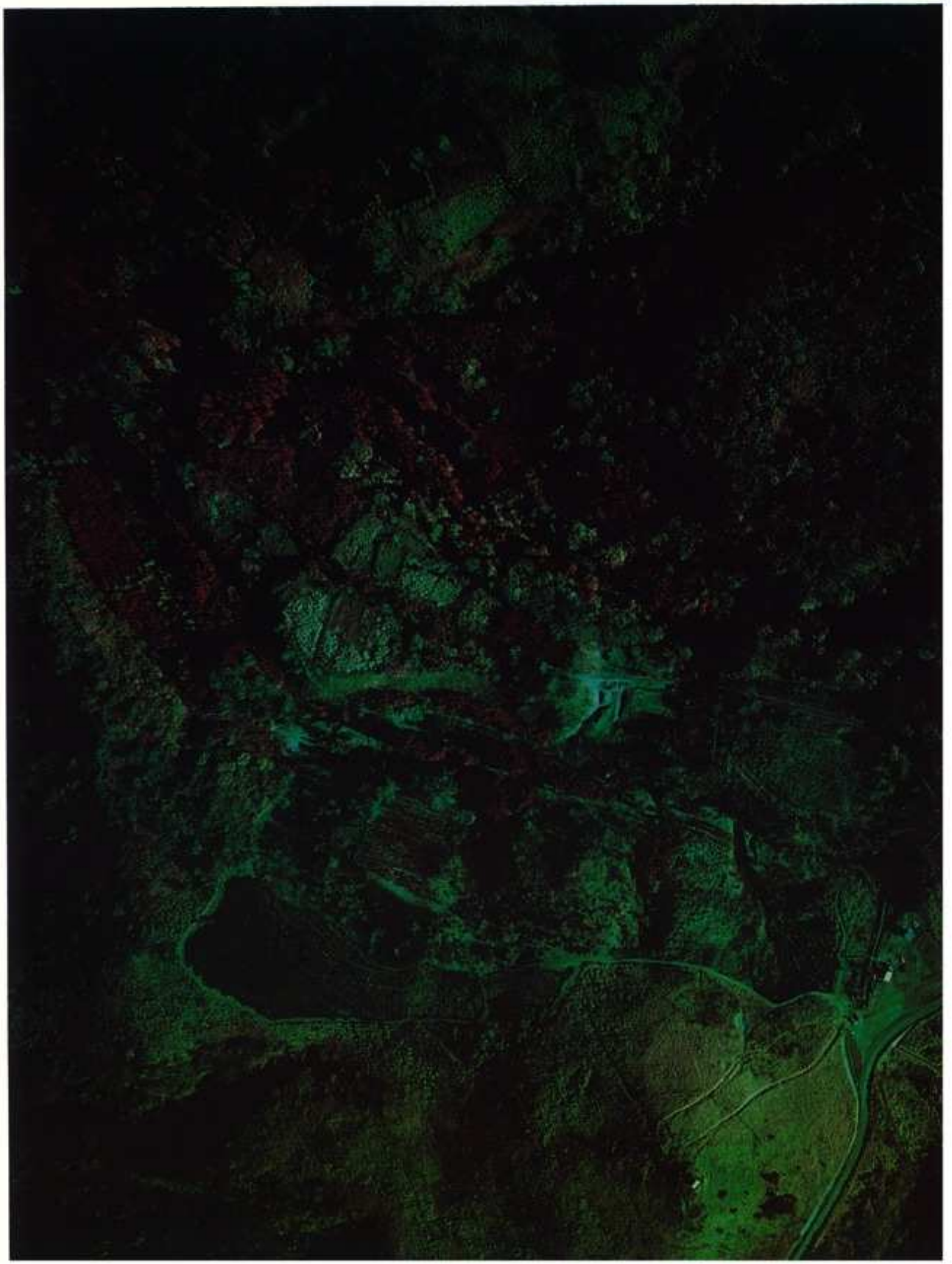


PL. 4　国産陶器（外面）

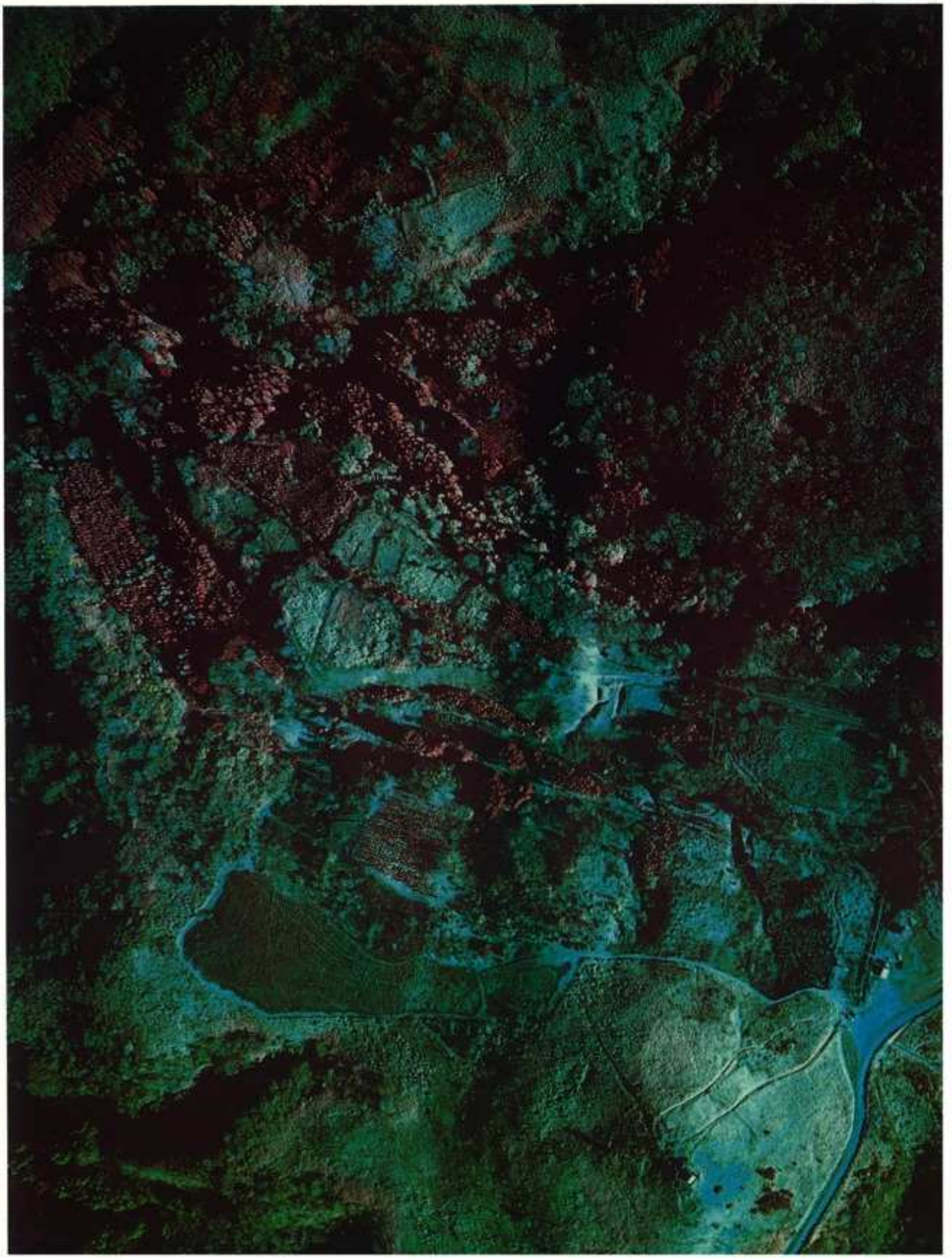


PL.5 国産陶器 (内面)

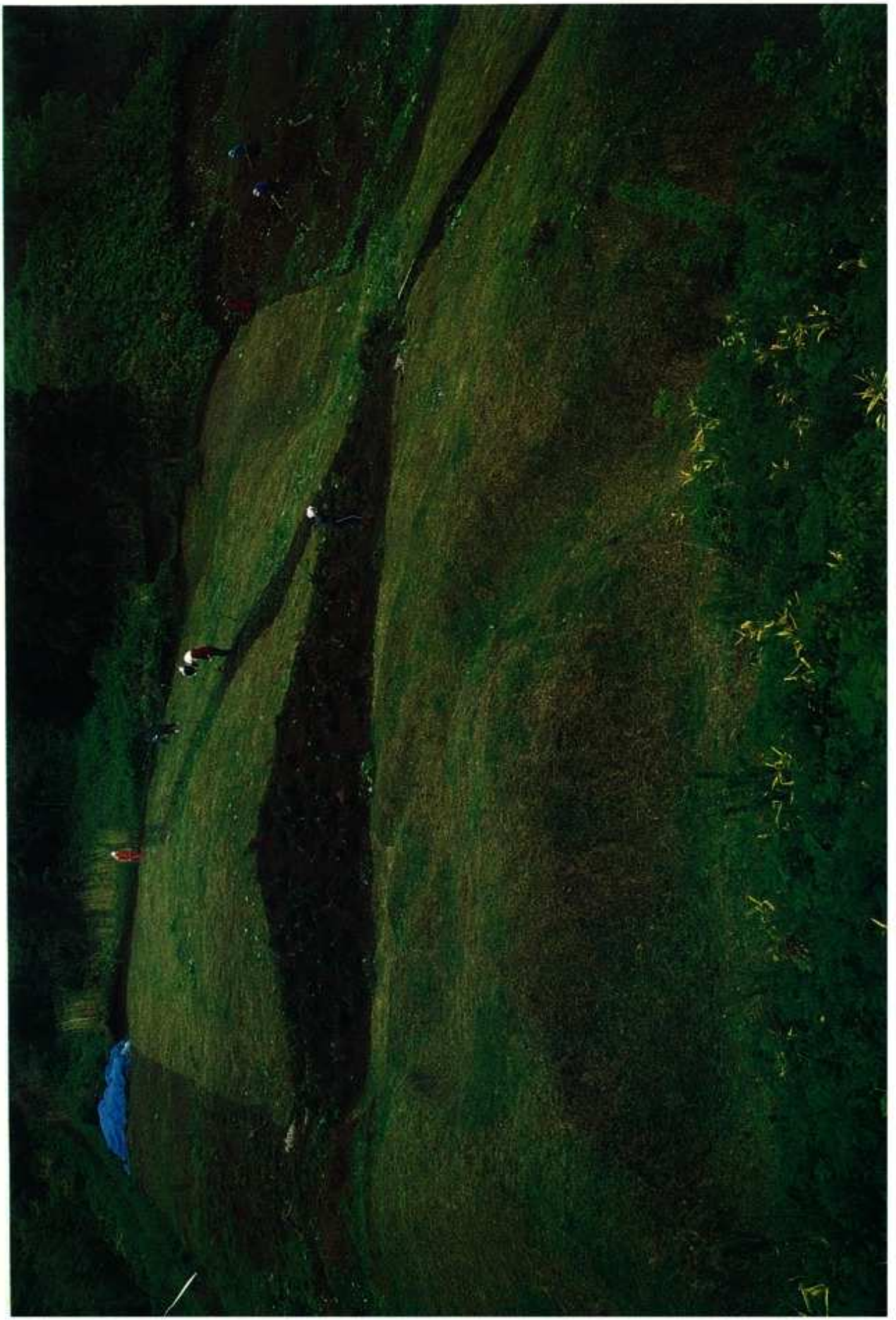
PL. 6　赤外線写真　①（Ⅳ－1）



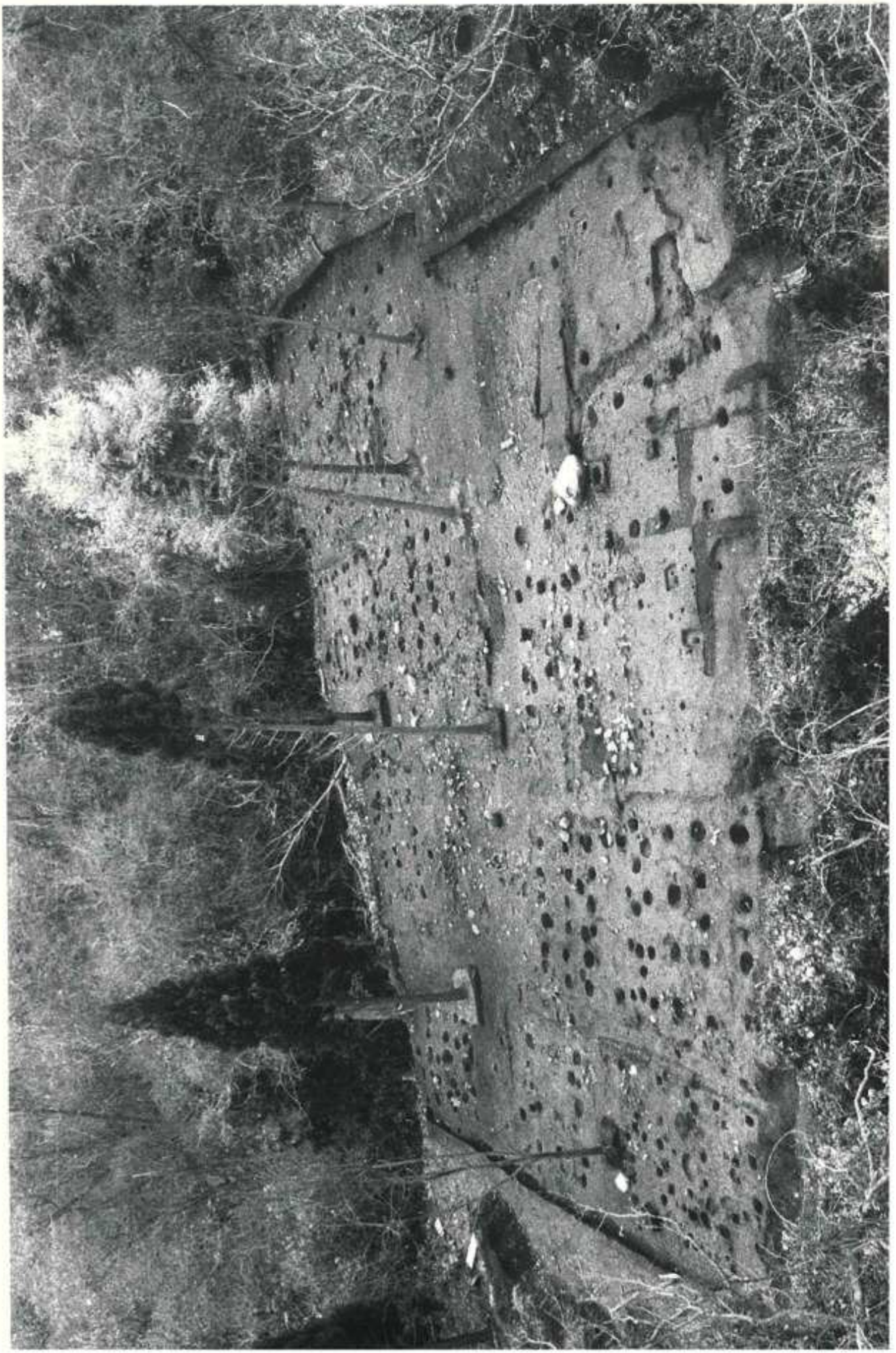
PL.7　赤外線写真　②（Ⅳ－2）



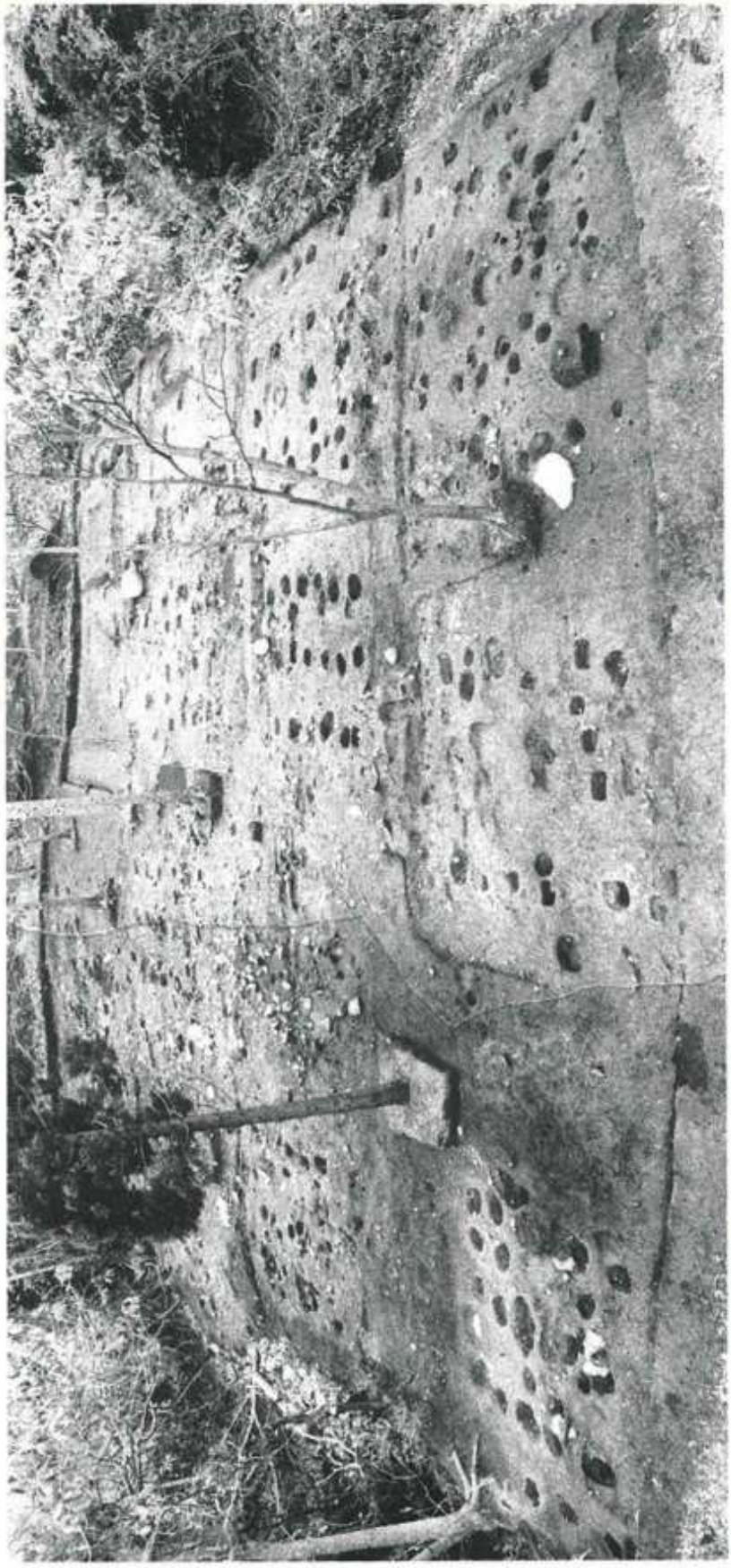
PL.8　空壕跡環境整備状況（Ⅶ－1）



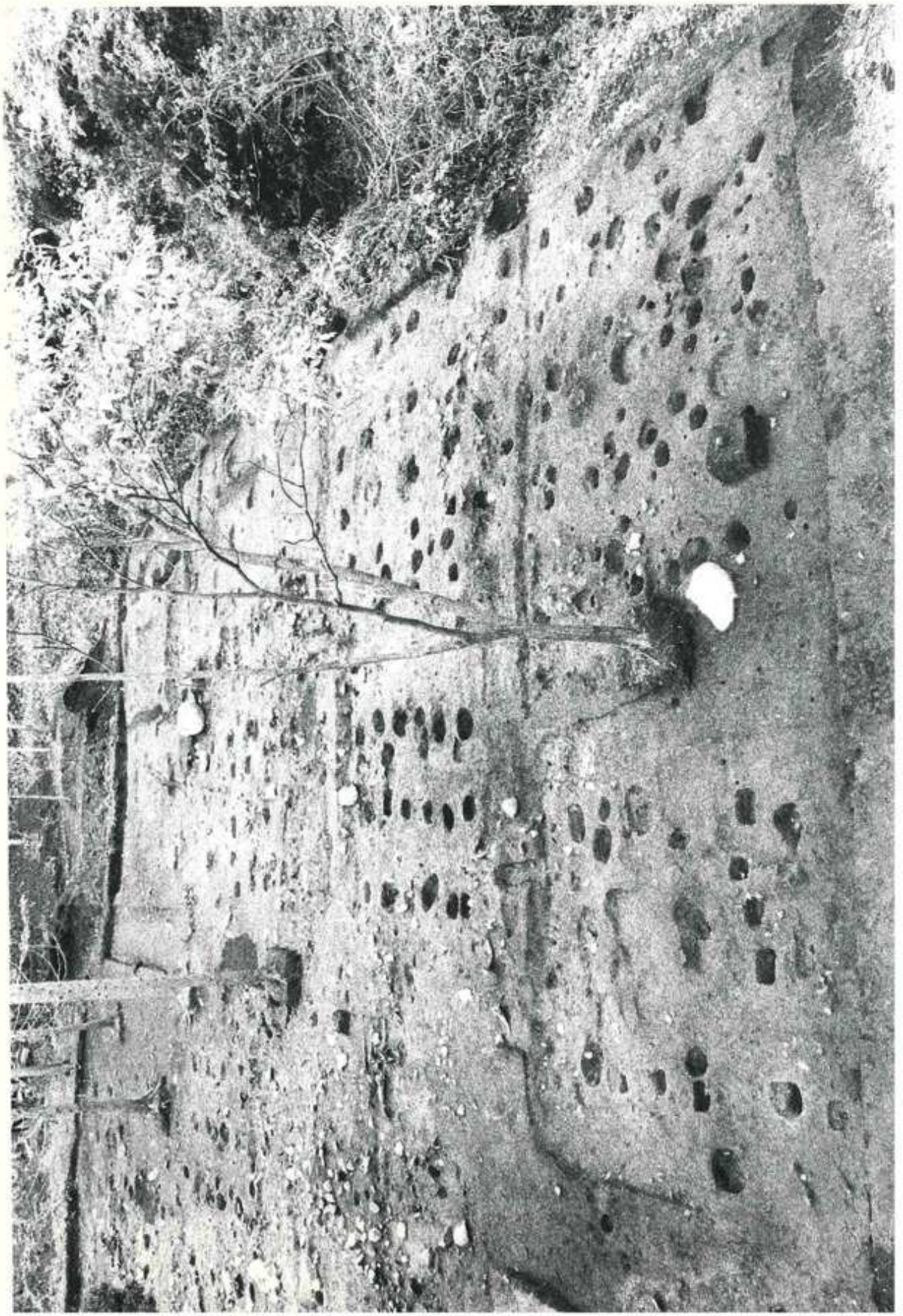
PL. 9　調査区全景（西より）



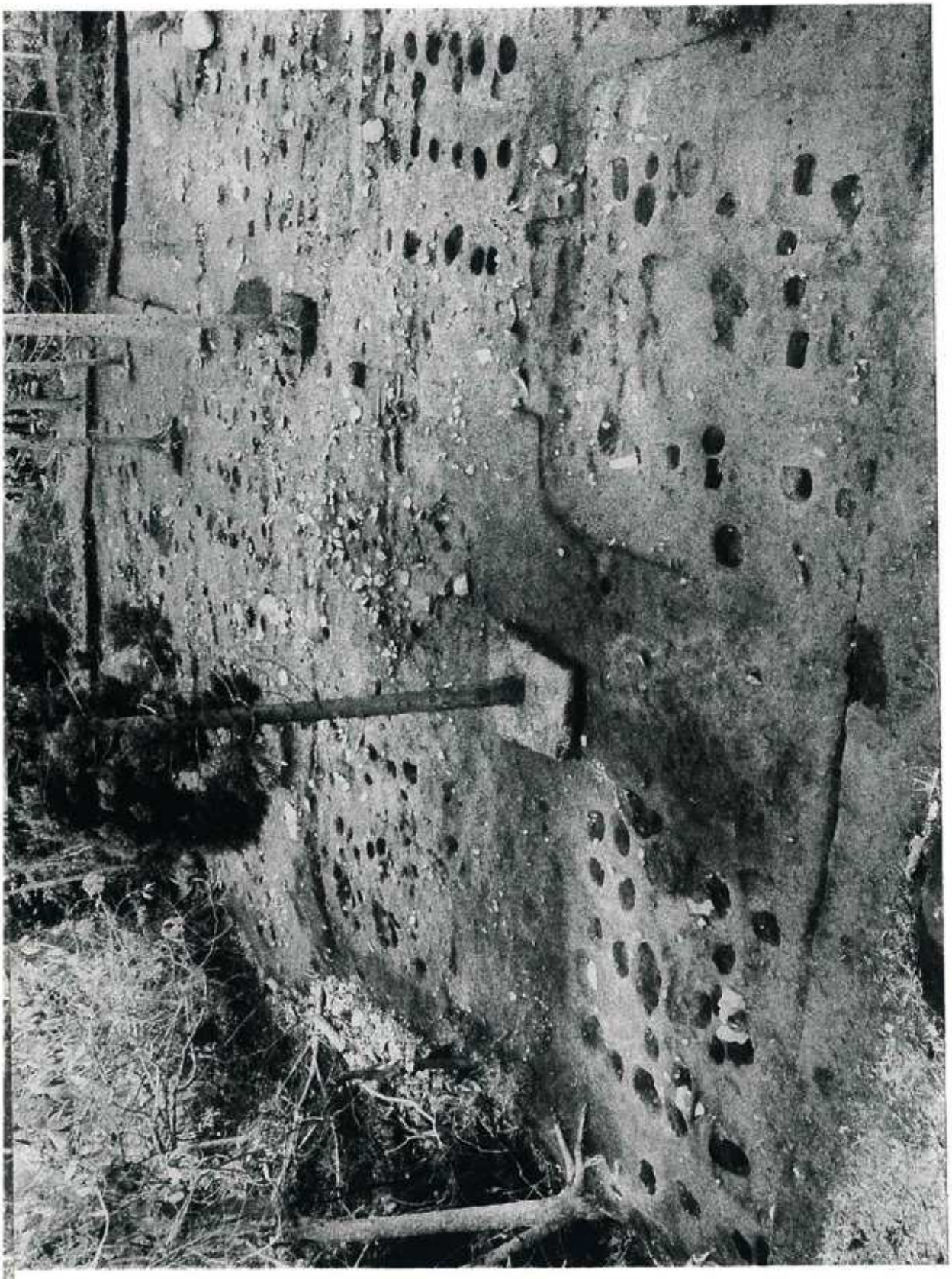
PL.10　調査区全景（北より）



PL. 11　調査区中景（北より）



PL. 12　調査区中景（北より）



PL.13　調査区

全景　調査前（西より）

全景　調査前（南西より）

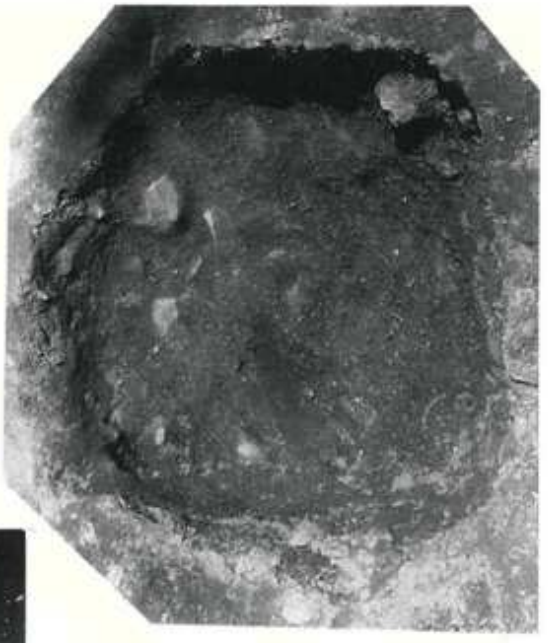
全景　調査終了後（西より）

（P.219）

第11号地割面東壁セクション

第1号地割面
柱穴断面

小石（×0.7）



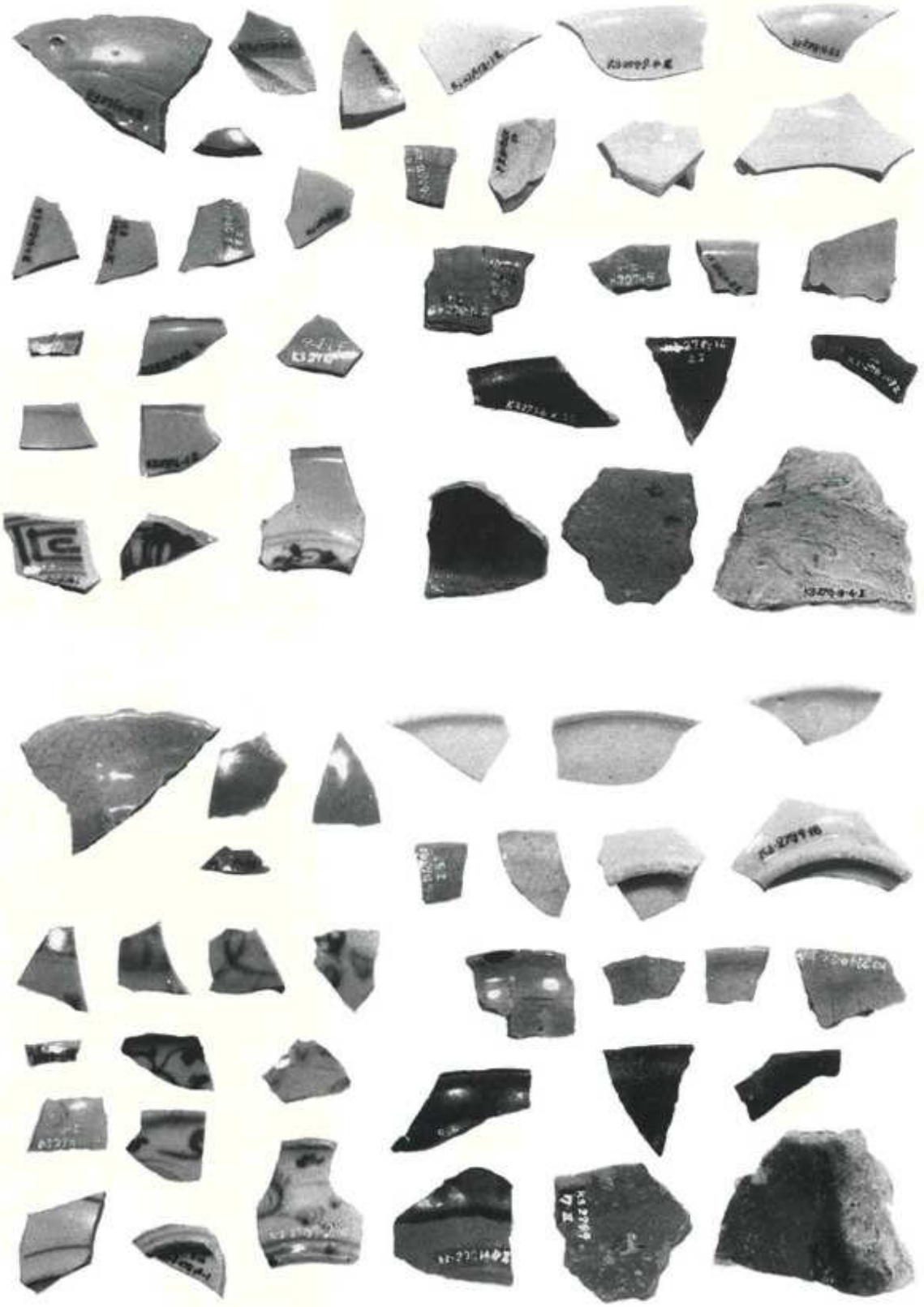
土壙

第1号地割面（南より）

骨（×1.8）

木炭（×1.8）

PL. 16　第1号地割面出土遺物（陶磁器）



骨（×1.3）

釘（×0.9）

木炭（×1.0）

第２号地割面（東より）

第３号地割面（北より）

陶磁器（第1号）

釘（×1.5）

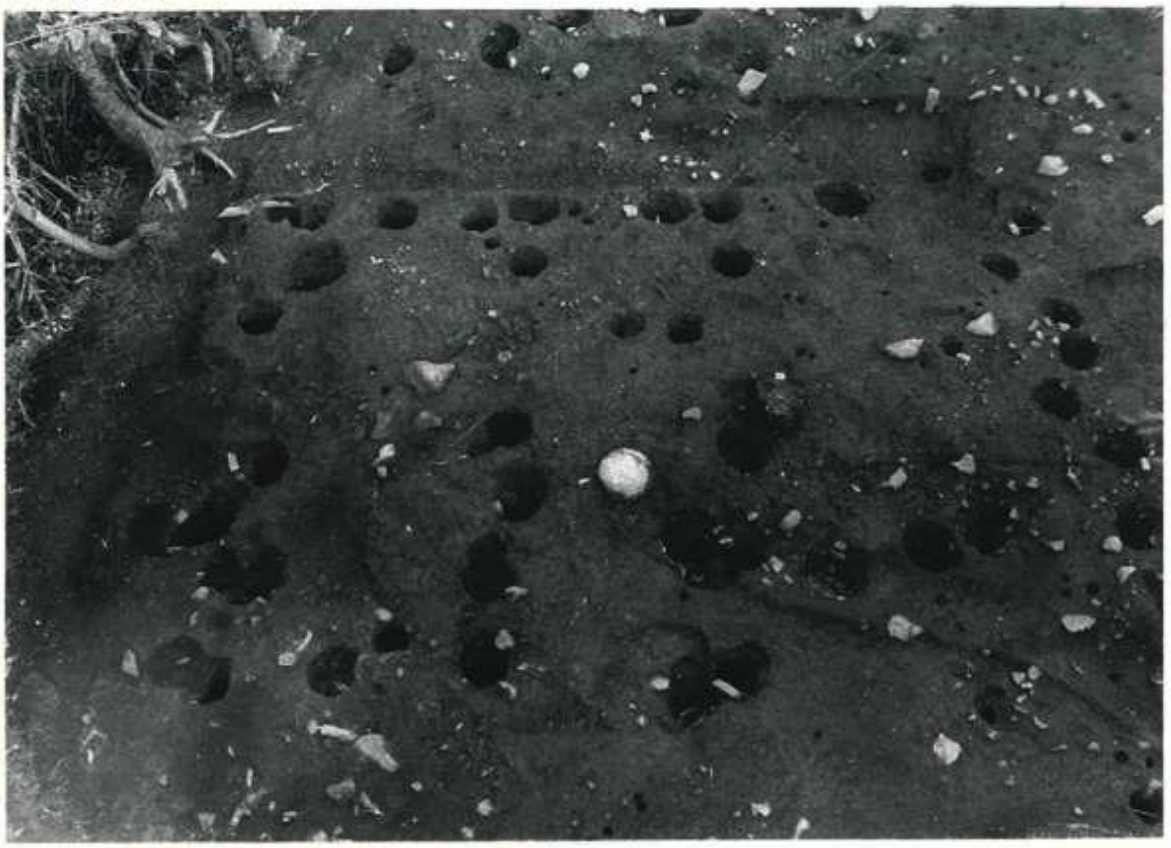
砂鉄？（×0.5）

鍛造剝片（×1.5）

鉄滓？（×1）

甘（×2）

PL. 21　第 4 号地割面



（北より）

（西より）

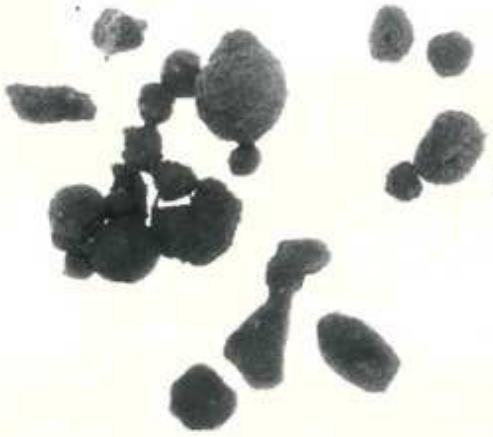
陶磁器

木炭（×0.6）

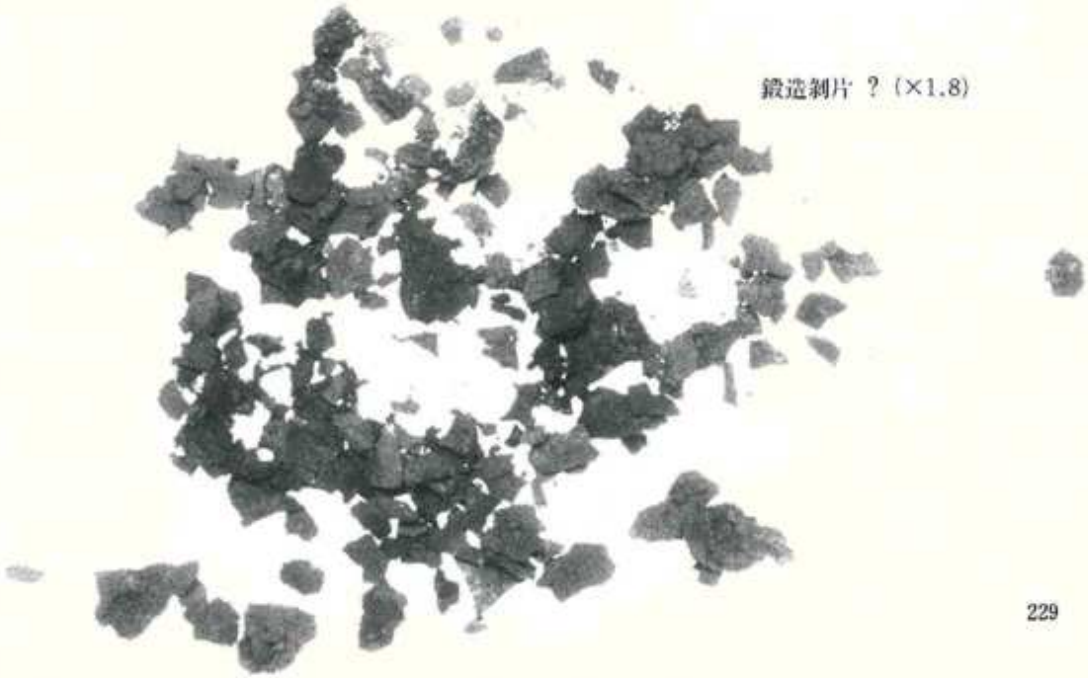
骨（×2）

小柄出土状況

鉄滓（× 1）



粒状滓？（×1.5）



鍛造剝片？（×1.8）

（北より）

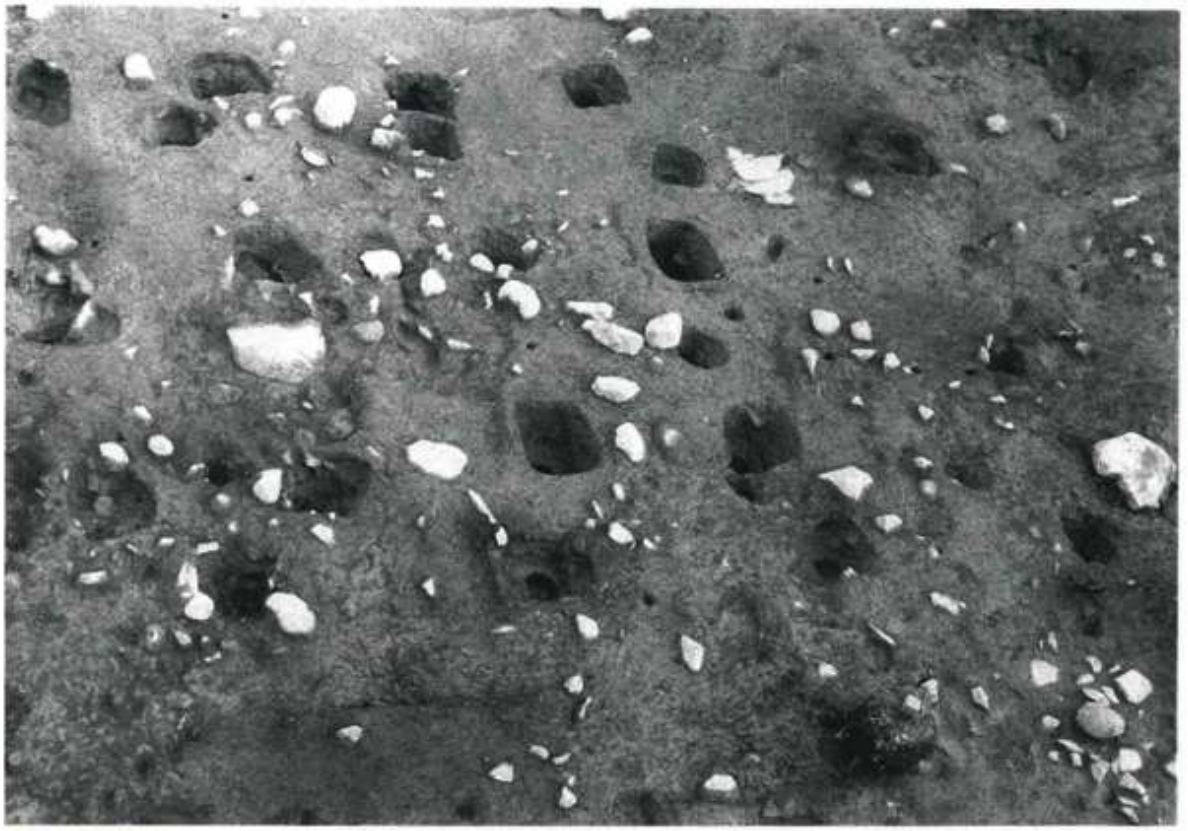
土壙出土
木炭（×0.6）

土壙出土
小石（×0.6）

PL. 25　第５号地割面・出土遺物（陶磁器）

（北より）

（西より）



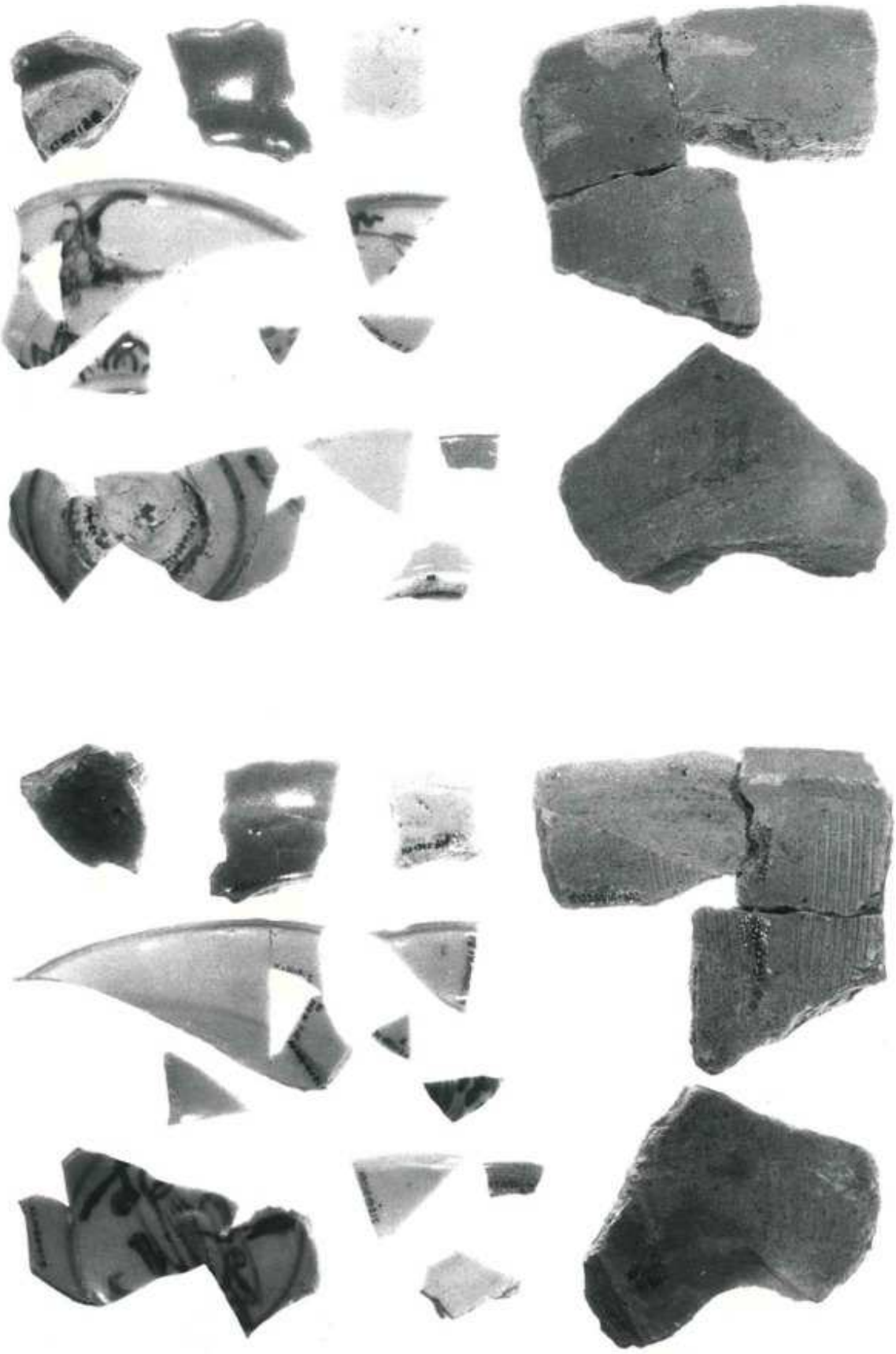
(西より)

(西より)

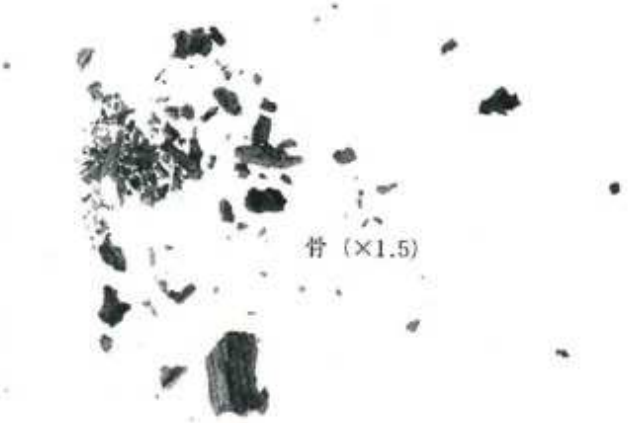
木炭 (×0.6)

骨 (×1.5)

PL. 27　第 6 号地割面出土遺物（陶磁器）



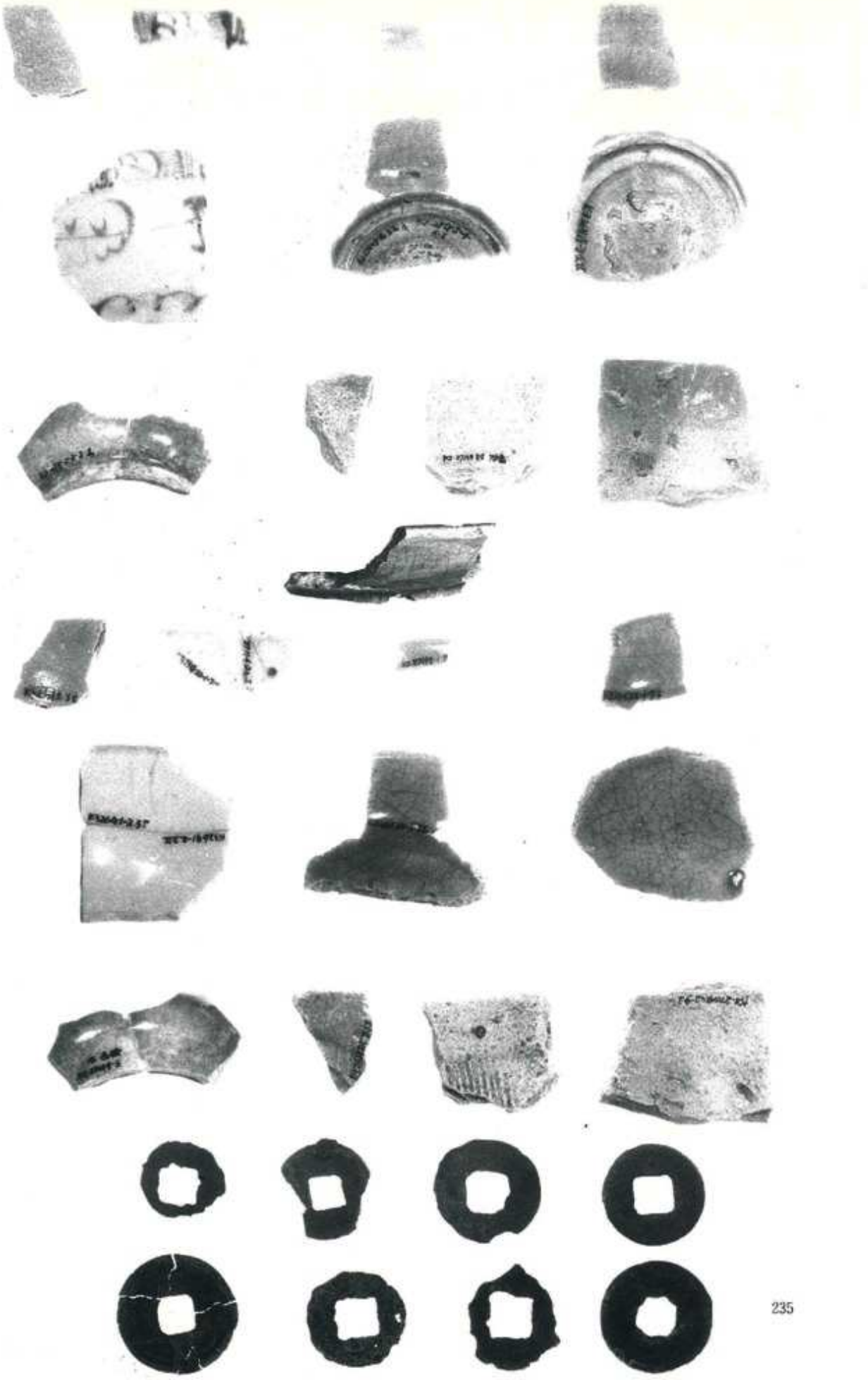
(北より)



骨 (×1.5)

銅銭出土状況

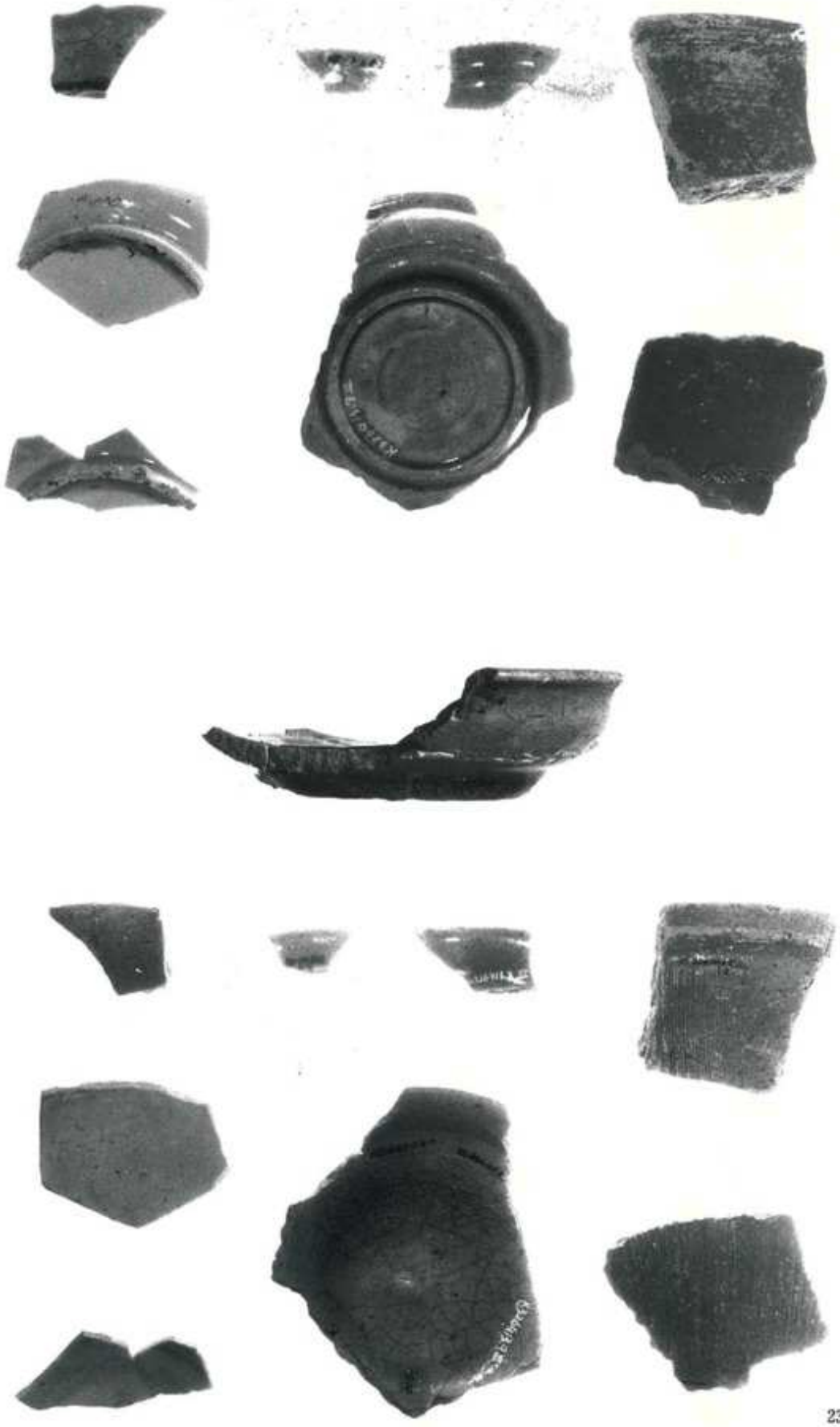
柱穴内礎石

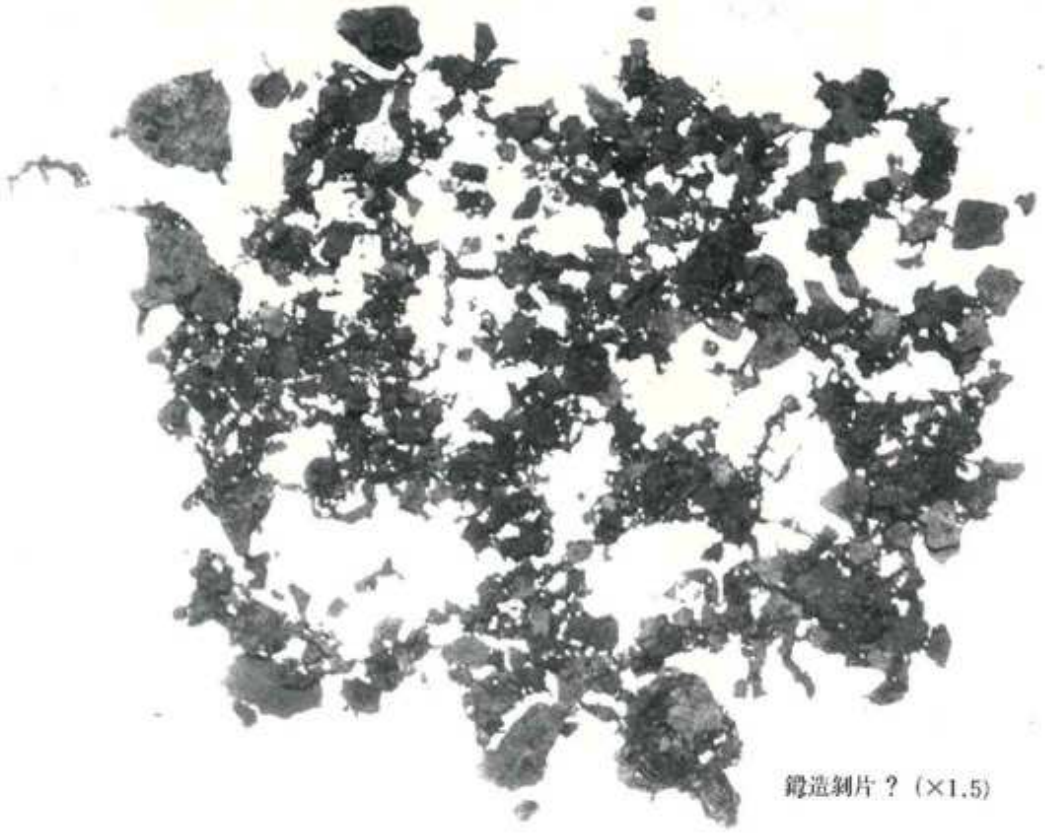


(北より)

(北より)

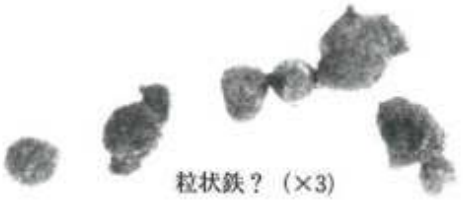
PL. 31　第 8 号地割面出土遺物（陶磁器）





鍛造剝片？（×1.5）

鉄滓（×0.7）



粒状鉄？（×3）

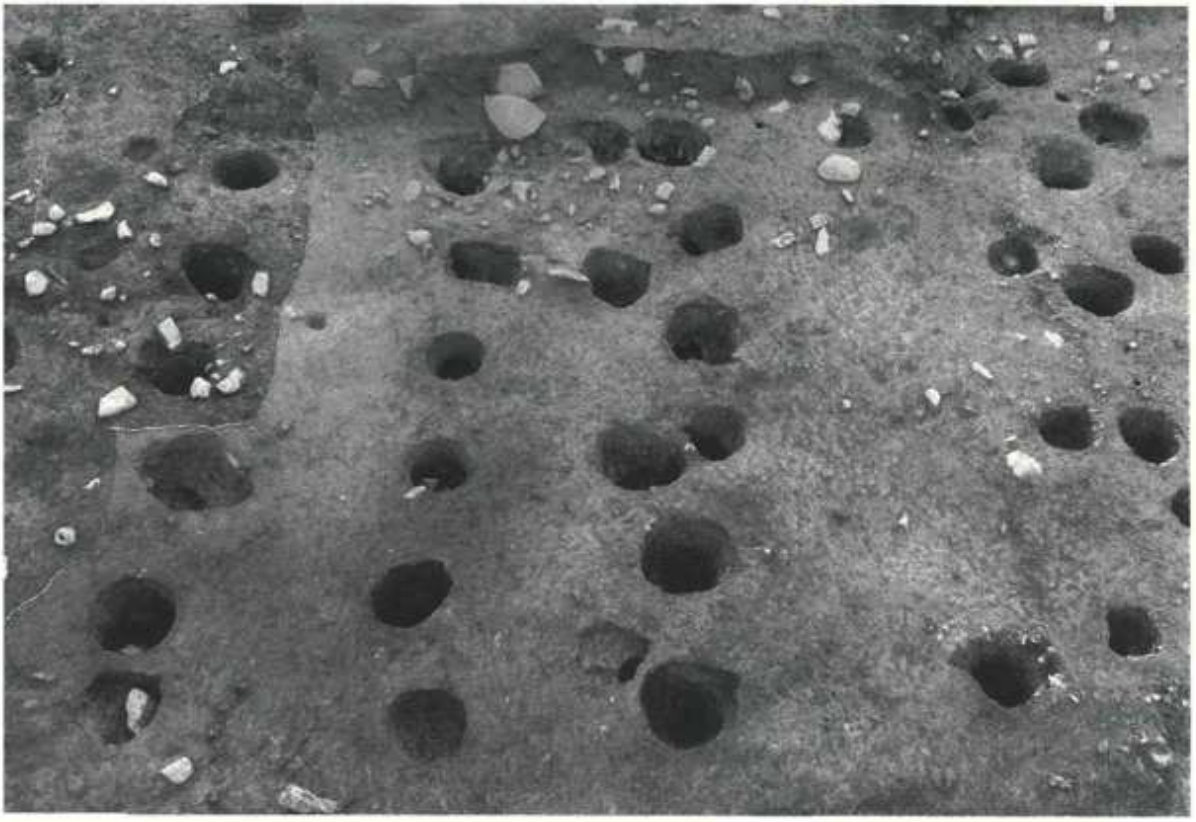
砂鉄？（×0.9）

釘（×1.

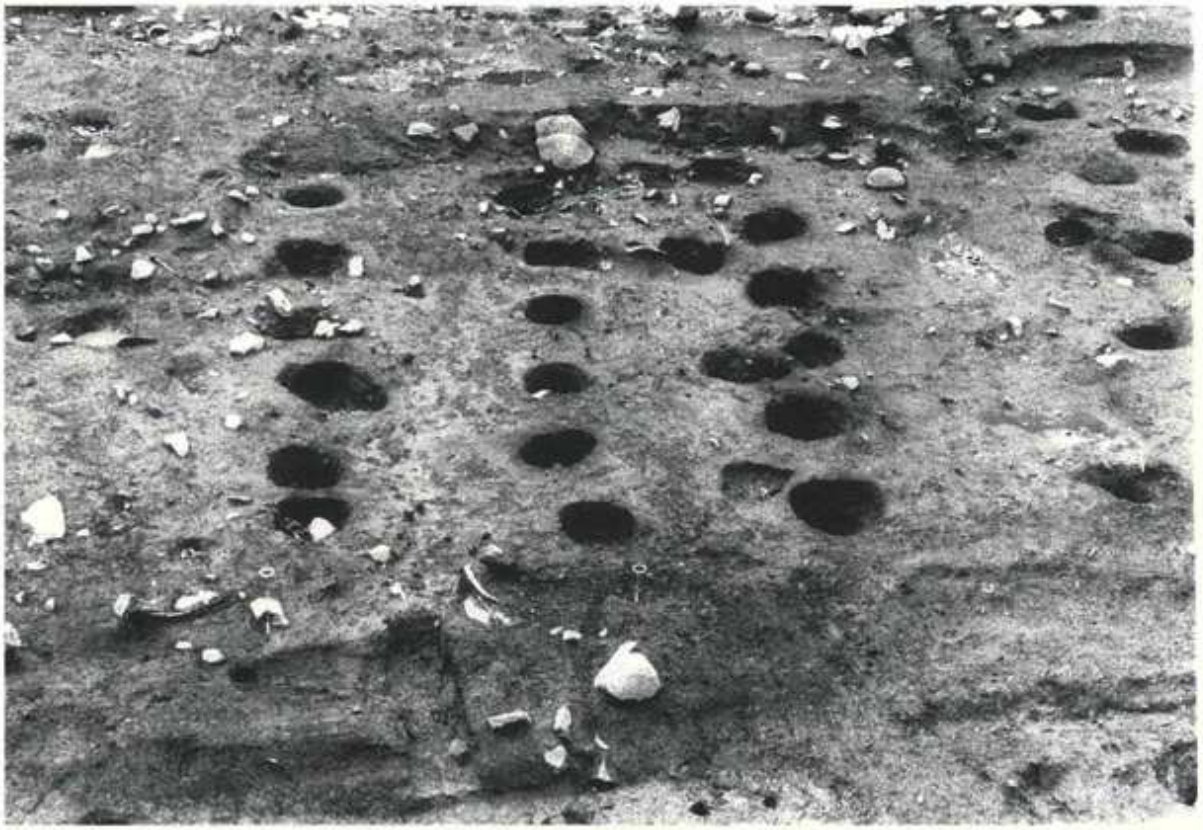
木炭（×1.7）

羽口（×1.0）

粘土（×1.0）

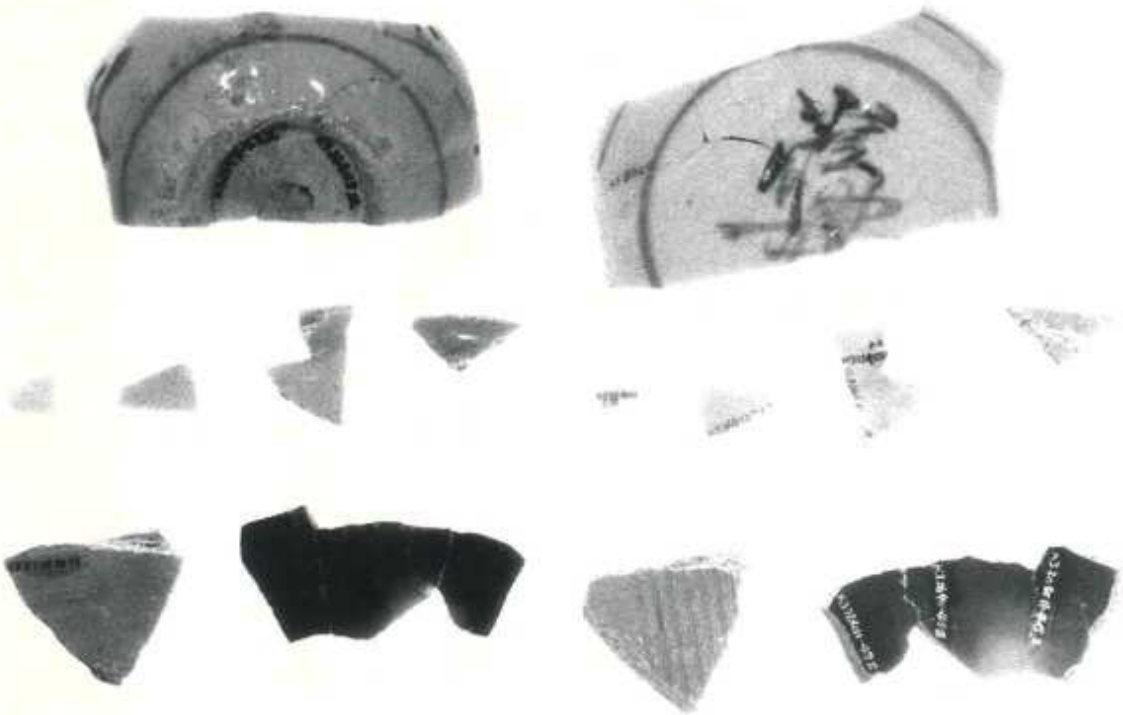


（北より）



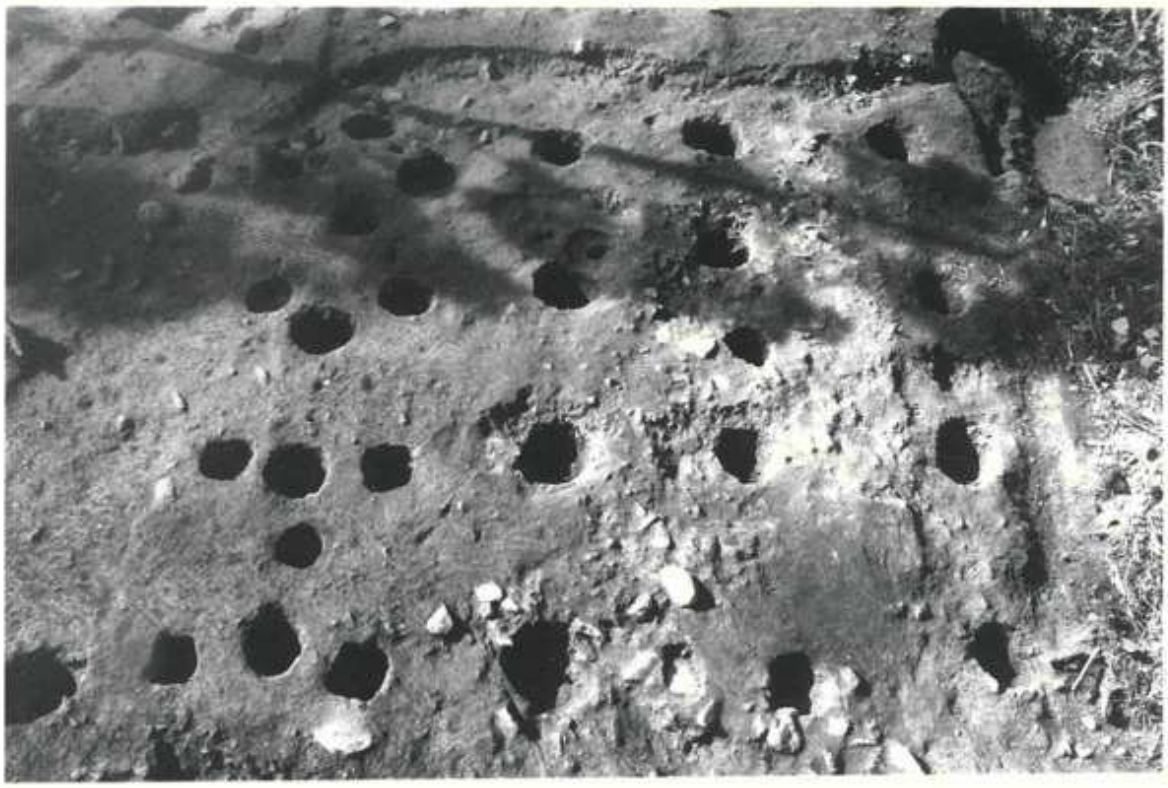
（北より）

PL.35　第9号地割面出土遺物(陶磁器・骨角器)，第9・10号地割面

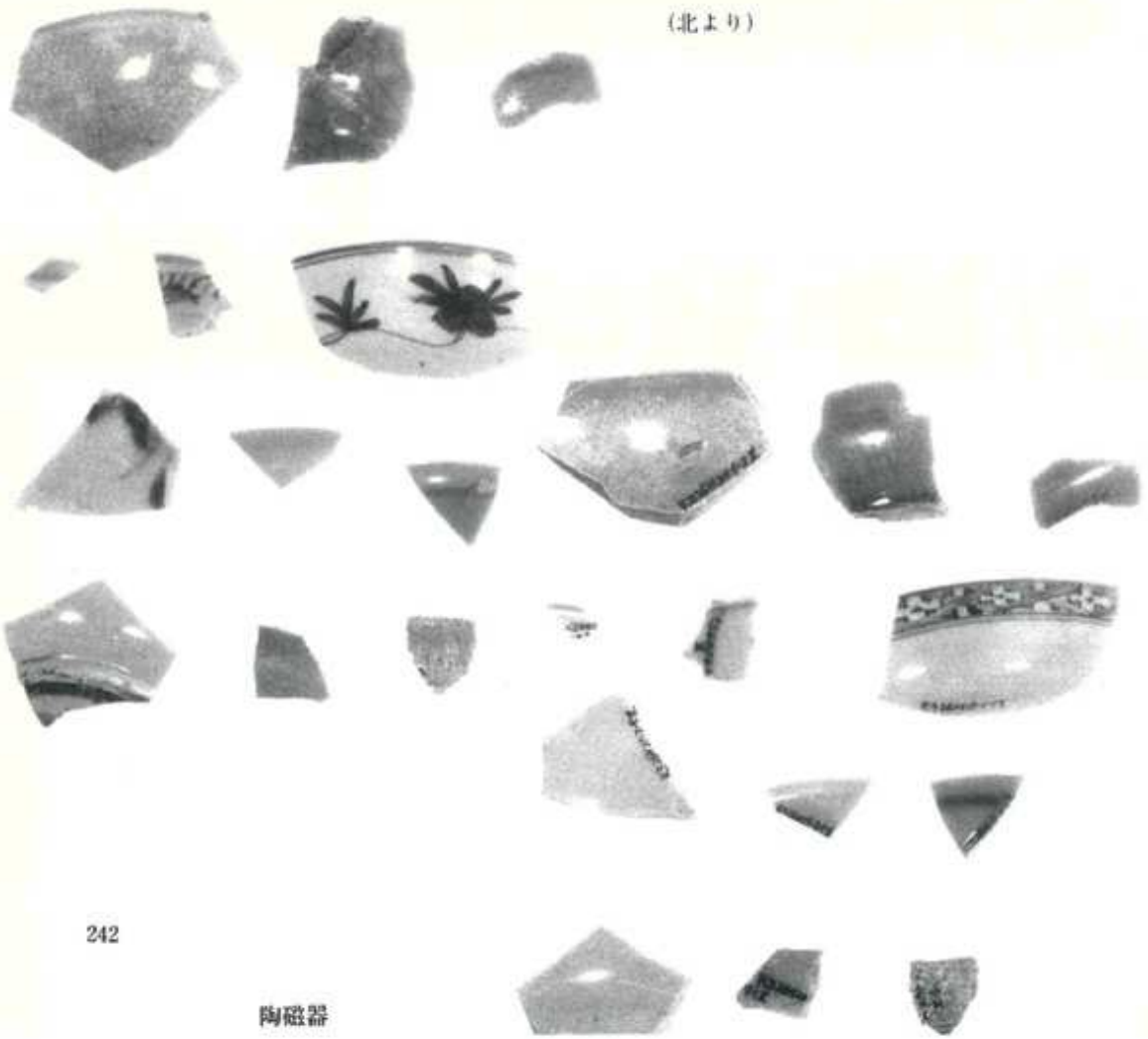


骨角器（×2）

第9・10号地割面（北より）



（北より）

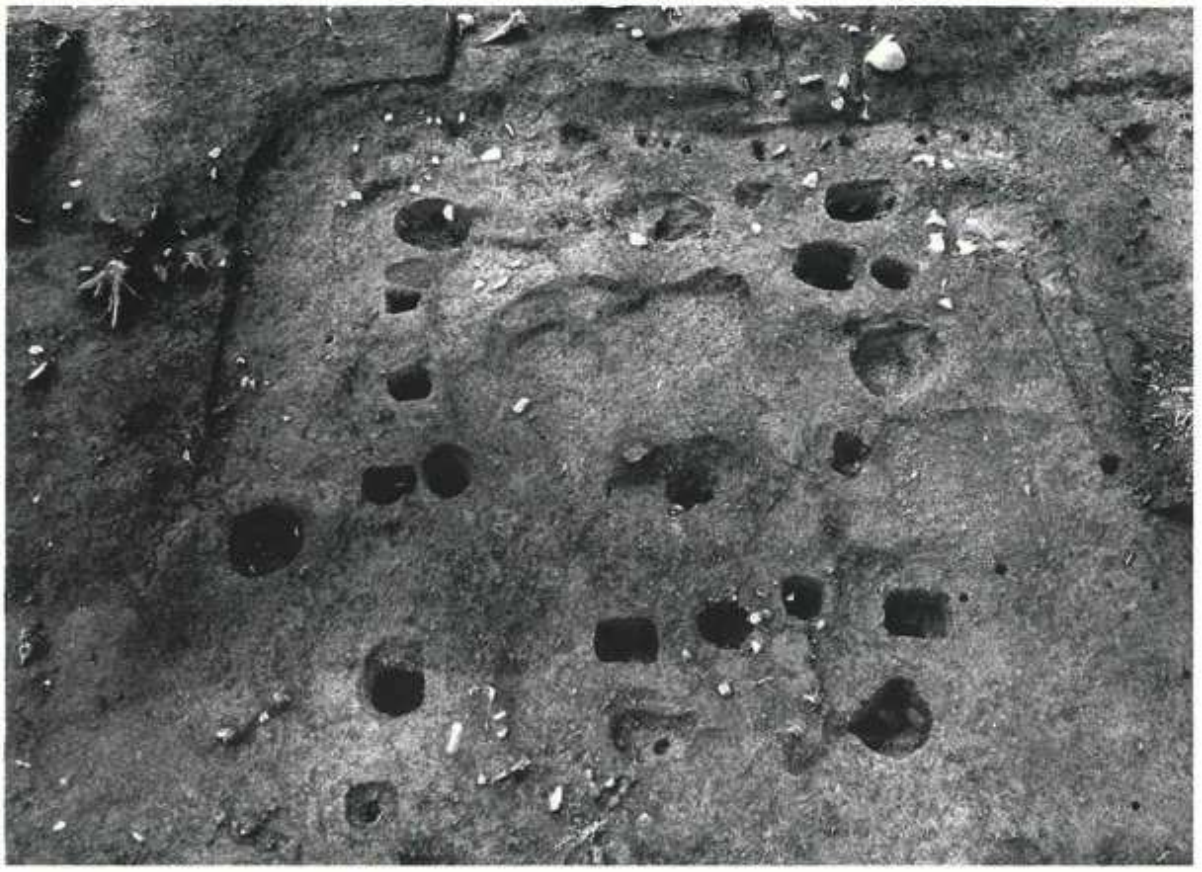


陶磁器

（北より）

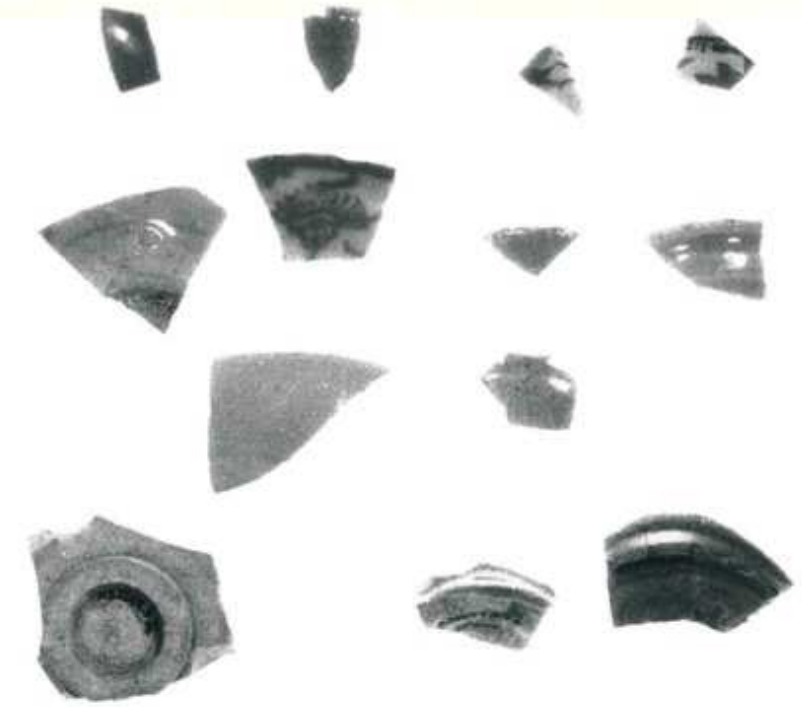
（西より）

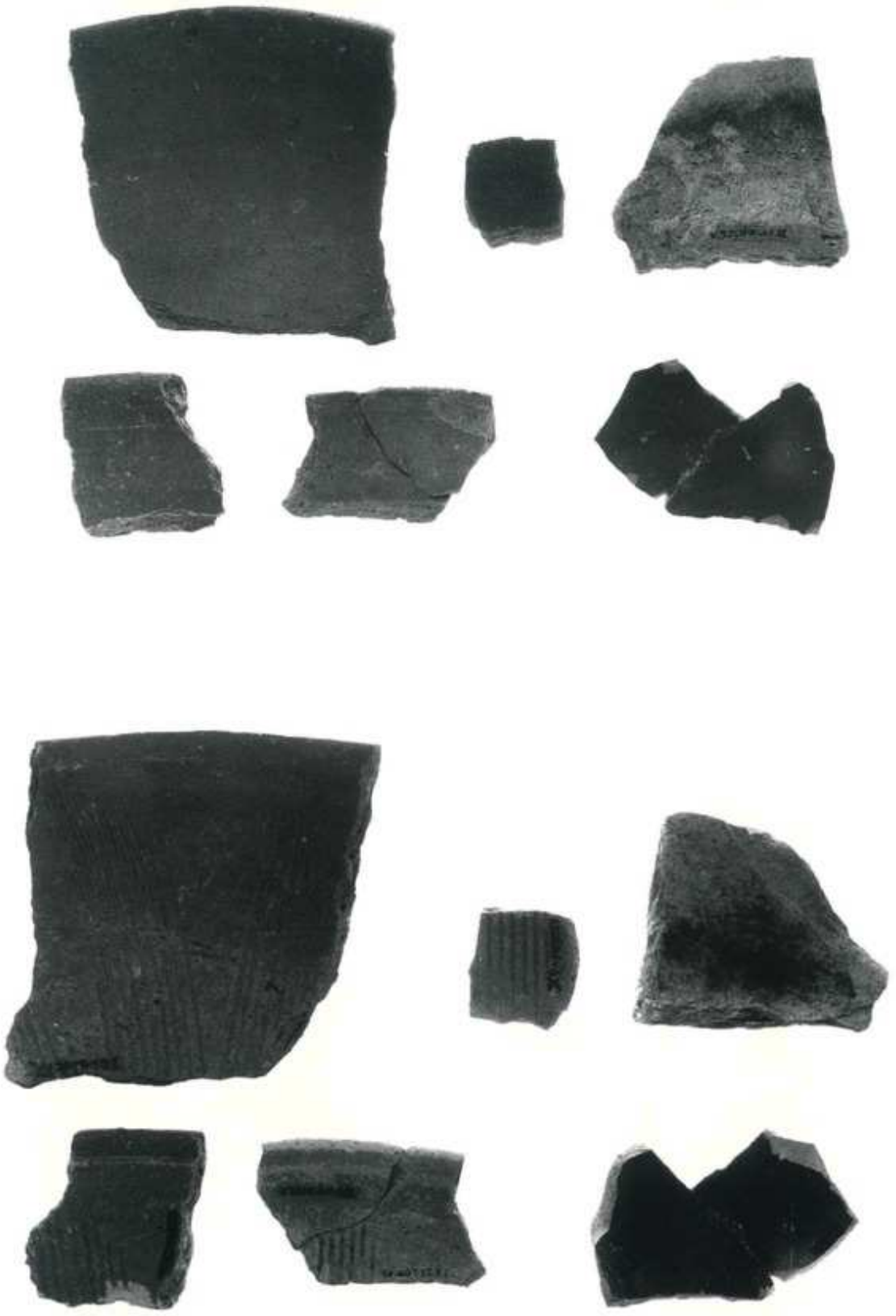
（北より）（後方は８号地割面）

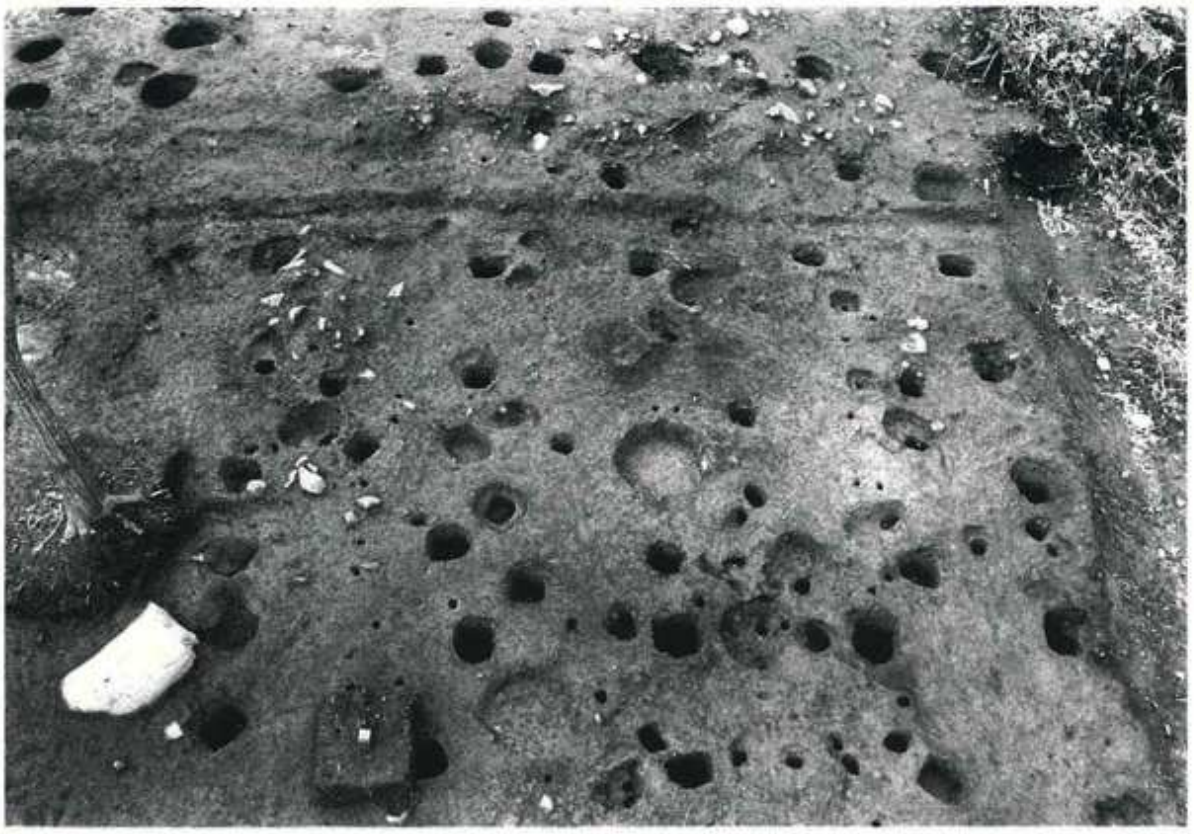


（北より）

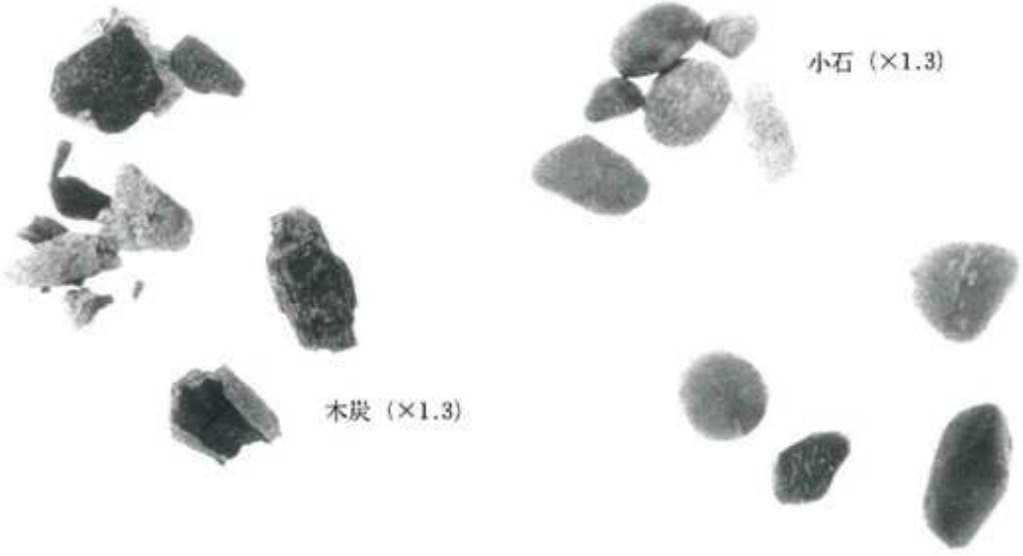
（西より）







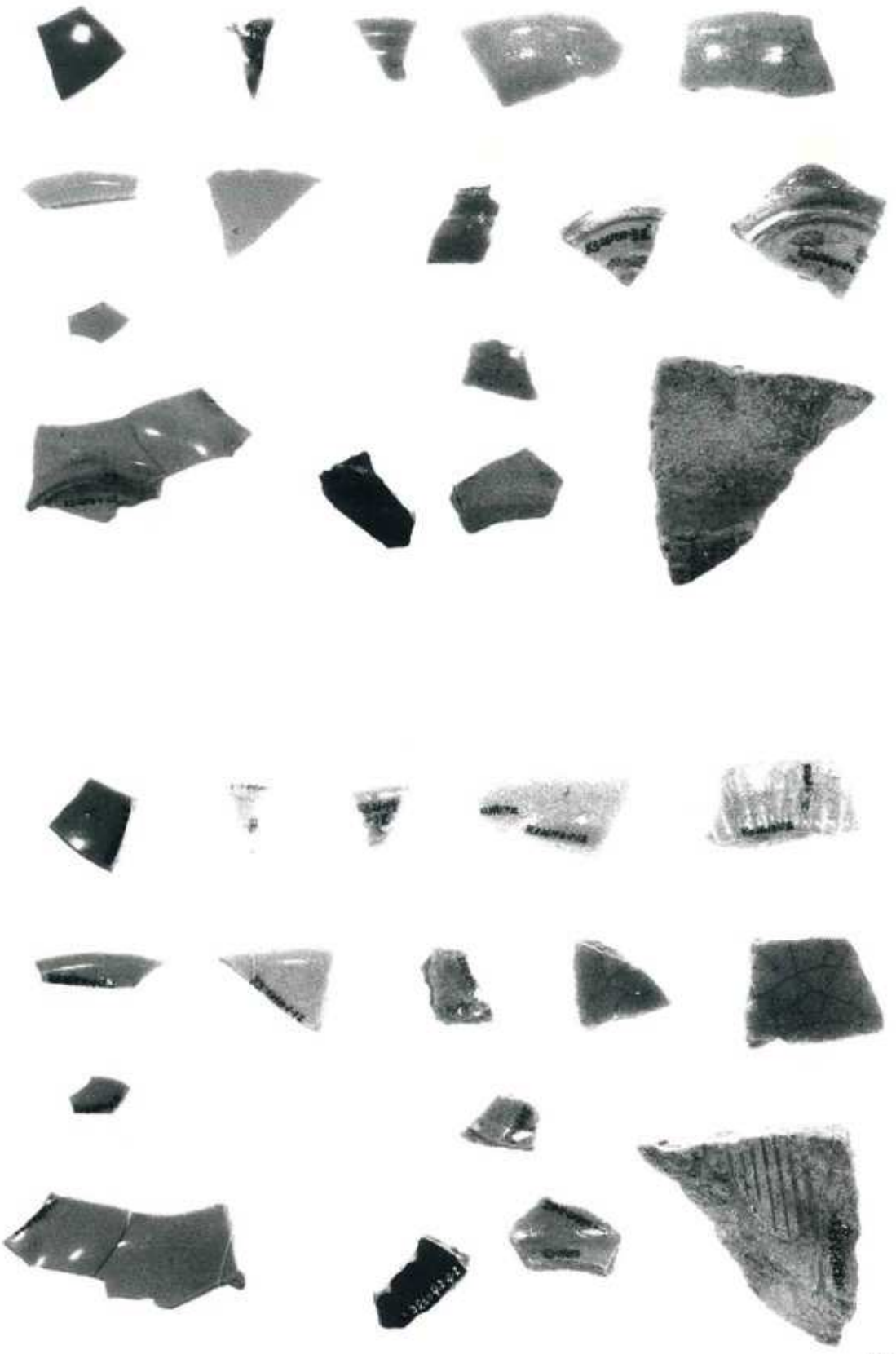
（北より）

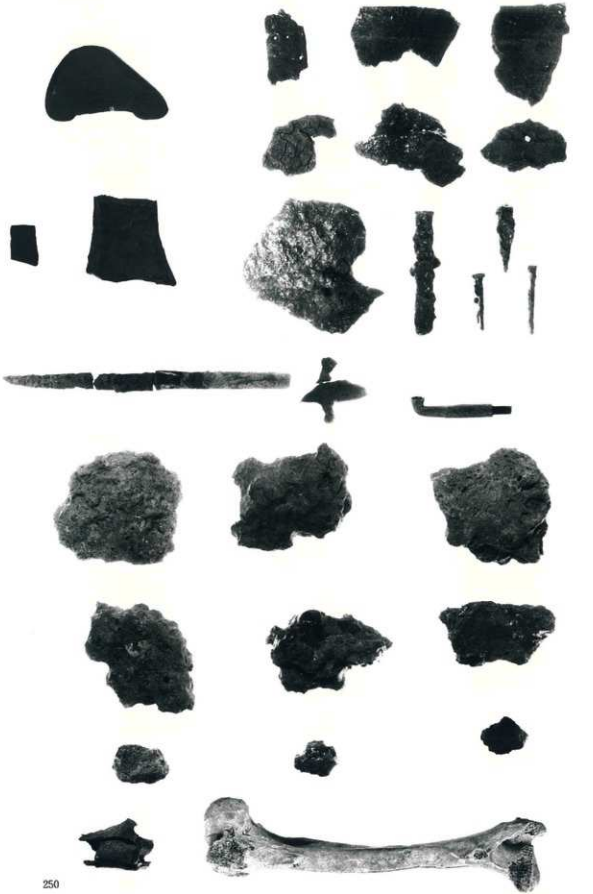


小石（×1.3）

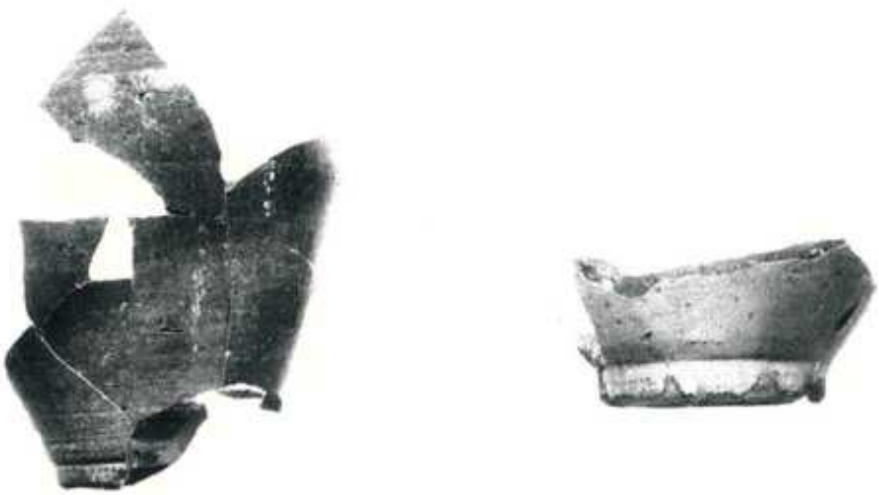
木炭（×1.3）

PL. 43　第13号地割面出土遺物（陶磁器）

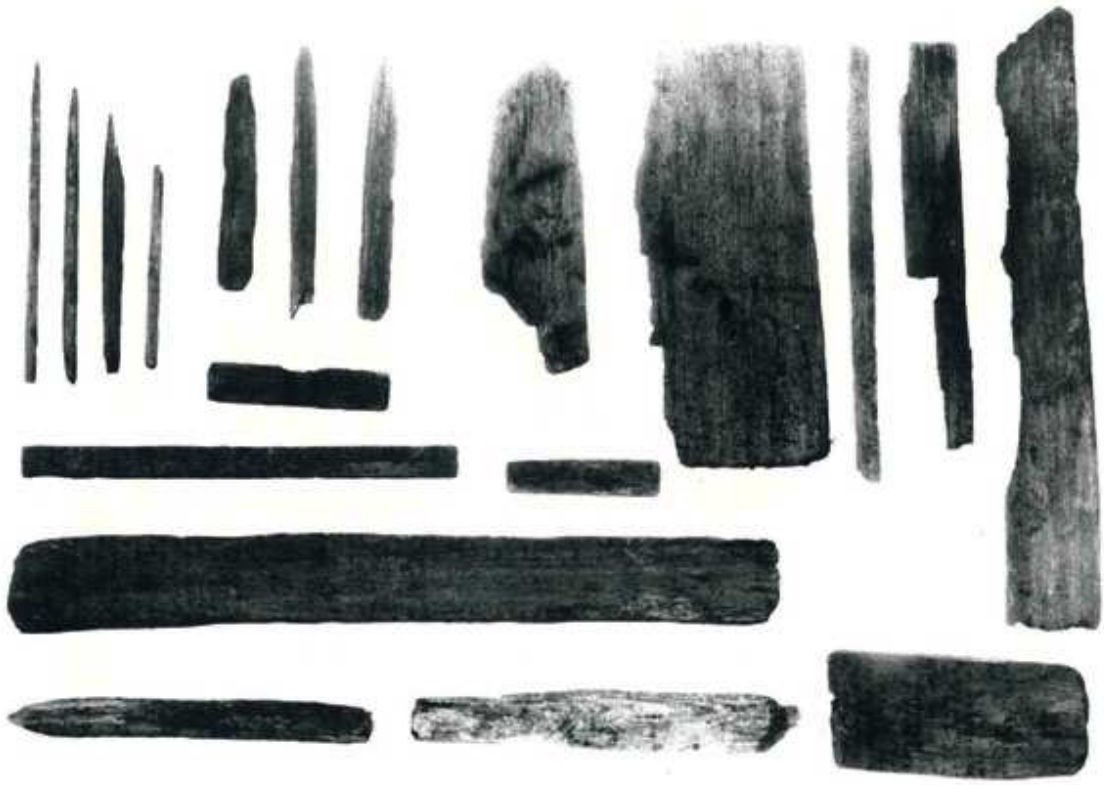


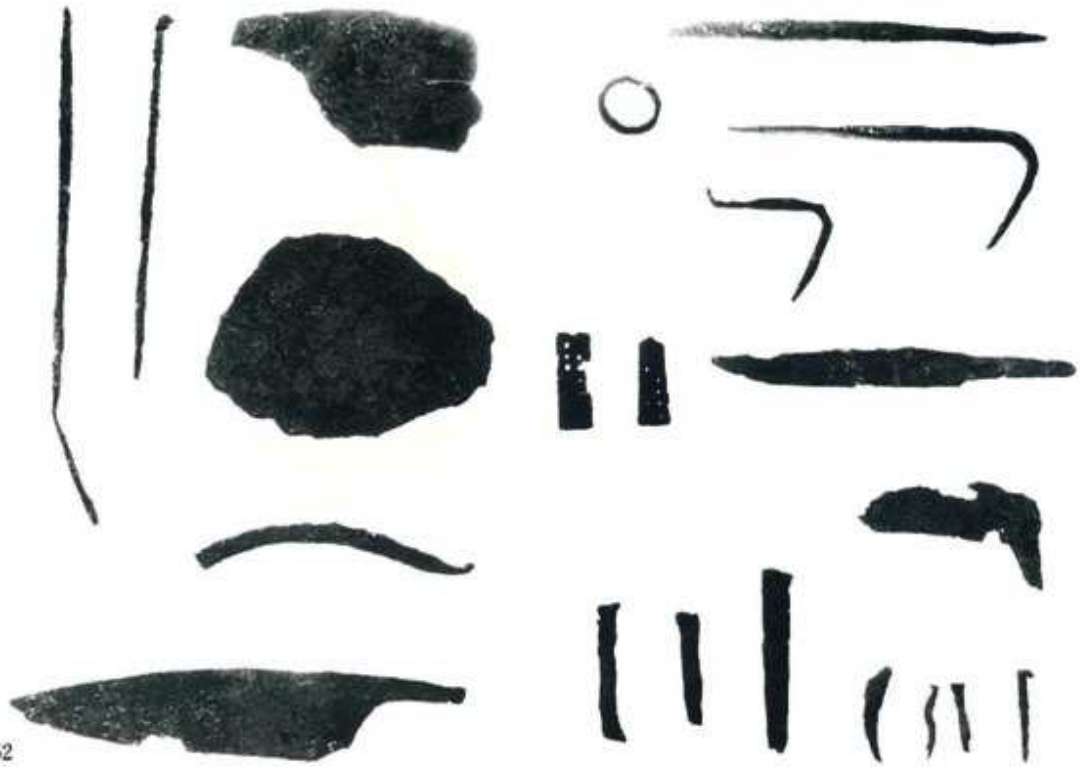


PL. 45　近世以降磁器他

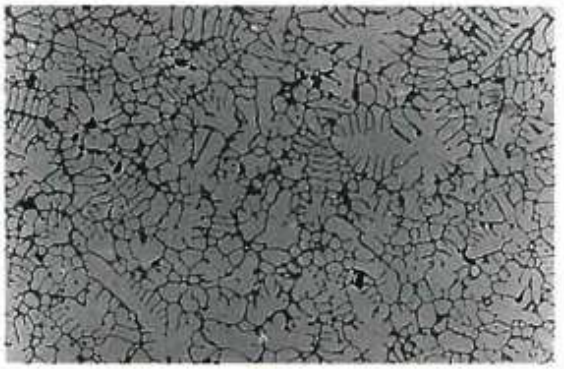


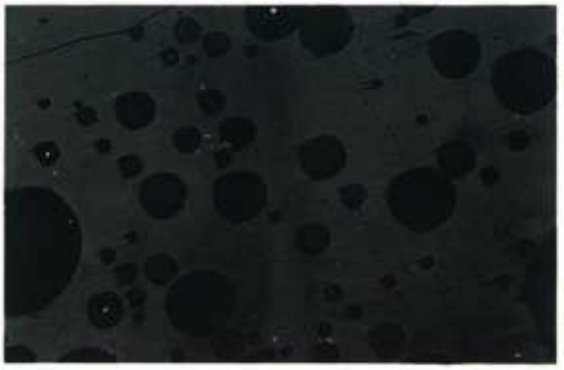
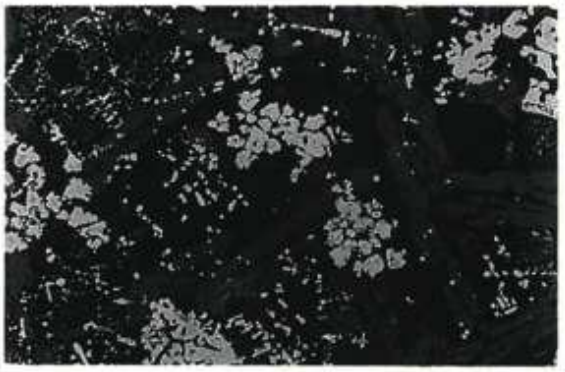
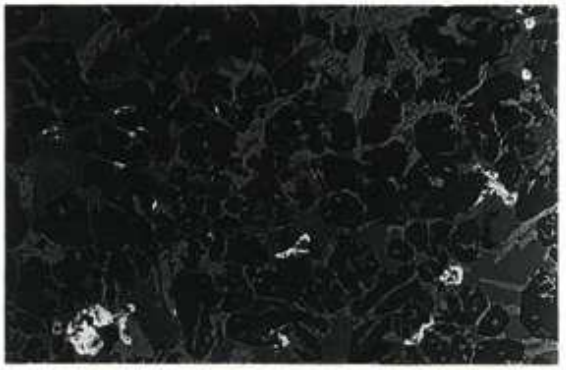
PL. 46　保存処理終了後の木製品・鉄製品

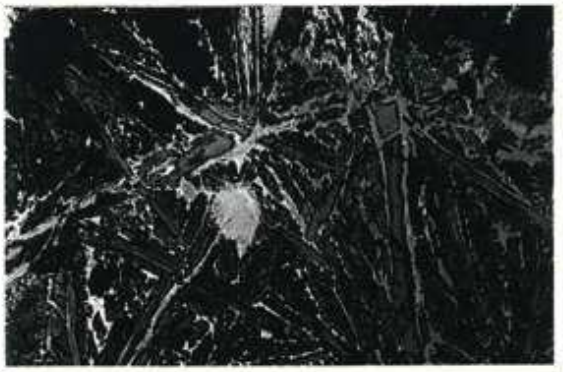




PL. 47　鉄滓の顕微鏡組織

① UEN－1 上之国勝山館跡 (27K19、Ⅰ層出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1/2.6		
② UEN－2 上之国勝山館跡 (27K19、Ⅰ層出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1/2.6		
③ UEN－3 上之国勝山館跡 (26K、Ⅰ層出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1/2.6		
④ UEN－4 上之国勝山館跡 (27K、Ⅲb27出土) ガラス質鉄滓 (鍛錬鍛冶滓) ×100 外観写真1/2.6		

⑤　UEN－5 上之国勝山館跡 (27K、Ⅲb27出土) ガラス質鉄滓 (精錬鍛冶滓) ×100 外観写真1/2.6		
⑥　UEN－6 上之国勝山館跡 (27K2·7、I層出土) 精錬鍛冶滓 ×100 外観写真1/2.6		
同　上 (別 視 野)		
⑦　UEN－7 上之国勝山館跡 (27K2·7、I層出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1/2.6		

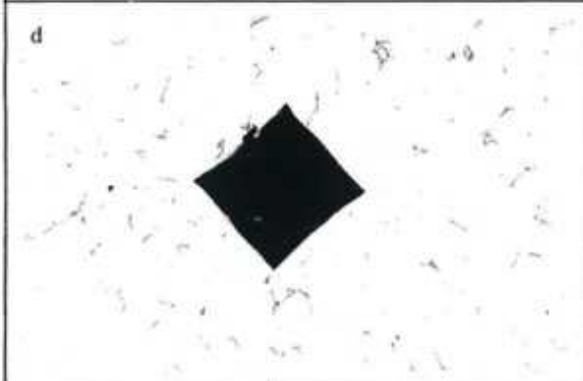
⑧ UEN－8 上之国勝山館跡 (27 J 17、茶褐色土出土) 鋳鉄酸化物 ×100 外観写真1/2.6		
⑨ UEN－9 上之国勝山館跡 (27 J 17、茶褐色土出土) 鋳鉄酸化物 ×100 外観写真1/2.6		
⑩ UEN－10 上之国勝山館跡 (27 J 17、茶褐色土出土) 鋳鉄酸化物 ×100 外観写真1/2.6		
⑪ UEN－11 上之国勝山館跡 (27 K 19、表土出土) 鍛錬鍛冶滓 ×100 外観写真1/2.6		

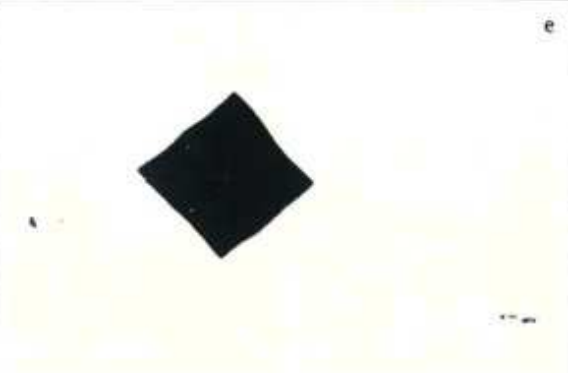
⑫　U E N－12

上之国勝山館跡

（K3M、27K3表面採集）

外観写真 1/2.6	介在物 ×400
炭化物（L方向） ×400	炭化物（C方向） ×400
硬度圧痕 ×200	硬度圧痕 ×200





⑬　U E N－13

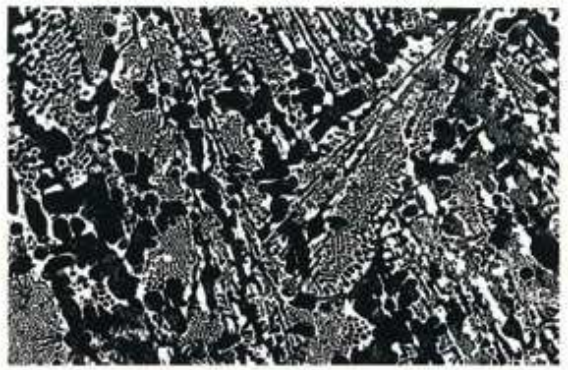
上之国勝山館跡

（八M-129、Ⅱ層出土）

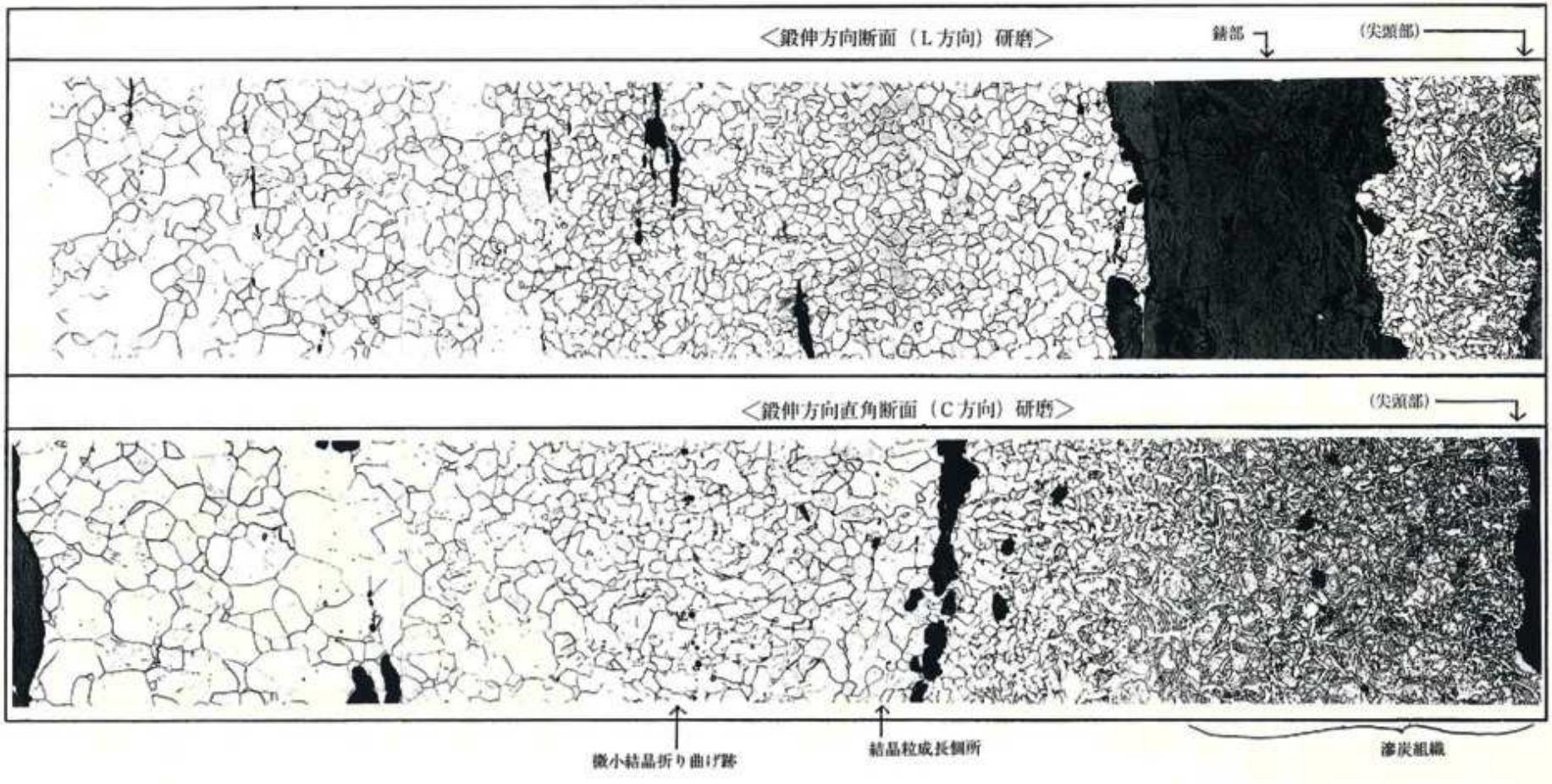
白鋳鉄鍋破片

×100

外観写真1/2.6

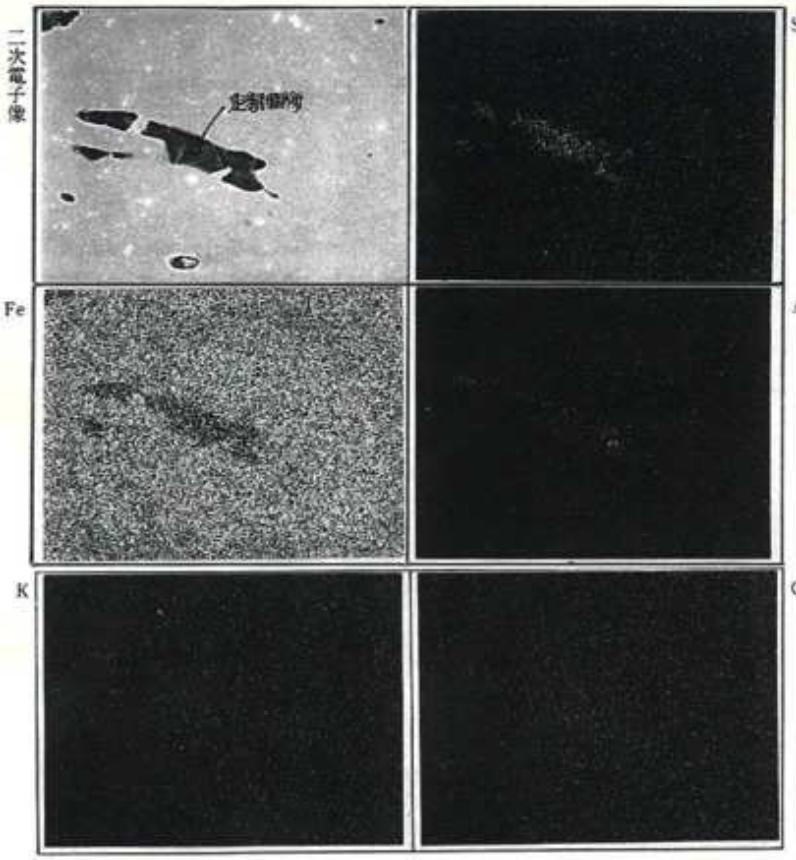


PL. 51　カスガイの結晶粒組織（×100）



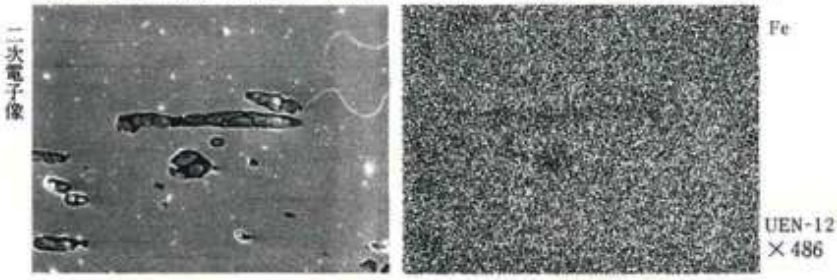
⑭ UEN－14 上之国勝山館跡 (23J 18、I層出土) 白鋳鉄鍋破片 ×400 外観写真1/2.6		
⑮ UEN－15 上之国勝山館跡 (23J 18出土) 白鋳鉄鍋破片 ×200 外観写真1/2.6		
⑯ UEN－16 上之国勝山館跡 (23K17、I層出土) 白鋳鉄鍋破片 ×200 外観写真1/2.6		
⑰ UEN－17 上之国勝山館跡 (23J 18出土) 白鋳鉄鍋破片 ×200 外観写真1/2.6		

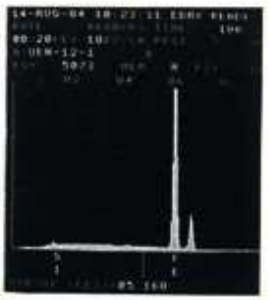
PL 53　上之国勝山館跡出土カスガイ中非金属介在物の走査X線像及びエネルギー分散分析

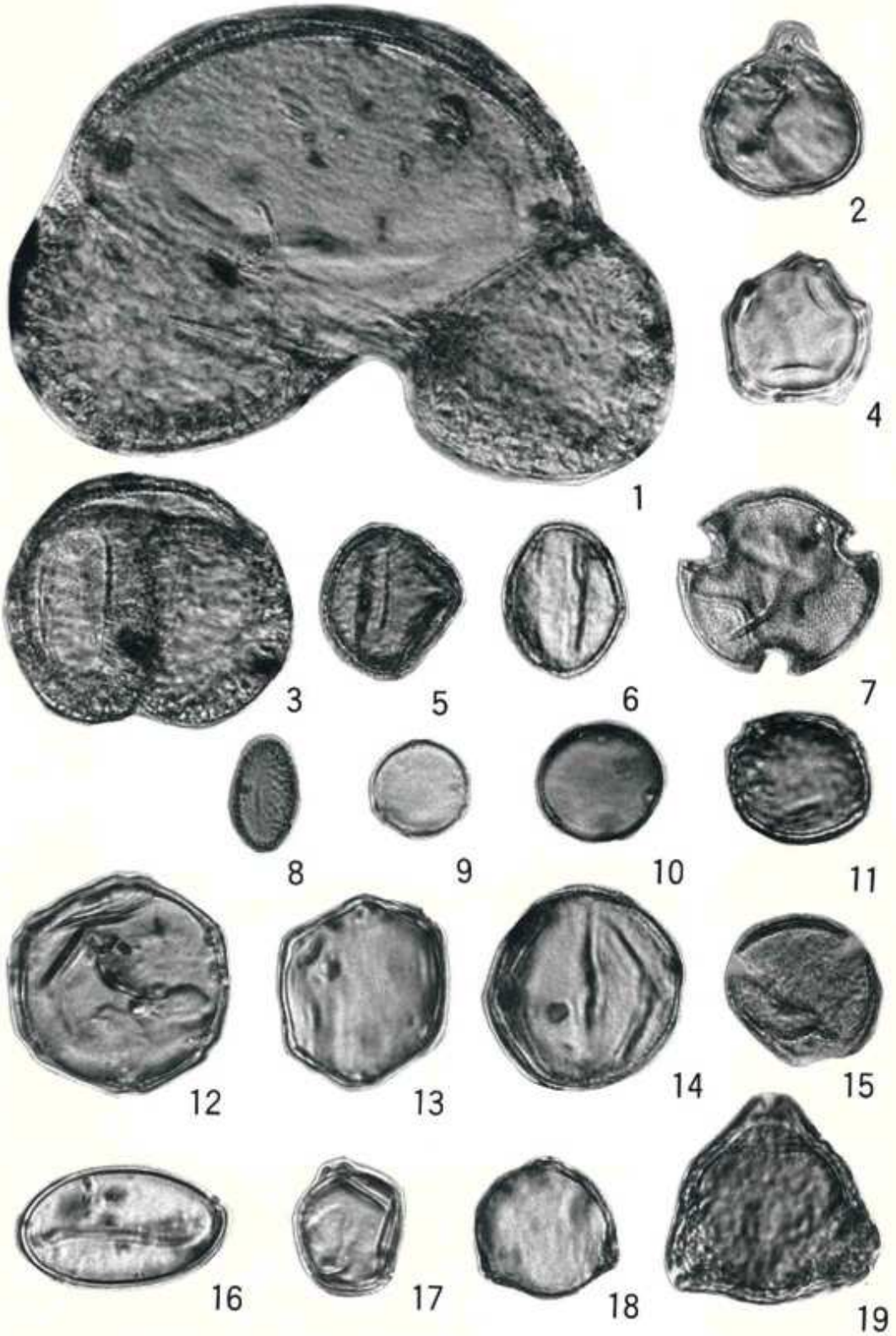


(その1)上之国勝山館跡出土カスガイ(UEN-12)中非金属介在物の走査X線像

(その2)上之国勝山館跡出土カスガイ(UEN-12)中非金属介在物のエネルギー分散分析



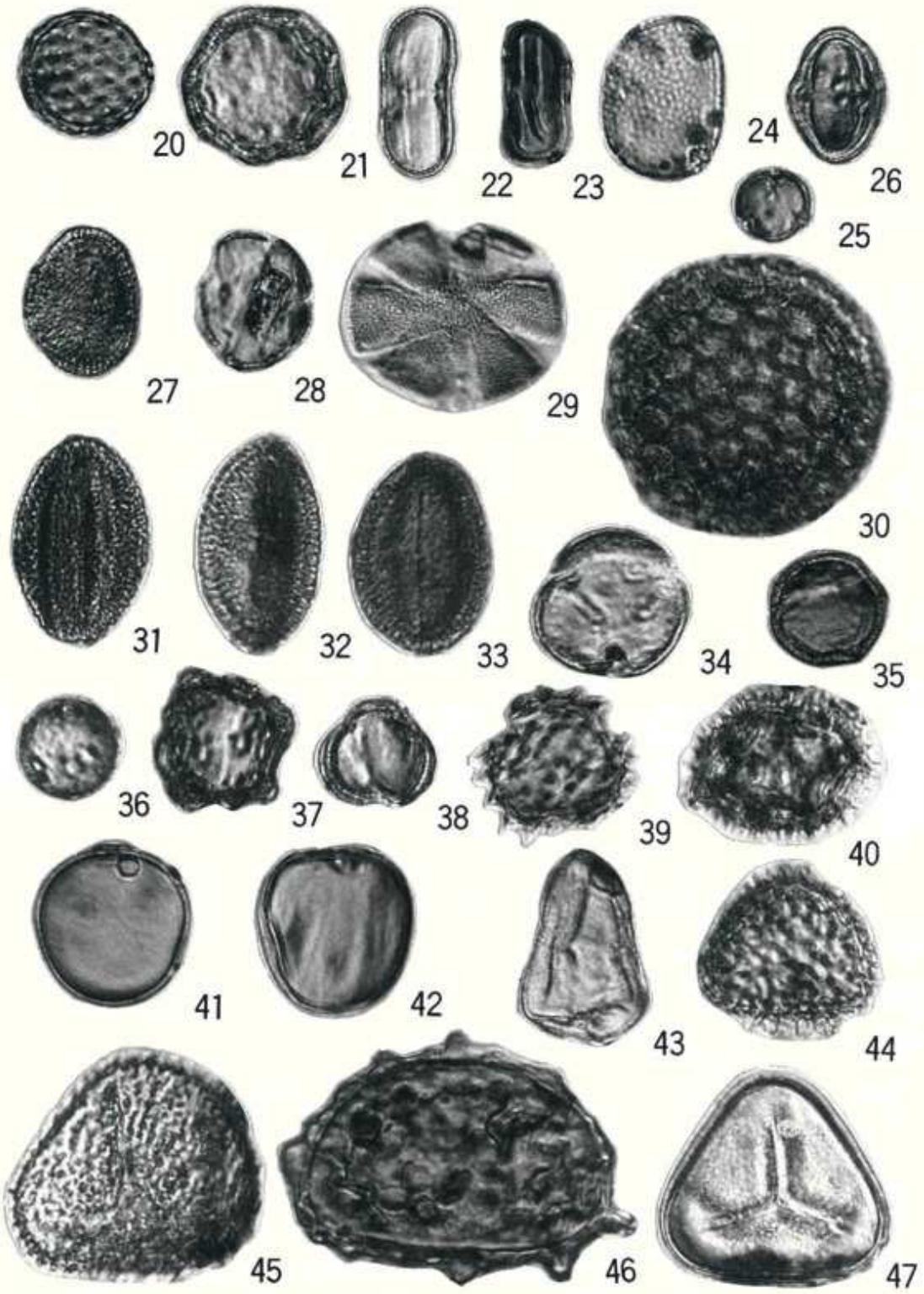




1,*Abies* 2,*Cryptomeria* 3,*Pinus* 4,*Alnus* 5,6,*Quercus* 7,*Tilia* 8,*Salix* 9,*Morus* 10,*Celtis* 11,*Ulmus* 12,13,*Juglans–Pterocarya* 14,*Fagus* 15,*Acer* 16,*Magnolia* 17,*Betula* 18,*Carpinus* 19,*Elaeagnus*.

1～2，5，12，14～15，18が25M19東1。3～4，6～11，13，16～17，19が25M19北4。（倍率は×1500）

PL.55 花粉顕微鏡写真②(Ⅳ－4)



20,Chenopodiaceae 21,Caryophyllaceae 22,23,Umbelliferae 24,Balasaminaceae
25,26,Rosaceae 27,Cruciferae 28,Ranunculaceae 29,Labiatae 30,34,35,Polygonaceae
31,32,33,*Fagopyrum* 36,Plantaginaceae 37,Haloragaceae 38,*Artemisia* 39,Carduoideae
40,Cichorioideae 41,42,Gramineae 43,Cyperaceae 44,Lycopodiace 45,Osmundaceae
46,Monolate type spore 47,Trilete type spore.
20, 22～23, 25～26, 29～30が25M19東1。21, 31, 34, 36, 38, 41, 46～47が25M19東3。24, 27, 32, 37, 39が25M19北3。28, 33, 35, 42～45が25M19北4。40が26G6。
(倍率は×1500)

史跡　上之国勝山館跡　Ⅵ

—昭和59年度発掘調査整備事業概報—

発　行　　上ノ国町教育委員会

印　刷　　昭和60年３月25日

発　行　　昭和60年３月30日

印刷所　　㈱長門出版社印刷部